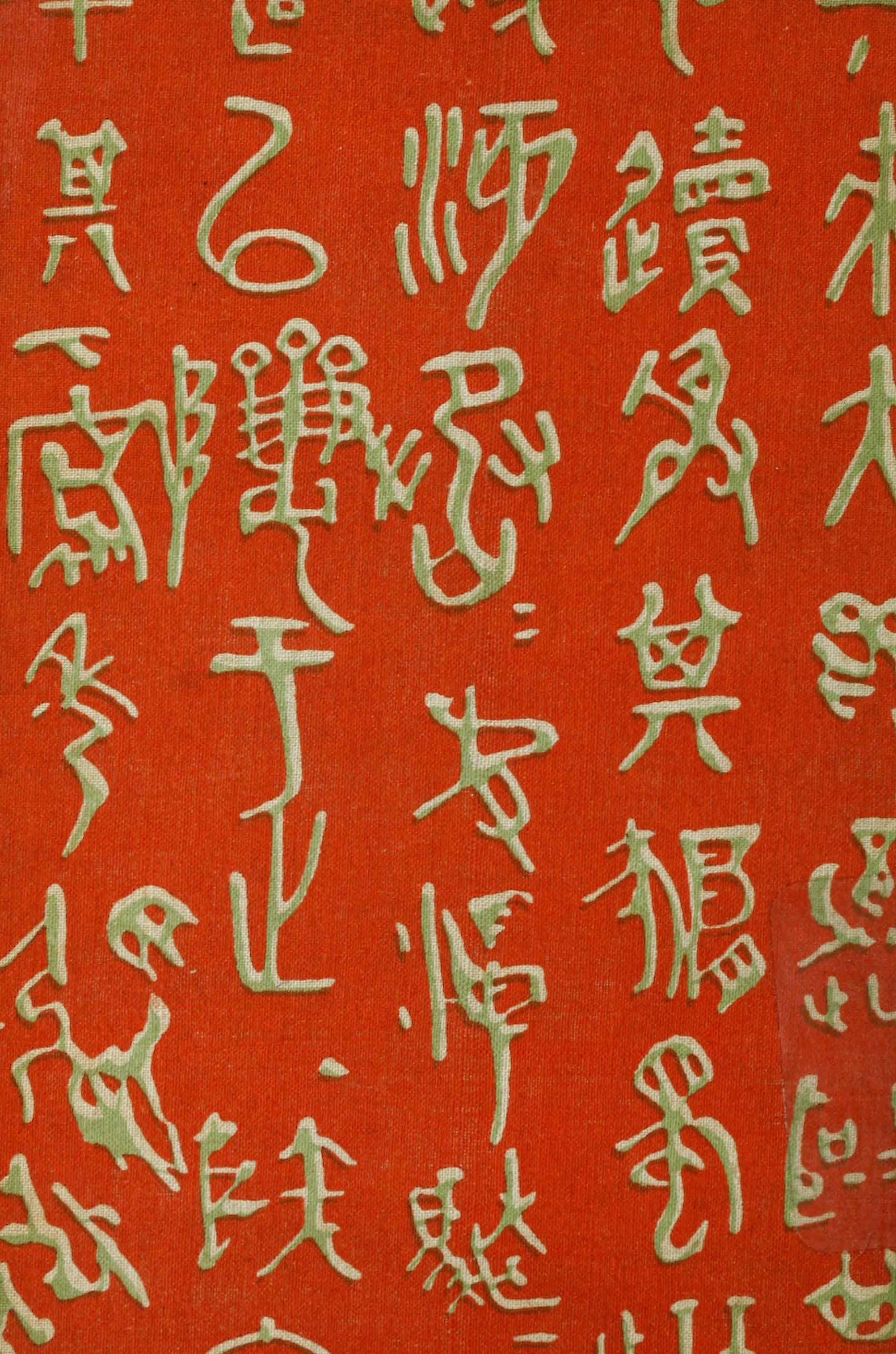


柳井藏書

柳井藏書

漱石全集

第八卷

行人

Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

The Library of

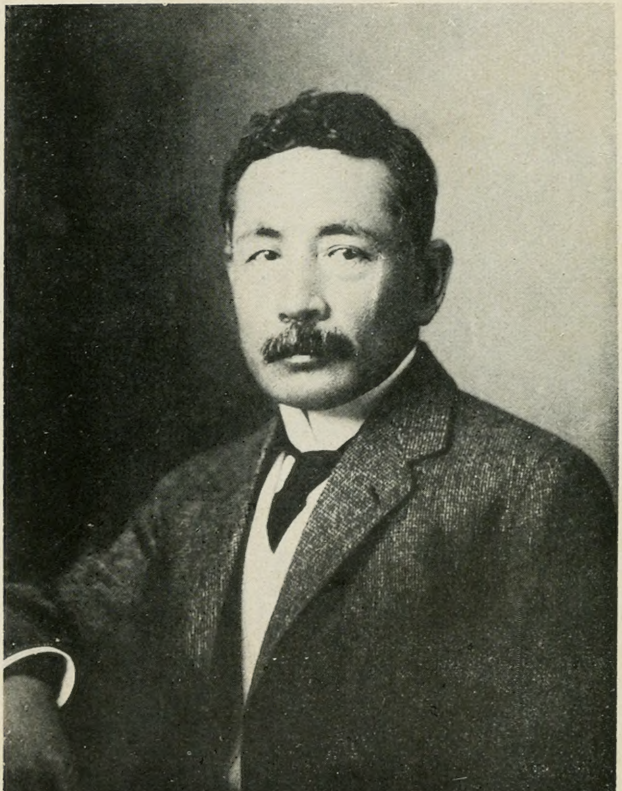
Takaichi (T.U.) Umezuki

LIBRARY

OCT 2 0 1996

UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5



大正元年十月撮影

目次

行人
友達　五
兄　八四
歸つてから　一九七
塵勞　二九五

行人

一、一二、六―二、四、七

友達

一

梅田の停車場を下りるや否や自分は母から云ひ附けられた通り、すぐ俥を雇つて岡田の家に馳けさせた。岡田は母方の遠縁に當たる男であつた。自分は彼が果して母の何に當たるかを知らずに唯疎い親類とばかり覺えてゐた。

大阪へ下りるとすぐ彼を訪うたのには理由があつた。自分は此處へ來る一週間前、或友達と約束をして、今から十日以内に阪地で落ち合はう、さうして一所に高野登りを遣らう、若し時日が許すなら、伊勢から名古屋へ廻らう、と取り極めた時、何方も指定すべき場所を有たないので、自分はつい岡田の氏名と住所を自分の友達に告げたのである。

「ぢや大阪へ着き次第、其處へ電話を掛ければ君の居るか居ないかは、すぐ分るんだね」と友達は別かれるとき念を押した。岡田が電話を有つてゐるかどうか、其處は自分にも甚だ怪しかつたので、もし電話

がなかつたら、電信でも郵便でも好いから、すぐ出して呉れるやうに賴んで置いた。友達は甲州線で諏訪まで行つて、夫から引き返して木曾を通つた後、大阪へ出る計畫であつた。自分は東海道を一息に京都迄來て、其處で四五日用足し旁逗留してから、同じ大阪の地を踏む考へであつた。

豫定の時日を京都で費やした自分は、友達の消息を一刻も早く耳にする爲停車場を出ると共に、岡田の家を尋ねなければならなかつたのである。けれども夫はたゞ自分の便宜になる丈の、いはば私の都合に過ぎないので、先刻云つた母の云ひ附けとは丸で別物であつた。母が自分に向つて、彼方へ行つたら何より先に岡田を尋ねるやうにと、わざ〳〵荷になる程大きい罐入りの菓子を、御土產だよと斷つて、鞄の中へ入れて呉れたのは、昔氣質の律儀からではあるが、其奧にもう一つ實際的の用件を控へてゐるからであつた。

自分は母と岡田が彼等の系統上どんな幹の先へ岐れて出た、どんな枝となつて、互に關係してゐるか知らない位な人間である。母から依託された用向きについても大した期待も興味もなかつた。けれども久し振に岡田といふ人物――落ち附いて四角な顏をしてゐる、いくら髭を欲しがつても髭の容易に生えない、しかも頭の方がそろ〳〵薄くなつて來さうな、――岡田といふ人物に會ふ方の好奇心は多少動いた。岡田は今迄に所用で時々出京した。所が自分は何時も懸け違つて會ふ事が出來なかつた。從つて強く酒精に染められた彼の四角な顏も見る機會を奪はれてゐた。自分は俥の上で指を折つて勘定して見た。岡田が居

なくなつたのは、つい此間の様でも、もう五六年になる。彼の氣にしてゐた頭も、此頃では大分危険に逼つてゐるだらうと思つて、その地の透いて見える所を想像したり抔した。
岡田の髪の毛は想像した通り薄くなつて居たが、住居は思つたよりも薩張りした新しい普請であつた。
「どうも上方流で餘計な所に高塀なんか築き上げて、陰氣で困つちまひます。其代り二階はあります。一寸上がつて御覧なさい」と彼は云つた。自分は何より先に友達の事が氣になるので、斯う〳〵いふ人からまだ何とも通知は來ないかと聞いた。岡田は不思議さうな顔をして、いゝえと答へた。

二

自分は岡田に連れられて二階へ上がつて見た。當人が自慢する程あつて眺望は可なり好かつたが、縁側のない座敷の窓へ日が遠慮なく照り返すので、暑さは一通りではなかつた。床の間に懸けてある軸物も反つくり返つて居た。
「なに日が射す爲ぢやない。年が年中懸け通しだから糊の具合であゝなるんです」と岡田は眞面目に辯解した。
「成程梅に鶯だ」と自分も云ひたくなつた。彼は世帯を持つ時の用意に、此幅を自分の父から貰つて、大得意で自分の室へ持つて來て見せたのである。其時自分は「岡田君此呉春は僞物だよ。夫だからあの親

父が君に呉れたんだ」と云つて調戯半分岡田を怒らした事を覺えてゐた。

二人は懸物を見て、當時を思ひ出しながら子供らしく笑つた。岡田は何時迄も窓に腰を掛けて話し續ける風に見えた。自分も襯衣に洋袴丈になつて、其處に寢轉びながら相手になつた。さうして彼から天下茶屋の形勢だの、將來の發展だの、電車の便利だのを聞かされた。自分は自分に夫程興味のない問題を、たゞ素直にはい〳〵と聽いて居たが、電車の通じる所へわざ〳〵俥へ乘つて來た事丈は、馬鹿らしいと思つた。二人は又二階を下りた。

やがて細君が歸つて來た。細君はお兼さんと云つて、器量は夫程でもないが、色の白い、皮膚の滑らかな、遠見の大變好い女であつた。父が勤めてゐたある官省の屬官の娘で、其頃は時々勝手口から賴まれものの仕立物などを持つて出入りをしてゐた。岡田は又其時分自分の家の食客をして、勝手口に近い書生部屋で、勉強もし晝寐もし、時には燒芋抔も食つた。彼等は斯樣にして互に顏を知り合つたのである。が、顏を知り合つてから、結婚が成立するまでに、どんな徑路を通つて來たか自分はよく知らない。岡田は母の遠縁に當たる男だけれども、自分の宅では書生同樣にしてゐたから、下女達は自分や自分の兄には遠慮して云ひ兼ねる事迄も、岡田に對してはつけつけと云つて退けた。「岡田さんお兼さんが宜しく」抔といふ言葉は、自分も時々耳にした。けれども岡田は一向氣にも留めない樣子だつたから、大方たゞの徒事だらうと思つてゐた。すると岡田は高商を卒業して一人で大阪のある保險會社へ行つて仕舞つた。地位は自

分の父が周旋したのださうである。夫から一年程して彼は又飄然として上京した。さうして今度はお兼さんの手を引いて大阪へ下つて行つた。これも自分の父と母が口を利いて、話を纏めて遣つたのださうである。自分は其時富士へ登つて甲州路を歩く考へで家には居なかつたが、後で其話を聞いて一寸驚いた。勘定して見ると、自分が御殿場で下りた汽車と擦れ違つて、岡田は新しい細君を迎へるために入京したのである。

お兼さんは、格子の前で疊んだ洋傘を、小さい包と一緒に、脇の下へ抱へながら玄關から勝手の方に通り抜ける時、ちよつと極りの悪さうな顔をした。其顔は日盛りの中を歩いた火氣のため、汗を帯びて赤くなつてゐた。

「おい御客さまだよ」と岡田が遠慮のない大きな聲を出した時、お兼さんは「只今」と奥の方で優しく答へた。自分は此聲の持主に、かつて着た久留米絣やフランネルの襦袢を縫つて貰つた事もあるのだなと、不圖懐かしい記憶を呼び起した。

三

お兼さんの態度は明瞭で落ち附いて、何處にも下卑た家庭に育つたといふ面影は見えなかつた。「二三日前からもう御出でだらうと思つて、心待ちに御待ち申して居りました」などと云つて、眼の縁に愛嬌を

漂はせる所などは、自分の妹よりも品の良い許りでなく、様子も幾分か立ち優つて見えた。自分はしばらくお兼さんと話してゐるうちに、是なら岡田がわざ〳〵東京迄出て來て連れて行つても然るべきだといふ氣になつた。

此若い細君がまだ娘盛りの五六年前に、自分は旣に其聲も眼鼻立も知つてゐたのではあるが、夫程親しく言葉を換はす機會もなかつたので、斯うして岡田夫人として改まつて會つて見ると、さう馴れ〳〵しい應對も出來なかつた。それで自分は自分と同階級に屬する未知の女に對する如く、畏まつた言語をぽつぽつ使つた。岡田はそれが可笑しいのか、又は嬉しいのか、時々自分の顏を見て笑つた。夫丈なら構はないが、折節はお兼さんの顏を見て笑つた。けれどもお兼さんは澄ましてゐた。お兼さんが一寸用があつて奧へ立つた時、岡田はわざと低い聲をして、自分の膝を突つつきながら、「何故あいつに對して、さう改まつてるんです。元から知つてる間柄ぢやありませんか」と冷笑すやうな句調で云つた。

「好い奧さんになつたね。あれなら僕が貰やよかつた」

「冗談いつちや不可ない」と云つて岡田は一層大きな聲を出して笑つた。やがて少し眞面目になつて、

「だつて貴方はあいつの惡口を御母さんに云つたつていふぢやありませんか」と聞いた。

「何て」

「岡田も氣の毒だ、あんなものを大阪下り迄引つ張つて行くなんて。最う少し待つてゐれば己が相當な

のを見附けてやるのにつて」

「そりや君昔の事ですよ」

斯うは答へたやうなもの丶、自分は少し恐縮した。且一寸狼狽した。さうして先刻岡田が變な眼遣ひをして、時々細君の方を見た意味を漸く理解した。

「あの時は僕も母から大變叱られてね。御前のやうな書生に何が解るものか。岡田さんの事は御父さんと私とで當人達に都合の好いやうにしたんだから、餘計な口を利かずに默つて見て御出でなさいつて。どうも手痛くやられました」

自分は母から叱られたといふ事實が、自分の辯解にでもなるやうな語氣で、其時の樣子を多少誇張して述べた。岡田は益笑つた。

夫でもお兼さんが又座敷へ顏を出した時、自分は多少極りの惡い思ひをしなければならなかつた。人の惡い岡田はわざ／＼細君に、「今二郎さんが御前の事を大變賞めて下すつたぜ。よく御禮を申し上げるが好い」と云つた。お兼さんは「貴方があんまり惡口を仰しやるからでせう」と夫に答へて、眼では自分の方を見て微笑した。

夕飯前に浴衣がけで、岡田と二人岡の上を散歩した。まばらに建てられた家屋や、それを取り卷く垣根が東京の山の手を通り越した郊外を思ひ出させた。自分は突然大阪で會合しようと約束した友達の消息が

氣になり出した。自分はいきなり岡田に向つて、「君の所にや電話はないんでせうね」と聞いた。「あの構で電話があるやうに見えますかね」と答へた岡田の顏には、たゞ機嫌の好い浮き〳〵した調子ばかり見えた。

四

それは夕方の比較的長く續く夏の日の事であつた。二人の歩いてゐる岡の上は殊更明るく見えた。けれども遠くにある立樹の色が空に包まれて段々黑ずんで行くにつれて、空の色も時を移さず變つて行つた。自分は名殘の光で岡田の顏を見た。

「君東京に居た時より餘程快豁になつた樣ですね。血色も大變好い。結構だ」

岡田は「えゝまあ御蔭さまで」と云つたやうな曖昧な挨拶をしたが、其挨拶のうちには一種嬉しさうな調子もあつた。

もう晩飯の用意も出來たから歸らうぢやないかと云つて、二人歸路についた時、自分は突然岡田に、「君とお兼さんとは大變仲が好いやうですね」といつた。自分は眞面目な積りだつたけれども、岡田にはそれが冷笑のやうに聞こえたと見えて、彼はたゞ笑ふ丈で何の答もしなかつた。けれども別に否みもしなかつた。

少時してから彼は今迄の快豁な調子を急に失つた。さうして何か祕密でも打ち明けるやうな具合に、聲を落とした。それでゐて、恰も獨り言をいふ時のやうに足元を見詰めながら「是であいつと一所になつてから、彼是もう五六年近くになるんだが、どうも子供が出來ないんでね、何ういふものか、それが氣掛りで……」と云つた。

自分は何とも答へなかつた。自分は子供を生ます爲に女房を貰ふ人は、天下に一人もある筈がないと、豫てから思つてゐた。然し女房を貰つてから後で、子供が欲しくなるものかどうか、其處になると自分にも判斷が附かなかつた。

「結婚すると子供が欲しくなるものですかね」と聞いて見た。

「なに子供が可愛いかどうかまだ僕にも分りませんが、何しろ妻たるものが子供を生まなくつちや、丸で一人前の資格がない樣な氣がして……」

岡田は單にわが女房を世間並にする爲に子供を欲するのであつた。結婚はしたいが子供が出來るのが怖いから、まあ最う少し先へ延ばさうといふ苦しい世の中ですよと自分は彼に云つて遣りたかつた。すると岡田が「それに二人切りぢや淋しくつてね」と又つけ加へた。

「二人切りだから仲が好いんでせう」

「子供が出來ると夫婦の愛は減るもんでせうか」

岡田と自分は實際二人の經驗以外にあることを左も心得た樣に話し合つた。

宅では食卓の上に刺身だの吸物だのが綺麗に竝んで二人を待つてゐた。お兼さんは薄化粧をして二人の御酌をした。時々は團扇を持つて自分を扇いで呉れた。自分は其風が横顔に當たるたびに、お兼さんの白粉の匂を微かに感じた。さうして夫が麥酒や山葵の香よりも人間らしい好い匂の樣に思はれた。

「岡田君は何時も斯うやつて晩酌を遣るんですか」と自分はお兼さんに聞いた。お兼さんは微笑しながら、「どうも後引上戸で困ります」と答へてわざと夫の方を見遣つた。夫は、「なに後が引ける程飲ませやしないやね」と云つて、傍にある團扇を取つて、急に胸のあたりをはた〳〵いはせた。自分は又急に此地で會ふべき筈の友達の事に思ひ及んだ。

「奥さん、三澤といふ男から僕に宛てて、郵便か電報か何か來ませんでしたか。今散歩に出た後で」

「來やしないよ。大丈夫だよ、君。僕の妻はさう云ふ事はちやんと心得てるんだから。ねえお兼。——好いぢやありませんか、三澤の一人や二人來たつて來なくたつて。二郎さん、そんなに僕の宅が氣に入らないんですか。第一貴方はあの一件からして片附けて仕舞はなくつちやならない義務があるでせう」

岡田は斯う云つて、自分の洋盃へ麥酒をごほ〳〵と注いだ。もう餘程醉つてゐた。

五

其晩はとう〳〵岡田の家へ泊つた。六疊の二階で一人寐かされた自分は、蚊帳の中の暑苦しさに堪へかねて、成るべく夫婦に知れないやうに、そつと雨戸を開け放つた。窓際を枕に寢てゐたので、空は蚊帳越しにも見えた。試しに赤い裾から、頭だけ出して眺めると星がきら〳〵と光つた。自分はこんな事をする間にも、下にゐる岡田夫婦の今昔は忘れなかつた。結婚してからあゝ親しく出來たら嘸幸福だらうと羨ましい氣もした。三澤から何の音信のないのも氣掛りであつた。然し斯うして幸福な家庭の客となつて、彼の消息を待つために四五日愚圖々々してゐるのも惡くはないと考へた。一番何うでも好かつたのは岡田の所謂「例の一件」であつた。

翌日眼が覺めると、窓の下の狹苦しい庭で、岡田の聲がした。

「おいお兼とう〳〵絞りのが咲き出したぜ。一寸來て御覧」

自分は時計を見て、腹這ひになつた。さうして燐寸を擦つて敷島へ火を點けながら、暗にお兼さんの返事を待ち構へた。けれどもお兼さんの聲は丸で聞こえなかつた。岡田は「おい」「おいお兼」を又二三度繰り返した。やがて、「せはしない方ね、貴方は。今朝顔どころぢやないわ、臺所が忙しくつて」といふ言葉が手に取るやうに聞こえた。お兼さんは勝手から出て來て座敷の縁側に立つてゐるらしい。

「それでも綺麗ね。咲いて見ると。——金魚はどうして」

「金魚は泳いでゐるがね。どうも此方は六づかしいらしい」

自分はお兼さんが、死にかゝつた金魚の運命について、何かセンチメンタルな事でもいふかと思つて、煙草を吹かしながら聽いてゐた。けれどもいくら待つてゐても、お兼さんは何とも云はなかつた。岡田の聲も聞こえなかつた。自分は煙草を捨てて立ち上がつた。さうして可なり急な階子段を一段づゝ音を立てて下へ降りて行つた。

三人で飯を濟ました後、岡田は會社へ出勤しなければならないので、緩り案内をする時間がないのを殘念がつた。自分は此處へ來る前から、そんな事を全く豫期してゐなかつたと云つて、白い詰襟姿の彼を坐つたまゝ眺めてゐた。

「お兼、御前暇があるなら二郎さんを案内して上げるが好い」と岡田は急に思ひ附いたやうな顏附で云つた。お兼さんは何時もの樣子に似ず、此時丈は夫にも自分にも何とも答へなかつた。自分はすぐ、「なに構はない。君と一所に君の會社のある方角迄行つて、そこいらを逍遙いて見よう」と云ひながら立つた。お兼さんは玄關で自分の洋傘を取つて、自分に手渡しして呉れた。夫から只一口「御早く」と云つた。

自分は二度電車に乘せられて、二度下ろされた。さうして岡田の通つてゐる石造の會社の周圍を好い加減に歩き廻つた。同じ流れか、違ふ流れか、水の面が二三度目に入つた。その内暑さに堪へられなくなつて、又好い加減に岡田の家へ歸つて來た。

二階へ上がつて、――自分は昨夜から此六疊の二階を、自分の室と心得るやうになつた。――休息して

ゐると、下から階子段を踏む音がして、お兼さんが上がつて來た。自分は驚いて脱いだ肌を入れた。昨日廂に束ねてあつたお兼さんの髪は、何時の間にか大きな丸髷に變つてゐた。さうして桃色の手絡が髷の間から覗いてゐた。

六

お兼さんは黑い盆の上に載せた平野水と洋盃を自分の前に置いて、「如何で御座いますか」と聞いた。自分は「難有う」と答へて、盆を引き寄せようとした。お兼さんは「いゝえ私が」と云つて急に罎を取り上げた。自分は此時默つてお兼さんの白い手ばかり見てゐた。其手には昨夕氣が附かなかつた指環が一つ光つてゐた。

自分が洋盃を取り上げて咽喉を潤した時、お兼さんは帶の間から一枚の葉書を取り出した。

「先程御出掛けになつた後で」と云ひかけて、にや〳〵笑つてゐる。自分は其表面に三澤の二字を認めた。

「とう〳〵參りましたね、御待ちかねの……」

自分は微笑しながら、すぐ裏を返して見た。

「一兩日後れるかも知れぬ」

葉書に大きく書いた文字はたゞ是丈であつた。

「丸で電報の樣で御座いますね」

「それで貴方笑つてたんですか」

「さう云ふ譯でも御座いませんけれども、何だか餘り……」

お兼さんは其處で默つて仕舞つた。自分はお兼さんをもつと笑はせたかつた。

「餘り、何うしました」

「餘り勿體ないやうですから」

お兼さんの御父さんといふのは大變緻密な人で、お兼さんの所へ手紙を寄こすにも、大抵は葉書で用を辨じてる代りに蠅の頭のやうな字を十五行も竝べて來るといふ話を、お兼さんは面白さうにした。自分は三澤の事を全く忘れて、たゞ前にゐるお兼さんを的に、樣々の事を尋ねたり聞いたりした。

「奧さん、子供が欲しかありませんか。斯うやつて、一人で留守をしてゐると退屈するでせう」

「左樣でも御座いませんわ。私兄弟の多い家に生れて大變苦勞して育つた所爲か、子供程親を意地見るものはないと思つて居りますから」

「だつて一人や二人は可いでせう。岡田君は子供がないと淋しくつて不可ないと云つてましたよ」

お兼さんは何も答へずに窓の外の方を眺めてゐた。顏を元へ戻しても、自分を見ずに、疊の上にある平

野水の罎を見てゐた。自分は何も氣が附かなかつた。それで又「奥さんは何故子供が出來ないんでせう」と聞いた。するとお兼さんは急に赤い顔をした。自分はたゞ心易だてで云つたことが、甚だ面白くない結果を引き起したのを後悔した。けれども何うする譯にも行かなかつた。其時はたゞお兼さんに氣の毒をしたといふ心丈で、お兼さんの赤くなつた意味を知らう抔とは夢にも思はなかつた。

自分は此居苦しく又立ち苦しくなつた樣に見える若い細君を、何うともして救はなければならなかつた。夫には是非共話頭を轉ずる必要があつた。自分はかねてから左程重きを置いてゐなかつた岡田の所謂「例の一件」をとう〳〵持ち出した。お兼さんはすぐ元の態度を囘復した。けれども夫に責任の過半を讓る積りか、決して多くを語らなかつた。自分もさう根掘り葉掘り聞きもしなかつた。

七

「例の一件」が本式に岡田の口から持ち出されたのは其晩の事であつた。自分は露に近い縁側を好んで其處に座を占めてゐた。岡田は夫迄お兼さんと向き合つて座敷の中に坐つて居たが、話しが始まるや否や、すぐ立つて縁側へ出て來た。

「何うも遠くぢや話しがし惡くつて不可ない」と云ひながら、模樣の附いた座蒲團を自分の前に置いた。お兼さん丈は依然として元の席を動かなかつた。

「二郎さん寫眞は見たでせう、此間僕が送つた」
寫眞の主といふのは、岡田と同じ會社へ出る若い人であつた。此寫眞が來た時家のものが代り番子に見て、樣々の批評を加へたのを、岡田は知らないのである。
「えゝ一寸見ました」
「何うです評判は」
「少し御凸額だつて云つたものも有ります」
お兼さんは笑ひ出した。自分も可笑しくなつた。と云ふのは、其男の寫眞を見て、御凸額だと云ひ始めたものは、實のところ自分だからである。
「お重さんでせう、そんな惡口をいふのは。あの人の口に掛かつちや、大抵のものは敵はないからね」
岡田は自分の妹のお重を大變口の惡い女だと思つてゐる。それも彼がお重から、あなたの顏は將棋の駒見たいよと云はれてからの事である。
「お重さんに何と云はれたつて構はないが肝心の當人は何うなんです」
自分は東京を立つとき、母から、貞には無論異存これなくといふ返事を岡田の方へ出して置いたといふ事を確めて來たのである。だから、當人は母から上げた返事の通りだと答へた。岡田夫婦は又佐野といふ婿になるべき人の性質や品行や將來の望みや、其他色々の條項に就いて一々自分に話して聞かせた。最後

に當人が此縁談の成立を切望してる例抔を擧げた。

お貞さんは器量から云つても教育から云つても、是といふ特色のない女である。たゞ自分の家の厄介ものといふ名がある丈である。

「先方があまり乘り氣になつて何だか劍呑だから、彼地へ行つたら好く樣子を見て來て御呉れ」

自分は母から斯う頼まれたのである。自分はお貞さんの運命について、夫程多くの興味は有ち得なかつたけれども、成程さう望まれるのは、お貞さんの爲に結構な樣で又危險な事だらうとも考へてゐた。夫で今迄默つて岡田夫婦の云ふ事を聞いてゐた自分は、不圖口を滑らした。――

「何うしてお貞さんが、そんなに氣に入つたものかな。まだ會つた事もないのに」

「佐野さんはあゝいふ確りした方だから、矢つ張り辛抱人を御貰ひになる御考へなんですよ」

お兼さんは岡田の方を向いて、佐野の態度を斯う辯解した。岡田はすぐ「さうさ」と答へた。さうして其外には何も考へてゐないらしかつた。自分は兎に角其佐野といふ人に明日會はうといふ約束を岡田として、又六疊の二階に上がつた。頭を枕に着けながら、自分の結婚する場合にも事が斯う簡單に運ぶのだらうかと考へると、少し恐ろしい氣がした。

八

翌日岡田は會社を午で切り上げて歸つて來た。洋服を投げ出すが早いか勝手へ行つて水浴をして「さあ行かう」と云ひ出した。

お兼さんは何時の間にか簞笥の抽出を開けて、岡田の着物を取り出した。自分は岡田が何を着るか、左程氣にも留めなかつたが、お兼さんの着せ具合や、帶の取つて遣り具合には、知らず知らず注意を拂つてゐたものと見えて、「二郎さんあなた仕度は好いんですか」と聞かれた時、はつと氣が附いて立ち上がつた。

「今日は御前も行くんだよ」と岡田はお兼さんに云つた。「だつて……」とお兼さんは絽の羽織を兩手で持ちながら、夫の顏を見上げた。自分は梯子段の中途で、「奥さん入らつしやい」と云つた。

洋服を着て下へ降りて見ると、お兼さんは何時の間にかもう着物も帶も取り換へてゐた。

「早いですね」

「えゝ早變り」

「あんまり變り榮えもしない服裝だね」と岡田が云つた。

「是で澤山よ彼んな所へ行くのに」とお兼さんが答へた。

三人は暑さを冒して岡を下つた。さうして停車場からすぐ電車に乘つた。自分は向う側に竝んで腰を掛けた岡田とお兼さんを時々見た。其間には三澤の突飛な葉書を思ひ出したりした。全體あれは何處で出したものなんだらうと考へても見た。是から會ひに行く佐野といふ男の事も、ちよいちよい頭に浮かんだ。

しかし其たんびに「物好き」といふ言葉が何うしても一所に出て來た。

岡田は突然體を前に曲げて、「何うです」と聞いた。自分はたゞ「結構です」と答へた。岡田は元のやうに腰から上を眞直にして、何かお兼さんに云つた。其顔には得意の色が見えた。すると今度はお兼さんが顔を前へ出して「御氣に入つたら、貴方も大阪へ入らつしやいませんか」と云つた。自分は覺えず「難有う」と答へた。さつき何うですと突然聞いた岡田の意味は、此時漸く解つた。

三人は濱寺で降りた。此地方の樣子を知らない自分は、大きな松と砂の間を歩いて流石に好い所だと思つた。然し岡田は此處では「何うです」を繰り返さなかつた。お兼さんも洋傘を開いた儘さつさと行つた。

「もう來てゐるだらうか」

「さうね。ことに因ると最う來て待つて入らつしやるかも知れないわ」

自分は二人の後に跟いて、斯んな會話を聽きながら、すばらしく大きな料理屋の玄關の前に立つた。自分は何よりもまづ其大きいのに驚かされたが、上がつて案内をされた時、更にその道中の長いのに吃驚した。三人は段々を下りて細い廊下を通つた。

「隧道ですよ」

お兼さんが斯ういつて自分に教へて呉れたとき、自分はそれが冗談で、本當に地面の下ではないのだと思つた。それで只笑つて薄暗い處を通り拔けた。

座敷では佐野が一人敷居際に洋服の片膝を立てて、煙草を吹かしながら海の方を見てゐた。自分達の足音を聞いた彼はすぐ此方を向いた。其時彼の額の下に、金縁の眼鏡が光つた。部屋へ這入るとき第一に彼と顔を見合はせたのは實に自分だつたのである。

九

佐野は寫眞で見たよりも一層御凸額であつた。けれども額の廣い處へ、夏だから髮を短かく刈つてゐるので、ことにさう見えたのかも知れない。初對面の挨拶をするとき、彼は「何分宜敷く」と云つて頭を丁寧に下げた。此普通一般の挨拶振が、場合が場合なので、自分には一種變に聞こえた。自分の胸は今迄左程責任を感じてゐなかつた所へ急に重苦しい束縛が出來た。

四人は膳に向ひながら話をした。お兼さんは佐野とは大分心易い間柄と見えて、時々向う側から調戯つたりした。

「佐野さん、あなたの寫眞の評判が東京で大變なんですつて」

「どう大變なんです。――大方好い方へ大變なんでせうね」

「そりや勿論よ。嘘だと思し召すなら御隣りに入らつしやる方に伺つて御覽になれば解るわ」

佐野は笑ひながらすぐ自分の方を見た。自分は一寸何とか云はなければ跋が惡かつた。それで眞面目な

顔をして、「どうも寫眞は大阪の方が東京より發達してゐるやうですね」と云つた。すると岡田が、「淨瑠璃ぢやあるまいし」と交ぜ返した。

岡田は自分の母の遠縁に當たる男だけれども、長く自分の宅の食客をしてゐた所爲か、昔から自分や自分の兄に對しては一段低い物の云ひ方をする習慣を有つてゐた。久し振に會つた昨日一昨日抔は殊に左右であつた。所が斯うして佐野が一人新しく席に加はつて見ると、友達の手前體裁が惡いといふ譯だか何だか、自分に對する口の利き方が急に對等になつた。ある時は對等以上に横風になつた。

四人のゐる座敷の向うには、同じ家のだけれども棟の違ふ高い二階が見えた。障子を取り拂つた其廣間の中を見上げると、角帶を締めた若い人達が大勢ゐて、其内の一人が手拭を肩へ掛けて踊かなにか躍つてゐた。「御店ものの懇親會といふ所だらう」と評し合つてゐるうちに、十六七の小僧が手摺の所へ出て來て、汚いものを容赦なく廂の上へ吐いた。すると同じ位な年配の小僧が又一人煙草を吹かしながら出て來て、こら確りしろ、己が附いてゐるから、何も怖がるには及ばない、といふ意味を純粹の大阪辯で遣り出した。今迄苦々しい顔をして手摺の方を見てゐた四人はとう〳〵吹き出して仕舞つた。

「何方も醉つてるんだよ。小僧の癖に」と岡田が云つた。

「貴方見たいね」とお兼さんが評した。

「何方がです」と佐野が聞いた。

「兩方ともよ。吐いたり管を捲いたり」とお兼さんが答へた。

岡田は寧ろ愉快な顏をしてゐた。自分は默つてゐた。佐野は獨り高笑ひをした。

四人はまだ日の高い四時頃に其處を出て歸路についた。途中で分かれるとき佐野は「何れ其内又」と帽を取つて挨拶した。三人はプラットフォームから外へ出た。

「何うです、二郎さん」と岡田はすぐ自分の方を見た。

「好ささうですね」

自分は斯うより外に答へる言葉を知らなかつた。それでゐて、斯う答へた後は甚だ無責任なやうな氣がしてならなかつた。同時に此無責任を餘儀なくされるのが、結婚に關係する多くの人の經驗なんだらうとも考へた。

十

自分は三澤の消息を待つて、猶二三日岡田の厄介になつた。實をいふと彼等は自分の餘所に行つて宿を取る事を許さなかつたのである。自分は其間出來る丈一人で大阪を見て歩いた。すると町幅の狹い所爲か人間の運動が東京よりも潑溂と自分の眼を射るやうに思はれたり、家並が締りのない東京より整つて好ましいやうに見えたり、河が幾筋もあつて其河には靜かな水が豐かに流れてゐたり、眼先の變つた興味が日

に一つ二つは必ずあつた。
佐野には濱寺で一所に飯を食つた次の晩又會つた。今度は彼の方から浴衣がけで岡田を尋ねて來た。自分は其時も彼是二時間餘り彼と話した。けれどもそれは只前日の催しを岡田の家で小規模に繰り返したに過ぎなかつたので、新しい印象と云つては格別頭に殘りやうがなかつた。だから本當をいふと唯世間並の人といふ外に、自分は彼に就いて何も解らなかつた。けれども亦母や岡田に對する義務としては、何も解らないで澄ましてる譯にも行かなかつた。自分は此二三日の間に、とう／＼東京の母へ向けて佐野と會見を結了した旨の報告を書いた。
仕方がないから「佐野さんはあの寫眞によく似てゐる」と書いた。「酒は呑むが、呑んでも赤くならない」と書いた。「御父さんのやうに謠をうたふ代りに義太夫を勉強してゐるさうだ」と書いた。最後に岡田夫婦と仲の好ささうな樣子を述べて「あれ程仲の好い岡田さん夫婦の周旋だから間違ひはないでせう」と書いた。一番仕舞に「要するに、佐野さんは多數の妻帶者と變つた所も何もないやうです。お貞さんも普通の細君になる資格はあるんだから、承諾したら好いぢやありませんか」と書いた。
自分は此手紙を封じる時、漸く義務が濟んだやうな氣がした。然し此手紙一つでお貞さんの運命が永久に決せられるのかと思ふと、多少自分のおつ猪口ちよいに恥ぢ入る所もあつた。そこで自分は此手紙を封筒へ入れた儘、岡田の所へ持つて行つた。岡田はすうと眼を通した丈で「結構」と答へた。お兼さんは、

てんで巻紙に手を觸れなかつた。自分は二人の前に坐つて、双方を見較べた。

「是で好いでせうかね。是さへ出して仕舞へば、宅の方は極まるんです。從つて佐野さんも一寸動けなくなるんですが」

「結構です。それが僕等の最も希望する所です」と岡田は開き直つていつた。お兼さんは同じ意味を女の言葉で繰り返した。二人から斯う事もなげに云はれた自分は、それで安心するよりも却て心元なくなつた。

「何がそんなに氣になるんです」と岡田が微笑しながら煙草の煙を吹いた。「此事件に就いて一番冷淡だつたのは君ぢやありませんか」

「冷淡にや違ひないが、あんまり御手輕過ぎて、少し双方に對して申し譯がない樣だから」

「御手輕どころぢや御座いません、それ丈長い手紙を書いて頂けば。それで御母さまが御滿足なさる。此方は初めから極まつてゐる。是程御目出たい事はないぢや御座いませんか、ねえ貴方」

お兼さんは斯ういつて、岡田の方を見た。岡田は左右ともと云はぬばかりの顏をした。自分は理窟をいふのが厭になつて、二人の目の前で、三錢切手を手紙に貼つた。

十一

自分は此手紙を出しつ切りにして大阪を立ち退きたかつた。岡田も母の返事の來るまで自分に居て貰ふ必要もなからうと云つた。

「けれどもまあ緩りなさい」

是が彼の屢繰り返す言葉であつた。夫婦の好意は自分によく解つてゐた。同時に彼等の迷惑も亦よく想像された。夫婦ものに自分の樣な横着な泊り客は、此方にも多少の窮屈は免れなかつた。自分は電報のやうに簡單な端書を書いたぎり何の音沙汰もない三澤が惡らしくなつた。もし明日中に何とか音信がなければ、一人で高野登りを遣らうと決心した。

「ぢや明日は佐野を誘つて寶塚へでも行きませう」と岡田が云ひ出した。自分は岡田が自分のために時間の差繰りをして呉れるのが苦になつた。もつと皮肉を云へば、そんな溫泉場へ行つて、飲んだり食つたりするのが、お兼さんに濟まない樣な氣がした。お兼さんは一寸見ると、派出好きの女らしいが、夫は寧ろ色白な顏立や樣子がさう思はせるので、性質からいふと普通の東京ものよりずつと地味であつた。外へ出る夫の懷中にすら、ある程度の束縛を加へる位締まつてゐるんぢやないかと思はれた。

「御酒を召し上がらない方は一生の御得ですね」

自分の杯に親しまないのを知つたお兼さんは、ある時斯ういふ述懷を、さも羨ましさうに洩らした事さへある。それでも岡田が顏を赤くして、「二郎さん久し振に相撲でも取りませうか」と野蠻な聲を出すと、

お兼さんは眉をひそめながら、嬉しさうな眼附をするのが常であつたから、お兼さんは旦那の醉ふのが嫌ひなのではなくつて、酒に費用の掛かるのが嫌ひなのだらうと、自分は推察してゐた。

自分は折角の好意だけれども寶塚行を斷つた。さうして腹の中で、あしたの朝岡田の留守に、一寸電車に乘つて一人で行つて樣子を見て來ようと取り極めた。岡田は「さうですか。文樂だと好いんだけれども生憎暑いんで休んでゐるもんだから」と氣の毒さうに云つた。

翌朝自分は岡田と一所に家を出た。彼は電車の上で突然自分の忘れ掛けてゐたお貞さんの結婚問題を持ち出した。

「僕は貴方の親類だと思つてやしません。貴方の御父さんや御母さんに書生として育てられた食客と心得てゐるんです。僕の今の地位だつて、あのお兼だつて、みんな貴方の御兩親の御蔭で出來たんです。だから何か御恩返しをしなくつちや濟まないと平生から思つてるんです。お貞さんの問題もつまり夫が動機で爲たんですよ。決して他意はないんですからね」

お貞さんは宅の厄介ものだから、一日も早く何處かへ嫁に世話をするといふのが彼の主意であつた。自分は家族の一人として岡田の好意を謝すべき地位にあつた。

「御宅ぢや早くお貞さんを片附けたいんでせう」

自分の父も母も實際さうなのである。けれども此時自分の眼にはお貞さんと佐野といふ縁故も何もない

二人が一所に且離れ〴〵に映じた。

「旨く行くでせうか」

「そりや行くだらうぢやありませんか。僕とお兼を見たつて解るでせう。結婚してからまだ一度も大喧嘩をした事なんかありやしませんぜ」

「貴方方は特別だけれども……」

「なに何處の夫婦だつて、大概似たものでさあ」

岡田と自分はそれで此話しを切り上げた。

十二

三澤の便りは果して次の日の午後になつても來なかつた。氣の短かい自分には斯んなづぼらを待つて遣るのが腹立たしく感ぜられた。強ひても是から一人で立たうと決心した。

「まあもう一日二日は宜しいぢや御座いませんか」とお兼さんは愛嬌に云つて呉れた。自分が鞄の中へ浴衣や三尺帶を詰めに二階へ上がり掛ける下から、「是非左右なさいましよ」と追つ掛けるやうに留めた。それでも氣が濟まなかつたと見えて、自分が鞄の始末をした頃、上り口へ顔を出して、「おやもう御荷物の仕度をなすつたんですか。ぢや御茶でも入れますから、御緩りどうぞ」と降りて行つた。

自分は胡坐の儘旅行案内をひろげた。さうして胸の中で彼是と時間の都合を考へた。其都合が中々旨く行かないので、仰向けになつて少時寐て見た。すると三澤と一所に歩く時の愉快が色々に想像された。富士を須走口へ降りる時、滑つて轉んで、腰にぶら下げた大きな金明水入りの硝子壜を、壞したなり帶へ括り附けて歩いた彼の姿抔が眼に浮かんだ。所へ又梯子段を踏むお兼さんの足音がしたので、自分は急に起き直つた。

お兼さんは立ちながら、「まあ好かつた」と一息吐いたやうに云つて、すぐ自分の前に坐つた。さうして三澤から今屆いた手紙を自分に渡した。自分はすぐ封を開いて見た。

「とう〳〵御着きになりましたか」

自分は一寸お兼さんに答へる勇氣を失つた。三澤は三日前大阪に着いて二日ばかり寐た揚句とう〳〵病院に入つたのである。自分は病院の名を指してお兼さんに地理を聞いた。お兼さんは地理丈はよく呑み込んでゐたが、病院の名は知らなかつた。自分は兎に角鞄を提げて岡田の家を出る事にした。

「どうも飛んだ事で御座いますね」とお兼さんは繰り返し〳〵氣の毒がつた。斷るのを無理に、下女が鞄を持つて停車場迄隨いて來た。自分は途中で猶も此下女を返さうとしたが、何とか云つて中々歸らなかつた。其言葉は解るには解るが、自分のやうに此土地に親しみのないものには到底覺えられなかつた。別れるとき今迄世話になつた禮に一圓遣つたら「さいなら、御機嫌よう」と云つた。

電車を下りて俥に乘ると、其俥は軌道を橫切つて細い通を眞直に馳けた。馳け方が餘り烈しいので、向うから來る自轉車だの俥だのと幾度か衝突しさうにした。自分ははら〳〵しながら病院の前に降ろされた。鞄を持つた儘三階に上がつた自分は、三澤を探すため方々の室を覗いて步いた。三澤は廊下の突き當りの八疊に、氷嚢を胸の上に載せて寐てゐた。

「何うした」と自分は室に入るや否や聞いた。彼は何も答へずに苦笑してゐる。「又食ひ過ぎたんだらう」と自分は叱るやうに云つたなり、枕元に胡坐を搔いて上着を脫いだ。

「其處に蒲團がある」と三澤は上眼を使つて、室の隅を指した。自分は其眼の樣子と頰の具合を見て、是は何の位重い程度の病氣なんだらうと疑つた。

「看護婦は附いてるのかい」

「うん。今何處かへ出て行つた」

十三

三澤は平生から胃腸のよくない男であつた。動ともすると吐いたり下したりした。友達は夫を彼の不養生からだと評し合つた。當人は又母の遺傳で體質から來るんだから仕方がないと辯解してゐた。さうして消化器病の書物などを引つ繰り返して、アトニーとか下垂性とかトーヌスとかいふ言葉を使つた。自分抔

が時々彼に忠告めいた事をいふと、彼は素人が何を知るものかと云はぬ許りの顏をした。

「君アルコールは胃で吸收されるものか、腸で吸收されるものか知つてるか」などと澄ましてゐた。其癖病氣になると彼は屹度自分を呼んだ。自分もそれ見ろと思ひながら必ず見舞に出掛けた。彼の病氣は短かくて二三日長くて一二週間で大抵は癒つた。それで彼は彼の病氣を馬鹿にしてゐた。他人の自分は猶更であつた。

けれども此場合自分は先づ彼の入院に驚かされてゐた。其上に胃の上の氷嚢で又驚かされた。自分は夫迄氷嚢は頭か心臟の上でなければ載せるものでないとばかり信じてゐたのである。自分はぴくぴくと脈を打つ氷嚢を見詰めて厭な心持になつた。枕元に坐つてゐればゐる程、附け景氣の言葉が段々出なくなつて來た。

三澤は看護婦に命じて氷菓子を取らせた。自分が其一杯に手を着けてゐるうちに、彼は殘る一杯を食ふといひ出した。自分は藥と定食以外にそんなものを口にするのは好くなからうと思つて留めに掛かつた。すると三澤は怒つた。

「君は一杯の氷菓子を消化するのに、何の位強壯な胃が必要だと思ふのか」と眞面目な顏をして議論を仕掛けた。自分は實の所何も知らないのである。看護婦は、可からうけれども念の爲だからと云つて、わざわざ醫局へ聞きに行つた。さうして少量なら差支へないといふ許可を得て來た。

自分は便所に行くとき三澤に知れないやうに看護婦を呼んで、あの人の病氣は全體何といふんだと聞いて見た。看護婦は大方胃が悪いんだらうと答へた。夫より以上の事を尋ねると、今朝看護婦會から派出された計りで、何もまだ分らないんだと云つて平氣でゐた。仕方なしに下へ降りて醫員に尋ねたら、其男もまだ三澤の名を知らなかつた。けれども患者の病名だの處方だのを書いた紙箋を繰つて、胃が少し糜爛れたんだといふ事丈教へて呉れた。

自分は又三澤の傍へ行つた。彼は氷嚢を胃の上に載せた儘、「君其窓から外を見てみろ」と云つた。窓は正面に二つ側面に一つあつたけれども、何れも西洋式で普通より高い上に、病人は日本の蒲團を敷いて寐てゐるんだから、彼の眼には強い色の空と、電信線の一部分が筋違に見える丈であつた。

自分は窓側に手を突いて、外を見下ろした。すると何よりも先づ高い煙突から出る遠い煙が眼に入つた。其煙は市全體を掩ふやうに大きな建物の上を這ひ廻つてゐた。

「河が見えるだらう」と三澤が云つた。

大きな河が左手の方に少し見えた。

「山も見えるだらう」と三澤が又云つた。

山は正面に先から見えてゐた。

それが暗がり峠で、昔は多分大きな木ばかり生えてゐたのだらうが、今はあの通り明るい峠に變化した

んだとか、もう少しするとあの山の下を突き貫いて、奈良へ電車が通ふやうになるんだとか、三澤は今誰かから聞いた許りの事を元氣よく語つた。自分は是なら大した心配もないだらうと思つて病院を出た。

十四

自分は別に行く所もなかつたので、三澤の泊つた宿の名を聞いて、其處へ俥で乘り附けた。看護婦はつい近くのやうに云つたが、始めての自分には可なりの道程と思はれた。

其宿には玄關も何もなかつた。這入つても入らつしやいと挨拶に出る下女もなかつた。自分は三澤の泊つたといふ二階の一間に通された。手摺の前はすぐ大きな川で、座敷から眺めてゐると大變涼しさうに水は流れるが、向きの所爲か風は少しも入らなかつた。夜に入つて向う側に點ぜられる燈火のきらめきも、たゞ眼に少しばかりの趣きを添へる丈で、涼味といふ感じには丸でならなかつた。

自分は給仕の女に三澤の事を聞いて始めて知つた。彼は二日此處に寐た揚句、三日目に入院したやうに記憶してゐたが實はもう一日前の午後に着いて、鞄を投げ込んだ儘外出して、其晩の十時過ぎに始めて歸つて來たのださうである。着いた時には五六人の伴侶がゐたが、歸りにはたつた一人になつてゐたと下女は告げた。自分は其五六人の伴侶の何人であるかに就いて思ひ惱んだ。然し想像さへ浮かばなかつた。

「醉つてたかい」と自分は下女に聞いて見た。其處は下女も知らなかつた。けれども少し經つて吐いた

から醉つてゐたんだらうと答へた。

自分は其夜蚊帳を釣つて貰つて早く床に這入つた。すると其蚊帳に穴があつて、蚊が二三疋這入つて來た。團扇を動かして、それを拂ひ退けながら寐ようとすると、隣の室の話し聲が耳に附いた。客は下女を相手に酒でも呑んでゐるらしかつた。さうして警部だとかいふ事であつた。自分は警部の二字に多少の興味があつた。それで其人の話しを聞いて見る氣になつたのである。すると自分の室を受け持つてゐる下女が上がつて來て、病院から電話だと知らせた。自分は驚いて起き上がつた。

電話の相手は三澤の看護婦であつた。病人の模樣でも急に變つたのかと思つて心配しながら用事を聞いて見ると病人から、明日は成るべく早く來て呉れ、退屈で困るからといふ傳言に過ぎなかつた。自分は彼の病氣が果してさう重くないんだと斷定した。「何だそんな事か、さういふ我儘は成るべく取次がないが好い」と叱り附けるやうに云つて遣つたが、後で看護婦に對して氣の毒になつたので、「然し行く事は行くよ。君が來て呉れといふなら」と附け足して室へ歸つた。

下女は何時氣が附いたか、蚊帳の穴を針と絲で塞いでゐた。けれども既に這入つてゐる蚊は其儘なので、横になるや否や、時々額や鼻の頭の邊でぶうんと云ふ小さい音がした。夫でもうとうとと寐た。すると今度は右の方の部屋でする話し聲で眼が覺めた。聞いてゐると矢張り男と女の聲であつた。自分は此方側に客は一人もゐない積りでゐたので、一寸驚かされた。然し女が繰り返して、「そんなら最う歸して貰ひます

ぜ」といふやうな言葉を二三度用ひたので、隣の客が女に送られて茶屋からでも歸つて來たのだらうと推察して又眠りに落ちた。

それから最う一度下女が雨戸を引く音に夢を破られて、最後に起き上がつたのが、まだ川の面に白い靄が薄く見える頃だつたから、正味寐たのは何時間にもならなかつた。

十五

三澤の氷嚢は依然として其日も胃の上に在つた。

「まだ氷で冷やしてゐるのか」

自分は聊か案外な顏をして斯う聞いた。三澤にはそれが友達甲斐もなく響いたのだらう。

「鼻風邪ぢやあるまいし」と云つた。

自分は看護婦の方を向いて、「昨夕は御苦勞さま」と一口禮を述べた。看護婦は色の蒼い膨れた女であつた。顏附が繪にかいた座頭に好く似てゐる所爲か、普通彼等の着る白い着物が些とも似合はなかつた。岡山のもので、小さい時膿毒性とかで右の眼を惡くしたんだと、此方で尋ねもしない事を話した。成程この女の一方の眼には白い雲が一杯に掛かつてゐた。

「看護婦さん、こんな病人に優しくして遣ると何を云ひ出すか分らないから、好い加減にして置くが可

いよ」

自分は面白半分わざと輕薄な露骨を云つて、看護婦を苦笑させた。すると三澤が突然「おい氷だ」と氷嚢を持ち上げた。

廊下の先で氷を割る音がした時、三澤は又「おい」と云つて自分を呼んだ。

「君には解るまいが、此病氣を押してゐると、屹度潰瘍になるんだ。それが危險だから僕は斯う凝として氷嚢を載せてゐるんだ。此處へ入院したのも、醫者が勸めたのでも、宿で周旋して貰つたのでもない。たゞ僕自身が必要と認めて自分で入つたのだ。醉興ぢやないんだ」

自分は三澤の醫學上の智識に就いて、夫程信を置き得なかつた。けれども斯う眞面目に出られて見ると、もう交ぜ返す勇氣もなかつた。其上彼の所謂潰瘍とは何んなものか全く知らなかつた。

自分は起つて窓側へ行つた。さうして强い光に反射して、乾いた土の色を見せてゐる暗がり峠を望んだ。不圖奈良へでも遊びに行つて來ようかといふ氣になつた。

「君其樣子ぢや當分約束を履行する譯にも行かないだらう」

「履行しようと思つて、是程の養生をしてゐるのさ」

三澤は中々强情の男であつた。彼の强情に附き合へば、彼の健康が旅行に堪へ得る迄自分は此暑い都の中で蒸されてゐなければならなかつた。

「だつて君の氷嚢は中々取れさうにないぢやないか」

「だから早く癒るさ」

自分は彼と斯ういふ談話を取り換はせてゐるうちに、彼の强情のみならず、彼の我儘な點をよく見て取つた。同時に一日も早く病人を見捨てて行かうとする自分の我儘も亦よく自分の眼に映つた。

「君大阪へ着いたときは澤山伴侶があつたさうぢやないか」

「うん、あの連中と飲んだのが惡かつた」

彼の擧げた姓名のうちには、自分の知つてゐるものも二三あつた。三澤は彼等と名古屋から一所の汽車に乘つたのだが、何れも馬關とか門司とか福岡とか迄行く人であるに拘らず、久し振だからといふので、皆大阪で降りて三澤と共に飯を食つたのださうである。

自分は兎も角もう二三日居て病人の經過を見た上、何うとか爲ようと分別した。

十六

其間自分は三澤の附添ひのやうに、晝も晩も大抵は病院で暮らした。孤獨な彼は實際每日自分を待ち受けてゐるらしかつた。それでゐて顏を合はすと、決して禮などは云はなかつた。わざわざ草花を買つて持つて行つて遣つても、憤と膨れてゐる事さへあつた。自分は枕元で書物を讀んだり、看護婦を相手にした

り、時間が來ると病人に藥を呑ませたりした。朝日が強く差し込む室なので、看護婦を相手に、寐床を陰の方へ移す手傳もさせられた。

自分は斯うしてゐるうちに、毎日午前中に囘診する院長を知る樣になつた。院長は大概黑のモーニングを着て醫員と看護婦を一人づゝ隨へてゐた。色の淺黑い鼻筋の通つた立派な男で、言葉遣ひや態度にも容貌の示す如く品格があつた。三澤は院長に會ふと、醫學上の知識を丸で有つてゐない自分たちと同じやうな質問をしてゐた。「まだ容易に旅行などは出來ないでせうか」「潰瘍になると危險でせうか」「斯うやつて思ひ切つて入院した方が、今考へて見ると矢つ張り得策だつたんでせうか」などと聞くたびに院長は「えゝまあ左右です」ぐらゐな單簡な返答をした。自分は平生解らない術語を使つて、他を馬鹿にする彼が、院長の前で斯う小さくなるのを滑稽に思つた。

彼の病氣は輕いやうな重いやうな變なものであつた。宅へ知らせる事は當人が絕對に不承知であつた。院長に聞いて見ると、嘔氣が來なければ心配する程の事もあるまいが、夫にしても最う少しは食慾が出る筈だと云つて、不思議さうに考へ込んでゐた。自分は去就に迷つた。

自分が始めて彼の膳を見たとき其上には、生豆腐と海苔と鰹節の肉汁が載つてゐた。彼は是より以上箸を着ける事を許されなかつたのである。自分は是では前途遼遠だと思つた。同時に其膳に向つて薄い粥を啜る彼の姿が變に痛ましく見えた。自分が席を外して、つい近所の洋食屋へ行つて支度をして歸つて來る

と、彼は屹度「旨かつたか」と聞いた。自分は其顔を見て益氣の毒になつた。

「あの家は此間君と喧嘩した氷菓子を持つて來る家だ」

三澤は斯う云つて笑つてゐた。自分は彼がもう少し健康を回復する迄彼の傍に居てやりたい氣がした。然し宿へ歸ると、暑苦しい蚊帳の中で、早く涼しい田舍へ行きたいと思ふことが多かつた。此間の晩女と話しをして人の眠りを妨げた隣の客はまだ泊つてゐた。さうして自分の寐ようとする頃に必ず酒氣を帶びて歸つて來た。ある時は宿で酒を飲んで、藝者を呼べと怒鳴つてゐた。それを下女が樣々に胡魔化さうとして仕舞には、あの女はあなたの前へ出ればこそ、彼んな愛嬌をいふものゝ、蔭では貴方の惡口ばかり並べるんだから止めろと忠告してゐた。すると客は、なに己の前へ出た時だけ御世辭を云つて呉れりやそれで嬉しいんだ、蔭で何と云つたつて聞こえないから構はないと答へてゐた。ある時は是も藝者が何か眞面目な話しを持ち込んで來たのを、今度は客の方で胡魔化さうとして、其藝者から他の話しを「ちやん、ちやか、ちやん」に爲てしまふと云つて怒られてゐた。

自分はこんな事で安眠を妨害されて、實際迷惑を感じた。

十七

そんな斯んなで好く眠られなかつた朝、もう看病は御免蒙るといふ氣で、病院の方へ橋を渡つた。する

と病人はまだすや〳〵眠つてゐた。

　三階の窓から見下ろすと、狹い通なので、門前の路が細く綺麗に見えた。向う側は立派な高塀つゞきで、其一つの潜りの外へ主人らしい人が出て、如露で丹念に往來を濡らしてゐた。塀の内には夏蜜柑のやうな深綠の葉が瓦を隱す程茂つてゐた。

　院内では小使が丁字形の棒の先へ雜巾を括り附けて廊下をぐん〳〵押して歩いた。雜巾をゆすがないので、折角拭いた所が却て白く汚れた。輕い患者はみな洗面所へ出て顏を洗つた。看護婦の拂塵の聲が此處彼處で聞こえた。自分は枕を借りて、三澤の隣の空室へ、昨夕の睡眠不足を補ひに入つた。

　其室も朝日の強く當たる向きにあるので、一寐入りするとすぐ眼が覺めた。額や鼻の頭に汗と脂が一面に浮き出してゐるのも不愉快だつた。自分は其時岡田から電話口へ呼ばれた。岡田が病院へ電話を掛けたのは是で三度目である。彼は極まり切つて「御病人の御樣子は何うです」と聞く。「二三日うち是非伺ひます」といふ。「何でも御用があるなら御遠慮なく」といふ。最後に屹度お兼さんの事を一口二口附け加へて、「お兼からも宜しく」とか、「是非御遊びに入らつしやる樣に妻も申して居ります」とか、「うちの方が忙しいんで、つい御無沙汰をしてゐます」とか云ふ。

　其日も岡田の話しは何時もの通りであつた。けれども一番仕舞に「今から一週間内……と斷定する譯には行かないが、兎に角もう少しすると、貴方を一寸驚かせる事が出て來るかも知れませんよ」と妙な事を

仄めかした。自分は全く想像が附かないので、全體何んな話なんですかと二三度聞き返したが、岡田は笑ひながら、「もう少しすれば解ります」といふ限りなので、自分もとう〳〵其意味を聞かないで、三澤の室へ歸つて來た。

「叉例の男かい」と三澤が云つた。

自分は今の岡田の電話が氣になつて、すぐ大阪を立つ話しを持ち出す心持になれなかつた。すると思ひ掛けなく三澤の方から「君もう大阪は厭になつたらう。僕のためにゐて貰ふ必要はないから、何處かへ行くなら遠慮なく行つて呉れ」と云ひ出した。彼はたとひ病院を出る場合が來ても、無闇な山登り抔は當分愼まなければならないと覺つたと說明して聞かせた。

「それぢや僕の都合の好いやうにしよう」

自分は斯う答へて暫く默つてゐた。看護婦は無言の儘室の外に出て行つた。自分は其草履の音の消えるのを聞いてゐた。それから小さい聲をして三澤に、「金はあるか」と尋ねた。彼は己の病氣をまだ己の家に知らせないでゐる。夫にたつた一人の知人たる自分が、彼の傍を立ち退いたら、精神上よりも物質的に心細からうと自分は懸念した。

「君に才覺が出來るのかい」と三澤は聞いた。

「別に目的もないが」と自分は答へた。

「何いざとなれば何うかなるよ。君に算段して貰はなくつても。金は有るには有るんだから」と云つた。

三澤は急に笑ひ出した。

「岡田か」と自分は少し考へ込んだ。

「例の男は何うだい」と三澤が云つた。

十八

金の事はつい夫なりになつた。自分は岡田へ金を借りに行く時の思ひを想像すると實際厭だつた。病氣に罹つた友達の爲だと考へても、少しも進む氣はしなかつた。其代り此地を立つとも立たないとも決心し得ないで愚圖々々した。

岡田からの電話は掛かつて來た時大いに自分の好奇心を動搖させたので、わざ／＼彼に會つて眞相を聞き糺さうかとも思つたけれども、一晩經つとそれも面倒になつて、つい其儘にして置いた。

自分は依然として病院の門を潛つたり出たりした。朝九時頃玄關に掛かると、廊下も控所も外來の患者で一杯に埋まつてる事があつた。そんな時には世間にも是程病人が有り得るものかとわざと驚いたやうな顔をして、彼等の様子を一順見渡してから、梯子段に足を掛けた。自分が偶然あの女を見出したのは全く此一瞬間にあつた。あの女といふのは三澤があの女あの女と呼ぶから自分もさう呼ぶのである。

あの女は其時廊下の薄暗い腰掛の隅に丸くなつて横顔丈を見せてゐた。其傍には洗髪を櫛巻にした脊の高い中年の女が立つてゐた。自分の一瞥はまづ其女の後姿の上に落ちた。さうして何だか其處に愚圖愚圖してゐた。すると其年増が向うへ動き出した。あの女は其年増の影から現はれたのである。其時あの女は忍耐の像の様に丸くなつて凝としてゐた。けれども血色にも表情にも苦悶の迹は殆ど見えなかつた。自分は最初其横顔を見た時、是が病人の顔だらうかと疑つた。たゞ胸が腹に着く程背中を曲げてゐる所に、恐ろしい何物かが潜んでゐる様に思はれて、それが甚だ不快であつた。自分は階段を上りつゝ、「あの女」の忍耐と、美しい容貌の下に包んでゐる病苦とを想像した。

三澤は看護婦から病院のAといふ助手の話を聞かされてゐた。此Aさんは夜になつて閑になると、好く尺八を吹く若い男であつた。獨身もので病院に寢泊りをして、室は三澤と同じ三階の折れ曲がつた隅にあつた。此間迄始終上履の音をぴしや／＼云はして歩いてゐたが、此二三日丸で顔を見せないので、三澤も自分も、何うかしたのかね位は噂し合つてゐたのである。

看護婦はAさんが時々跛を引いて便所へ行く様子が可笑しいと云つて笑つた。それから病院の看護婦が時々ガーゼと金盥を持つてAさんの部屋へ入つて行く所を見たとも云つた。三澤はさういふ話に興味が有るでもなく、又無いでもない様な無愛嬌な顔をして、たゞ「ふん」とか「うん」とか答へてゐた。

彼は又自分に何時迄大阪に居る積りかと聞いた。彼は旅行を断念してから、自分の顔を見るとよく斯う

云つた。それが自分には遠慮がましく且催促がましく聞こえて却て厭であつた。

「僕の都合で歸らうと思へば何時でも歸るさ」

「何うか左右して呉れ」

自分は立つて窓から眞下を見下ろした。「あの女」はいくら見てゐても門の外へ出て來なかつた。

「日の當たる所へわざ〳〵出て何を爲てゐるんだ」と三澤が聞いた。

「見てゐるんだ」と自分は答へた。

「何を見てゐるんだ」と三澤が聞き返した。

十九

自分は夫でも我慢して容易に窓側を離れなかつた。つい向うに見える物干に、松だの石榴だのの盆栽が五六鉢竝んでゐる傍で、島田に結つた若い女が、しきりに洗濯ものを竿の先に通してゐた。自分は一寸其方を見ては又下を向いた。けれども待ち設けてゐる當人はいつ迄經つても出て來る氣色はなかつた。自分はとう〳〵暑さに堪へ切れないで又三澤の寐床の傍へ來て坐つた。彼は自分の顏を見て、「何うも強情な男だな、他が親切に云つて遣れば遣る程、わざ〳〵日の當たる所に顏を曝してゐるんだから。君の顏は眞赤だよ」と注意した。自分は平生から三澤こそ強情な男だと思つてゐた。それで「僕の窓から首を出してゐる

たのは、君の樣な無意味な强情とは違ふ。ちやんと目的があつてわざと首を出したんだ」と少し勿體を附けて說明した。其代り肝心の「あの女」の事を却て云ひ惡くして仕舞つた。

程經て三澤は又「先刻は本當に何か見てゐたのか」と笑ひながら聞いた。自分は此時もう氣が變つてゐた。「あの女」を口にするのが愉快だつた。何うせ强情な三澤の事だから、聞けば屹度馬鹿だとか下らないとか云つて自分を冷罵するに違ひないとは思つたが、それも氣にはならなかつた。左右したら實は「あの女」に就いて自分はある原因から特別の興味を有つやうになつたのだ位答へて、三澤を少し焦らして遣らうといふ下心さへ手傳つた。

所が三澤は自分の豫期とは丸で反對の態度で、自分のいふ一句々々をさも感心したらしく聞いてゐた。自分も乘り氣になつて一二分で濟む所を三倍程に語り續けた。一番仕舞に自分の言葉が途切れた時、三澤は「それは無論素人なんぢやなからうな」と聞いた。自分は「あの女」を詳しく說明したけれども、つい藝者といふ言葉を使はなかつたのである。

「藝者ならことによると僕の知つてる女かも知れない」

自分は驚かされた。然し的きり冗談だらうと思つた。けれども彼の眼は其反對を語つてゐた。其癖口元は笑つてゐた。彼は繰り返して「あの女」の眼つきだの鼻つきだのを自分に問うた。自分は梯子段を上る時、其橫顏を見た限りなので、さう詳しい事は答へられない程であつた。自分にはたゞ背中を折つて重な

り合つてゐるやうな憐れな姿勢丈がありくと眼に映つた。

「屹度あれだ。今に看護婦に名前を聞かして遣らう」

三澤は斯う云つて薄笑ひをした。けれども自分を擔いでゐる樣子は更に見えなかつた。自分は少し釣り込まれた氣味で、彼と「あの女」との關係を聞かうとした。

「今に話すよ。あれだと云ふ事が確かに分つたら」

そこへ病院の看護婦が「回診です」と注意しに來たので、「あの女」の話しはそれなり途切れて仕舞つた。自分は回診の混雜を避けるため、時間が來ると席を外して廊下へ出たり、貯水桶のある高い處へ出たりしてゐたが、其日は手近にある帽を取つて、梯子段を下迄降りた。「あの女」がまだ何處かに居さうな氣がするので、自分は玄關の入口に佇んで四方を見廻した。けれども廊下にも控室にも患者の影はなかつた。

二十

其夕方の空が風を殺して靜まり返つた灯ともし頃、自分は又曲がりくねつた段々を急ぎ足に三澤の室迄上つた。彼は食後と見えて蒲團の上に胡坐をかいて大きくなつてゐた。

「もう便所へも一人で行くんだ。肴も食つてゐる」

是が彼の其時の自慢であつた。

窓は三つ共明け放つてあつた。室が三階で前に目を遮るものがないから、空は近くに見えた。其中に燦く星も遠慮なく光を増して來た。三澤は團扇を使ひながら「蝙蝠が飛んでやしないか」と云つた。看護婦の白い服が窓の傍迄動いて行つて、其胴から上が一寸窓枠の外へ出た。自分は蝙蝠よりも「あの女」の事が氣に掛かつた。「おい、あの事は解つたか」と聞いて見た。

「矢つ張りあの女だ」

三澤は斯う云ひながら、一寸意味のある眼遣ひをして自分を見た。自分は「左右か」と答へた。その調子が餘り高いといふ譯なんだらう、三澤は團扇でぱつと自分の顏を扇いだ。さうして急に持ち交へた柄の方を前へ出して、自分達のゐる室の筋向うを指した。

「あの室へ這入つたんだ。君の歸つた後で」

三澤の室は廊下の突き當りで往來の方を向いてゐた。女の室は同じ廊下の角で、中庭の方から明りを取る樣に出來てゐた。暑いので兩方共入り口は明けた儘、障子は取り拂つてあつたから、自分のゐる所から、團扇の柄で指し示された部屋の入口は、四半分程斜に見えた。然し其處には女の寐て居る床の裾が、畫の模樣のやうに三角に少し出てゐる丈であつた。

自分は其蒲團の端を見詰めて少時何も云はなかつた。

「潰瘍の劇しいんだ。血を吐くんだ」と三澤が又小さな聲で告げた。自分は此時彼が無理を遣ると潰瘍

になる危險があるから入院したと說明して聞かせた事を思ひ出した。潰瘍といふ言葉は其折自分の頭に何等の印象も與へなかつたが、今度は妙に恐ろしい響を傳へた。潰瘍の陰に、死といふ怖いものが潛んでるかのやうに。

しばらくすると、女の部屋で微かにげえ〳〵といふ聲がした。

「そら吐いてゐる」と三澤が眉をひそめた。やがて看護婦が戶口へ現はれた。手に小さな金盥を持ちながら、草履を突つ掛けて、一寸我々の方を見た儘出て行つた。

「癒りさうなのかな」

自分の眼には、今朝腮を胸に押し附けるやうにして、凝と腰を掛けてゐた美しい若い女の顏がありありと見えた。

「何うだかね。あゝ嘔くやうぢや」と三澤は答へた。其表情を見ると氣の毒といふより寧ろ心配さうな或物に囚へられてゐた。

「君は本當にあの女を知つてるのか」と自分は三澤に聞いた。

「本當に知つてる」と三澤は眞面目に答へた。

「然し君は大阪へ來たのが今度始めてぢやないか」と自分は三澤を責めた。

「今度來て今度知つたのだ」と三澤は辯解した。「此病院の名も實はあの女に聞いたのだ。僕は此處へ

這入る時から、あの女が事によると遣つて來やしないかと心配してゐた。けれども今朝君の話しを聞く迄はよもやと思つてゐた。僕はあの女の病氣に對しては責任があるんだから……」

二十一

大阪へ着くと其儘、友達と一所に飲みに行つた何處かの茶屋で、三澤は「あの女」に會つたのである。三澤は其時既に暑さのために胃に變調を感じてゐた。彼を強ひた五六人の友達は、久し振だからといふ口實のもとに、彼を醉はせる事を御馳走のやうに振舞つた。三澤も宿命に從ふ柔順な人として、いくらでも盃を重ねた。それでも胸の下の所には絶えず不安な自覺があつた。ある時は變な顏をして苦しさうに生唾を呑み込んだ。丁度彼の前に坐つてゐた「あの女」は、大阪言葉で彼に藥を遣らうかと聞いた。彼はジエムか何かを五六粒手の平へ載せて口のなかへ投げ込んだ。すると入れ物を受取つた女も同じ様に白い掌の上に小さな粒を並べて口へ入れた。

三澤は先刻から女の倦怠さうな立ち居に氣を附けてゐたので、御前も何處か惡いのかと聞いた。女は淋しさうな笑ひを見せて、暑い所爲か食慾がちつとも進まないので困つてゐると答へた。ことに此一週間は御飯が厭で、たゞ氷ばかり呑んでゐる、それも今呑んだかと思ふと、すぐ又食べたくなるんで、何うも仕様がないと云つた。

三澤は女に、それは大方胃が惡いのだらうから、何處かへ行つて專門の大家にでも見せたら好からうと眞面目な忠告をした。女も他に聞くと胃病に違ひないといふから、好い醫者に見せたいのだけれども家業が家業だからと後は云ひ澁つてゐた。彼は其時女から始めて此處の病院と院長の名前を聞いた。

「僕もさう云ふ所へ一寸入つて見ようかな。何うも少し變だ」

三澤は冗談とも本氣ともつかない調子で斯んな事を云つて、女から緣起でもないやうに眉を寄せられた。

「夫ぢやまあたんと飮んでから後の事にしよう」と三澤は彼の前にある盃をぐつと干して、それを女の前に突き出した。女は大人しく酌をした。

「君も飮むさ。飯は食へなくつても、酒なら飮めるだらう」

彼は女を前に引き附けて無暗に盃を遣つた。女も素直にそれを受けた。然し仕舞には堪忍して吳れと云ひ出した。それでも凝と坐つた儘席を立たなかつた。

「酒を呑んで胃病の蟲を殺せば飯なんかすぐ喰へる。呑まなくつちや駄目だ」

三澤は自暴に醉つた揚句、亂暴な言葉迄使つて女に酒を强ひた。それでゐて、己の胃の中には、今にも爆發しさうな苦しい塊りが、うねりを打つてゐた。

* * * * * *

自分は三澤の話しを此處迄聞いて慄とした。何の必要があつて、彼は己の肉體をさう殘酷に取り扱つた

のだらう。己は自業自得としても、「あの女」の弱い身體をなんで左右無益に苦しめたものだらう。

「知らないんだ。向うは僕の身體を知らないし、僕は又あの女の身體を知らないんだ。周圍に居るものは又我々二人の身體を知らないんだ。それ計りぢやない、僕もあの女も自分で自分の身體が分らなかつたんだ。其上僕は自分の胃の腑が忌々しくつて堪らなかつた。それで酒の力で一つ壓倒して遣らうと試みたのだ。あの女もことによると、左右かも知れない」

三澤は斯う云つて黯然としてゐた。

二十二

「あの女」は室の前を通つても廊下からは顏の見えない位置に寐てゐた。看護婦は入口の柱の傍へ寄つて覗き込むやうにすれば見えると云つて自分に敎へて吳れたけれども、自分にはそれを敢てする程の勇氣がなかつた。

附添ひの看護婦は暑いせゐか大概は其柱にもたれて外の方ばかり見てゐた。それが又看護婦としては特別器量が好いので、三澤は時々不平な顏をして人を馬鹿にしてゐる抔と云つた。彼の看護婦はまた別の意味からして、此美しい看護婦を好く云はなかつた。病人の世話を其方退けにするとか、不親切だとか、京都に男があつて、其男から手紙が來たんで夢中なんだとか、色々の事を探つて來ては三澤や自分に報告し

た。ある時は病人の便器を差し込んだなり、引き出すのを忘れて其儘寐込んで仕舞つた怠慢さへあつたと告げた。

實際この美しい看護婦が器量の優れてゐる割合に義務を重んじなかつた事は自分達の眼にもよく映つた。

「ありや取り換へて遣らなくつちや、あの女が可哀さうだね」と三澤は時々苦い顔をした。それでも其看護婦が入口の柱にもたれて、うと〳〵して居ると、彼はわが室の中から其横顔を凝と見詰めて居る事があつた。

「あの女」の病勢も此方の看護婦の口からよく洩れた。――牛乳でも肉汁でも、どんな輕い液體でも狂つた胃が決して受け附けない。肝心の藥さへ厭がつて飲まない。強ひて飲ませると、すぐ戻してしまふ。

「血は吐くかい」

三澤は何時でも斯う云つて看護婦に反問した。自分は其言葉を聞くたびに不愉快な刺激を受けた。

「あの女」の見舞客は絕えずあつた。けれども外の室のやうに賑やかな話し聲は丸で聞こえなかつた。自分は三澤の室に寐ころんで、「あの女」の室を出たり入つたりする島田や銀杏返しの影をいくつとなく見た。中には眼の覺めるやうに派出な模樣の着物を着てゐるものもあつたが、大抵は素人に近い地味な服裝で、こつそり來てこつそり出て行くのが多かつた。入口であら姐はんといふ感投詞を用ひたものもあつたが、夫はたゞの一遍に過ぎなかつた。それも廊下の端に洋傘を置いて室の中へ入るや否や急に消えたやう

に靜かになつた。

「君はあの女を見舞つて遣つたのか」と自分は三澤に聞いた。

「いゝや」と彼は答へた。「然し見舞つて遣る以上の心配をして遣つてゐる」

「ぢや向うでもまだ知らないんだね。君の此處にゐる事は」

「知らない筈だ、看護婦でも云はない以上は。あの女の入院するとき僕はあの女の顏を見てはつと思つたが、向うでは僕の方を見なかつたから、多分知るまい」

三澤は病院の二階に「あの女」の馴染客があつて、夫が「御前胃のため、わしや腸のため、共に苦しむ酒のため」といふ都々逸を紙片へ書いて、あの女の所へ屆けた上、出院のとき袴羽織でわざ〳〵見舞に來た話をして、何といふ馬鹿だといふ顏附をした。

「靜かにして、刺激のないやうにして遣らなくつちや不可ない。室でもそつと入つて、そつと出て遣るのが當り前だ」と彼は云つた。

「隨分靜かぢやないか」と自分は云つた。

「病人が口を利くのを厭がるからさ。惡い證據だ」と彼が又云つた。

二十三

三澤は「あの女」の事を自分の豫想以上に詳しく知つてゐた。さうして自分が病院に行くたびに、其話を第一の問題として持ち出した。彼は自分の居ない間に得た「あの女」の内情を、恰も彼と關係ある婦人の内所話でも打ち明ける如くに語つた。さうして夫等の知識を自分に與へるのを誇りとする樣に見えた。

彼の語る所によると「あの女」はある藝者屋の娘分として大事に取り扱はれる賣れつ子であつた。虛弱な當人は又それを唯一の滿足と心得て商賣に勉强してゐた。ちつとやそつと身體が惡くても決して休むやうな橫着はしなかつた。時たま堪へられないで床に就く場合でも、早く御座敷に出たい出たいといふのを口癖にしてゐた。……

「今あの女の室に來てゐるのは、其藝者屋に古くからゐる下女さ。名前は下女だけれど、古くからゐるんで、自然權力があるから、下女らしく爲ちやゐない。丸で叔母さんか何ぞの樣だ。あの女もあの下女のいふ事丈は素直によく聞くので、厭がる藥を吞ませたり、我儘を云ひ募らせないためには必要な人間なんだ」

三澤はすべて斯ういふ内幕の出所をみんな彼の看護婦に歸して、ことごとく彼女から聞いた樣に說明した。けれども自分は少し其處に疑はしい點を認めないでもなかつた。自分は三澤が便所へ行つた留守に、看護婦を捕まへて、「三澤はあゝ云つてるが、僕の居ないとき、あの女の室へ行つて話しでもするんぢやないか」と聞いて見た。看護婦は眞面目な顏をして「そんな事ありやしまへん」といふやうな言葉で、一口

に自分の疑ひを否定した。彼女は夫から左右いふ御客が見舞に行つた所で、身上話などが出來る筈がないと辯解した。さうして「あの女」の病氣が段々險惡の一方へ落ち込んで行く心細い例を話して聞かせた。「あの女」は吐氣が止まないので、上から營養の取り樣がなくなつて、昨日とう／＼滋養浣腸を試みた。然し其結果は思はしくなかつた。少量の牛乳と鷄卵を混和した單純な液體ですら衰弱を極めたあの女の腸には荷が重過ぎると見えて豫期通り吸收されなかつた。

看護婦は是丈語つて、この位重い病人の室へ入つて、誰が悠々と身上話などを聞いて居られるものかといふ顏をした。自分も彼女の云ふ所が本當だと思つた。それで三澤の事は忘れて、たゞ綺羅を着飾つた流行の藝者と、恐ろしい病氣に罹つた憐れな若い女とを、默つて心のうちに對照した。

「あの女」は器量と藝を賣る御蔭で、何とかいふ藝者屋の娘分になつて家のものから大事がられてゐた。それを賣る事が出來なくなつた今でも、矢張り今迄通り宅のものから大事がられるだらうか。若し彼等の待遇が、あの女の病氣と共に段々輕薄に變つて行くなら、毒惡な病と苦戰するあの女の心は何の位心細いだらう。何うせ藝妓屋の娘分になる位だから、生みの親は身分のあるものでないに極まつてゐる。經濟上の餘裕がなければ、何う心配したつて役には立つまい。

自分は斯んな事も考へた。便所から歸つた三澤に「あの女の本當の親はあるのか知つてるか」と尋ねて見た。

二十四

「あの女」の本當の母といふのを、三澤はたつた一遍見た事があると語つた。

「それもほんの後姿丈さ」と彼はわざ〳〵斷つた。

其母といふのは自分の想像通り、あまり樂な身分の人ではなかつたらしい。やつとの思ひで薩張りした身裝をして出て來るやうに見えた。たまに來ても左も氣兼ねらしく狐鼠々々と來て、何時の間にか、又梯子段を下りて人の氣の附かない樣に歸つて行くのださうである。

「いくら親でも、あゝなると遠慮が出來るんだね」と三澤は云つてゐた。

「あの女」の見舞客はみんな女であつた。しかも若い女が多數を占めてゐた。それが又普通の令孃や細君と違つて、色香を命とする綺麗な人許りなので、其中に交る此母は、唯でさへ燻ぶり過ぎて地味なのである。自分は年を取つた貧しさうな此母の後姿を想像に描いて暗に憐れを催した。

「親子の情合からいふと、娘があんな大病に罹つたら、母たるものは朝晩とも嘸傍に附いて居て遣りたい氣がするだらうね。他人の下女が幅を利かしてゐて、實際の親が他人扱ひにされるのは、見てゐても餘り好い心持ぢやない」

「いくら親でも仕方がないんだよ。だいち傍にゐてやる程の時間もなし、時間があつても入費がないん

だから」

　自分は情ない氣がした。あゝ云ふ浮いた家業をする女の平生は羨ましい程派出でも、いざ病氣となると、普通の人よりも悲酸の程度が一層甚しいのではないかと考へた。

「旦那が附いてゐさうなものだがな」

三澤の頭も此點丈は注意が足りなかつたと見えて、自分が斯う不審を打つたとき、彼は何の答もなく默つてゐた。あの女に關して一切の新知識を供給する看護婦も其處へ行くと何の役にも立たなかつた。

「あの女」の蚊弱い身體は、其頃の暑さでも何うか斯うか持ち應へてゐた。三澤と自分はそれを殆ど奇蹟の如くに語り合つた。其癖兩人とも露骨を憚つて、つひぞ柱の影から室の中を覗いて見た事がないので、現在の「あの女」が何の位窶れてゐるかは空しい想像畫に過ぎなかつた。滋養浣腸さへ思はしく行かなかつたといふ報知が、自分等二人の耳に屆いた時ですら、三澤の眼には美しく着飾つた藝者の姿より外に映るものはなかつた。自分の頭にも、唯血色の惡くない入院前の「あの女」の顏が描かれる丈であつた。それで二人共あの女は最う六づかしいだらうと話し合つてゐた。さうして實際は雙方共死ぬとは思はなかつたのである。

　同時に色々な患者が病院を出たり入つたりした。ある晩「あの女」と同じ位な年配の二階に居る婦人が擔架で下へ運ばれて行つた。聞いて見ると、今日明日にも變がありさうな危險な所を、附添ひの母が田舍

へ連れて歸るのであつた。其母は三澤の看護婦に、氷計りも二十何圓とか遣つたと云つて、何うしても退院するより外に途がないとわが窮狀を仄めかしたさうである。

自分は三階の窓から、田舍へ歸る釣臺を見下ろした。釣臺は暗くて見えなかつたが、用意の提灯の灯はやがて動き出した。窓が高いのと往來が狹いので、灯は谷の底をひそかに動いて行くやうに見えた。それが向うの暗い四つ角を曲がつてふつと消えた時、三澤は自分を顧て、「歸り着く迄持てば好いがな」と云つた。

二十五

斯んな悲酸な退院を餘儀なくされる患者があるかと思ふと、毎日子供を負ぶつて、廊下だの物見臺だの他人の室だのを、ぶら〳〵廻つて歩く呑氣な男もあつた。

「丸で病院を娛樂場のやうに思つてるんだね」

「第一何方が病人なんだらう」

自分達は可笑しくもあり又不思議でもあつた。看護婦に聞くと、負ぶつてゐるのは叔父で、負ぶさつてゐるのは甥であつた。此甥が入院當時骨と皮計りに瘠せてゐたのを叔父の丹精一つでこの位肥つたのださうである。叔父の商賣はメリヤス屋だとか云つた。いづれにしても金に困らない人なのだらう。

時には病院を空ける事さへあつた。歸つて來ると素つ裸體になつて、病院の飯を旨さうに食つた。さうして三澤の一軒置いて隣には又變な患者がゐた。手提乾抔を提げて、普通の人間の如く平氣で出歩いた。時には病院を空ける事さへあつた。歸つて來ると素つ裸體になつて、病院の飯を旨さうに食つた。さうして昨日は一寸神戸まで行つて來ました抔と澄ましてゐた。

岐阜からわざ〳〵本願寺參りに京都迄出て來た序に、夫婦共此病院に這入つたなり動かないのもゐた。其夫婦ものの室の床には後光の射した阿彌陀樣の軸が懸けてあつた。二人差向ひで氣樂さうに碁を打つてゐる事もあつた。それでも細君に聞くと、此春餅を食つた時、血を猪口に一杯半程吐いたから伴れて來たのだと勿體らしく云つて聞かせた。

「あの女」の看護婦は依然として入口の柱に靠れて、わが膝を兩手で抱いてゐる事が多かつた。此方の看護婦はそれを又器量を鼻へ掛けて、わざ〳〵あんな人の眼に着く所へ出るのだと評してゐた。自分は「まさか」と云つて辯護する事もあつた。けれども「あの女」と其美しい看護婦との關係は、冷淡さ加減の程度に於て、當初も其時もあまり變りがないやうに見えた。自分は器量好しが二人寄つて、我知らず互に嫉み合ふのだらうと說明した。三澤は、さうぢやない、大阪の看護婦は氣位が高いから、藝者抔を眼下に見て、始めから相手にならないんだ、それが冷淡の原因に違ひないと主張した。斯う主張しながらも彼は別に此看護婦を惡む樣子はなかつた。自分もこの女に對して左程厭な感じは有つてゐなかつた。醜い三澤の附添ひは「本間に器量の好いものは德やな」と云つた風の、自分達には變に響く言葉を使つて、二人を笑

はせた。

こんな周圍に取り圍まれた三澤は、身體の囘復するに從つて「あの女」に對する興味を日に增し加へて行くやうに見えた。自分は已むを得ず興味といふ妙な熟字を此處に用ひるのは、彼の態度が戀愛でもなければ、又全くの親切でもなく、興味の二字で現はすより外に、適切な文字が一寸見當たらないからである。始めて「あの女」を控室で見たときは、自分の興味も三澤に讓らない位鋭かつた。けれども彼から「あの女」の話を聞かされるや否や、主客の別は旣に附いて仕舞つた。それからと云ふもの「あの女」の噂が出る度に、彼は何時でも先輩の態度を取つて自分に向つた。自分も一時は彼に釣り込まれて、當初の興味が段々研ぎ澄まされて行く樣な氣分になつた。けれども客の位置に据ゑられた自分はそれ程長く興味の高潮を保ち得なかつた。

二十六

自分の興味が强くなつた頃、彼の興味は自分より一層强くなつた。自分の興味が稍衰へかけると、彼の興味は益强くなつて來た。彼は元來が打つ切ら棒の男だけれども、胸の奧には人一倍優しい感情を有つてゐた。さうして何か事があると急に熱する癖があつた。

自分は旣に院内をぶら〳〵する程に囘復した彼が、何故「あの女」の室へ入り込まないかを不審に思つ

た。彼は決して自分の樣な羞恥家ではなかつた。同情の言葉を掛けに、一遍會つた「あの女」の病室へ見舞に行く位の事は彼の性質から見て何でもなかつた。自分は「そんなにあの女が氣になるなら、直かに行つて、會つて慰めて遣れば好いぢやないか」と迄云つた。彼は「うん、實は行きたいのだが……」と澁つてゐた。實際これは彼の平生にも似合はない挨拶であつた。さうして其意味は解らなかつた。解らなかつたけれども、本當は彼の行かない方が、自分の希望であつた。

ある時自分は「あの女」の看護婦から——自分と此美しい看護婦とは何時の間にか口を利く樣になつてゐた。尤もそれは彼女が例の柱に倚りかゝつて、其前を通る自分の顏を見上げるときに、時候の挨拶を取り換はす位な程度に過ぎなかつたけれども、——兎に角此美しい看護婦から自分は運勢早見なんとかいふ、玩具の占ひの本見た樣なものを借りて、三澤の室でそれを遣つて遊んだ。

是は赤と黑と兩面に塗り分けた碁石のやうな丸く平たいものを幾何か持つて、それを眼を眠つた儘疊の上へ竝べて置いて、赤が若干黑が若干と後から勘定するのである。それから其數字を一つは横へ、一つは竪に繰つて、兩方が一點に會した所を本で引いて見ると、辻占のやうな文句が出る事になつてゐた。

自分が眼を閉ぢて、石を一つ〳〵疊の上に置いたとき、看護婦は赤がいくつ黑がいくつと云ひながら占ひの文句を繰つて呉れた。すると、「此戀若し成就する時は、大いに恥を搔く事あるべし」とあつたので、彼女は讀みながら吹き出した。三澤も笑つた。

「おい氣を附けなくつちや不可ないぜ」と云つた。三澤は其前から「あの女」の看護婦に自分が御辭儀をする所が變だと云つて、始終自分に調戯つてゐたのである。

「君こそ少し氣を附けるが好い」と自分は三澤に竹篦返しを喰はして遣つた。すると三澤は眞面目な顔をして、「何故」と反問して來た。此場合此強情な男にこれ以上いふと、事が面倒になるから自分は默つてゐた。

實際自分は三澤が「あの女」の室へ出入りする氣色のないのを不審に思つてゐたが、一方では又彼の熱し易い性質を考へて、今迄は兎に角、是から先彼が何時何う變返るかも知れないと心配した。彼は既に下の洗面所迄行つて、朝毎に顔を洗ふ位の氣力を回復してゐた。

「何うだもう好い加減に退院したら」

自分は斯う勸めて見た。さうして萬一金錢上の關係で退院を躊躇するやうすが見えたら、彼が自宅から取り寄せる手間と時間を省くため、自分が思ひ切つて一つ岡田に相談して見ようと迄思つた。三澤は自分の云ふ事には何の返事も與へなかつた。却て反對に「一體君はいつ大阪を立つ積りだ」と聞いた。

二十七

自分は二日前に天下茶屋のお兼さんから不意に訪問を受けた。其結果として此間岡田が電話口で自分に

話し掛けた言葉の意味を漸く知つた。だから自分は此時既に一週間内に自分を驚かして見せるといつた彼の豫言の爲に縛られてゐた。三澤の病氣、美しい看護婦の顏、聲も姿も見えない若い藝者と、其人の一時折り合つてゐる蒲團の上の狹い生活、――自分は單にそれ等ばかりで大阪に愚圖ついて居るのではなかつた。詩人の好きな言語を借りて云へば、ある豫言の實現を期待しつゝ暑い宿屋に泊つてゐたのである。

「僕には左右いふ事情があるんだから、もう少し此處に待つてゐなければならないのだ」と自分は大人しく三澤に答へた。すると三澤は多少殘念さうな顏をした。

「ぢや一所に海邊へ行つて靜養する譯にも行かないな」

三澤は變な男であつた。此方が大事がつて遣る間は、向うで何時でも跳ね返すし、此方が退かうとすると、急に又他の袂を捕まへて放さないし、と云つた風に氣分の出入りが著しく眼に立つた。彼と自分との交際は從來何時でも斯ういふ消長を繰り返しつゝ今日に至つたのである。

「海岸へ一所に行く積りでもあつたのか」と自分は念を押して見た。

「無いでもなかつた」と彼は遠くの海岸を眼の中に思ひ浮かべるやうな風をして答へた。其時の彼の眼には、實際「あの女」も「あの女」の看護婦もなく、たゞ自分といふ友達がある丈のやうに見えた。

自分は其日快く三澤に別れて宿へ歸つた。然し歸り路に、その快く別れる前の不愉快さも考へた。自分は彼に病院を出ろと勸めた、彼は自分に何時迄大阪にゐるのだと尋ねた。上部にあらはれた言葉の遣り

取りはたゞ是丈に過ぎなかつた。然し三澤も自分も其處に變な苦い意味を味はつた。

自分の「あの女」に對する興味は衰へたけれども、自分は何うしても三澤と「あの女」とをさう懇意にしたくなかつた。三澤も又、あの美しい看護婦を何うする了簡もない癖に、自分丈が段々彼女に近づいて行くのを見て、平氣でゐる譯には行かなかつた。其處に自分達の心附かない暗闘があつた。其處に持つて生れた人間の我儘と嫉妬があつた。其處に調和にも衝突にも發展し得ない、中心を缺いた興味があつた。要するに其處には性の爭ひがあつたのである。さうして兩方共それを露骨に云ふ事が出來なかつたのである。

自分は歩きながら自分の卑怯を恥ぢた。同時に三澤の卑怯を惡んだ。けれども淺間しい人間である以上、是から先何年交際を重ねても、此卑怯を拔く事は到底出來ないんだといふ自覺があつた。自分は其時非常に心細くなつた。かつ悲しくなつた。

自分は其明日病院へ行つて三澤の顏を見るや否や、「もう退院は勸めない」と斷つた。自分は手を突いて彼の前に自分の罪を詫びる心持で斯う云つたのである。すると三澤は「いや僕もさう愚圖々々してはゐられない。君の忠告に從つて愈出る事にした」と答へた。彼は今朝院長から退院の許可を得た旨を話して、「あまり動くと惡いさうだから寢臺で東京迄直行する事にした」と告げた。自分は其突然なのに驚いた。

二十八

「何うして又左右急に退院する氣になつたのか」

自分は斯う聞いて見ないではゐられなかつた。三澤は自分の問に答へる前に凝と自分の顏を見た。自分はわが顏を通して、わが心を讀まれるやうな氣がした。

「別段是といふ譯もないが、もう出る方が好からうと思つて……」

三澤は是ぎり何も云はなかつた。自分も默つてゐるより外に仕方がなかつた。二人は何時もより沈んで相對してゐた。看護婦は既に歸つた後なので、室の中はことに淋しかつた。今迄蒲團の上に胡坐をかいてゐた彼は急に倒れるやうに仰向きに寢た。さうして上眼を使つて窓の外を見た。外には何時ものやうに色の強い青空が、ぎら／＼する太陽の熱を一面に漲らしてゐた。

「おい君」と彼はやがて云つた。「よく君の話す例の男ね。あの男は金を持つてゐないかね」

自分は固より岡田の經濟事情を知らう筈がなかつた。あの始末屋のお兼さんの事を考へると、金といふ言葉を口から出すのも厭だつた。けれどもいざ三澤の出院となれば、其位な手數は厭ふまいと、昨日既に覺悟を極めた所であつた。

「節儉家だから少しは持つてるだらう」

「少しで好いから借りて來て吳れ」

自分は彼が退院するに就いて會計へ拂ふ入院料に困るのだと思つた。それで何の位不足なのかを確めた。所が事實は案外であつた。

「此處の拂ひと東京へ歸る旅費位は何うか斯うか持つてゐるんだ。夫丈なら何も君を煩はす必要はない」

彼は大した物持ちの家に生れた果報者でもなかつたけれども、自分が一人息子だけに、斯ういふ點に掛けると、自分達より餘程自由が利いた。其上母や親類いものから京都で買物を賴まれたのを、新しい道伴れが出來たためつい大阪迄乘り越して、未だに手を着けない金が餘つてゐたのである。

「ぢや唯用心の爲に持つて行かうと云ふんだね」

「いや」と彼は急に云つた。

「ぢや何うするんだ」と自分は問ひ詰めた。

「何うしても僕の勝手だ。たゞ借りて吳れさへすれば好いんだ」

自分は又腹が立つた。彼は自分を丸で他人扱ひにしてゐるのである。自分は憤として默つてゐた。

「怒つちや不可ない」と彼が云つた。「隱すんぢやない、君に關係のない事を、わざと吹聽する樣に見えるのが厭だから、知らせずに置かうと思つた丈だから」

自分はまだ默つてゐた。彼は寐ながら自分の顏を見上げてゐた。

「そんなら話すがね」と彼が云ひ出した。「僕はまだあの女を見舞つて遣らない。向うでもそんな事は待ち受けてやしないだらうし、僕も必ず見舞に行かなければならない程の義理はない。が、僕は何だかあの女の病氣を危險にした本人だといふ自覺が何うしても退かない。それで何方が先へ退院するにしても、其間際に一度會つて置きたいと始終思つてゐた。見舞ぢやない、謝る爲にだよ。氣の毒な事をしたと一口詫れば夫で好いんだ。けれども只詫る譯にも行かないから、それで君に賴んで見たのだ。然し君の方の都合が悪ければ強ひて左右して貰はないでも何うかなるだらう。宅へ電報でも掛けたら」

二十九

自分は行掛り上一應岡田に當たつて見る必要があつた。宅へ電報を打つといふ三澤を一寸待たして、ふらりと病院の門を出た。岡田の勤めてゐる會社は、三澤の室とは反對の方向にあるので、彼の窓から眺める譯には行かないけれども、道程からいふと幾何もなかつた。それでも暑いので歩いて行くうちに汗が背中を濡らす程出た。

彼は自分の顏を見るや否や、左も久し振に會つた人らしく「やつ暫く」と叫ぶやうに云つた。さうして是迄度々電話で繰り返した挨拶を又新しくまのあたり述べた。

自分と岡田とは今でこそ少し改まつた言葉使ひもするが、昔を云へば、何の遠慮もない間柄であつた。其頃は金も少しは彼の爲に融通して遣つた覺えがある。自分は勇氣を鼓舞する爲に、わざと其當時の記憶を呼び起して掛かつた。何も知らない彼は、立ちながら元氣な聲を出して、「何うです二郎さん、僕の豫言は」と云つた。「何うか斯うか一週間うちに貴方を驚かす事が出來さうぢやありませんか」

自分は思ひ切つて、先づ肝心の用事を話した。彼は案外な顏をして聞いてゐたが、聞いて仕舞ふとすぐ、「宜うがす、其位なら何うでもします」と容易に引き受けて吳れた。

彼は固より其隱袋の中に入用の金を持つてゐなかつた。「明日でも好いんでせう」と聞いた。自分は又思ひ切つて、「出來るなら今日中に欲しいんだ」と強ひた。彼は一寸當惑した樣に見えた。

「ぢや仕方がない迷惑でせうけれども、手紙を書きますから、宅へ持つて行つてお兼に渡して下さいませんか」

自分は此事件に就いてお兼さんと直接の交渉は成るべく避けたかつたけれども、此場合已むを得なかつたので、岡田の手紙を懷へ入れて、天下茶屋へ行つた。お兼さんは自分の聲を聞くや否や上り口迄馳け出して來て、「此御暑いのに好くまあ」と驚いて吳れた。さうして「さあ何うぞ」を二三返繰り返したが、自分は立つた儘「少し急ぎますから」と斷つて、岡田の手紙を渡した。お兼さんは上り口に兩膝を突いたなり封を切つた。

「何うもわざ〳〵恐れ入りましたね。夫ではすぐ御供をして參りますから」とすぐ奧へ入つた。奧では用箪笥の環の鳴る音がした。

自分はお兼さんと電車の終點迄一所に乘つて來て其處で別かれた。「では後程」と云ひながらお兼さんは洋傘を開いた。自分は又俥を急がして病院へ歸つた。顏を洗つたり、身體を拭いたり、少時三澤と話してゐるうちに、自分は待ち設けた通りお兼さんから病院の玄關迄呼び出された。お兼さんは帶の間にある銀行の帳面を拔いて、其處に挾んであつた札を自分の手の上に乘せた。

「では何うぞ一寸御改めなすつて」

自分は形式的にそれを勘定した上「確かに。――どうも飛んだ御手數を掛けました。御暑い所を」と禮を述べた。實際急いだと見えてお兼さんは富士額の兩脇を、細かい汗の玉でじつとりと濡らしてゐた。

「何うです、ちつと上がつて涼んで入らしつたら」

「いゝえ今日は急ぎますから、是で御免を蒙ります。御病人へ何うぞ宜しく。――でも結構で御座いましたね、早く御退院になれて。一時は宅でも大層心配致しまして、よく電話で御樣子を伺つたとか申して居りましたが」

お兼さんは斯んな愛想を云ひながら、又例のクリーム色の洋傘を開いて歸つて行つた。

三十

　自分は少し急き込んでゐた。紙幣を握つた儘段々を馳け上がるやうに三階迄來た。三澤も平生よりは落ち附いてゐなかつた。今火を點けた計りの卷煙草をいきなり灰吹の中に放り込んで、難有うともいはずに、自分の手から金を受取つた。自分は渡した金の高を注意して、「好いか」と聞いた。夫でも彼は只うんと云つた丈である。

　彼は凝と「あの女」の室の方を見詰めた。時間の具合で、見舞に來たものの草履は一足も廊下の端に脫ぎ棄ててなかつた。平生から靜か過ぎる室の中は、殊に寂寞としてゐた。例の美しい看護婦は相變らず角の柱に倚りかゝつて、產婆學の本か何か讀んでゐた。

「あの女は寐てゐるのかしら」

　彼は「あの女」の室へ入るべき好機會を見出だしながら、却て其眠りを妨げるのを恐れるやうに見えた。

「寐てゐるかも知れない」と自分も思つた。

　しばらくして三澤は小さな聲で「あの看護婦に都合を聞いて貰はうか」と云ひ出した。彼はまだ此看護婦に口を利いた事がないといふので、自分が其役を引き受けなければならなかつた。

　看護婦は驚いたやうな又可笑しいやうな顏をして自分を見た。けれどもすぐ自分の眞面目な態度を認め

て、室の中へ入つて行つた。かと思ふと、二分と經たないうちに笑ひながら又出て來た。さうして今丁度氣分の好い所だから御目に掛かれるといふ患者の承諾をもたらした。三澤は默つて立ち上がつた。

彼は自分の顔を見ず、又看護婦の顔も見ず、默つて立つたなり、すつと「あの女」の室の中へ姿を隱した。自分は元の座に坐つて、ぼんやり其後影を見送つた。彼の姿が見えなくなつても矢張り空に同じ所を見詰めてゐた。冷淡なのは看護婦であつた。一寸會釋の微笑を唇の上に漂はせて自分を見たが、それなり元の通り柱に脊を倚せて、默つて讀みかけた書物をまた膝の上にひろげ始めた。

室の中は三澤の入つた後も彼の入らない前も同じ樣に靜かであつた。話し聲抔は無論聞こえなかつた。看護婦は時々不意に眼を上げて室の奥の方を見た。けれども自分には何の相圖もせずに、すぐ其眼を頁の上に落とした。

自分は此三階の宵の間に蟲の音らしい涼しさを聽いた例はあるが、晝のうちに八釜しい蟬の聲はつひぞ自分の耳に屆いた事がない。自分のたつた一人で坐つてゐる病室は其時明らかな太陽の光を受けながら、眞夜中よりも猶靜かであつた。自分は此死んだやうな靜かさのために、却て神經を焦つかせて、「あの女」の室から三澤の出るのを待ちかねた。

やがて三澤はのつそりと出て來た。室の敷居を跨ぐ時、微笑しながら「御邪魔さま。大勉強だね」と看護婦に挨拶する言葉丈が自分の耳に入つた。

彼は上草履の音をわざとらしく高く鳴らして、自分の室に入るや否や「やつと濟んだ」と云つた。自分は「何うだつた」と聞いた。

「やつと濟んだ。是でもう出ても好い」

三澤は同じ言葉を繰り返す丈で、其他には何も云はなかつた。自分もそれ以上は聞き得なかつた。兎も角も退院の手續を早くする方が便利だと思つて、其處らに散らばつてゐるものを片附け始めた。三澤も固より凝としてはゐなかつた。

三十一

二人は俥を雇つて病院を出た。先へ梶棒を上げた三澤の車夫が餘り威勢よく馳けるので、自分は大きな聲でそれを留めようとした。三澤は後を振り向いて、手を振つた。「大丈夫、大丈夫」と云ふらしく聞こえたから、自分もそれなりにして注意はしなかつた。宿へ着いたとき、彼は川縁の欄干に兩手を置いて、眼の下の廣い流れを凝と眺めてゐた。

「何うした。心持でも悪いか」と自分は後から聞いた。彼は後を向かなかつた。けれども「いゝや」と答へた。「此處へ來て此河を見る迄此室の事を丸で忘れてゐた」

左右いつて、彼は依然として流れに向つてゐた。自分は彼を其儘にして、麻の座蒲團の上に胡坐をかい

た。それでも待ち遠しいので、やがて袂から敷島の袋を出して、煙草を吸ひ始めた。其煙草が三分の一煙になつた頃、三澤は漸く手摺を離れて自分の前へ來て坐つた。

「病院で暮らしたのも、つい昨日今日の樣だが、考へて見ると、もう大分になるんだね」と云つて指を折りながら、日數を勘定し出した。

「三階の光景が當分眼を離れないだらう」と自分は彼の顏を見た。

「思ひも寄らない經驗をした。是も何かの因緣だらう」と三澤も自分の顏を見た。

彼は手を叩いて、下女を呼んで今夜の急行列車の寢臺を注文した。それから時計を出して、食事を濟ました後、時間に何の位餘裕があるかを見た。窮屈に馴れない二人はやがて轉りと横になつた。

「あの女は癒りさうなのか」

「さうさな。事によると癒るかも知れないが……」

下女が誂へた水菓子を鉢に盛つて、梯子段を上がつて來たので、「あの女」の話しは是で切れて仕舞つた。自分は寢轉んだ儘、水菓子を食つた。其間彼はたゞ自分の口の邊を見る許りで、何事も云はなかつた。仕舞に左も病人らしい調子で、「己も食ひたいな」と一言云つた。先刻から浮かない樣子を見てゐた自分は、

「構ふものか、食ふが好い。食へ食へ」と勸めた。三澤は幸ひにして自分が氷菓子を食はせまいとした彼の日の出來事を忘れてゐた。彼はたゞ苦笑ひをして横を向いた。

「いくら好きだつて、悪いと知りながら、無理に食はせられて、あの女の樣になつちや大變だからな」

彼は先刻から「あの女」の事を考へてゐるらしかつた。彼は今でも「あの女」の事を考へてゐるとしか思はれなかつた。

「あの女は君を覺えてゐたかい」

「覺えてゐるさ。此間會つて、僕から無理に酒を呑まされた計りだもの」

「恨んでゐたらう」

今迄横を向いてそつぽへ口を利いてゐた三澤は、此時急に顏を向け直してきつと正面から自分を見た。其變化に氣の附いた自分はすぐ眞面目な顏をした。けれども彼があの女の室に入つた時、二人の間に何んな談話が交換されたかに就いて、彼は遂に何事をも語らなかつた。

「あの女はことによると死ぬかも知れない。死ねばもう會ふ機會はない。萬一癒るとしても、矢つ張り會ふ機會はなからう。妙なものだね。人間の離合といふと大袈裟だが。それに僕から見れば實際離合の感があるんだからな。あの女は今夜僕の東京へ歸る事を知つて、笑ひながら御機嫌ようと云つた。僕は其淋しい笑ひを、今夜何だか汽車の中で夢に見さうだ」

三十二

三澤は唯斯う云つた。さうして夢に見ない先から既に「あの女」の淋しい笑ひ顔を眼の前に浮かべてる様に見えた。三澤に感傷的の所があるのは自分もよく承知してゐたが、單にあれ丈の關係で、是程あの女に動かされるのは不審であつた。自分は三澤と「あの女」が別かれる時、何んな話しをしたか、詳しく聞いて見ようと思つて、少し水を向け掛けたが、何の效果もなかつた。しかも彼の態度が惜しいものを半分他に配けてやると、半分無くなるから厭だといふ風に見えたので、自分は益變な氣持がした。

「そろ〳〵出掛けようか。夜の急行は込むから」ととう〳〵自分の方で三澤を促すやうになつた。

「まだ早い」と三澤は時計を見せた。成程汽車の出る迄にはまだ二時間許り餘つてゐた。もう「あの女」の事は聞くまいと決心した自分は、成るべく病院の名前を口へ出さずに、寐轉びながら彼と通り一遍の世間話を始めた。彼は其時人並の受け答へをした。けれども何處か調子に乘らない所があるので、何となく不愉快さうに見えた。夫でも席は動かなかつた。さうして仕舞には默つて河の流ればかり眺めてゐた。

「まだ考へてゐる」と自分は大きな聲を出してわざと叫んだ。三澤は驚いて自分を見た。彼は斯ういふ場合にきつと、御前はヴルガーだと云ふ眼附をして、一瞥の侮辱を自分に與へなければ承知しなかつたが、此時に限つてそんな樣子はちつとも見せなかつた。

「うん考へてゐる」と輕く云つた。「君に打ち明けようか、打ち明けまいかと迷つてゐた所だ」と云つた。

自分は其時彼から妙な話を聞いた。さうして其話が直接「あの女」と何の關係もなかつたので猶更意外の感に打たれた。

今から五六年前彼の父がある知人の娘を同じくある知人の家に嫁らした事があつた。不幸にも其娘さんはある纒綿した事情のために、一年經つか經たないうちに、夫の家を出る事になつた。けれども其處にも亦複雜な事情があつて、すぐ吾家に引き取られて行く譯に行かなかつた。それで三澤の父が仲人といふ義理合から當分此娘さんを預かる事になつた。――三澤は一旦嫁いで出て來た女を娘さん娘さんと云つた。

「其娘さんは餘り心配した爲だらう、少し精神に異狀を呈してゐた。それは宅へ來る前か、或は來てからか好く分らないが、兎に角宅のものが氣が附いたのは來てから少し經つてからだ。固より精神に異狀を呈してゐるには相違なからうが、一寸見たつて少しも分らない。たゞ默つて鬱ぎ込んでゐる丈なんだから。所が其娘さんが……」

三澤は此處迄來て少し躊躇した。

「其娘さんが可笑しな話をするやうだけれども、僕が外出すると屹度玄關迄送つて出る。いくら隱れて出ようとしても屹度送つて出る。さうして必ず、早く歸つて來て頂戴ねと云ふ。僕がえゝ早く歸りますから大人しくして待つて入らつしやいと返事をすれば合點々々をする。もし默つてゐると、早く歸つて來て頂戴ね、ね、と何度でも繰り返す。僕は宅のものに對して極りが惡くつて仕樣がなかつた。けれども亦此

娘さんが不憫で堪らなかつた。だから外出しても成るべく早く歸る樣に心掛けてゐた。歸ると其人の傍へ行つて、立つた儘只今と一言必ず云ふ事にしてゐた」

三澤は其處へ來て又時計を見た。

「まだ時間はあるね」と云つた。

三十三

其時自分は是限りで其娘さんの話を止められてはと思つた。幸ひに時間がまだ大分あつたので、自分の方から何とも云はない先に彼は又語り續けた。

「宅のものが其娘さんの精神に異狀があるといふ事を明らかに認め出してからはまだ可かつたが、知らないうちは今云つた通り僕も其娘さんの露骨なのに隨分弱らせられた。父や母は苦い顏をする。臺所のものは內所でくす〳〵笑ふ。僕は仕方がないから、其娘さんが僕を送つて玄關迄來た時、烈しく怒り附けて遣らうかと思つて、二三度後を振り返つて見たが、顏を合はせるや否や、怒る所か、邪慳な言葉などは可哀さうで到底口から出せなくなつて仕舞つた。其娘さんは蒼い色の美人だつた。さうして黑い眉毛と黑い大きな眸を有つてゐた。其黑い眸は始終遠くの方の夢を眺めてゐるやうに恍惚と潤つて、其處に何だか便のなささうな憐れを漂はせてゐた。僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄關に膝を突いたなり恰

も自分の孤獨を訴へるやうに、其黑い眸を僕に向けた。僕は其度に娘さんから、斯うして活きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縋られるやうに感じた。――其眼がだよ。其黑い大きな眸が僕にさう訴へるのだよ」

「君に惚れたのかな」と自分は三澤に聞きたくなつた。

「それがさ。病人の事だから戀愛なんだか病氣なんだか、誰にも解る筈がないさ」と三澤は答へた。

「色情狂つていふのは、其んなもんぢやないのかな」と自分は又三澤に聞いた。

三澤は厭な顏をした。

「色情狂と云ふのは、誰にでも枝垂れ懸かるんぢやないか。其娘さんはたゞ僕を玄關迄送つて出て來て、早く歸つて來て頂戴ねと云ふ丈なんだから違ふよ」

「左右か」

自分の其時の返事は全く光澤がなさ過ぎた。

「僕は病氣でも何でも構はないから、其娘さんに思はれたいのだ。少なくとも僕の方ではさう解釋してゐたいのだ」と三澤は自分を見詰めて云つた。彼の顏面の筋肉は寧ろ緊張してゐた。「所が事實は何うも左右でないらしい。其娘さんの片附いた先の旦那といふのが放蕩家なのか交際家なのか知らないが、何でも新婚早々たび〳〵家を空けたり、夜遲く歸つたりして、其娘さんの心を散々苛め拔いたらしい。けれど

るのも其娘さんは一口も夫に對して自分の苦しみを言はずに我慢してゐたのだね。その時の事が頭に祟つてゐるから、離婚になつた後でも旦那に云ひたかつた事を病氣のせゐで僕に云つたのださうだ。——けれども僕はさう信じたくない。强ひても左右でないと信じてゐたい」

「それ程君は其娘さんが氣に入つてたのか」と自分は又三澤に聞いた。

「氣に入るやうになつたのさ。病氣が惡くなればなる程」

「それから。——其娘さんは」

「死んだ。病院へ入つて」

自分は默然とした。

「君から退院を勸められた晩、僕は其娘さんの三回忌を勘定して見て、單にその爲丈でも歸りたくなつた」と三澤は退院の動機を說明して聞かせた。自分はまだ默つてゐた。

「あゝ肝心の事を忘れた」と其時三澤が叫んだ。自分は思はず「何だ」と聞き返した。

「あの女の顏がね。實は其娘さんに好く似て居るんだよ」

三澤の口元には解つたらうと云ふ一種の微笑が見えた。二人はそれからぢきに梅田の停車場へ俥を急がした。場内は急行を待つ乘客で既に一杯になつてゐた。二人は橋を向うへ渡つて上り列車を待ち合はせた。列車は十分と立たないうちに地を動かして來た。

「又會はう」

自分は「あの女」の爲に、又「其娘さん」の爲に三澤の手を固く握つた。彼の姿は列車の音と共に忽ち暗中に消えた。

一

自分は三澤を送つた翌日又母と兄夫婦とを迎へるため同じ停車場に出掛けなければならなかつた。自分から見ると殆ど想像さへ附かなかつた此出來事を、始めから工夫して、とう〳〵それを物にする迄漕ぎ附けたものは例の岡田であつた。彼は平生からよくこんな技巧を弄して其成效に誇るのが好きであつた。自分をわざ〳〵電話口へ呼び出して、其内屹度自分を驚かして見せると斷つたのは彼である。それから程なく、お兼さんが宿屋へ尋ねて來て、其譯を話した時には、自分も實際驚かされた。

「何うして來るんです」と自分は聞いた。

自分が東京を立つ前に、母の持つてゐた、或場末の地面が、新たに電車の布設される通路に當たるとかで其前側を幾坪か買ひ上げられると聞いたとき、自分は母に「ぢや其金で此夏みんなを連れて旅行なさい」と勸めて、「また二郎さんの御株が始まつた」と笑はれた事がある。母はかねてから、若し機會があつたら京大阪を見たいと云つてゐたが、或は其金が手に入つた所へ、岡田からの勸誘があつたため、斯う大袈裟な計畫になつたのではなからうか。それにしても岡田が又何でそんな勸誘をしたものだらう。

「何といふ大した考へもないんで御座いませう。たゞ昔御世話になつた御禮に御案内でもする氣なんでせう。それに彼の事も御座いますから」

お兼さんの「彼の事」といふのは例の結婚事件である。自分はいくらお貞さんが母の御氣に入りだつて、其爲に彼女がわざ〱大阪三界迄出て來る筈がないと思つた。

自分は其時既に懐が怪しくなつてゐた。其上後から三澤のために岡田に若干の金額を借りた。外の意味は別として、母と兄夫婦の來るのは此不足塡補の方便として自分には好都合であつた。岡田もそれを知つて快く此方の要る丈すぐ用立てて呉れたに違ひなからうと思つた。

自分は岡田夫婦と一所に停車場に行つた。三人で汽車を待ち合はしてゐる間に岡田は、「何うです。二郎さん喫驚したでせう」といつた。自分は是と類似の言葉を、彼から何遍も聞いてゐるので、何とも答へなかつた。お兼さんは岡田に向つて、「あなた此間から獨りで御得意なのね。二郎さんだつて聞き飽きて入らつしやるわ。そんな事」と云ひながら自分を見て「ねえ貴方」と詫るやうに附け加へた。自分はお兼さんの愛嬌のうちに、何處となく黑人らしい媚びを認めて、急に返事の調子を狂はせた。お兼さんは素知らぬ風をして岡田に話し掛けた。——

「奥さまも大分御目に懸からないから、隨分御變りになつたでせうね」

「此前會つた時は矢つ張り元の叔母さんさ」

岡田は自分の母の事を叔母さんと云ひ、お兼さんは奥様といふのが、自分には變に聞こえた。

「始終傍にゐると、變るんだか變らないんだか分りませんよ」と自分は答へて笑つてゐるうちに汽車が着いた。岡田は彼等三人の爲に特別に宿を取つて置いたとかいつて、直ちに俥を南へ走らした。自分は空に乘つた俥の上で、彼のよく人を驚かせるのに驚いた。左右云へば彼が突然上京してお兼さんを奪ふやうに伴れて行つたのも自分を驚かした目覺ましい手柄の一つに相違なかつた。

二

母の宿は左程大きくはなかつたけれども、自分の泊つてゐる所よりは餘程上品な構であつた。室には煽風器だの、唐机だの、特別に其唐机の傍に備へ附けた電燈などがあつた。兄はすぐ其處にある電報紙へ大阪着の旨を書いて下女に渡してゐた。岡田は何時の間にか用意して來た三四枚の繪端書を袂の中から出して、是は叔父さん、是はお重さん、是はお貞さんと一々名宛を書いて、「さあ一口宛皆何うぞ」と方々へ配つてゐた。

自分はお貞さんの繪端書へ「御目出たう」と書いた。すると母が其後へ「病氣を大事になさい」と書いたので吃驚した。

「お貞さんは病氣なんですか」

「實はあの事があるので、丁度好い折だから、今度伴れて來ようと思つて仕度までさせた所が、生憎御腹が惡くなつてね。殘念な事をしましたよ」

「でも大した事ぢやないのよ。もう御粥がそろ〳〵食べられるんだから」と嫂が傍から說明した。其嫂は父に出す繪端書を持つた儘何か考へてゐた。「叔父さんは風流人だから歌が好いでせう」と岡田に勸められて、「歌なんぞ出來るもんですか」と斷つた。岡田は又お重へ宛てたのに、「あなたの口の惡い所を聞けないのが殘念だ」と細かく謹んで書いたので、兄から「將棋の駒がまだ祟つてると見えるね」と笑はれてゐた。

繪端書が濟んで、しばらく世間話をした後で、岡田とお兼さんは又來ると云つて、母や兄が止めるのも聞かずに歸つて行つた。

「お兼さんは本當に奧さんらしくなつたね」

「宅へ仕立物を持つて來た時分を考へると、丸で見違へる樣だよ」

母が兄とお兼さんを評し合つた言葉の裏には、己が夫丈年を取つたといふ淡い哀愁を含んでゐた。

「お貞さんだつて、もう直きですよ御母さん」と自分は橫合から口を出した。

「本當にね」と母は答へた。母は腹の中で、まだ片附く當てのないお重の事でも考へてゐるらしかつた。

兄は自分を顧て、「三澤が病氣だつたので、何處へも行かなかつたさうだね」と聞いた。自分は「えゝ。飛

んだ所へ引つかゝつて何處へも行かずじまひでした」と答へた。自分と兄とは常に此位懸隔のある言葉で應對するのが例になつてゐた。是は年が少し違ふのと、父が昔堅氣で、長男に最上の權力を塗り附けるやうにして育て上げた結果である。母も偶には自分をさん附けにして二郎さんと呼んで吳れる事もあるが、是は單に兄の一郎さんの御餘りに過ぎないと自分は信じてゐた。

みんなは話しに氣を取られて浴衣を着換へるのを忘れてゐた。兄は立つて、糊の强いのを肩へ掛けながら、「何うだい」と自分を促した。嫂は浴衣を自分に渡して、「全體あなたの御部屋は何處にあるの」と聞いた。手摺の所へ出て、鼻の先にある高い塗塀を鬱陶しさうに眺めてゐた母は、「宜い室だが少し陰氣だね。二郎御前の御室も斯んなかい」と聞いた。自分は母のゐる傍へ行つて、下を見た。下には張物板の樣な細長い庭に、細い竹が疎らに生えて錆びた鐵燈籠が石の上に置いてあつた。其石も竹も打水で皆しつとり濡れてゐた。

「狹いが凝つてますね。其代り僕の所の樣に河がありませんよ、御母さん」

「おや何處に河があるの」と母がいふ後から、兄も嫂も其河の見える座敷と取り換へて貰はうと云ひ出した。自分は自分の宿のある方角やら地理やらを說明して聞かした。さうして一先歸つて荷物を纏めた上又此處へ來る約束をして宿を出た。

三

自分は其夕方宿の拂ひを濟まして母や兄と一所になつた。三人は少し夕飯が後れたと見えて、膳を控へた儘楊枝を使つてゐた。自分は彼等を散歩に連れ出さうと試みた。母は疲れたと云つて應じなかつた。兄は面倒らしかつた。嫂丈には行きたい樣子が見えた。

「今夜は御止しよ」と母が留めた。

兄は寐轉びながら話しをした。さうして口では大阪を知つてる樣な事を云つた。けれども好く聞いて見ると、知つてるのは天王寺だの中の島だの千日前だのといふ名前計りで地理上の知識になると、丸で夢のやうに散漫極まるものであつた。

尤も「大阪城の石垣の石は實に大きかつた」とか、「天王寺の塔の上へ登つて下を見たら眼が眩んだ」とか斷片的の光景は實際覺えてゐるらしかつた。其内で一番面白く自分の耳に響いたのは彼の昔泊つたといふ宿屋の夜の景色であつた。

「細い通の角で、欄干の所へ出ると柳が見えた。家が隙間なく竝んでゐる割には閑靜で、窓から眺められる長い橋も畫の樣に趣きがあつた。其上を通る車の音も愉快に響いた。尤も宿そのものは不親切で汚くつて困つたが……」

「一體それは大阪の何處なの」と嫂が聞いたが、兄は全く知らなかつた。方角さへ分らないと答へた。是が兄の特色であつた。彼は事件の斷面を驚く許り鮮やかに覺えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた。夫で彼は平氣でゐた。

「何處だか解らなくつちや詰らないわね」と嫂が又云つた。兄と嫂とはこんな所でよく喰ひ違つた。兄の機嫌の惡くない時は夫でも濟むが、少しの具合で事が面倒になる例も稀ではなかつた。斯ういふ消息に通じた母は、「何處でも構はないが、それ丈ぢやない筈だつたのにね。後を御話しよ」と云つた。兄は「御母さんにも直にも詰らない事ですよ」と斷つて、「二郎其處の二階に泊つたとき面白いと思つたのはね」と自分に話し掛けた。自分は固より兄の話しを一人で聞くべき責任を引き受けた。

「何うしました」

「夜になつて一寐入りして眼が醒めると、明るい月が出て、其月が青い柳を照らしてゐた。それを寐ながら見てゐるとね、下の方で、急にやつといふ懸け聲が聞こえた。あたりは案外靜まり返つてゐるので、其懸け聲が殊更強く聞こえたんだらう、己はすぐ起きて欄干の傍迄出て下を覗いた。すると向うに見える柳の下で、眞裸な男が三人代る〳〵大きな澤庵石の持ち上げ競をしてゐた。やつと云ふのは兩手へ力を入れて差し上げる時の聲なんだよ。夫を三人とも夢中になつて熱心に遣つてゐたが、熱心な所爲か、誰も一口も物を云はない。己は明らかな月影に默つて動く裸體の人影を見て、妙に不思議な心持がした。すると

其内の一人が細長い天秤棒のやうなものをぐるり〳〵と廻し始めた……」
「何だか水滸傳のやうな趣きぢやありませんか」
「其時からしてが既に縹緲たるものさ。今日になつて囘顧すると丸で夢の樣だ」
兄はこんな事を囘想するのが好きであつた。さうして夫は母にも嫂にも通じない、たゞ父と自分丈に解る趣きであつた。
「其時大阪で面白いと思つたのは只それ限りだが、何だかそんな連想を持つて來て見ると、一向大阪らしい氣がしないね」
自分は三澤の居た病院の三階から見下ろされる狹い綺麗な通を思ひ出した。さうして兄の見た棒使ひや力持ちはあんな町内にゐる若い衆ぢやなからうかと想像した。
岡田夫婦は約の如く其晩又尋ねて來た。

四

岡田は頗る念入りの遊覽目錄といつたやうなものを、わざ〳〵宅から拵へて來て、母と兄に見せた。それが又餘り綿密過ぎるので、母も兄も「是ぢや」と驚いた。
「まあ幾日位御滯在になれるんですか、夫次第でプログラムの作り方も亦あるんですから。此方は東京

と逢つてね、少し市を離れると幾何でも見物する所があるんです」

岡田の言葉のうちには多少の不服が籠もつてゐたが、同時に得意な調子も見えた。

「丸で大阪を自慢して入らつしやる様よ。貴方の話しを傍で聞いてゐると」

お兼さんは笑ひながら斯う云つて眞面目な夫に注意した。

「いえ自慢ぢやない。自慢ぢやないが……」

注意された岡田は益眞面目になつた。それが少し滑稽に見えたので皆が笑ひ出した。

「岡田さんは五六年のうちに悉皆上方風になつて仕舞つたんですね」と母が調戯つた。

「それでも能く東京の言葉丈は忘れずにゐるぢやありませんか」と兄が其後に随いて又冷嘲し始めた。

岡田は兄の顔を見て、「久し振に會ふと、すぐ是だから敵はない。全く東京ものは口が悪い」と云つた。

「それにお重の兄だもの、岡田さん」と今度は自分が口を出した。

「お兼少し助けて呉れ」と岡田が仕舞に云つた。さうして母の前に置いてあつた先刻のプログラムを取つて袂へ入れながら、「馬鹿々々しい、骨を折つたり調戯はれたり」とわざ〳〵怒つた風をした。

冗談が一仕切り濟むと、自分の豫期してゐた通り、佐野の話が母の口から持ち出された。母は「此度は又色々」と云つた様な打つて變つた几帳面な言葉で岡田に禮を述べる、岡田は又鹿爪らしく改まつた口上で、まことに行き屆きませんでなどと挨拶をする、自分には兩方共大袈裟に見えた。それから岡田は丁度

好い都合だから、是非本人に會つて遣つて呉れと、また會見の打ち合せをし始めた。兄も其話しの中に首を突込まなくつては義理が悪いと見えて、煙草を吹かしながら二人の相手になつてゐた。自分は病氣で寐てゐるお貞さんに此樣子を見せて、難有いと思ふか、餘計な御世話だと思ふか、本當の所を聞いて見たい氣がした。同時に三澤が別れる時、新しく自分の頭に殘して行つた美しい精神病の「娘さん」の不幸な結婚を聯想した。

嫂とお兼さんは親しみの薄い間柄であつたけれども、若い女同志といふ縁故で先刻から二人丈で話してゐた。然し氣心が知れない所爲か、兩方共遠慮がちで一向調子が合ひさうになかつた。嫂は無口な性質であつた。お兼さんは愛嬌のある方であつた。お兼さんが十口物をいふ間に、嫂は一口しか喋舌れなかつた。しかも種が切れると、其都度屹度お兼さんの方から供給されてゐた。最後に子供の話が出た。すると嫂の方が急に優勢になつた。彼女はその小さい一人娘の平生を、左も興ありげに語つた。お兼さんは又嫂のくだ〳〵しい敍述を、左も感心したやうに聞いてゐたが、實際は丸で無頓着らしくも見えた。たゞ一遍「よくまあ御一人で御留守居が出來ます事」と云つたのは誠らしかつた。「お重さんによく馴附いて居りますから」と嫂は答へてゐた。

五

母と兄夫婦の滯在日數は存外少ないものであつた。先づ市内で二三日市外で二三日しめて一週間足らずで東京へ歸る豫定で出て來たらしかつた。

「切めてもう少しは宜いでせう。折角此處迄出て入らしつたんだから。又來るたつて、そりや容易な事ぢやありませんよ、億劫で」

斯うは云ふものゝ岡田も、母の滯在中會社の方を丸で休んで、毎日案内ばかりして歩ける程の餘裕は無論なかつた。母も東京の宅の事が氣に掛かる樣に見えた。自分に云はせると、母と兄夫婦といふからしてが既に妙な組合せであつた。本來なら父と母と一所に來るとか、兄と嫂丈が連れ立つて避暑に出掛けるとか、もし又お貞さんの結婚問題が目的なら、當人の病氣が癒るのを待つて、母なり父なりが連れて來て、早く事を片附けてしまふとか、自然の豫定は二通りも三通りもあつた。それが斯う變な形になつて現はれたのは何ういふ譯だか、自分には始めから呑み込めなかつた。母は又それを胸の中に疊み込んでゐるといふ風に見えた。母ばかりではない、兄夫婦も其處に氣が附いてゐるらしい所もあつた。

佐野との會見は型の如く濟んだ。母も兄も岡田に禮を述べてゐた。岡田の歸つた後でも兩方共佐野の批評はしなかつた。もう事が極まつて批評をする餘地がないといふ樣にも取れた。結婚は年の暮に佐野が東京へ出て來る機會を待つて、式を擧げるやうに相談が調つた。自分は兄に、「御目出た過ぎる位事件がどん〳〵進行して行く癖に、本人が一向知らないんだから面白い」と云つた。

「當人は無論知つてるんだ」と兄が答へた。

「大喜びだよ」と母が保證した。

自分は一言もなかつた。しばらくしてから、「尤もこんな問題になると自分でどんどん進行させる勇氣は日本の婦人にあるまいからな」と云つた。兄は默つてゐた。嫂は變な顏をして自分を見た。

「女丈ぢやないよ。男だつて自分勝手に無暗と進行されちや困りますよ」と母は自分に注意した。すると兄が「一層その方が好いかも知れないね」と云つた。其云ひ方が少し冷やか過ぎた所爲か、母は何だか厭な顏をした。嫂も亦變な顏をした。けれども二人とも何とも云はなかつた。

少し經つてから母は漸く口を開いた。

「でも貞丈でも極まつて吳れると御母さんは大變樂な心持がするよ。後は重ばかりだからね」

「是も御父さんの御蔭さ」と兄が答へた。其時兄の唇に薄い皮肉の影が動いたのを母は氣がつかなかつた。

「全く御父さんの御蔭に違ひないよ。岡田が今あゝ遣つてるのと同じ事さ」と母は大分滿足な體に見えた。

憐れな母は父が今でも社會的に昔通りの勢力を有つてゐると計り信じてゐた。兄は兄丈に、社會から退隱したと同樣の今の父に、其半分の影響さへ六づかしいと云ふ事を見破つてゐた。

兄と同意見の自分は、家族中ぐるになつて、佐野を瞞してゐる樣な氣がしてならなかつた。けれども亦一方から云へば、佐野は瞞されても然るべきだといふ考へが始めから頭の何處かに引掛かつてゐた。兎に角會見は滿足のうちに濟んだ。兄は暑いので腦に應へるとか云つて、早く大阪を立ち退く事を主張した。自分は固より贊成であつた。

六

實際其頃の大阪は暑かつた。ことに我々の泊つてゐる宿屋は暑かつた。庭が狹いのと塀が高いので、日の射し込む餘地もなかつたが、其代り風の通る隙間にも乏しかつた。ある時は濕つぽい茶座敷の中で、四方から焚火に焙られてゐるやうな苦しさがあつた。自分は夜通し煽風器を掛けてぶう〳〵鳴らしたため、馬鹿な眞似をして風邪でも引いたら何うすると云つて母から叱られた事さへあつた。

大阪を立たうといふ兄の意見に贊成した自分は、有馬なら涼しくつて兄の頭に宜からうと思つた。自分は此有名な溫泉をまだ知らなかつた。車夫が梶棒へ綱を附けて、其綱の先をまた犬に附けて坂路を上るのださうだが、暑いので犬がともすると溪河の清水を飲まうとするのを、車夫が怒つて竹の棒で無暗に打ち擲くから、犬がひん〳〵苦しがりながら俥を引くんだといふ話を、かつて聞いた儘喋舌つた。

「厭だねそんな俥に乘るのは、可哀相で」と母が眉をひそめた。

「何故又水を飮ませないんだらう。俥が遲れるからかね」と兄が聞いた。

「途中で水を飮むと疲れて役に立たないからださうです」と自分が答へた。

「へえー、何故」と今度は嫂が不思議さうに聞いたが、それには自分も答へる事が出來なかつた。

有馬行は犬の所爲でもなかつたらうけれども、とう〳〵立消えになつた。さうして意外にも和歌の浦見物が兄の口から發議された。是は自分もかねてから見たいと思つてゐた名所であつた。母も子供の時から其名に親しみがあるとかで、すぐ同意した。嫂丈は何處でも構はないといふ風に見えた。

兄は學者であつた。又見識家であつた。其上詩人らしい純粹な氣質を持つて生れた好い男であつた。けれども長男丈に何處か我儘な所を具へてゐた。自分から云ふと、普通の長男よりは、大分甘やかされて育つたとしか見えなかつた。自分許りではない、母や嫂に對しても、機嫌の好い時は馬鹿に好いが、一旦旋毛が曲り出すと、幾日でも苦い顏をして、わざと口を利かずに居た。それで他人の前へ出ると、また全く人間が變つた樣に、大抵な事があつても滅多に紳士の態度を崩さない、圓滿な好侶伴であつた。だから彼の朋友は悉く彼を穩やかな好い人物だと信じてゐた。父や母は其評判を聞くたびに案外な顏をした。けれども矢つ張り自分の子だと見えて、何處か嬉しさうな樣子が見えた。兄と衝突してゐる時にこんな評判でも耳に入らうものなら、自分は無暗に腹が立つた。一々其人の宅迄出掛けて行つて、彼等の誤解を訂正して遣りたいやうな氣さへ起つた。

和歌の浦行に母がすぐ贊成したのも、實は彼女が兄の氣性をよく呑み込んでゐるからだらうと自分は思つた。母は長い間吾子の我を助け育てるやうにした結果として、今では何事によらず其我の前に跪く運命を甘んじなければならない位置にあつた。

自分は便所に立つた時、手水鉢の傍にぼんやり立つてゐた嫂を見附けて、「嫂さん何うです近頃は。兄さんの機嫌は好い方なんですか惡い方なんですか」と聞いた。嫂は「相變らずですわ」とたゞ一口答へた丈であつた。嫂は夫でも淋しい頰に片靨を寄せて見せた。彼女は淋しい色澤の頰を有つてゐた。それから其眞中に淋しい片靨を有つてゐた。

七

自分は立つ前に岡田に借りた金の片を附けて行きたかつた。尤も彼に話しをしさへすれば、東京へ歸つてからでも構はないとは思つたけれども、あゝいふ人の金は成る可く早く返して置いた方が、此方の心持が宜いといふ考へがあつた。それで誰も傍に居ない折を見計らつて、母に何うかして呉れと頼んだ。

母は兄を大事にする丈あつて、無論彼を心から愛してゐた。けれども長男といふ譯か、又氣六づかしいといふ所爲か、何處かに遠慮があるらしかつた。一寸の事を注意するにしても、成る可く氣に障らないやうに、始めから氣を置いて掛かつた。其處へ行くと自分は丸で子供同樣の待遇を母から受けてゐた。「二

郎そんな法があるのかい」などと頭ごなしに遣附けられた。其代りまた兄以上に可愛がられもした。小遣などは兄に内所でよく貰つた覺えがある。父の着物なども何時の間にか自分のに仕立て直してある事は珍らしくなかつた。斯ういふ母の仕打ちが、例の兄には又頗る氣に入らなかつた。些細な事から兄はよく機嫌を惡くした。さうして明るい家の中に陰氣な空氣を漲らした。母は眉をひそめて、「また一郎の病氣が始まつたよ」と自分に時々私語いた。自分は母から腹心の郎黨として取扱はれるのが嬉しさに、「癖なんだから、放つて御置きなさい」位云つて澄ましてゐた時代もあつた。兄の性質が氣六づかしいばかりでなく、大小となく陰で狐鼠々々何か遣られるのを忌む正義の念から出るのだといふ事を後から知つて以來、自分は彼に對してこんな輕薄な批評を加へるのを恥づるやうになつた。けれども表向き兄の承諾を求めると、到底行はれにくい用件が多いので、自分はつい機會を見ては母の懷に一人抱かれようとした。

母は自分が三澤のために岡田から金を借りた顚末を聞いて驚いた顏をした。

「そんな女のために御金を使ふ譯がないぢやないか、三澤さんだつて。馬鹿らしい」と云つた。

「だけど、其處には三澤も義理があるんだから」と自分は辯解した。

「義理々々つて、御母さんには解らないよ、御前のいふことは。氣の毒なら、手ぶらで見舞ひに行く丈のことぢやないか。もし手ぶらで極りが惡ければ、菓子折の一つも持つて行きやあ澤山だね」

自分はしばらく默つてゐた。

「よし三澤さんに夫丈の義理があつたにした所でさ。何も御前が岡田なんぞからそれを借りて上げる丈の義理はなからうぢやないか」

「ぢや宜御座んす」と自分は答へた。さうして立つて下へ行かうとした。兄は湯に入つてゐた。嫂は小さい下の座敷を借りて髮を結はしてゐた。座敷には母より外にゐなかつた。

「まあ御待ちよ」と母が呼び留めた。「何も出して上げないと云つてやしないぢやないか」

母の言葉には兄一人でさへ澤山な所へ、何の必要があつて、自分迄此年寄を苛めるかと云はぬ許りの心細さが籠もつてゐた。自分は母のいふ通り元の席に着いたが、氣の毒で一寸顏を上げ得なかつた。さうして此無恰好な態度で、左も子供らしく母から要る丈の金子を受取つた。母が一段聲を落として、何時ものやうに、「兄さんには內所だよ」と云つた時、自分は不意に名狀しがたい不愉快に襲はれた。

八

自分達は其翌日の朝和歌山へ向けて立つ筈になつてゐた。何うせ一旦は此處へ引き返して來なければならないのだから、岡田の金も其時で好いとは思つたが、性急の自分には紙入を其儘懷中してゐるからが既に厭だつた。岡田は其晚も例の通り宿屋へ話しに來るだらうと想像された。だからその折にそつと返して置かうと自分は腹の中で極めた。

兄が湯から上がつて來た。帶も締めずに、浴衣を羽織るやうに引つ掛けた儘ずつと欄干の所迄行つて其處へ濡手拭を懸けた。

「御待ち遠」

「御母さん、何うです」と自分は母を促した。

「まあ御這入りよ、御前から」と云つた母は、兄の首や胸の所を眺めて、「大變好い血色におなりだね。夫に少し肉が附いた樣ぢやないか」と賞めてゐた。兄は性來の瘦つぽちであつた。宅では夫をみんな神經の所爲にして、もう少し肥らなくつちや駄目だと云ひ合つてゐた。その内でも母は最も氣を揉んだ。當人自身も瘦せてゐるのを何かの刑罰のやうに忌み恐れた。夫でも些とも肥れなかつた。

自分は母の言葉を聞きながら、此苦しい愛嬌を、慰藉の一つとして吾子の前に捧げなければならない彼女の心事を氣の毒に思つた。兄に比べると遙かに頑丈な體軀を起しながら、「ぢや御先へ」と母に挨拶して下へ降りた。風呂場の隣の小さい座敷を一寸覗くと、嫂は今髷が出來た所で、合せ鏡をして鬢だの髱だのを撫でてゐた。

「もう濟んだんですか」

「えゝ。何處へ入らつしやるの」

「御湯へ這入らうと思つて。御先へ失禮しても宜ござんすか」

「さあ何うぞ」

自分は湯に入りながら、嫂が今日に限つてなんで又丸髷なんて仰山な頭に結ふのだらうと思つた。大きな聲を出して、「嫂さん、嫂さん」と湯壺の中から呼んで見た。「なによ」といふ返事が廊下の出口で聞こえた。

「御苦勞さま、此暑いのに」と自分が云つた。

「何故」

「何故つて、兄さんの御好みなんですか、其でこ〳〵頭は」

「知らないわ」

嫂の廊下傳ひに梯子段を上る草履の音が判切聞こえた。

廊下の前は中庭で八つ手の株が見えた。自分は其暗い庭を前に眺めて、番頭に背中を流して貰つてゐた。すると入口の方から縁側を沿つて、又活潑な足音が聞こえた。さうして詰襟の白い洋服を着た岡田が自分の前を通つた。自分は思はず、「おい君、君」と呼んだ。

「や、今御湯、暗いんで些とも氣が附かなかつた」と岡田は一足後戻りして風呂を覗き込みながら挨拶をした。

「貴方に話しがある」と自分は突然云つた。

「話しが？何です」

「まあ、御入んなさい」

岡田は冗談ぢやないと云ふ顔をした。

「お兼は來ませんか」

自分が「いゝえ」と答へると、今度は「皆さんは」と聞いた。自分が又「みんな居ますよ」といふと、不思議さうに「ぢや今日は何處へも行かなかつたんですか」と聞いた。

「行つてもう歸つて來たんです」

「實は僕も今會社から歸り掛けですがね、何うも暑いぢやありませんか。――兎に角一寸伺候して來ますから。失禮」

岡田は斯う云ひ捨てたなり、とう／＼自分の用事を聞かずに二階へ上がつて行つて仕舞つた。自分もしばらくして風呂から出た。

九

岡田は其夜大分酒を呑んだ。彼は是非都合して和歌の浦迄一所に行く積りでゐたが、生憎同僚が病氣で缺勤してゐるので、豫期の通りにならないのが甚だ殘念だと云つて頻りに母や兄に詫びてゐた。

「ぢや今夜が御別れだから、少し御過ごしなさい」と母が勸めた。

生憎自分の家族は酒に親しみの薄いもの計りで、誰も彼の相手にはなれなかつた。それで皆御免蒙つて岡田より先へ食事を濟ました。岡田はそれが此方も勝手だといつた風に、獨り膳を控へて盃を甜め續けた。

彼は性來元氣な男であつた。其上酒を呑むと益陽氣になる好い癖を持つてゐた。さうして相手が聞かうが聞くまいが、頓着なしに好きな事を喋舌つて、時々一人高笑ひをした。

彼は大阪の富が過去二十年間に何の位殖えて、是から十年立つとまた其富が今の何十倍になるといふやうな統計を擧げて大いに滿足らしく見えた。

「大阪の富より自君身の富は何うだい」と兄が皮肉を云つたとき、岡田は禿げ掛かつた頭へ手を載せて笑ひ出した。

「然し僕の今日あるも――といふと、偉過ぎるが、まあ何うか斯うか遣つて行けるのも、全く叔父さんと叔母さんの御蔭です。僕はいくら斯うして酒を呑んで太平樂を竝べてゐたつて、夫丈は決して忘れやしません」

岡田は斯んな事を云つて、傍にゐる母と遠くにゐる父に感謝の意を表した。彼は醉ふと同じ言葉を何遍も繰り返す癖のある男だつたが、ことに此感謝の意は少しづゝ違つた形式で、幾度か彼の口から洩れた。仕舞に彼は灘萬のまな鰹とか何とかいふものを、是非父に喰はせたいと云ひ募つた。

自分は彼がもと書生であつた頃、ある正月の宵何處かで振舞酒を浴びて歸つて來て、父の前へ長さ三寸ばかりの赤い蟹の足を置きながら平伏して、謹んで北海の珍味を獻上しますと云つたら、父は「何だそんな朱塗りの文鎭見たいなもの。要らないから早く其方へ持つて行け」と怒つた昔を思ひ出した。

岡田は何時迄も飮んで歸らなかつた。始めは興を添へた彼の座談も段々皆に飽きられて來た。嫂は團扇を顏へ當てて欠を隱した。自分はとう〳〵彼を外へ連れ出さなければならなかつた。自分は散歩にかこつけて五六町彼と一所に歩いた。さうして懷から例の金を出して彼に返した。金を受取つた時の彼は、醉つてゐるにも拘らず驚くべく慥かなものであつた。「今でなくつても宜いのに、然しお兼が喜びますよ。有りがたう」と云つて、洋服の内隱袋へ收めた。

通は靜かであつた。自分はわれ知らず空を仰いだ。空には星の光が存外濁つてゐた。自分は心の内に明日の天氣を氣遣つた。すると岡田が藪から棒に「一郎さんは實際六づかしやでしたね」と云ひ出した。さうして昔兄と自分と將棋を指した時、自分が何か一口云つたのを癪に、いきなり將棋の駒を自分の額へ打附けた騷ぎを、新しく自分の記憶から呼び覺ました。

「あの時分から我儘だつたからね、何うも。然し此頃は大分機嫌が好いやうぢやありませんか」と彼が又云つた。自分は爽え切らない生返事をして置いた。

「尤も奧さんが出來てから、もう餘つ程になりますからね。然し奧さんの方でも隨分氣骨が折れるでせ

う。あれぢや」

自分は夫でも何の答もしなかつた。ある四つ角へ來て彼と別れるときたゞ「お兼さんに宜しく」と云つた儘又元の路へ引き返した。

十

翌日朝の汽車で立つた自分達は狹い列車のなかの食堂で晝飯を食つた。「給仕がみんな女だから面白い。しかも中々別嬪がゐますぜ、白いエプロンを掛けてね。是非中で晝飯を遣つて御覧なさい」と岡田が自分に注意したから、自分は皿を運んだりサイダーを注いだりする女をよく心附けて見た。然し別に是といふ程の器量を有つたものもゐなかつた。

母と嫂は物珍らしさうに窓の外を眺めて、田舍めいた景色を賞し合つた。實際窓外の眺めは大阪を今離れた計りの自分達には一つの變化であつた。ことに汽車が海岸近くを走るときは、松の綠と海の藍とで、煙に疲れた眼に爽やかな青色を射返した。木蔭から出たり隱れたりする屋根瓦の積み方も東京地方のものには珍らしかつた。

「あれは妙だね。御寺かと思ふと、左右でもないし。二郎、矢つ張り百姓家なのかね」と母がわざ〳〵指をさして、比較的大きな屋根を自分に示した。

自分は汽車の中で兄と隣り合せに坐つた。兄は何か考へ込んでゐた。自分は心の内で又例のが始まつたのぢやないかと思つた。少し話しでもして機嫌を直さうか、それとも默つて知らん顏をしてゐようかと躊躇した。兄は何か癪に障つた時でも、六づかしい高尚な問題を考へてゐる時でも、同じく斯んな樣子をするから、自分には一向見分けが附かなかつた。

自分は仕舞にとう〳〵思ひ切つて此方から何か話しを切り出さうとした。と云ふのは、向う側に腰を掛けてゐる母が、嫂と應對の相間々々に、兄の顏を偸むやうに一二度見たからである。

「兄さん、面白い話がありますがね」と自分は兄の方を見た。

「何だ」と兄が云つた。兄の調子は自分の豫期した通り無愛想であつた。然しそれは覺悟の前であつた。

「つい此間三澤から聞いた計りの話ですがね。……」

自分は例の精神病の娘さんが一旦嫁いだあと不緣になつて、三澤の宅へ引き取られた時、三澤の出る後を慕つて、早く歸つて來て頂戴と、何時でも云ひ習はした話をしようと思つて一寸其所で句を切つた。すると兄は急に氣乘りのした樣な顏をして、「其話なら己も聞いて知つてゐる。三澤が其女の死んだとき、冷たい額へ接吻したといふ話だらう」と云つた。

自分は喫驚した。

「そんな事があるんですか。三澤は接吻の事については一口も云ひませんでしたがね。皆居る前でです

か、三澤が接吻したつて云ふのは」

「夫は知らない。皆の前で遣つたのか、叉は外に人の居ない時に遣つたのか」

「だつて三澤が只一人で其娘さんの死骸の傍にゐる筈がないと思ひますがね。もし誰もそばに居ない時接吻したとすると」

「だから知らんと斷つてるぢやないか」

自分は默つて考へ込んだ。

「一體兄さんは何うして、其んな話を知つてるんです」

「Hから聞いた」

Hとは兄の同僚で、三澤を教へた男であつた。其Hは三澤の保證人だつたから、少しは關係の深い間柄なんだらうけれども、何うして斯んな際どい話を聞き込んで、兄に傳へたものだらうか、夫は彼も知らなかつた。

「兄さんは何故叉今日迄其話を爲ずに默つてるたんです」と自分は最後に兄に聞いた。兄は苦い顔をして、「する必要がないからさ」と答へた。自分は樣子によつたらもつと肉薄して見ようかと思つてるうちに汽車が着いた。

十一

停車場を出るとすぐ其處に電車が待つてゐた。兄と自分は手提鞄を持つた儘婦人を扶けて急いでそれに乘り込んだ。

電車は自分達四人が一度に這入つた丈で、中々動き出さなかつた。

「閑靜な電車ですね」と自分が侮るやうに云つた。

「是なら妾達の荷物を乘つけても宜さゝうだね」と母は停車場の方を顧た。

所へ書物を持つた書生體の男だの、扇を使ふ商人風の男だのが二三人前後して車臺に上つてばらばらに腰を掛け始めたので、運轉手は遂に把手を動かし出した。

自分達は何だか市の外廓らしい淋しい土塀つゞきの狹い町を曲がつて、二三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある濠を見た。濠の中には蓮が一面に靑い葉を浮かべてゐた。其靑い葉の中に、點々と咲く紅の花が、落ち附かない自分達の眼をちら〳〵させた。

「へえー是が昔の御城かね」と母は感心してゐた。母の叔母といふのが、昔紀州家の奧に勤めてゐたとか云ふので、母は一層感慨の念が深かつたのだらう。自分も子供の時、折々耳にした紀州樣、紀州樣といふ封建時代の言葉を不圖思ひ出した。

和歌山市を通り越して少し田舍道を走ると、電車はぢき和歌の浦へ着いた。拔け目のない岡田はかねてから注意して土地で一流の宿屋へ室の注文をしたのだが、生憎避暑の客が込み合つて、眺めの好い座敷が塞がつてゐるとかで、自分達は直ちに俥を命じて濱手の角を曲がつた。さうして海を眞前に控へた高い三階の上層の一室に入つた。

其處は南と西の開いた廣い座敷だつたが、普請は氣の利いた東京の下宿屋位なもので、品位からいふと大阪の旅館とはてんで比べ物にならなかつた。時々大一座でもあつた時に使ふ二階は打つ通しの大廣間で、伽藍堂の樣な眞中に立つて、波を打つた安疊を眺めると、何となく殺風景な感が起つた。

兄は其大廣間に假の仕切りとして立ててあつた六枚折の屛風を默つて見てゐた。彼は斯ういふものに對して、父の薰陶から來た一種の鑑賞力を有つてゐた。其屛風には妙にべろ／＼した葉の竹が巧みに描かれてゐた。兄は突然後を向いて「おい二郎」と云つた。

其時兄と自分は下の風呂に行く積りで二人ながら手拭をさげてゐた。さうして自分は彼の二間許り後に立つて、屛風の竹を眺める彼を又眺めてゐた。自分は兄が此屛風の畫について、何かまた批評を加へるに違ひないと思つた。

「何です」と答へた。

「先刻汽車の中で話しが出た、あの三澤の事だね。御前は何う思ふ」

兄の質問は實際自分に取つて意外であつた。彼は何故其話を今迄自分に聞かせなかつたと汽車の中で問はれた時、既に苦い顔をして必要がないからだと答へた計りであつた。

「例の接吻の話ですか」と自分は聞き返した。

「いゝえ接吻ぢやない。其女が三澤の出る後を慕つて、早く歸つて來て頂戴と必ず云つたといふ方の話さ」

「僕には兩方共面白いが、接吻の方が何だかより多く純粹で且美しい氣がしますね」

此時自分達は二階の梯子段を半分程降りてゐた。兄は其中途でぴたりと留まつた。

「そりや詩的に云ふのだらう。詩を見る眼で云つたら、兩方共等しく面白いだらう。けれども己の云ふのは左右ぢやない。もつと實際問題にしての話だ」

十二

自分には兄の意味がよく解らなかつた。默つて梯子段の下まで降りた。兄も仕方なしに自分の後に跟いて來た。風呂場の入口で立ち留まつた自分は、振り返つて兄に聞いた。

「實際問題と云ふと、何ういふ事になるんですか。一寸僕には解らないんですが」

兄は焦急つたさうに說明した。

「つまり其女がさ、三澤の想像する通り本當に彼の男を思つてゐたか、又は先の夫に對して云ひたかつ

た事を、我慢して云はずにゐたので、精神病の結果ふら〳〵と口にし始めたのか、何方だと思ふと云ふんだ」

自分も此問題は始め其話を聞いた時、少し考へて見た。けれども何方が何うだか到底分るべき筈の者でないと諦めて、それなり放つて仕舞つた。それで自分は兄の質問に對して是といふ程の意見も持つてゐなかつた。

「僕には解らんです」

「左右か」

兄は斯う云ひながら、矢つ張り風呂に這入らうともせず、其儘立つてゐた。自分も仕方なしに裸になるのを控へてゐた。風呂は思つたより小さく且多少古びてゐた。自分は先づ薄暗い風呂を覗き込んで、又兄に向つた。

「兄さんには何か意見が有るんですか」

「己は何うしても其女が三澤に氣があつたのだとしか思はれんがね」

「何故ですか」

「何故でも己はさう解釋するんだ」

二人は其話しの結末を附けずに湯に入つた。湯から上がつて婦人連と入れ代つた時、室には西日が一杯

射して、海の上は溶けた鐵の樣に熱く輝いた。二人は日を避けて次の室に這入つた。さうして其處で相對して坐つた時、先刻の問題が又兄の口から話頭に上つた。

「己は何うしても斯う思ふんだがね……」

「えゝ」と自分は只大人しく聞いてゐた。

「人間は普通の場合には世間の手前とか義理とかで、いくら云ひ度くつても云へない事が澤山あるだらう」

「夫は澤山あります」

「けれども夫が精神病になると——と云ふと凡ての精神病を含めて云ふやうで、醫者から笑はれるかも知れないが、——然し精神病になつたら、大變氣が樂になるだらうぢやないか」

「左右云ふ種類の患者もあるでせう」

「所でさ、もし其女が果して左右いふ種類の精神病患者だとすると、凡て世間並の責任は其女の頭の中から消えて無くなつて仕舞ふに違ひなからう。消えて無くなれば、胸に浮かんだ事なら何でも構はず露骨に云へるだらう。さうすると、其女の三澤に云つた言葉は、普通我々が口にする好い加減な挨拶よりも遙かに誠の籠もつた純粹のものぢやなからうか」

自分は兄の解釋にひどく感服して仕舞つた。「夫は面白い」と思はず手を打つた。すると兄は案外不機

嫌な顏をした。

「面白いとか面白くないとか云ふ浮いた話ぢやない。二郎、實際今の解釋が正確だと思ふか」と問ひ詰める樣に聞いた。

「左右ですね」

自分は何となく躊躇しなければならなかつた。

「噫々女も氣狂にして見なくつちや、本體は到底解らないのかな」

兄は斯う云つて苦しい溜息を洩らした。

十三

宿の下には可なり大きな堀割があつた。それが何うして海へつゞいてるか一寸解らなかつたが、夕方には漁船が一二艘何所からか漕ぎ寄せて來て、緩やかに樓の前を通り過ぎた。

自分達は其堀割に沿うて一二丁右の方へ歩いた後、又左へ切れて田圃路を橫切り始めた。向うを見ると、田の果がだら〳〵坂の上りになつて、其を上り盡くした土手の縁には、松が左右に長く續いてる。自分達の耳には大きな波の石に碎ける音がどゞん〳〵と聞こえた。三階から見ると其碎けた波が忽然白い煙となつて空に打ち上げられる樣が、明らかに見えた。

自分達は遂に其土手の上へ出た。波は土手のもう一つ先にある厚く築き上げられた石垣に當たつて、見事に粉微塵となつた末、飜え返るやうな色を起して空を吹くのが常であつたが、偶には崩れたなり石垣の上を流れ越えて、ざつと內側へ落ち込んだりする大きいのもあつた。

自分達はしばらく其壯觀に見惚れてゐたが、やがて强い浪の響を耳にしながら步き出した。其時母と自分は、是が片男波だらうと好い加減な想像を話しの種に二人竝んで步いた。兄夫婦は自分達より少し先へ行つた。二人とも浴衣掛けで、兄は細い洋杖を突いてゐた。嫂は又幅の狹い御殿模樣か何かの麻の帶を締めてゐた。彼等は自分達より殆ど二十間ばかり先へ出てゐた。さうして二人とも竝んで足を運ばして行つた。けれども彼等の間には彼是一間の距離があつた。母はそれを氣にする樣な、又氣にしない樣な眼遣ひで、時々見た。其見方が又餘りに神經的なので、母の心は此二人について何事かを考へながら步いてゐるとしか思へなかつた。けれども自分は話しの面倒になるのを恐れたから、素知らぬ顏をしてわざと緩々步いた。さうして成るべく呑氣さうに見せる積りで母を笑はせるやうな剽輕な事ばかり饒舌つた。母は何時もの通り「二郎、御前見たいに暮らして行けたら、世間に苦はあるまいね」と云つたりした。

仕舞に彼女はとう／＼堪へ切れなくなつたと見えて、「二郎あれを御覽」と云ひ出した。

「何ですか」と自分は聞き返した。

「あれだから本當に困るよ」と母が云つた。其時母の眼は先へ行く二人の後姿を凝と見詰めてゐた。自

分は少なくとも彼女の困ると云つた意味を表向き承認しない譯に行かなかつた。

「又何か兄さんの氣に障る事でも出來たんですか」

「そりやあの人の事だから何とも云へないがね。けれども夫婦となつた以上は、御前、いくら旦那が素つ氣なくしてゐたつて、此方は女だもの。直の方から少しは機嫌の直るやうに仕向けて呉れなくつちや困るぢやないか。あれを御覽な、あれぢや丸であかの他人が同じ方角へ歩いて行くのと違やしないやね。なんぼ一郎だつて直に傍へ寄つて呉れるなと頼みやしまいし」

母は無言の儘離れて歩いてゐる夫婦のうちで、唯嫂の方にばかり罪を着せたがつた。是には多少自分にも同感な所もあつた。さうして此同感は平生から兄夫婦の關係を傍で見てゐるものの胸には屹度起る自然のものであつた。

「兄さんは又何か考へ込んでゐるんですよ。夫で嫂さんも遠慮してわざと口を利かずにゐるんでせう」

自分は母の爲にわざと斯んな氣休めを云つて胡魔化さうとした。

十四

「たとひ何か考へて居るにしてもだね。直の方があゝ無頓着ぢや片つ方でも口の利きやうがないよ。丸でわざ〳〵離れて歩いてゐるやうだもの」

兄に同情の多い母から見ると、嫂の後姿は、如何にも冷淡らしく思はれたのだらう。が自分はそれに對して何とも答へなかつた。たゞ歩きながら嫂の性格をもつと一般的に考へるやうになつた。自分は母の批評が滿更當たつてゐないとも思はなかつた。けれども我肉身の子を可愛がり過ぎるせゐで、少し彼女の缺點を苛酷に見て居はしまいかと疑つた。

自分の見た彼女は決して溫かい女ではなかつた。けれども相手から熱を與へると、溫め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で隨分愛嬌を搾り出す事の出來る女であつた。自分は腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出だした事が時々あつた。けれども矯め難い不親切や殘酷心はまさかにあるまいと信じてゐた。

不幸にして兄は今自分が嫂について云つた樣な氣質を多量に具へてゐた。從つて同じ型に出來上がつた此夫婦は、己の要するものを、要する事の出來ない御互に對して、初手から求め合つてゐて、未だにしつくり反りが合はずに居るのではあるまいか。時々兄の機嫌の好い時丈、嫂も愉快さうに見えるのは、兄の方が熱し易い性丈に、女に働き掛ける溫か味の功力と見るのが當然だらう。さうでない時は、母が嫂を冷淡過ぎると評する樣に、嫂も亦兄を冷淡過ぎると腹のうちで評してゐるかも知れない。

自分は母と竝んで歩きながら先へ行く二人を斯んなに考へた。けれども母に對してはそんな六づかしい理窟を云ふ氣にはなれなかつた。すると「何うも不思議だよ」と母が云ひ出した。

「一體直は愛嬌のある質ぢやないが、御父さんや妾には何時だつて同じ調子だがね。二郎、御前にだつて左右だらう」

是は全く母の云ふ通りであつた。自分は元來性急な性分で、よく大きな聲を出したり、怒鳴り附けたりするが、不思議にまだ嫂と喧嘩をした例はなかつたのみならず、場合によると、兄よりも却て心置きなく話しをした。

「僕にも左右ですがね。成程さう云はれゝば少々變には違ひない」

「だからさ妾には直が一郎に對して丈、わざ〳〵、彼んな風をつらあてがましく遣つてゐる樣に思はれて仕方がないんだよ」

「まさか」

自白すると自分は此問題を母程細かく考へてゐなかつた。從つてそんな疑ひを挾む餘地がなかつた。あつても其原因が第一不審であつた。

「だつて宅中で兄さんが一番大事な人ぢやありませんか、嫂さんに取つて」

「だからさ。御母さんには譯が解らないと云ふのさ」

自分には折角斯んな景色の好い所へ來ながら、際限もなく母を相手に、嫂を陰で評してゐるのが馬鹿らしく感ぜられてきた。

「其内機會があつたら、嫂さんにまた好く腹の中を僕から聞いて見ませう。何心配する程の事はありません」と云ひ切つて、向うの石垣迄突き出してゐる掛茶屋から防波堤の上に馳け上がつた。さうして、精一杯の聲を揚げて、「おーい〳〵」と呼んだ。兄夫婦は驚いて振り向いた。其時石の堤に當たつて碎けた波が、吹き上げる泡と脚を洗ふ流れとで、自分を濡れ鼠の如くにした。

自分は母に叱られながら、ぼた〳〵雫を垂らして、三人と共に宿に歸つた。どゞん〳〵といふ波の音が、歸り道中自分の鼓膜に響いた。

十五

其晩自分は母と一所に眞白な蚊帳の中に寢た。普通の麻よりは遙かに薄く出來てゐるので、風が來て綺麗なレースを弄ぶ樣が涼しさうに見えた。

「好い蚊帳ですね。宅でも一つ斯んなのを買はうぢやありませんか」と母に勸めた。

「是や見てくれ丈は綺麗だが、それ程高いものぢやないよ。却て宅にあるあの白麻の方が上等なんだよ。たゞ此方のはうが輕くつて、繼ぎ目がない丈に華奢に見えるのさ」

母は昔もの丈あつて宅にある岩國か何處かで出來る麻の蚊帳の方を賞めてゐた。

「だいち寢冷えをしない丈でも彼方の方が得ぢやないか」と云つた。

下女が來て障子を締め切つてから、蚊帳は少しも動かなくなつた。

「急に暑苦しくなりましたね」と自分は嘆息するやうに云つた。

「左右さね」と答へた母の言葉は、丸で暑さが苦にならない程落ち附いてゐた。それでも團扇遣ひの音丈は微かに聞こえた。

母はそれから弗つり口を利かなくなつた。自分も眼を眠つた。襖一つ隔てた隣座敷には兄夫婦が寢てゐた。これは先刻から靜かであつた。自分の話し相手がなくなつて此方の室が急に寂りして見ると、兄の室は猶森閑と自分の耳を澄ました。

自分は眼を閉ぢた儘凝としてゐた。然し何時迄經つても寢つかれなかつた。仕舞には靜かさに祟られたやうな此暑い苦しみを痛切に感じ出した。それで母の眠りを妨げない樣にそつと蒲團の上に起き直つた。それから蚊帳の裾を捲くつて緣側へ出る氣で、成る可く音のしない樣に障子をすうと開けに掛かつた。すると今迄寢入つてゐたと計り思つた母が突然「二郎何處へ行くんだい」と聞いた。

「あんまり寢苦しいから、緣側へ出て少し涼まうと思ひます」

「左右かい」

母の聲は明晰で落ち附いてゐた。自分は其調子で、彼女がまんじりともせずに今迄起きてゐた事を知つた。

「御母さんも、まだ御休みにならないんですね」

「えゝ寢床の變つた所爲か何だか勝手が違つてね」

自分は貸浴衣の腰に三尺帶を一重廻した丈で、懷へ敷島の袋と燐寸を入れて緣側へ出た。緣側には白いカヷーの掛かつた椅子が二脚程出てゐた。自分は其一脚を引き寄せて腰を掛けた。

「餘りがたく〳〵云はして、兄さんの邪魔になると不可ないよ」

母から斯う注意された自分は、煙草を吹かしながら默つて、夢のやうな眼前の景色を眺めてゐた。景色は夜と共に無論ぼんやりしてゐた。月のない晩なので、殊更暗いものが蔓り過ぎた。其うちに晝間見た土手の松並木丈が一際黑ずんで左右に長い帶を引き渡してゐた。其下に浪の碎けた白い泡が夜の中に絕間なく動搖するのが、比較的刺激強く見えた。

「もう好い加減に御這入りよ。風邪でも引くと不可ないから」

母は障子の內から斯う云つて注意した。自分は椅子に倚りながら、母に夜の景色を見せようと思つて一寸勸めたが、彼女は應じなかつた。自分は素直に又蚊帳の中に這入つて、枕の上に頭を着けた。

自分が蚊帳を出たり這入つたりした間、兄夫婦の室は森として元の如く靜かであつた。自分が再び床に就いた後も依然として同じ沈默に鎖されてゐた。たゞ防波堤に當たつて碎ける浪の音のみが、どん〳〵と何時迄も響いた。

十六

朝起きて膳に向つた時見ると、四人は悉く寢足らない顏をしてゐた。さうして四人とも其寢足らない雲を膳の上に打ちひろげてわざと會話を陰氣にしてゐるらしかつた。自分も變に窮屈だつた。

「昨夕食つた鯛の焙烙蒸に中てられたらしい」と云つて、自分は不味さうな顏をして席を立つた。手摺の所へ來て、隣に見える東洋第一エレヹーターと云ふ看板を眺めてゐた。此昇降器は普通のやうに、家の下層から上層に通じてゐるのとは違つて、地面から岩山の頂まで物數奇な人間を引き上げる仕掛であつた。所にも似ず無風流な裝置には違ひないが、淺草にもまだない新しさが、昨日から自分の注意を惹いてゐた。果して早起の客が二人三人ぽつ〳〵もう乘り始めた。早く食事を終へた兄は何時の間にか、自分の後へ來て、小楊枝を使ひながら、上つたり下りたりする鐵の箱を自分と同じ樣に眺めてゐた。

「二郎、今朝一寸あの昇降器へ乘つて見ようぢやないか」と兄が突然云つた。

自分は兄にしては些と子供らしい事を云ふと思つて、ひよつと後を顧た。

「何だか面白さうぢやないか」と兄は柄にもない稚氣を言葉に現はした。自分は昇降器へ乘るのは好いが、ある目的地へ行けるか何うか夫が怪しかつた。

「何處へ行けるんでせう」

「何處だつて構はない。さあ行かう」

自分は母と嫂も無論一所に連れて行く積りで、「さあ〳〵」と大きな聲で呼び掛けた。すると兄は急に自分を留めた。

「二人で行かう。二人限りで」と云つた。

そこへ母と嫂が「何處へ行くの」と云つて顏を出した。

「何一寸あのエレヹーターへ乘つて見るんです。二郎と一所に。女には劍呑だから、御母さんや直は止した方が好いでせう。僕等がまあ乘つて試して見ますから」

母は虛空に昇つて行く鐵の箱を見ながら氣味の惡さうな顏をした。

「直御前何うする」

母が斯う聞いた時、嫂は例の通り淋しい靨を寄せて、「妾は何うでも構ひません」と答へた。それが大人しいとも取れるし、又聽きやうでは、冷淡とも無愛想とも取れた。夫を自分は兄に對して氣の毒と思ひ嫂に對しては損だと考へた。

二人は浴衣掛けで宿を出ると、すぐ昇降器へ乘つた。箱は一間四方位のもので、中に五六人這入ると戸を閉めて、すぐ引き上げられた。兄と自分は顏さへ出す事の出來ない鐵の棒の間から外を見た。さうして非常に鬱陶しい感じを起した。

「牢屋見たいだな」と兄が低い聲で私語いた。
「左右ですね」と自分が答へた。
「人間も此通りだ」
兄は時々斯んな哲學者めいた事をいふ癖があつた。自分は只「左右ですな」と答へた丈であつた。けれども兄の言葉は單に其輪廓位しか自分には呑み込めなかつた。
牢屋に似た箱の上り詰めた頂點は、小さい石山の天邊であつた。其處々に脊の低い松が噛りつくやうに脊味を添へて、單調を破るのが、夏の眼に嬉しく映つた。さうして僅かな平地に掛茶屋があつて、猿が一匹飼つてあつた。兄と自分は猿に芋を遣つたり、調戯つたりして、物の十分も其茶屋で費やした。
「何處か二人丈で話す所はないかな」
兄は斯う云つて四方を見渡した。其眼は本當に二人丈で話しの出來る靜かな場所を見附けてゐるらしかつた。

十七

其處は高い地勢の御蔭で四方とも好く見晴らされた。ことに有名な紀三井寺を蓊鬱した木立の中に遠く望む事が出來た。其麓に入江らしく穏やかに光る水が又海濱とは思はれない澤邊の景色を、複雜な色に描

き出してゐた。自分は傍に居る人から淨瑠璃にある下り松といふのを敎へて貰つた。其松は成程懸崖を傳ふ樣に逆に枝を伸してゐた。

兄は茶店の女に、此處いらで靜かな話しをするに都合の好い場所はないかと尋ねてゐたが、茶店の女は兄の問が解らないのか、何を云つても少しも要領を得なかつた。さうして地方訛りののしとかいふ語尾を頻りに繰り返した。

仕舞に兄は「ぢや其權現樣へでも行くかな」と云ひ出した。

「權現樣も名所の一つだから好いでせう」

二人はすぐ山を下りた。俥にも乘らず、傘も差さず、麥藁帽子丈被つて暑い砂道を歩いた。斯うして兄と一所に昇降器へ乘つたり、權現へ行つたりするのが、其日は自分に取つて、何だか不安に感ぜられた。平生でも兄と差向ひになると多少氣不精には違ひなかつたけれども、其日程落ち附かない事も亦珍らしかつた。自分は兄から「おい二郎二人で行かう、二人限りで」と云はれた時から旣に變な心持がした。

二人は額から油汗をぢり〳〵湧かした。其上に自分は實際昨夕食つた鯛の焙烙蒸に少し中てられてゐた。そこへ段々高くなる太陽が容赦なく具合の惡い頭を照らしたので、自分は仕方なしに默つて歩いてゐた。兄も無言の儘體を運ばした。宿で借りた粗末な下駄がさく〳〵砂に喰ひ込む音が耳に附いた。

「二郎何うかしたか」

兄の聲は全く藪から棒が急に出た樣に自分を驚かした。

「少し心持が變です」

二人は又無言で歩き出した。

漸く權現の下へ來た時、細い急な石段を仰ぎ見た自分は、其高いのに辟易する丈で、容易に登る勇氣は出し得なかつた。兄は其下に並べてある藁草履を突掛けて十段ばかり一人で上つて行つたが、後から續かない自分に氣が附いて、「おい來ないか」と嶮しく呼んだ。自分も仕方なしに婆さんから草履を一足借りて、骨を折つて石段を上り始めた。夫でも中途位から一歩ごとに膝の上に兩手を置いて、身體の重みを託さなければならなかつた。兄を下から見上げると左も焦熱つたさうに頂上の山門の角に立つてゐた。

「丸で醉つ拂ひの樣ぢやないか、段々を筋違に練つて歩くざまは」

自分は何と評されても構はない氣で、早速帽子を地の上に投げると同時に、肌を拔いだ。扇を持たないので、手にした手帛でしきりに胸の邊を拂つた。自分は後から「おい二郎」と屹度何か云はれるだらうと思つて、内心穩やかでなかつた所爲か、汗に濡れた手帛を無暗に振り動かした。さうして「暑い暑い」と續けざまに云つた。

兄は軈て自分の傍へ來て其處にあつた石に腰を卸ろした。其石の後は篠竹が一面に生えて遙かの下迄石垣の縁を隱す樣に茂つてゐた。其中から大きな椿が所々に白茶けた幹を現はすのが殊に目立つて見えた。

「成程此處は靜かだ。此處なら悠り話しが出來さうだ」と兄は四方を見廻した。

十八

「二郎少し御前に話しがあるがね」と兄が云つた。

「何です」

兄は少時逡巡して口を開かなかつた。自分は又それを聞くのが厭さに、催促もしなかつた。

「此處は涼しいですね」と云つた。

「あゝ涼しい」と兄も答へた。

實際其處は日影に遠い所爲か涼しい風の通ふ高みであつた。自分は三四分手帛を動かした後、急に肌を入れた。山門の裏には物寂びた小さい拜殿があつた。餘程古い建物と見えて、軒に彫り附けた獅子の頭抔は繪の具が半分剝げかゝつてゐた。

自分は立つて山門を潛つて拜殿の方へ行つた。

「兄さん此方の方がまだ涼しい。此方へ入らつしやい」

兄は答もしなかつた。自分は夫を機に拜殿の前面の左右に逍遙した。さうして暑い日を遮る高い常磐木を見てゐた。所へ兄が不平な顔をして自分に近づいて來た。

「おい少し話しがあるんだと云つたぢやないか」

自分は仕方なしに拜殿の段々に腰を掛けた。兄も自分に竝んで腰を掛けた。

「何ですか」

「實は直の事だがね」

兄は甚だ云ひ惡い所をやつと云ひ切つたといふ風に見えた。自分は「直」といふ言葉を聞くや否や冷りとした。兄夫婦の間柄は母が自分に訴へた通り、自分にも大抵は呑み込めてゐた。さうして母に約束した如く、自分は何時か折を見て、嫂に腹の中をとつくり聽き糺した上、此方から其知識をもつて、積極的に兄に向はうと思つてゐた。それを自分が遣らないうちに、若し兄から先を越されでもすると困るので、自分はひそかに其處を心配してゐた。實を云ふと、今朝兄から「二郎、二人で行かう、二人限りで」と云はれた時、自分は或は此問題が出るのではあるまいかと掛念して自づと厭になつたのである。

「嫂さんが何うかしたんですか」と、自分は已むを得ず兄に聞き返した。

「直は御前に惚れてるんぢやないか」

兄の言葉は突然であつた。且普通兄の有つてゐる品格にあたひしなかつた。

「何うして」

「何うしてと聞かれると困る。夫から失禮だと怒られては猶困る。何も文を拾つたとか、接吻した所を

見たとか云ふ實證から來た話しではないんだから。本當いふと表向きこんな愚劣な問を、苟も夫たる己が、他人に向つて掛けられた譯のものではない。ないが相手が御前だから己も己の體面を構はずに、聞き悪い所を我慢して聞くんだ。だから云つて呉れ」

「だつて嫂さんですぜ相手は。夫のある婦人、殊に現在の嫂ですぜ」

自分は斯う答へた。さうして斯う答へるより外に何と云ふ言葉も出なかつた。

「それは表面の形式から云へば誰もさう答へなければならない。御前も普通の人間だからさう答へるのが至當だらう。己も其一言を聞けば只恥ぢ入るより外に仕方がない。けれども二郎御前は幸ひに正直な御父さんの遺傳を受けてゐる。それに近頃の、何事も隱さないといふ主義を最高のものとして信じてゐるから聞くのだ。形式上の答は己にも聞かない先から解つてゐるが、たゞ聞きたいのは、もつと奥の奥の底にある御前の感じだ。その本當の所を何うぞ聞かして呉れ」

十九

「そんな腹の奥の奥底にある感じなんて僕に有る筈がないぢやありませんか」

斯う答へた時、自分は兄の顔を見ないで、山門の屋根を眺めてゐた。兄の言葉はしばらく自分の耳に聞こえなかつた。すると其れが一種の癇高い、さも昂奮を抑へたやうな調子になつて響いて來た。

「おい二郎何だつて其んな輕薄な挨拶をする。己と御前は兄弟ぢやないか」
自分は驚いて兄の顔を見た。兄の顔は常磐木の蔭で見る所爲か稍蒼味を帶びてゐた。
「兄弟ですとも。僕はあなたの本當の弟です。だから本當の事を御答へした積りです。今云つたのは決して空々しい挨拶でも何でもありません。眞底さうだから左右いふのです」
兄の神經の鋭敏な如く自分は熱しやすい性急であつた。平生の自分なら或は斯んな返事は出なかつたかも知れない。兄は其時簡單な一句を射た。
「屹度」
「えゝ屹度」
「だつて御前の顔は赤いぢやないか」
實際其時の自分の顔は赤かつたかも知れない。兄の面色の蒼いのに反して、自分は我知らず、兩方の頰の熱るのを強く感じた。其上自分は何と返事をして好いか分らなかつた。
すると兄は何と思つたか忽ち階段から腰を起した。さうして腕組をしながら、自分の席を取つてゐる前を右左に歩き出した。自分は不安な眼をして、彼の姿を見守つた。彼は始めから眼を地面の上に落としてゐた。二三度自分の前を横切つたけれども決して一遍も其眼を上げて自分を見なかつた。三度目に彼は突如として、自分の前に來て立ち留まつた。

「二郎」

「はい」

「おれは御前の兄だつたね。誠に子供らしい事を云つて濟まなかつた」

兄の眼の中には涙が一杯溜まつてゐた。

「何故です」

「おれは是でも御前より學問も餘計した積りだ。見識も普通の人間より持つてゐると計り今日迄考へてゐた。所があんな子供らしい事をつい口にして仕舞つた。まことに面目ない。何うぞ兄を輕蔑して呉れるな」

「何故です」

自分は簡單な此問を再び繰り返した。

「何故ですとさう眞面目に聞いて呉れるな。あゝ己は馬鹿だ」

兄は斯う云つて手を出した。自分はすぐ其手を握つた。兄の手は冷たかつた。自分の手も冷たかつた。

「たゞ御前の顏が少し許り赤くなつたからと云つて、御前の言葉を疑るなんて、まことに御前の人格に對して濟まない事だ。何うぞ堪忍して呉れ」

自分は兄の氣質が女に似て陰晴常なき天候の如く變るのを好く承知してゐた。然し一見識ある彼の特長

として、自分にはそれが天眞爛漫の子供らしく見えたり、又は玉のやうに玲瓏な詩人らしく見えたりした。自分は彼を尊敬しつゝも、何處か馬鹿にし易い所のある男の樣に考へない譯に行かなかつた。自分は彼の手を握つた儘「兄さん、今日は頭が何うかして居るんですよ。そんな下らない事はもう是限りにして徐々歸らうぢやありませんか」と云つた。

二十

兄は突然自分の手を放した。けれども決して其處を動かうとしなかつた。元の通り立つた儘何も云はずに自分を見下ろした。

「御前他の心が解るかい」と突然聞いた。

今度は自分の方が何も云はずに兄を見上げなければならなかつた。

「僕の心が兄さんには分らないんですか」と稍間を置いて云つた。自分の答には兄の言葉より一種の根強さが籠もつてゐた。

「御前の心は己に好く解つてゐる」と兄はすぐ答へた。

「ぢや夫で好いぢやありませんか」と自分は云つた。

「いや御前の心ぢやない。女の心の事を云つてるんだ」

兄の言語のうち、後一句には火の附いたやうな鋭さがあつた。其鋭さが自分の耳に一種異樣の響を傳へた。

「女の心だつて男の心だつて」と云ひ掛けた自分を彼は急に遮つた。

「御前は幸福な男だ。恐らくそんな事をまだ研究する必要が出て來なかつたんだらう」

「そりや兄さんの樣な學者ぢやないから……」

「馬鹿云へ」と兄は叱り附けるやうに叫んだ。

「書物の研究とか心理學の說明とか、そんな廻り遠い研究を指すのぢやない。現在自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要に出逢つた事があるかと聞いてるんだ」

最も親しかるべき筈の人と云つた兄の意味は自分にすぐ解つた。

「兄さんは餘り考へ過ぎるんぢやありませんか、學問をした結果。もう少し馬鹿になつたら好いでせう」

「向うでわざと考へさせるやうに仕向けて來るんだ。己の考へ慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」

自分は玆にいたつて、殆ど慰藉の辭に窮した。自分より幾倍立派な頭を有つてるか分らない兄が、斯んな妙な問題に對して自分より幾倍頭を惱めてるかを考へると、甚だ氣の毒でならなかつた。兄が自分

より神經質な事は、兄も自分もよく承知してゐた。けれども今迄兄から斯う歇私的里的に出られた事がないので、自分は實に途方に暮れて仕舞つた。

「御前メレヂスといふ人を知つてるか」と兄が聞いた。

「名前丈は聞いてゐます」

「あの人の書翰集を讀んだ事があるか」

「讀む所か表紙を見た事も有りません」

「左右か」

彼は斯う云つて再び自分の傍へ腰を掛けた。自分は此時始めて懷中に敷島の袋と燐寸のある事に氣が附いた。それを取り出して、自分から先づ火を點けて兄に渡した。兄は器械的にそれを吸つた。

「其人の書翰の一つのうちに彼は斯んな事を云つてゐる。——自分は女の容貌に滿足する人を見ると羨ましい。女の肉に滿足する人を見ても羨ましい。自分は何うあつても女の靈といふか魂といふか、所謂スピリツトを攫まなければ滿足が出來ない。それだから何うしても自分には戀愛事件が起らない」

「メレヂスつて男は生涯獨身で暮らしたんですかね」

「そんな事は知らない。又そんな事は何うでも構はないぢやないか。然し二郎、おれが靈も魂も所謂スピリツトも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥かだ」

二十一

兄の顔には苦悶の表情がありありと見えた。色々な點に於て兄を尊敬する事を忘れなかつた自分は、此時胸の奥で殆ど恐怖に近い不安を感ぜずには居られなかつた。

「兄さん」と自分はわざと落ち附き拂つて云つた。

「何だ」

自分は此答を聞くと同時に立つた。さうして、殊更に兄の腰を掛けてゐる前を、先刻兄が遣つたと同じ様に、然し全く別の意味で、右左へと二三度横切つた。兄は自分には丸で無頓着に見えた。兩手の指を、少し長くなつた髮の間に、櫛の齒の樣に深く差し込んで下を向いてゐた。彼は大變色澤の好い髮の所有者であつた。自分は彼の前を横切る度に、其漆黑の髮と其間から見える關節の細い、華奢な指に眼を惹かれた。其指は平生から自分の眼には彼の神經質を代表する如く優しく且骨張つて映つた。

「兄さん」と自分が再び呼び掛けた時、彼は漸く重さうに頭を上げた。

「兄さんに對して僕が斯んな事をいふと甚だ失禮かも知れませんがね。他の心なんて、いくら學問をしたつて、研究をしたつて、解りつこないだらうと僕は思ふんです。兄さんは僕よりも偉い學者だから固より其處に氣が附いて入らつしやるでせうけれども。いくら親しい親子だつて兄弟だつて、心と心は只通じ

てゐるやうな氣持がする丈で、實際向うと此方とは身體が離れてゐる通り心も離れてゐるんだから仕樣がないぢやありませんか」

「他の心は外から研究は出來る。けれども其心に爲つて見る事は出來ない。其位の事なら己だつて心得てゐる積りだ」

兄は吐き出すやうに、又懶さうに斯う云つた。自分はすぐ其後に跟いた。

「それを超越するのが宗教なんぢやありますまいか。僕なんぞは馬鹿だから仕方がないが、兄さんは何でも好く考へる性質だから……」

「考へる丈で誰が宗教心に近づける。宗教は考へるものぢやない、信じるものだ」

兄は左も忌々しさうに斯う云ひ放つた。さうして置いて、「あゝ己は何うしても信じられない。何うしても信じられない。たゞ考へて、考へて、考へる丈だ。二郎、何うか己を信じられる樣にして吳れ」と云つた。

兄の言葉は立派な敎育を受けた人の言葉であつた。然し彼の態度は殆ど十八九の子供に近かつた。自分はかゝる兄を自分の前に見るのが悲しかつた。其時の彼はほとんど砂の中で狂ふ泥鰌の樣であつた。

いづれの點に於ても自分より立ち勝つた兄が、斯んな態度を自分に示したのは此時が始めてであつた。自分はそれを悲しく思ふと同時に、此傾向で彼が段々進んで行つたなら或は遠からず彼の精神に異狀を呈

するやうになりはしまいかと懸念して、それが急に恐ろしくなつた。
「兄さん、此事に就いては僕も實はとうから考へてゐたんです……」
「いや御前の考へなんか聞かうと思つてゐやしない。今日御前を此處へ連れて來たのは少し御前に頼みがあるからだ。何うぞ聞いて呉れ」
「何ですか」
事は段々面倒になつて來さうであつた。けれども兄は容易に其頼みといふのを打ち明けなかつた。所へ我々と同じ遊覽人めいた男女が三四人石段の下に現はれた。彼等はてんでに下駄を草履と脫ぎ易へて、高い石段を此方へ登つて來た。兄は其人影を見るや否や急に立ち上がつた。「二郎歸らう」と云ひながら石段を下り掛けた。自分もすぐ其後に隨つた。

二十二

兄と自分は又元の路へ引き返した。朝來た時も腹や頭の具合が變であつたが、歸りは日盛りになつた所爲か猶苦しかつた。生憎二人共時計を忘れたので何時だか一寸分り兼ねた。
「もう何時だらう」と兄が聞いた。
「左右ですね」と自分はぎら〳〵する太陽を仰ぎ見た。「まだ午にはならないでせう」

二人は元の路を逆に歩いてゐる積りであつたが、何う間違へたものか、變に磯臭い濱邊へ出た。其處には漁師の家が雜貨店と交つて貧しい町をかたち作つてゐた。古い旗を屋根の上に立てた汽船會社の待合所も見えた。

「何だか路が違つた樣ぢやありませんか」

兄は相變らず下を向いて考へながら歩いてゐた。下には貝殼が其處此處に散つてゐた。それを踏み碎く二人の足音が時々單調な步行に一種田舍びた變化を與へた。兄は一寸立ち留まつて左右を見た。

「此處は往きに通らなかつたかな」

「えゝ通りやしません」

「左右か」

二人はまた歩き出した。兄は依然として下を向き勝ちであつた。自分は路を迷つた爲、存外宿へ歸るのが遲くなりはしまいかと心配した。

「何狹い所だ。何處を何う間違へたつて、歸れるのは同じ事だ」

兄は斯う云つてすた〳〵行つた。自分は彼の步き方を後から見て、足に任せてといふ故い言葉を思ひ出した。さうして彼より五六間後れた事を此場合何よりも難有く感じた。

自分は二人の歸り道に、兄から例の依賴といふのを屹度打ち明けられるに違ひないと思つて暗に其覺悟

をしてゐた。所が事實は反對で、彼は出來る丈口數を愼んで、さつさと歩く方針に出た。それが少しは無氣味でもあつたが又大分嬉しくもあつた。

宿では母と嫂が欄干に縞絽だか明石だか他所行の着物を掛けて二人とも浴衣の儘差向ひで坐つてゐた。自分達の姿を見た母は、「まあ何處迄行つたの」と驚いた顏をした。

「あなた方は何處へも行かなかつたんですか」

欄干に干してある着物を見ながら、自分が斯う聞いた時、嫂は「えゝ行つたわ」と答へた。

「何處へ」

「中てて御覽なさい」

今の自分は兄のゐる前で嫂から斯う氣易く話し掛けられるのが、兄に對して何とも申し譯がないやうであつた。のみならず、兄の眼から見れば、彼女が故意に自分に丈親しみを表はしてゐるとしか解釋が出來まいと考へて誰にも打ち明けられない苦痛を感じた。

嫂は一向平氣であつた。自分には夫が冷淡から出るのか、無頓着から來るのか、又は常識を無視してゐるのか、少し解り兼ねた。

彼等の見物して來た所は紀三井寺であつた。玉津島明神の前を通へ出て、其處から電車に乘るとすぐ寺の前へ出るのだと母は兄に說明してゐた。

「高い石段でね。斯うして見上げる丈でも眼が眩ひさうなんだよ、御母さんには。是ぢや到底上れつこないと思つて、妾や何うしようか知らと考へたけれども、直に手を引つ張つて貰つて、漸く御參り丈は濟ませたが、其代り汗で着物がぐつしよりさ……」

兄は「はあ、左右ですか左右ですか」と時々氣のない返事をした。

二十三

其日は何事も起らずに濟んだ。夕方は四人でトランプをした。みんなが四枚づゝのカードを持つて、其一枚を順送りに次の者へ伏せ渡しにするうちに數の揃つたのを出して仕舞ふと、何處かにスペードの一が殘る。それを握つたものが負けになるといふ溫泉場などでよく流行る至極簡單なものであつた。

母と自分はよくスペードを握つては妙な顏をしてすぐ勘附かれた。兄も時々苦笑した。一番冷淡なのは嫂であつた。スペードを握らうが握るまいが、われには一向關係がないといふ風をしてゐた。是は風といふよりも寧ろ彼女の性質であつた。自分はそれでも兄が先刻の會談のあと、よく是程に昂奮した神經を治められたものだと思つてひそかに感心した。

晩は寢られなかつた。昨夕よりも猶寐られなかつた。自分はどゞん〳〵と響く浪の音の間に、兄夫婦の寐てゐる室に耳を澄ました。けれども彼等の室は依然として昨夜の如く靜かであつた。自分は母に見咎め

られるのを恐れて、其夜は敢て縁側へ出なかつた。

朝になつて自分は母と嫂を例の東洋第一エレヴエーターへ案内した。さうして昨日の樣に山の上の猿に芋を遣つた。今度は猿に馴染のある宿の女中が一所に隨いて來たので、猿を抱いたり鳴かしたり前の日よりは大分賑やかだつた。母は茶店の床几に腰を掛けて、新和歌の浦とかいふ禿げて茶色になつた山を指して何だらうと聞いてゐた。嫂は頻りに遠眼鏡はないか遠眼鏡はないかと騷いだ。

「嫂さん、芝の愛宕樣ぢやありませんよ」と自分は云つて遣つた。

「だつて遠眼鏡位あつたつて好いぢやありませんか」と嫂はまだ不足を竝べてゐた。

夕方になつて自分はとう〳〵兄に引つ張られて紀三井寺へ行つた。是は婦人連が昨日既に參詣したといふのを口實に、我々二人丈が行く事にしたのであるが、其實兄の依賴を聞くために自分が彼から誘ひ出されたのである。

自分達は母の見た丈で恐れたといふ高い石段を一直線に上つた。其上は平たい山の中腹で眺望の好い所にベンチが一つ据ゑてあつた。本堂は傍に五重の塔を控へて、普通ありふれた佛閣よりも寂びがあつた。廂の眞中から下がつてゐる白い紐などは如何にも閑靜に見えた。

自分達は何物も眼を遮らないベンチの上に腰を卸ろして竝び合つた。

「好い景色ですね」

眼の下には遙かの海が鰯の腹のやうに輝いた。其處へ名殘の太陽が一面に射して、眩さが赤く頰を染める如くに感じた。澤らしい不規則な水の形も亦海より近くに、平たい面を鏡のやうに展べてゐた。兄は例の洋杖を顋の下に支へて默つてゐたが、やがて思ひ切つたと云ふ風に自分の方を向いた。

「二郎實は賴みがあるんだが」

「えゝ、それを伺ふ積りでわざ〳〵來たんだから緩り話して下さい。出來る事なら何でもしますから」

「二郎實は少し云ひ惡い事なんだがな」

「云ひ惡い事でも僕だから好いでせう」

「うん己は御前を信用してゐるから話すよ。然し驚いて吳れるな」

自分は兄から斯う云はれた時に、話しを聞かない先にまづ驚いた。さうして何んな注文が兄の口から出るかを恐れた。兄の氣分は前云つた通り變り易かつた。けれども一旦何か云ひ出すと、意地にも夫を通さなければ承知しなかつた。

二十四

「二郎驚いちや不可ないぜ」と兄が繰り返した。さうして現に驚いてゐる自分を嘲る如く見た。自分は今の兄と權現社頭の兄とを比較して丸で別人の觀をなした。今の兄は翻し難い堅い決心を以て自分に向つ

てるとしか自分には見えなかつた。

「二郎己は御前を信用してゐる。御前の潔白な事は既に御前の言語が證明してゐる。それに間違ひはないだらう」

「ありません」

「夫では打ち明けるが、實は直の節操を御前に試して貰ひたいのだ」

自分は「節操を試す」といふ言葉を聞いた時、本當に驚いた。當人から驚くなといふ注意が二遍あつたに拘らず、非常に驚いた。只あつけに取られて、呆然としてゐた。

「何故今になつてそんな顏をするんだ」と兄が云つた。

自分は兄の眼に映じた自分の顏を如何にも情なく感ぜざるを得なかつた。丸で此間の會見とは兄弟地を換へて立つたとしか思へなかつた。それで急に氣を取り直した。

「嫂さんの節操を試すなんて、——其んな事は廢した方が好いでせう」

「何故」

「何故つて、餘り馬鹿らしいぢやありませんか」

「何が馬鹿らしい」

「馬鹿らしかないかも知れないが、必要がないぢやありませんか」

「必要があるから頼むんだ」

自分は少時默つてゐた。廣い境内には參詣人の影も見えないので、四邊は存外靜かであつた。自分は其處いらを見廻して、最後に我々二人の淋しい姿を其一隅に見出だした時、薄氣味の惡い心持がした。

「試すつて、何うすれば試されるんです」

「御前と直が二人で和歌山へ行つて一晩泊つて呉れゝば好いんだ」

「下らない」と自分は一口に退けた。すると今度は兄が默つた。自分は固より無言であつた。海に射り附ける落日の光が次第に薄くなりつゝ猶名殘の熱を薄赤く遠い彼方に棚引かしてゐた。

「厭かい」と兄が聞いた。

「えゝ、外の事ならですが、夫丈は御免です」と自分は判切云ひ切つた。

「ぢや頼むまい。其代り己は生涯御前を疑るよ」

「そりや困る」

「困るなら己の頼む通り遣つて呉れ」

自分は唯俯向いてゐた。何時もの兄ならもう疾くに手を出してゐる時分であつた。自分は俯向きながら、今に兄の拳が帽子の上へ飛んで來るか、又は彼の平手が頰のあたりでぴしやりと鳴るかと思つて、凝と癇癪玉の破裂するのを期待してゐた。さうして其破裂の後に多く生ずる反動を機會として、兄の心を落ち附

けようとした。自分は人より一倍強い程度で、此反動に罹り易い兄の氣質をよく呑み込んでゐた。

自分は大分辛抱して兄の鐵拳の飛んで來るのを待つてゐた。けれども自分の期待は全く徒勞であつた。兄は死んだ人の如く靜かであつた。遂には自分の方から狐の樣に變な眼遣ひをして、兄の顏を偸み見なければならなかつた。兄は蒼い顏をしてゐた。けれども決して衝動的に動いて來る氣色には見えなかつた。

二十五

稍あつて兄は昂奮した調子で斯う云つた。

「二郎己は御前を信用してゐる。けれども直を疑つてゐる。しかも其疑られた當人の相手は不幸にして御前だ。但し不幸と云ふのは、御前に取つて不幸といふので、己には却て幸ひになるかも知れない。と云ふのは、己は今明言した通り、御前の云ふ事なら何でも信じられるし又何でも打ち明けられるから、それで己には幸ひなのだ。だから賴むのだ。己の云ふ事に滿更論理のない事もあるまい」

自分は其時兄の言葉の奧に、何か深い意味が籠もつてゐるのではなからうかと疑ひ出した。兄は腹の中で、自分と嫂の間に肉體上の關係を認めたと信じて、わざと斯ういふ難題を持ち掛けるのではあるまいか。自分は「兄さん」と呼んだ。兄の耳には兎に角、自分は餘程力強い聲を出した積りであつた。

「兄さん、外の事とは違つて是は倫理上の大問題ですよ……」

「當り前さ」
自分は兄の答の殊の外冷淡なのを意外に感じた。同時に先の疑ひが益深くなつて來た。
「兄さん、いくら兄弟の仲だつて僕はそんな殘酷な事はしたくないです」
「いや向うの方が己に對して殘酷なんだ」
自分は兄に向つて嫂が何故殘酷であるかの意味を聞かうともしなかつた。
「そりや改めて又伺ひますが、何しろ今の御依賴丈は御免蒙ります。僕には僕の名譽がありますから。いくら兄さんの爲だつて、名譽迄犧牲には出來ません」
「名譽？」
「無論名譽です。人から賴まれて他を試驗するなんて、——外の事だつて厭でさあ。況して其んな……探偵ぢやあるまいし……」
「二郎、己はそんな下等な行爲を御前から向うへ仕掛けてくれと賴んでるのぢやない。單に嫂とし又弟として一つ所へ行つて一つ宿へ泊つて呉れといふのだ。不名譽でも何でもないぢやないか」
「兄さんは僕を疑つていらつしやるんでせう。そんな無理を仰しやるのは」
「いや信じてるから賴むのだ」
「口で信じてるて、腹では疑つていらつしやる」

「馬鹿な」
兄と自分は斯んな會話を何遍も繰り返した。さうして繰り返すたびに双方共激して來た。すると一寸した言葉から熱が急に引いた樣に二人共治まつた。
其激した或時に自分は兄を眞正の精神病患者だと斷定した瞬間さへあつた。然し其發作が風のやうに過ぎた後では又通例の人間の樣にも感じた。仕舞に自分は斯う云つた。
「實は此間から僕も其事に就いては少々考へがあつて、機會があつたら嫂さんにとくと腹の中を聞いて見る氣でゐたんですから、夫丈なら受け合ひませう。もうぢき東京へ歸るでせうから」
「ぢや夫を明日遣つて呉れ。あした晝一所に和歌山へ行つて、晝のうちに返つて來れば差支へないだらう」
自分は何故か夫が厭だつた。東京へ歸つて緩り折を見ての事にしたいと思つたが、片方を斷つた今更一方も否とは云ひかねて、とう〳〵和歌山見物丈は引き受ける事にした。

二十六

その明くる朝は起きた時から生憎空に斑が見えた。しかも風さへ高く吹いて例の防波堤に崩ける波の音が凄じく聞こえ出した。欄干に倚つて眺めると、白い煙が濛々と岸一面を立て籠めた。午前は四人とも海

岸に出る氣がしなかつた。

午過ぎになつて、空模樣は少し穩やかになつた。雲の重なる間から日脚さへ一寸〻〻光を出した。それでも漁船が四五艘いつもより早く樓前の堀割へ漕ぎ入れて來た。

「氣味が惡いね。何だか暴風雨でもありさうぢやないか」

母はいつもと違ふ空を仰いで、斯う云ひながら又元の座敷へ引返して來た。兄はすぐ立つて又欄干へ出た。

「何大丈夫だよ。大した事はないに極まつてゐる。御母さん僕が受け合ひますから出掛けようぢやありませんか。俥も旣に誂へてありますから」

母は何とも云はずに自分の顏を見た。

「そりや行つても好いけれど、行くなら皆で一所に行かうぢやないか」

自分には其方が遙かに樂であつた。出來得るなら何うか母の御供をして、和歌山行を已めたいと考へた。

「ぢや僕達も一所にその切り開いた山道の方へ行つて見ませうか」と云ひながら立ち掛けた。すると嶮しい兄の眼がすぐ自分の上に落ちた。自分は到底是では約束を履行するより外に道がなからうと又思ひ返した。

「さう〳〵嫂さんと約束があつたつけ」

自分は兄に對して、つい空惚けた挨拶をしなければ濟まなくなつた。すると母が今度は苦い顏をした。

「和歌山は已めに御爲よ」

自分は母と兄の顏を見比べて何うしたものだらうと躊躇した。嫂は何時もの樣に冷然としてゐた。自分が母と兄の間に迷つてゐる間、彼女は殆ど一言も口にしなかつた。

「直御前二郎に和歌山へ連れて行つて貰ふ筈だつたね」と兄が云つた時、嫂はたゞ「えゝ」と答へた丈であつた。母が「今日は御止しよ」と止めた時、嫂は又「えゝ」と答へた丈であつた。自分が「嫂さん何うします」と顧た時は、又「何うでも好いわ」と答へた。

自分は一寸用事に下へ降りた。すると母が又後から降りて來た。彼女の樣子は何だかそは〳〵してゐた。

「御前本當に直と二人で和歌山へ行く氣かい」

「えゝ、だつて兄さんが承知なんですもの」

「幾何承知でも御母さんが困るから御止しよ」

母の顏の何處かには不安の色が見えた。自分はその不安の出所が兄にあるのか、又は嫂と自分にあるのか。一寸判斷に苦しんだ。

「何故です」と聞いた。

「何故ですつて、御前と直と行くのは不可ないよ」

「兄さんに惡いと云ふんですか」

自分は露骨に斯う聞いて見た。

「兄さんに惡い計りぢやないが……」

「ぢや嫂さんだの僕だのに惡いと云ふんですか」

自分の問は前より猶露骨であつた。母は默つて其處に佇んでゐた。自分は母の表情に珍らしく猜疑の影を見た。

二十七

自分は自分を信じ切り、又愛し切つてゐると計り考へてゐた母の表情を見て忽ち臆した。

「では止します。元々僕の發案で嫂さんを誘ひ出すんぢやない。兄さんが二人で行つて來いと云ふから行く丈の事です。御母さんが御不承知なら何時でも已めます。其代り御母さんから兄さんに談判して行かないで好いやうにして下さい。僕は兄さんに約束があるんだから」

自分は斯う答へて、何だか極りが惡さうに母の前に立つてゐた。實は母の前を去る勇氣が出なかつたのである。母は少し途方に暮れた樣子であつた。然し仕舞に思ひ切つたと見えて、「ぢや兄さんには妾から話しをするから、其代り御前は此處に待つてて御呉れ、三階へ一所に來ると又事が面倒になるかも知れない

から」と云つた。

自分は母の後影を見送りながら、事が斯んな風に引つ絡まつた日には、到底嫂を連れて和歌山などへ行く氣になれない、行つた所で肝心の用は辨じない、何うか母の思ひ通りに事が變じて吳れゝば好いがと思つた。さうして氣の落ち附かない胸を抱いて、廣い座敷を右左に目的もなく往つたり來たりした。

やがて三階から兄が下りて來た。自分は其顏をちらりと見た時、是は何うしても行かなければ濟まないなとすぐ讀んだ。

「二郎、今になつて違約して貰つちや己が困る。貴樣だつて男だらう」

自分は時々兄から貴樣と呼ばれる事があつた。さうして此貴樣が彼の口から出たときは屹度用心して後難を避けた。

「いえ行くんです。行くんですが御母さんが止せと仰しやるから」

自分が斯う云つてるうちに、母が又心配さうに三階から下りて來た。さうしてすぐ自分の傍へ寄つて、

「二郎御母さんは先刻あゝ云つたけれども、よく一郞に聞いて見ると、何だか紀三井寺で約束した事があるとか云ふ話だから、殘念だが仕方ない。矢つ張り其約束通りになさい」と云つた。

「えゝ」

自分は斯う答へて、あとは何も云はない事にした。

やがて母と兄は下に待つてゐる俥に乘つて、樓前から右の方へ鐵輪の音を鳴らして去つた。

「ぢや僕等も徐々出掛けませうかね」と嫂を顧た時、自分は實際好い心持ではなかつた。

「何うです出掛ける勇氣がありますか」と聞いた。

「あなたは」と向うも聞いた。

「僕はあります」

「貴方にあれば、妾にだつてあるわ」

自分は立つて着物を着換へ始めた。

嫂は上着を引つ掛けて呉れながら、「貴方何だか今日は勇氣がないやうね」と調戯ひ半分に云つた。自分は全く勇氣がなかつた。

二人は電車の出る所迄歩いて行つた。生憎近路を取つたので、嫂の薄い下駄と白足袋が一足毎に砂の中に潛つた。

「歩き惡いでせう」

「えゝ」と云つて彼女は傘を手に持つた儘、後を向いて自分の後足を顧た。自分は赤い靴を砂の中に埋めながら、今日の使命を何處で何う果したものだらうと考へた。考へながら歩く所爲か會話は少しも機まない心持がした。

「貴方今日は珍らしく默つていらつしやるのね」と遂に嫂から注意された。

二十八

自分は嫂と竝んで電車に腰を掛けた。けれども大事の用を前に控へてゐるといふ氣が胸にあるので、何うしても機嫌よく話しは出來なかつた。

「何故そんなに默つていらつしやるの」と彼女が聞いた。自分は宿を出てから斯う云ふ意味の質問を彼女から既に二度迄受けた。それを裏から見ると、二人でもつと面白く話さうぢやありませんかと云ふ意味も映つてゐた。

「あなた兄さんにそんな事を云つたことがありますか」

自分の顏は稍眞面目であつた。嫂は一寸それを見て、すぐ窓の外を眺めた。さうして「好い景色ね」と云つた。成程其時電車の走つてゐた所は、惡い景色ではなかつたけれども、彼女の殊更にそれを眺めた事は明らかであつた。自分はわざと嫂を呼んで再び前の質問を繰り返した。

「何故そんな詰らない事を聞くのよ」と云つた彼女は、殆ど一顧に價しない風をした。

電車は又走つた。自分は次の停留所へ來る前又執拗く同じ問を掛けて見た。

「うるさい方ね」と彼女が遂に云つた。「そんな事聞いて何になさるの。そりや夫婦ですもの、その位

な事云つた覺えはあるでせうよ。それが何うしたの」

「何うもしやしません。兄さんにも左右いふ親しい言葉を始終掛けて上げて下さいと云ふ丈です」

彼女は蒼白い頰へ少し血を寄せた。其量が乏しい所爲か、頰の奧の方に灯を點けたのが遠くから皮膚をほてらしてゐる樣であつた。しかし自分は其意味を深くも考へなかつた。

和歌山へ着いた時、二人は電車を降りた。降りて始めて自分は和歌山へ始めて來た事を覺つた。實は此地を見物する口實の下に、嫂を連れて來たのだから、形式にも何處か見なければならなかつた。

「あら貴方まだ和歌山を知らないの。夫でゐて妾を連れて來るなんて、隨分呑氣ね」

嫂は心細さうに四方を見廻した。自分も何分か極りが惡かつた。

「俥へでも乘つて車夫に好い加減な所へ連れて行つて貰ひませうか。それともぶら〳〵御城の方へでも歩いて行きますか」

「左右ね」

嫂は遠くの空を眺めて、近い自分には眼を注がなかつた。空は此處も海邊と同じやうに曇つてゐた。不規則に濃淡を亂した雲が幾重にも二人の頭の上を蔽つて、日を直下に受けるよりは蒸し暑かつた。其上何時驟雨が來るか解らない程に、空の一部分が既に黑ずんでゐた。其黑ずんだ圓の四方が暈されたやうに輝いて、丁度今我々が見捨てて來た和歌の浦の見當に、凄じい空の一角を描き出してゐた。嫂は今その氣味

の悪い所を眉を寄せて眺めてゐるらしかつた。

「降るでせうか」

自分は固より降るに違ひないと思つてゐた。それで兎に角俥を雇つて、見る丈の所を馳け抜けた方が得策だと考へた。自分は直ちに俥を命じて、何處でも構はないから成るべく早く見物の出來る樣に挽いて廻れと命じた。車夫は要領を得た如く又得ない如く、無暗に驅けた。狹い町へ出たり、例の蓮の咲いてる濠へ出たり又狹い町へ出たりしたが、一向是ぞといふ所はなかつた。最後に自分は俥の上で、斯う驅けて計りゐては肝心の話しが出來ないと氣が附いて、車夫に何處か寛り坐つて話しの出來る所へ連れて行けと差圖した。

二十九

車夫は心得て驅け出した。今迄と違つて威勢があまり好過ぎると思ふうちに、二人の俥は狹い横町を曲がつて、突然大きな門を潛つた。自分があわてて、車夫を呼び留めようとした時、梶棒は旣に玄關に横附けになつてゐた。二人は何うする事も出來なかつた。其上若い着飾つた下女が案内に出たので、二人は遂に上がるべく餘儀なくされた。

「斯んな所へ來る筈ぢやなかつたんですが」と自分はつい言譯らしい事を云つた。

「何故。だつて立派な御茶屋ぢやありませんか。結構だわ」と嫂が答へた。其答へ振から推すと、彼女は最初から斯ういふ料理屋めいた所へでも來るのを豫期してゐたらしかつた。

實際嫂のいつた通り其座敷は物綺麗に且堅牢に出來上がつてゐた。

「東京邊の安料理屋より却て好い位ですね」と自分は柱の木口や床の軸などを見廻した。嫂は手摺の所へ出て、中庭を眺めてゐた。古い梅の株の下に、蘭の茂りが蒼黑い影を深く見せてゐた。梅の幹にも硬くて細長い苔らしいものが處々に喰つ附いてゐた。

下女が浴衣を持つて風呂の案内に來た。自分は風呂に這入る時間が惜しかつた。さうして日が暮れはしまいかと心配した。出來るならば一刻も早く用を片附けて、約束通り明るい路を濱邊まで歸りたいと念じた。

「何うします嫂さん、風呂は」と聞いて見た。

嫂も明るいうちには歸るやうに兄から兼ねて云ひ附けられてゐたので、其處はよく承知してゐた。彼女は帶の間から時計を出して見た。

「まだ早いのよ、二郎さん。御湯へ這入つても大丈夫だわ」

彼女は時間の遲く見えるのを全く天氣の所爲にした。尤も濁つた雲が幾重にも空を鎖してゐるので、時計の時間よりは世の中が暗く見えたのは慥かに違ひなかつた。自分は又今にも降り出しさうな雨を恐れた。

降るなら一仕切りざつと來た後で、歸つた方が却て樂だらうと考へた。

「ぢや一寸汗を流して行きませうか」

二人はとう〳〵風呂に入つた。風呂から出ると膳が運ばれた。時間からいふと飯には早過ぎた。酒は遠慮したかつた。且飮める口でもなかつた。自分は已むを得ず、吸物を吸つたり、刺身を突つついたりした。下女が邪魔になるので、用があれば呼ぶからと云つて下げた。

嫂には改まつて云ひ出したものだらうか、又は夫となく話しの序に其處へ持つて行つたものだらうかと思案した。思案し出すと何方も宜い樣で又何方も惡い樣であつた。自分は吸物椀を手にした儘ぼんやり庭の方を眺めてゐた。

「何を考へて入らつしやるの」と嫂が聞いた。

「何、降りやしまいかと思つてね」と自分は宜い加減な答をした。

「左右。そんなに御天氣が怖いの。貴方にも似合はないのね」

「怖かないけど、もし強雨にでもなつちや大變ですからね」

自分が斯う云つてゐる內に、雨はぽつり〳〵と落ちて來た。餘程早くからの宴會でもあるのか、向うに見える二階の廣間に、二三人紋付羽織の人影が見えた。其見當で藝者が三味線の調子を合はせてゐる音が聞こえ出した。

宿を出るとき既にざわついてゐた自分の心は、此時一層落附きを失ひ掛けて來た。自分は腹の中で、今日は到底しんみりした話しをする氣になれないと恐れた。何故又其今日に限つて、こんな變な事を引き受けたのだらうと後悔もした。

三十

嫂はそんな事に氣の附く筈がなかつた。自分が雨を氣にするのを見て、彼女は却て不思議さうに詰つた。

「何でそんなに雨が氣になるの。降れば後が涼しくなつて好いぢやありませんか」

「だつて何時已むか解らないから困るんです」

「困りやしないわ。いくら約束があつたつて、御天氣の所爲なら仕方がないんだから」

「然し兄さんに對して僕の責任がありますよ」

「ぢやすぐ歸りませう」

嫂は斯う云つて、すぐ立ち上がつた。其樣子には一種の決斷があらはれてゐた。向うの座敷では客の頭が揃つたのか、三味線の音が雨を隔てて爽やかに聞こえ出した。電燈も既に輝いた。自分も半ば嫂の決心に促されて、腰を立て掛けたが、考へると受け合つて來た話しはまだ一言も口へ出してゐなかつた。後れて歸るのが母や兄に濟まない如く、少しも嫂に肝心の用談を打ち明けないのが又自分の心に濟まなかつた。

「嫂さん此雨は容易に已みさうもありませんよ。それに僕は嫂さんに少し用談があつて來たんだから」
自分は半分空を眺めて又嫂を振り返つた。自分は固よりの事、立ち上がつた彼女も、まだ歸る仕度は始めなかつた。彼女は立ち上がつたには、立ち上がつたが、自分の樣子次第で其以後の態度を一定しようと、五分の隙間なく身構へてゐるらしく見えた。自分は又軒端へ首を出して上の方を望んだ。室の位置が中庭を隔てて向うに大きな二階建の廣間を控へてゐるため、空は何時ものやうに廣くは眼界に落ちなかつた。從つて雲の往來や雨の降り按排も、一般的にはよく分らなかつた。けれども凄じさが先刻よりは一層甚しく庭木を痛振つてゐるのは事實であつた。自分は雨よりも空よりも、まづ此風に辟易した。
「あなたも妙な方ね。歸るといふから其積りで仕度をすれば、又坐つて仕舞つて」
「仕度つて程の仕度もしないぢやありませんか。只立つた限りでさあ」
自分が斯う云つた時、嫂はにつこりと笑つた。さうして故意と己の袖や裾のあたりを成程といつたやうな又意外だと驚いたやうな眼附で見廻した。それから微笑を含んで其樣子を見てゐた自分の前に再びぺたりと坐つた。
「何よ用談があるつて。妾にそんな六づかしい事が分りやしないわ。それよりか向うの御座敷の三味線でも聞いてた方が增しよ」
雨は軒に響くといふよりも寧ろ風に乘せられて、氣儘な場所へ叩き附けられて行く樣な音を起した。其

間に三味線の音が氣紛れものらしく時々二人の耳を掠め去つた。

「用があるなら早く仰しやいな」と彼女は催促した。

「催促されたつて一寸云へる事ぢやありません」

自分は實際彼女から促された時、何と切り出して好いか分らなかつた。すると彼女はにや〳〵と笑つた。

「貴方取つて幾何なの」

「そんなに冷かしちや不可ません。本當に眞面目な事なんだから」

「だから早く仰しやいな」

自分は愈改まつて忠告がましい事を云ふのが厭になつた。さうして彼女の前へ出た今の自分が何だか彼女から一段低く見縊られてゐる樣な氣がしてならなかつた。それだのに其處に一種の親しみを感じずには又居られなかつた。

三十一

「嫂さんは幾何でしたつけね」と自分は遂に卽かぬ事を聞き出した。

「是でもまだ若いのよ。貴方より餘つ程下の積りですわ」

自分は始めから彼女の年と自分の年とを比較する氣はなかつた。

「兄さんとこへ來てからもう何年になりますかね」と聞いた。

嫂は唯澄まして「左右ね」と云つた。

「妾そんな事みんな忘れちまつたわ。だいち自分の年さへ忘れる位ですもの」

嫂の此恍け方は如何にも嫂らしく響いた。さうして自分には却て嬌態とも見える此不自然が、眞面目な兄に甚しい不愉快を與へるのではなからうかと考へた。

「嫂さんは自分の年にさへ冷淡なんですね」

自分は斯んな皮肉を何となく云つた。然し云つたときの浮氣な心にすぐ氣がつくと急に兄に濟まない恐ろしさに襲はれた。

「自分の年なんかに、いくら冷淡でも構はないから、兄さんに丈はもう少し氣を附けて親切にして上げて下さい」

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出來る丈の事は兄さんに爲て上げてる積りよ。兄さん計りぢやないわ。貴方にだつて左右でせう。ねえ二郎さん」

自分は、自分にもつと不親切にして構はないから、兄の方には最う少し優しくして呉れろと、頼む積りで嫂の眼を見た時、又急に自分の甘いのに氣が附いた。嫂の前へ出て、斯う差し向ひに坐つたが最後、到底眞底から誠實に兄の爲に計る事は出來ないのだと迄思つた。自分は言葉には少しも窮しなかつた。何ん

間に三味線の音が氣紛れものらしく時々二人の耳を掠め去つた。

「用があるなら早く仰しやいな」と彼女は催促した。

「催促されたつて一寸云へる事ぢやありません」

自分は實際彼女から促された時、何と切り出して好いか分らなかつた。すると彼女はにや〳〵と笑つた。

「貴方取つて幾何なの」

「そんなに冷かしちや不可ません。本當に眞面目な事なんだから」

「だから早く仰しやいな」

自分は愈改まつて忠告がましい事を云ふのが厭になつた。さうして彼女の前へ出た今の自分が何だか彼女から一段低く見縊られてゐる樣な氣がしてならなかつた。それだのに其處に一種の親しみを感じずには又居られなかつた。

三十一

「嫂さんは幾何でしたつけね」と自分は遂に卽かぬ事を聞き出した。

「是でもまだ若いのよ。貴方より餘つ程下の積りですわ」

自分は始めから彼女の年と自分の年とを比較する氣はなかつた。

「兄さんとこへ來てからもう何年になりますかね」と聞いた。

嫂は唯澄まして「左右ね」と云つた。

「妾そんな事みんな忘れちまつたわ。だいち自分の年さへ忘れる位ですもの」

嫂の此挑け方は如何にも嫂らしく響いた。さうして自分には却て嬌態とも見える此不自然が、眞面目な兄に甚しい不愉快を與へるのではなからうかと考へた。

「嫂さんは自分の年にさへ冷淡なんですね」

自分は斯んな皮肉を何となく云つた。然し云つたときの浮氣な心にすぐ氣がつくと急に兄に濟まない恐ろしさに襲はれた。

「自分の年なんかに、いくら冷淡でも構はないから、兄さんに丈はもう少し氣を附けて親切にして上げて下さい」

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出來る丈の事は兄さんに爲て上げてる積りよ。兄さん計りぢやないわ。貴方にだつて左右でせう。ねえ二郎さん」

自分は、自分にもつと不親切にして構はないから、兄の方には最う少し優しくして呉れろと、頼む積りで嫂の眼を見た時、又急に自分の甘いのに氣が附いた。嫂の前へ出て、斯う差し向ひに坐つたが最後、到底眞底から誠實に兄の爲に計る事は出來ないのだと迄思つた。自分は言葉には少しも窮しなかつた。何ん

な言語でも兄の爲に使はうとすれば使はれた。けれども其を使ふ自分の心は、兄の爲でなくつて却て自分の爲に使ふのと同じ結果になりやすかつた。自分は決して斯んな役割を引き受けべき人格でなかつた。自分は今更のやうに後悔した。

「貴方急に默つちまつたのね」と其時嫂が云つた。恰も自分の急所を突く樣に。

「兄さんの爲に、僕が先刻からあなたに賴んでゐる事を、嫂さんは眞面目に聞いて下さらないから」

自分は恥づかしい心を抑へてわざと斯う云つた。すると嫂は變に淋しい笑ひ方をした。

「だつて夫や無理よ二郎さん。妾馬鹿で氣が附かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけれど、是で全く出來る丈の事を兄さんに對してしてゐる氣なんですもの。——妾や本當に腑拔けなのよ。ことに近頃は魂の拔け殼になつちまつたんだから」

「さう氣を腐らせないで、もう少し積極的にしたら何うです」

「積極的つて何うするの。御世辭を使ふの。妾御世辭は大嫌ひよ。兄さんも御嫌ひよ」

「御世辭なんか嬉しがるものもないでせうけれども、もう少し何うかしたら兄さんも幸福でせうし、嫂さんも仕合せだらうから……」

「宜御座んす。もう伺はないでも」と云つた嫂は、其言葉の終らないうちに涙をほろ〳〵と落とした。

「妾のやうな魂の拔け殼はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう。然し私は是で滿足です。是で澤山で

す。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積りです。其位の事は二郎さんも大抵見てゐて解りさうなもんだのに……」

泣きながら云ふ嫂の言葉は途切れ〳〵にしか聞こえなかつた。然し其途切れ〳〵の言葉が鋭い力をもつて自分の頭に應へた。

三十二

自分は經驗のある或年長者から女の涙に金剛石は殆どない、大抵は皆ギヤマン細工だと嘗て教はつた事がある。其時自分は成程そんなものかと思つて感心して聞いてゐた。けれども夫は單に言葉の上の知識に過ぎなかつた。若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪へないやうな氣がした。外の場合なら彼女の手を取つて共に泣いて遣りたかつた。

「そりや兄さんの氣六づかしい事は誰にでも解つてます。あなたの辛抱も並大抵ぢやないでせう。けれども兄さんはあれで潔白すぎる程潔白で正直すぎる程正直な高尚な男です。敬愛すべき人物です……」

「二郎さんに何もそんな事を伺はないでも兄さんの性質位妾だつて承知してゐる積りです。妻ですもの」

嫂は斯う云つて又しやくり上げた。自分は益可哀さうになつた。見ると彼女の眼を拭つてゐた小形の

手帛が、皺だらけになつて濡れてゐた。自分は乾いてゐる自分ので彼女の眼や頰を撫でてやるために。彼女の顏に手を出したくて堪らなかつた。けれども、何とも知れない力が又其手をぐつと抑へて動けないやうに締め附けてゐる感じが強く働いた。

「正直な所嫂さんは兄さんが好きなんですか、又嫌ひなんですか」

自分は斯う云つて仕舞つた後で、此言葉は手を出して嫂の頰を、拭いて遣れない代りに自然口の方から出たのだと氣が附いた。嫂は手帛と涙の間から、自分の顏を覗くやうに見た。

「二郎さん」

「えゝ」

此簡單な答は、恰も磁石に吸はれた鐵の屑の樣に、自分の口から少しの抵抗もなく、何等の自覺もなく釣り出された。

「貴方何の必要があつて其んな事を聞くの。兄さんが好きか嫌ひかなんて。妾が兄さん以外に好いてる男でもあると思つていらつしやるの」

「左右いふ譯ぢや決してないんですが」

「だから先刻から云つてるぢやありませんか。私が冷淡に見えるのは、全く私が腑拔けの所爲だつて一

「さう腑拔けを殊更に振り舞はされちや困るね。誰も宅のものでそんな惡口を云ふものは一人もないん

ですから」

「云はなくつても腑抜けよ。好く知つてるわ、自分だつて。けど、是でも時々は他から親切だつて賞められる事もあつてよ。さう馬鹿にしたものでもないわ」

自分は嘗て大きなクッションに蜻蛉だの草花だのを色々の絲で、嫂に縫ひ附けて貰つた御禮に、あなたは親切だと感謝した事があつた。

「あれ、まだ有るでせう。綺麗ね」と彼女が云つた。

「えゝ。大事にして持つてゐます」と自分は答へた。自分は事實だから斯う答へざるを得なかつた。斯う答へる以上、彼女が自分に親切であつたといふ事實を裏から認識しない譯に行かなかつた。

不圖耳を欲てると向うの二階で彈いてゐた三味線は何時の間にか已んでゐた。殘り客らしい人の醉つた聲が時々風を横切つて聞こえた。もう夫程遲くなつたのかと思つて、時計を捜し出しに掛かつた所へ女中が飛石傳ひに縁側から首を出した。

自分等は此女中を通じて、和歌の浦が今暴風雨に包まれてゐるといふ事を知つた。電話が切れて話しが通じないといふ事を知つた。往來の松が倒れて電車が通じないといふ事も知つた。

三十三

自分は其時急に母や兄の事を思ひ出した。眉を焦がす火の如く思ひ出した。狂ふ風と渦巻く浪に弄ばれつゝある彼等の宿が想像の眼にありくと浮かんだ。

「嫂さん大變な事になりましたね」と自分は嫂を顧た。嫂は夫程驚いた樣子もなかつた。けれども氣の所爲か、常から蒼い頬が一層蒼いやうに感ぜられた。其蒼い頬の一部と眼の縁に先刻泣いた痕跡がまだ殘つてゐた。嫂はそれを下女に悟られるのが厭なんだらう、電燈に疎い不自然な方角へ顏を向けて、わざと入口の方を見なかつた。

「和歌の浦へは何うしても歸られないんでせうか」と云つた。

見當違ひの方から出た此問は、自分に云ふのか、又は下女に聞くのか、一寸解らなかつた。

「俥でも駄目だらうね」と自分が同じ樣な問を下女に取り次いだ。

下女は駄目といふ言葉こそ繰り返さなかつたが、危險な意味を反覆説明して聞かせた上、是非今夜丈は和歌山へ泊れと忠告した。彼女の顏は寧ろ吾々二人の利害を標的にして物を云つてるらしく眞面目に見えた。自分は下女の言葉を信ずれば信ずる程母の事が氣になつた。

防波堤と母の宿との間には彼是五六町の道程があつた。波が高くて少し土手を越す位なら、容易に三階の座敷迄來る氣遣ひはなからうとも考へた。然しもし海嘯が一度に寄せて來るとすると、……

「おい海嘯であすこいらの宿屋がすつかり波に攫はれる事があるかい」

自分は本當に心配の餘り下女に斯う聞いた。下女はそんな事はないと斷言した。然し波が防波堤を越えて土手下へ落ちてくるため、中が湖水のやうに一杯になる事は二三度あつたと告げた。

「夫にしたつて、水に浸つた家は大變だらう」と自分は又聞いた。

下女は、高々水の中で家がぐる〳〵回る位なもので、海迄持つて行かれる心配は先づあるまいと答へた。此呑氣な答が心配の中にも自分を失笑せしめた。

「ぐる〳〵回りや夫で澤山だ。其上海迄持つてかれた日にや好い災難ぢやないか」

下女は何とも云はずに笑つてゐた。嫂も暗い方から電燈をまともに見始めた。

「嫂さん何うします」

「何うしますつて、妾女だから何うして好いか解らないわ。若し貴方が歸ると仰しやれば、何んな危險があつたつて、妾一所に行くわ」

「行くのは構はないが、――困つたな。ぢや今夜は仕方がないから此處へ泊るとしますか」

「貴方が御泊りになれば妾も泊るより外に仕方がないわ。女一人で此暗いのにとても和歌の浦迄行く譯には行かないから」

下女は今迄勘違ひをしてゐたと云はぬ計りの眼遣ひをして二人を見較べた。

「おい電話は何うしても通じないんだね」と自分は又念のため聞いて見た。

「通じません」
自分は電話口へ出て直接に試みて見る勇氣もなかつた。
「ぢや仕樣がない泊ることに極めませう」と今度は嫂に向つた。
「えゝ」
彼女の返事は何時もの通り簡單でさうして落ち附いてゐた。
「町の中なら俥が通ふんだね」と自分は又下女に向つた。

三十四

二人はこれから料理屋で周旋して呉れた宿屋迄行かなければならなかつた。仕度をして玄關を下りた時、其所に輝く電燈と、車夫の提灯とが、雨の音と風の叫びに冴えて、恰も闇に狂ふ物凄さを照らす道具のやうに思はれた。嫂は先づ色の眼に附くあでやかな姿を黑い幌の中へ隱した。自分もつゞいて窮屈な深い桐油の中に身體を入れた。

幌の中に包まれた自分は殆ど往來の凄じさを見る遑がなかつた。自分の頭はまだ經驗した事のない海嘯といふものに絕えず支配された。でなければ、意地の惡い天候の御蔭で、自分が兄の前で一徹に退けた事を、何うしても實行しなければならなくなつた運命をつらく觀じた。自分の頭は落ち附いて想像したり觀

じたりする程の餘裕を無論有たなかつた。たゞ亂雜な火事場のやうに取留めもなくくる／＼廻轉した。

そのうち俥の梶棒が一軒の宿屋のやうな構の門口へ横附けになつた。自分は何だか暖簾を潛つて土間へ這入つたやうな氣がしたが慥かには覺えてゐない。土間は幅の割に竪からいつて大分長かつた。帳場も見えず番頭も居ず、たゞ一人の下女が取次に出た丈で、宵の口としては至つて淋しい光景であつた。

自分達は默つて其所に突立つてゐた。自分は何故だか嫂に話したくなかつた。彼女も澄まして絹張の傘の先を斜に土間に突いたなりで立つてゐた。

下女の案内で二人の通された部屋は、緣側を前に御簾の樣な簀垂を軒に懸けた古めかしい座敷であつた。柱は時代で黑く光つてゐた。天井にも煤の色が一面に見えた。嫂は例の傘を次の間の衣桁に懸けて、「こゝは向うが高い棟で、此方が厚い練塀らしいから風の音がそんなに聞こえないけれど、先刻俥へ乘つた時は大變ね。幌の上でひゆう／＼いふのが氣味が惡かつた位よ。あなた風の重みが俥の幌に乘し掛かつて來るのが乘つてゝ分つたでせう。妾もう少しで俥が引つ繰り返るかも知れないと思つたわ」と云つた。

自分は少し逆上してゐたので、そんな事はよく注意してゐられなかつた。けれども其通りを眞直に答へる程の勇氣もなかつた。

「えゝ隨分な風でしたね」と胡魔化した。

「此處で此位ぢや、和歌の浦はさぞ大變でせうね」と嫂が始めて和歌の浦の事を云ひ出した。

自分は胸が又わく〳〵し出した。「姐さん此處の電話も切れてるのかね」と云つて、答も待たずに風呂場に近い電話口迄行つた。其處で帳面を引つ繰り返しながら、號鈴をしきりに鳴らして母と兄の泊つてゐる和歌の浦の宿へ掛けて見た。すると不思議に向うで二言三言何か云つた樣な氣がするので、是は難有いと思ひつゝ猶暴風雨の模樣を聞かうとすると、又薩張り通じなくなつた。それから何遍もし〳〵と呼んでも幾何號鈴を鳴らしても、呼び甲斐も鳴らし甲斐も全く無くなつたので、遂に我を折つてわが部屋へ引き戻して來た。嫂は蒲團の上に坐つて茶を啜つてゐたが、自分の足音を聽きつゝ振り返つて、「電話は何うして？通じて？」と聞いた。自分は電話に就いて今の一部始終を説明した。

「大方其んな事だらうと思つた。到底駄目よ今夜は。いくら掛けたつて、風で電話線を吹き切つちまつたんだから。あの音を聞いたつて解るぢやありませんか」

風は何處からか二筋に綯れて來たのが、急に擦れ違ひになつて唸る樣な怪しい音を立てて、又虚空遙かに騰る如くに見えた。

三十五

二人が風に耳を峙ててゐると、下女が風呂の案内に來た。それから晩食を食ふかと聞いた。自分は晩食などを欲しいと思ふ氣になれなかつた。

「何うします」と嫂に相談して見た。

「左右ね。何うでも宜いけども。折角泊つたもんだから、御膳だけでも見た方が宜いでせう」と彼女は答へた。

下女が心得て立つて行つたかと思ふと、宅中の電燈がばたりと消えた。黒い柱と煤けた天井でたゞさへ陰氣な部屋が、今度は眞暗になつた。自分は鼻の先に坐つてゐる嫂を嗅げば嗅がれるやうな氣がした。

「嫂さん怖かありませんか」

「怖いわ」といふ聲が想像した通りの見當で聞こえた。けれども其聲のうちには怖らしい何物をも含んでゐなかつた。又わざと怖がつて見せる若々しい蓮葉の態度もなかつた。

二人は暗黑のうちに坐つてゐた。動かずに又物を云はずに、默つて坐つてゐた。眼に色を見ない所爲か、外の暴風雨は今迄よりは餘計耳に附いた。雨は風に散らされるので夫程恐ろしい音も傳へなかつたが、風は屋根も塀も電柱も、見境なく吹き捲くつて悲鳴を上げさせた。自分達の室は地面の上の穴倉見た様な所で、四方共頑丈な建物だの厚い塗壁だのに包まれて、縁の前の小さい中庭さへ比較的安全に見えたけれども、周圍一面から出る一種凄じい音響は、暗闇に伴なつて起る人間の抵抗し難い不可思議な威嚇であつた。

「嫂さんもう少しだから我慢なさい。今に女中が灯を持つて來るでせうから」

自分は斯う云つて、例の見當から嫂の聲が自分の鼓膜に響いて來るのを暗に豫期してゐた。すると彼女は何事をも答へなかつた。それが漆に似た暗闇の威力で、細い女の聲さへ通さないやうに思はれるのが、自分には多少無氣味であつた。仕舞に自分の傍に慥かに坐つてゐるべき筈の嫂の存在が氣に掛かり出した。

「嫂さん」

嫂はまだ默つてゐた。自分は電氣燈の消えない前、自分の向うに坐つてゐた嫂の姿を、想像で適當の距離に描き出した。さうして其を便りに又「嫂さん」と呼んだ。

「何よ」

彼女の答は何だか蒼蠅さうであつた。

「居るんですか」

「居るわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此處へ來て手で障つて御覽なさい」

自分は手搜りに搜り寄つて見たい氣がした。けれども夫程の度胸がなかつた。其うち彼女の坐つてゐる見當で女帶の擦れる音がした。

「嫂さん何かしてゐるんですか」と聞いた。

「えゝ」

「何をしてゐるんですか」と再び聞いた。

「先刻下女が浴衣を持つて來たから、着換へようと思つて、今帶を解いてゐる所です」と嫂が答へた。
自分が暗闇で帶の音を聞いてゐるうちに、下女は古風な蠟燭を點けて緣側傳ひに持つて來た。さうしてそれを座敷の床の横にある机の上に立てた。蠟燭の焔がちら／＼右左へ搖れるので、黑い柱や煤けた天井は勿論、灯の勢の及ぶ限りは、穩やかならぬ薄暗い光にどよめいて、自分の心を淋しく焦立たせた。殊更床に掛けた軸と、其前に活けてある花とが、氣味の惡い程目立つて蠟燭の灯の影響を受けた。自分は手拭を持つて、又汗を流しに風呂へ行つた。風呂は怪しげなカンテラで照らされてゐた。

三十六

自分は侘びしい光でやつと見分けのつく小桶を使つてざあ／＼背中を流した。出掛けに又念のためだから電話をちりん／＼鳴らして見たが更に通じる氣色がないので已めた。
嫂は自分と入れ代りに風呂に入つたかと思ふとすぐ出て來た。「何だか暗くつて氣味が惡いのね。それに桶や湯槽が古いんで緩り洗ふ氣にもなれないわ」
其時自分は畏まつた下女を前に置いて蠟燭の灯を便に宿帳を附けべく餘儀なくされてゐた。
「嫂さん宿帳は何う附けたら好いでせう」
「何うでも。好い加減に願ひます」

嫂は斯う云つて小さい袋から櫛やなにか這入つてゐる更紗の疊紙を出し始めた。彼女は後向きになつて蠟燭を一つ占領して鏡臺に向ひつゝ何か遣つてゐた。自分は仕方なしに東京の番地と嫂の名を書いて、わざと傍に一郎妻と認めた。同様の意味で自分の側にも一郎弟とわざ〳〵斷つた。

飯の出る前に、何の拍子か、先に暗くなつた電燈が又一時に明るくなつた。其時臺所の方でわあと喜びの鬨の聲を擧げたものがあつた。暴風雨で魚がないと下女が言譯を云つたに拘らず、吾々の膳の上は明らかであつた。

「丸で生き返つた樣ね」と嫂が云つた。

すると電燈が又ぱつと消えた。自分は急に箸を消えた處に留めたぎり、しばらく動かさなかつた。

「おや〳〵」

下女は大きな聲をして朋輩の名を呼びながら燈火を求めた。自分は電氣燈がぱつと明るくなつた瞬間に嫂が、何時の間にか薄く化粧を施したといふ艶かしい事實を見て取つた。電燈の消えた今、其顏丈が眞闇なうちに故の通り殘つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

「嫂さん何時御粧したんです」

「あら厭だ眞闇になつてから、そんな事を云ひだして、貴方何時見たの」

下女は暗闇で笑ひ出した。さうして自分の眼ざとい事を賞めた。

「斯んな時に白粉迄持つて來るのは實に細かいですね、嫂さんは」と自分は又暗闇の中で嫂に云つた。

「白粉なんか持つて來やしないわ。持つて來たのはクリームよ、貴方」と彼女は又暗闇の中で辯解した。

自分は暗がりの中で、しかも下女の居る前で、斯んな冗談を云ふのが常よりは面白かつた。そこへ彼女の朋輩が又別の蠟燭を二本許り點けて來た。

室の中は裸蠟燭の灯で渦を卷くやうに動搖した。自分も嫂も眉を顰めて燃える焰の先を見詰めて居た。さうして落附きのない淋しさとでも形容すべき心持を味はつた。

程なく自分達は寐た。便所に立つた時、自分は窓の間から空を仰ぐ樣に覗いて見た。今迄多少靜まつて居た暴風雨が、此時は夜更と共に募つたものか、眞黑な空が眞黑いなりに活動して、瞬間も休まない樣に感ぜられた。自分は恐ろしい空の中で、黑い電光が擦れ合つて、互に黑い針に似たものを隙間なく出しながら、此暗さを大きな音の中に維持してゐるのだと想像し、かつ其想像の前に畏縮した。

蚊帳の外には蠟燭の代りに下女が床を延べた時、行燈を置いて行つた。其行燈が又古風な陰氣なもので、一層吹き消して闇がりにした方が、微かな光に照らされる無氣味さよりは却て心持が好い位だつた。自分は燐寸を擦つて、薄暗い所で煙草を吞み始めた。

三十七

自分は先刻から少しも寐なかつた。小用に立つて、一本の紙卷を吹かす間にも色々な事を考へた。それが取り留めもなく雜然と一度に來るので、自分にも何が主要の問題だか捕へられなかつた。自分は燐寸を擦つて煙草を呑んでゐる事さへ時々忘れた。而も其處に氣が附いて、再び吸口を唇に銜へる時の煙の無味さは又特別であつた。

自分の頭の中には、今見て來た正體の解らない黑い空が、凄じく一樣に動いてゐた。夫から母や兄のゐる三階の宿が波を幾度となく被つて、くるり〳〵と廻り出してゐた。それが片附かないうちに、此部屋の中に寐てゐる嫂の事が又氣になり出した。天災とは云へ二人で此處へ泊つた言譯を何うしたものだらうと考へた。辯解してから後、兄の機嫌を何うして取り直したものだらうとも考へた。同時に今日嫂と一所に出て、滅多にない斯んな冒險を共にした嬉しさが何處からか湧いて出た。其嬉しさが出た時、自分は風も雨も海嘯も母も兄も悉く忘れた。すると其嬉しさが又俄然として一種の恐ろしさに變化した。恐ろしさと云ふよりも、寧ろ恐ろしさの前觸れであつた。何處かに潛伏してゐるやうに思はれる不安の徴候であつた。さうして其時は外面を狂ひ廻る暴風雨が、木を根こぎにしたり、塀を倒したり、屋根瓦を捲くつたりするのみならず、今薄暗い行燈の下で味のない煙草を吸つてゐる此自分を、粉微塵に破壞する豫告の如く思はれた。

自分が斯んな事をぐる〳〵考へてゐるうちに、蚊帳の中に死人の如く大人しくしてゐた嫂が、急に寐返

りをした。さうして自分に聞こえるやうに長い欠をした。
「嫂さんまだ寐ないんですか」と自分は煙草の煙の間から嫂に聞いた。
「えゝ、だつて此吹き降りぢや寐ようにも寐られないぢやありませんか」
「僕もあの風の音が耳に附いて何うする事も出來ない。電燈の消えたのは、何でも此處いら近所にある柱が一本とか二本とか倒れたためだつてね」
「さうよ、其んな事を先刻下女が云つたわね」
「御母さんと兄さんは何うしたでせう」
「妾も先刻から其事ばかり考へてるるの。然しまさか浪は這入らないでせう。這入つたつて、あの土手の松の近所にある怪しい藁屋位なものよ。持つてかれるのは。もし本當の海嘯が來てあすこ界隈を悉皆攫つて行くんなら、妾本當に惜しい事をしたと思ふわ」
「何故」
「何故つて、妾そんな物凄い所が見たいんですもの」
「冗談ぢやない」と自分は嫂の言葉を打つた切る積りで云つた。すると嫂は眞面目に答へた。
「あら本當よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌ひよ。大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」

自分は小說などを夫程愛讀しない嫂から、始めて斯んなロマンチックな言葉を聞いた。さうして心のうちで是は全く神經の昂奮から來たに違ひないと判じた。

「何かの本にでも出て來さうな死に方ですね」

「本に出るか芝居で遣るか知らないが、妾や眞劍にさう考へてるのよ。嘘だと思ふなら是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか」

「あなた今夜は昂奮してゐる」と自分は慰撫める如く云つた。

「妾の方が貴方より何の位落ち附いてゐるか知れやしない。大抵の男は意氣地なしね、いざとなると」

と彼女は床の中で答へた。

三十八

自分は此時始めて女といふものをまだ研究してゐない事に氣が附いた。嫂は何處から何う押しても押し樣のない女であつた。此方が積極的に進むと丸で暖簾の樣に抵抗がなかつた。仕方なしに此方が引き込むと、突然變な所へ強い力を見せた。其力の中には到底寄り附けさうにない恐ろしいものもあつた。又は是なら相手に出來るから進まうかと思つて、まだ進みかねてゐる中に、弗と消えて仕舞ふのもあつた。自分は彼女と話してゐる間始終彼女から飜弄されつゝある樣な心持がした。不思議な事に、其飜弄される心持

が、自分に取つて不愉快であるべき筈だのに、却て愉快でならなかつた。
彼女は最後に物凄い決心を語つた。海嘯に攫はれて行きたいとか、雷火に打たれて死にたいとか、何しろ平凡以上に壯烈な最後を望んでゐた。自分は平生から（ことに二人で此和歌山に來てから）體力や筋力に於て遙かに優勢な位地に立ちつゝも、嫂に對しては何處となく無氣味な感じがあつた。さうして其無氣味さが甚だ狎れ易い感じと妙に相伴なつてゐた。
自分は詩や小說にそれ程親しみのない嫂のくせに、何に昂奮して海嘯に攫はれて死にたい抔と云ふのか、其處をもつと突き留めて見たかつた。
「嫂さんが死ぬなんて事を云ひ出したのは今夜始めてですね」
「えゝ口へ出したのは今夜が始めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふなら、和歌の浦迄伴れて行つて頂戴。屹度浪の中へ飛び込んで死んで見せるから」
薄暗い行燈の下で、暴風雨の音の間に此言葉を聞いた自分は、實際物凄かつた。彼女は平生から落ち附いた女であつた。歇斯的里風な所は殆どなかつた。けれども寡言な彼女の頰は常に蒼かつた。さうして何處かの調子で眼の中に意味の強い解すべからざる光が出た。
「嫂さんは今夜餘つ程何うかしてゐる。何か昂奮してゐる事でもあるんですか」

自分は彼女の涙を見る事は出來なかつた。又彼女の泣き聲を聞く事も出來なかつた。けれども今にも其處に至りさうな氣がするので、暗い行燈の光を便りに、蚊帳の中を覗いて見た。彼女は赤い蒲團を二枚重ねて其上に緣を取つた白麻の掛蒲團を胸の所迄行儀よく掛けてゐた。自分が暗い灯で其姿を覗き込んだ時、彼女は枕を動かして自分の方を見た。

「あなた昂奮昂奮つて、よく仰しやるけれども妾や貴方よりいくら落ち附いてるか解りやしないわ。何時でも覺悟が出來てるんですもの」

自分は何と答ふべき言葉も持たなかつた。默つて二本目の敷島を暗い灯影で吸ひ出した。自分はわが鼻と口から濛々と出る煙ばかりを眺めてゐた。自分は其間に氣味のわるい眼を轉じて、時々蚊帳の中を窺つた。嫂の姿は死んだ樣に靜かであつた。或は旣に寐附いたのではないかとも思はれた。すると突然仰向けになつた顏の中から、「二郎さん」と云ふ聲が聞こえた。

「何ですか」と自分は答へた。

「貴方其處で何をして入らつしやるの」

「煙草を呑んでるんです。寐られないから」

「早く御休みなさいよ。寐られないと毒だから」

「えゝ」

自分は蚊帳の裾を捲くつて、自分の床の中に這入つた。

三十九

翌日は昨日と打つて變つて美しい空を朝まだきから仰ぐ事を得た。

「好い天氣になりましたね」と自分は嫂に向つて云つた。

「本當ね」と彼女も答へた。

二人はよく寐なかつたから、夢から覺めたといふ心持はしなかつた。たゞ床を離れるや否や魔から覺めたといふ感じがした程、空は蒼く染められてゐた。

自分は朝飯の膳に向ひながら、廂を洩れる明らかな光を見て、急に氣分の變化に心附いた。從つて向ひ合つてゐる嫂の姿が昨夕の嫂とは全く異なるやうな心持もした。今朝見ると彼女の眼に何處といつて浪漫的な光は射してゐなかつた。たゞ寐の足りない瞼が急に爽やかな光に照らされて、それに抵抗するのが如何にも慵いと云つたやうな一種の倦怠さが見えた。頰の蒼白いのも常に變らなかつた。

我々は出來る丈早く朝飯を濟まして宿を立つた。電車はまだ通じないだらうといふ宿のものの注意を信用して俥を雇つた。車夫は土間から表に出た我々を一目見て、すぐ夫婦ものと鑑定したらしかつた。俥に乘るや否や自分の梶棒を先へ上げた。自分はそれを留める樣に、「後から後から」と云つた。車夫は心得て

「奥さんの方が先だ」と相圖した。嫂の俥が自分の傍を擦り抜ける時、彼女は例の片靨を見せて「御先へ」と挨拶した。自分は「さあ何うぞ」と云つたやうなものゝ、腹の中では車夫の口にした奥さんといふ言葉が大いに氣になつた。嫂はそんな氣色もなく、自分を乘り越すや否や、琥珀に刺繍のある日傘を翳した。彼女の後姿は如何にも涼しさうに見えた。奥さんと云はれても云はれないでも全く無關係の態度で、俥の上に澄まして乘つてるとしか思はれなかつた。

自分は嫂の後姿を見詰めながら、又彼女の人となりに思ひ及んだ。自分は平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてる積りであつたが、いざ本式に彼女の口から本當の所を聞いて見ようとすると、丸で八幡の藪知らずへ這入つた樣に、凡てが解らなくなつた。

凡ての女は、男から觀察しようとすると、みんな正體の知れない嫂の如きものに歸着するのではあるまいか。經驗に乏しい自分は斯うも考へて見た。又其正體の知れない所が卽ち他の婦人に見出しがたい嫂丈の特色であるやうにも考へて見た。兎に角嫂の正體は全く解らないうちに、空が蒼々と晴れて仕舞つた。自分は氣の拔けた麥酒の樣な心持を抱いて、先へ行く彼女の後姿を絶えず眺めてゐた。

突然自分は宿へ歸つてから嫂について兄に報告をする義務がまだ殘つてる事に氣が附いた。自分は何と報告して好いかよく解らなかつた。云ふべき言葉は澤山あつたけれども、夫を一々兄の前に並べるのは到底自分の勇氣では出來なかつた。よし並べたつて最後の一句は正體が知れないといふ簡單な事實に歸す

る丈であつた。或は兄自身も自分と同じく、此正體を見屆けようと煩悶し拔いた結果、斯んな事になつたのではなからうか。自分は自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は兄以上に神經を惱ましはしまいかと思つて、始めて恐ろしい心持がした。

俥が宿へ着いたとき、三階の緣側には母の影も兄の姿も見えなかつた。

四十

兄は三階の日に遠い室で例の黑い光澤のある頭を枕に着けて仰向きになつてゐた。けれども眠つてはゐなかつた。寧ろ充血した眼を見張るやうに緊張して天井を見詰めてゐた。彼は自分達の足音を聞くや否や、いきなり其血走つた眼を自分と嫂に注いだ。自分は兼てから其眼附を豫想し得なかつた程兄を知らない譯でもなかつた。けれども室の入口で嫂と相竝んで立ちながら、昨夕まんじりともしなかつたと自白して居るやうな彼の赤くて鋭い眼附を見た時は、少し驚かされた。自分は斯ういふ場合の緩和劑として例の通り母を求めた。其母は座敷の中にも緣側にも何處にも見當らなかつた。

自分が彼女を探してゐるうちに嫂は兄の枕元に坐つて挨拶をした。

「只今」

兄は何とも答へなかつた。嫂は又坐つたなり其處を動かなかつた。自分は勢ひとして口を開くべく餘儀

なくされた。

「昨夕此方は大變な暴風雨でしたつてね」

「うん隨分非道い風だつた」

「波があの石の土手を越して松並木から下へ流れ込んだの」

是は嫂の言葉であつた。兄はしばらく彼女の顏を眺めてゐた。それから徐ろに答へた。

「いや左右でもない。家に故障はなかつた筈だ」

「ぢや。無理に歸れば歸れたのね」

嫂は斯う云つて自分を顧た。自分は彼女よりも寧ろ兄の方に向いた。

「いや到底歸れなかつたんです。電車がだいち通じないんですもの」

「左右かも知れない。昨日は夕方あたりからあの波が非常に高く見えたから」

「夜中に宅が搖れやしなくつて」

是も嫂の兄に聞いた問であつた。今度は兄がすぐ答へた。

「搖れた。御母さんは危險だからと云つて下へ降りて行かれた位搖れた」

「自分は兄の眼色の險惡な割合に、夫程殺氣を帶びてゐない彼の言語動作を漸々確め得た時やつと安心した。彼は自分の性急に比べると約五倍がたの癇癪持ちであつた。けれども一種天賦の能力があつて、時に

其癇癪を巧みに殺す事が出來た。

其内に明神樣へ御參りに行つた母が歸つて來た。彼女は自分の顏を見て漸く安心したといふやうな色をして呉れた。

「よく早く歸れて好かつたね。――まあ昨夕の恐ろしさつたら、夫や御話しにも何にもならないんだよ、二郎。此柱がぎい／＼つて鳴るたんびに、座敷が右左に動くんだらう。そこへ持つて來て、あの浪の音がね。――わたしや今聞いても本當に慄とするよ……」

母は昨夕の暴風雨を非道く怖がつた。殊に其聯想から出る、防波堤を碎きにかゝる浪の音を嫌つた。

「もう／＼和歌の浦も御免。海も御免。慾も得も要らないから、早く東京へ歸りたいよ」

母は斯う云つて眉をひそめた。兄は肉のない頰へ皺を寄せて苦笑した。

「二郎達は昨夕何處へ泊つたんだい」と聞いた。

自分は和歌山の宿の名を擧げて答へた。

「好い宿かい」

「何だか彼だか、たゞ暗くつて陰氣な丈です。ねえ嫂さん」

其時兄は走るやうな眼を嫂に轉じた。

嫂はたゞ自分の顏を見て「丸で御化でも出さうな宅ね」と云つた。

日の夕暮に自分は嫂と階段の下で出逢つた。其時自分は彼女に「何うです、兄さんは怒つてるんでせうか」と聞いて見た。嫂は「何うだか腹の中は一寸解らないわ」と淋しく笑ひながら上へ昇つて行つた。

四十一

母が暴風雨に怖氣が附いて、早く立たうと云ふのを機に、みんな此處を切り上げて一刻も早く歸る事にした。

「如何な名所でも一日二日は好いが、長くなると詰らないですね」と兄は母に同意してゐた。

母は自分を小蔭へ呼んで、「二郎御前何うする積りだい」と聞いた。自分は自分の留守中に兄が萬事を母に打ち明けたのかと思つた。然し兄の平生から察すると、そんな行き拔けの人と成りでもなささうであつた。

「兄さんは昨夕僕等が歸らないんで、機嫌でも惡くしてゐるんですか」

自分が斯う質問を掛けた時、母は少しの間默つてゐた。

「昨夕はね、知つての通りの浪や風だから、そんな話しをする閑も無かつたけれども……」

母は何うしても其處迄しか云はなかつた。

「御母さんは何だか僕と嫂さんの仲を疑つていらつしやる樣だが……」と云ひ掛けると、今迄自分の眼

を凝と見てゐた母は急に手を振つて自分を遮つた。
「そんな事があるものかね御前、御母さんに限つて」
母の言葉は實際判然した言葉に違ひなかつた。顔附も眼附もきび〳〵してゐた。けれども彼女の腹の中は到底讀めなかつた。自分は親身の子として、時たま本當の父や母に向ひながら、嘘と知りつゝ眞顔で何か云ひ聞かされる事を覺えて以來、世の中で本式の本當を云ひ續けに云ふものは一人もないと諦めてゐた。
「兄さんには僕から萬事話す事になつてゐます。さう云ふ約束になつてるんだから、御母さんが心配なさる必要はありません。安心して入らつしやい」
「ぢや成るべく早く片附けた方が好いよ二郎」
自分達は其明くる宵の急行で東京へ歸る事に極めてゐた。實はまだ大阪を中心として、見物かたがた歩くべき場所は澤山あつたけれども、母の氣が進まず、兄の興味が乘らず、大阪で中繼ぎをする時間さへ惜しんで、すぐ東京迄寢臺で通さうと云ふのが母と兄の主張であつた。
自分達は是非共翌日の朝の汽車で和歌山から大阪へ向けて立たなければならなかつた。自分は母の命令で岡田の宅迄電報を打つた。
「佐野さんへは掛ける必要もないでせう」と云ひながら自分は母と兄の顔を眺めた。
「あるまい」と兄が答へた。

「岡田へさへ打つて置けば、佐野さんは打つちやつて置いても屹度迭りに來て呉れるよ」

自分は電報紙を持ちながら、是非共お貞さんを貰ひたいといふ佐野の御凸額と其金縁眼鏡を思ひ出した。

「では彼の御凸額さんは止めて置かう」

自分は斯う云つて、みんなを笑はせた。自分が疾うから佐野の御凸額を氣にしてゐた如く、外のものも同じ人の同じ特色を注意してゐたらしかつた。

「寫眞で見たより御凸額ね」と嫂は眞面目な顏で云つた。

自分は冗談のうちに自分を紛らしつゝ、何んな折を利用して嫂の事を兄に復命したものだらうかと考へてゐた。それで時々偸むやうに又先方の氣の附かない樣に兄の樣子を見た。所が兄は自分の豫期に反して、全くそれには無頓着の樣に思はれた。

四十二

自分が兄から別室に呼び出されたのは夫が濟んで少時してゞあつた。其時兄は常に變らない樣子をして、（嫂に評させると常に變らない樣子を裝つて）「二郎一寸話しがある。彼方の室へ來て呉れ」と穩やかに云つた。自分は大人しく「はい」と答へて立つた。然し何うした機か立つときに嫂の顏を一寸見た。其時は何の氣も附かなかつたが、此平凡な所作が其後自分の胸には絕えず驕慢の發現として響いた。嫂は自分

と顔を合はせた時、いつもの通り片靨を見せて笑つた。自分と嫂の眼を他から見たら、何處かに得意の光を帶びてゐたのではあるまいか。自分は立ちながら、次の室で浴衣を疊んでゐた母の方を一寸顧て、思はず立ち竦んだ。母の眼附は先刻からたつた一人でそつと我々を觀察してゐたとしか見えなかつた。自分は母から疑惑の矢を胸に射附けられたやうな氣分で兄の居る室へ這入つた。

其頃は丁度舊曆の盆で、所謂盆波の荒いためか、泊り客は無論、口返りの遊び客さへ何時も程は影を見せなかつた。廣い三階建は從つて空いてゐる室の方が多かつた。少しの間融通しようと思へば、何時でも自分の自由になつた。

兄は兼てから下女に命じて置いたものと見えて、室には麻の蒲團が差し向ひに二枚、華奢な煙草盆を間に、團扇さへ添へて据ゑられてあつた。自分は兄の前に坐つた。けれども何と云ひ出して然るべきだか、其手加減が一寸解らないので、たゞ默つてゐた。兄も容易に口を開かなかつた。然しこんな場合になると性質上屹度兄の方から積極的に出るに違ひないと踏んだ自分は、わざと卷莨を吹かしつゞけた。

自分は此時の自分の心理狀態を解剖して、今から顧ると、兄に調戲ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす氣味でゐたのは慥かであると自白せざるを得ない。尤も自分が何故それ程兄に對して大膽になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乘り移つてゐたものだらう。自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出來ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。

自分が卷莨を吹かして默つてゐると兄は果して「二郎」と呼びかけた。

「御前直の性質が解つたかい」

「解りません」

自分は兄の問の餘りに嚴格なため、つい斯う簡單に答へて仕舞つた。さうして其のあまりに形式的なのに後から氣が附いて、惡かつたと思ひ返したが、もう及ばなかつた。

兄は其後一口も聞きもせず、又答へもしなかつた。二人斯うして默つてゐる間が、自分には非常な苦痛であつた。今考へると兄には、猶更の苦痛であつたに違ひない。

「二郎、おれは御前の兄として、たゞ解りませんといふ冷淡な挨拶を受けようとは思はなかつた」

兄は斯う云つた。さうして其聲は低くかつ顫へてゐた。彼は母の手前、宿の手前、又自分の手前と問題の手前とを兼ねて、高くなるべき筈の咽喉を、やつとの思ひで抑へてゐるやうに見えた。

「御前そんな冷淡な挨拶を一口したぎりで濟むものと、高を括つてるのか、子供ぢやあるまいし」

「いえ決して其んなわけぢやありません」

是丈の返事をした時の自分は眞に純良なる弟であつた。

四十三

「さう云ふ積りでなければ、積りでない樣にもつと詳しく話したら好いぢやないか」

兄は苦り切つて團扇の繪を見詰めてゐた。自分は兄に顏を見られないのを幸ひに、暗に彼の樣子を窺つた。自分から斯ういふと兄を輕蔑するやうで甚だ濟まないが、彼の表情の何處かには、といふよりも、彼の態度の何處かには、少し大人氣を缺いた稚氣さへ現はれてゐた。今の自分は此純粹な一本調子に對して、相應の尊敬を拂ふ見地を具へてゐる積りである。けれども人格の出來てゐなかつた當時の自分には、たゞ向うの隙を見て事をするのが賢いのだといふ利害の念が、斯んな問題に迄附け纏はつてゐた。

自分はしばらく兄の樣子を見てゐた。さうして是は與し易いといふ心が起つた。彼は癇癪を起してゐる。彼は焦れ切つてゐる。彼はわざとそれを抑へようとしてゐる。全く餘裕のない程緊張してゐる。然し風船球の樣に輕く緊張してゐる。もう少し待つてゐれば自分の力で破裂するか、又は自分の力で何處かへ飛んで行くに相違ない。——自分は斯う觀察した。

嫂が兄の手に合はないのも全く此處に根ざしてゐるのだと自分は此時漸く勘附いた。又嫂として存在するには、彼女の遣り口が一番巧妙なんだらうとも考へた。自分は今日迄たゞ兄の正面ばかり見て、遠慮したり氣兼ねしたり、時によつては恐れ入つたりしてゐた。然し昨日一日一晚嫂と暮らした經驗は圖らずも此苦々しい兄を裏から甘く見る結果になつて眼前に現はれて來た。自分は何時嫂から兄を斯う見ろと敎はつた覺えはなかつた。けれども兄の前へ出て、是程度胸の据わつた事も亦なかつた。自分は比較的

濟まして、團扇を見詰めてゐる兄の額のあたりを此方でも見詰めてゐた。

　すると兄が急に首を上げた。

「二郎何とか云はないか」と勵しい言葉を自分の鼓膜に射込んだ。自分は其聲で又はつと平生の自分に返つた。

「今云はうと思つてる所です。然し事が複雜な丈に、何から話して好いか解らないんで一寸困つてるんです。兄さんも外の事たあ違ふんだから、最う少し打ち解けて緩り聞いて下さらなくつちや。さう裁判所みたやうに生眞面目に叱り附けられちや、折角咽喉迄出掛かつたものも、辟易して引つ込んぢまひますから」

　自分が斯う云ふと、兄は流石に一見識ある人丈あつて「あゝ左右か己が惡かつた。御前が性急の上へ持つて來て、己が癇癪持ちと來てゐるから、つい變にもなるんだらう。二郎、それぢや何時緩り話される。緩り聞く事なら今でも己には出來る積りだが」と云つた。

「まあ東京へ歸る迄待つて下さい。東京へ歸るたつて、あすの晩の急行だから、もう直きです。其上で落ち附いて僕の考へも申し上げたいと思つてますから」

「夫でも好い」

　兄は落ち附いて答へた。今迄の彼の癇癪を自分の信用で吹き拂ひ得た如くに。

「では何うか、左右願ひます」と云つて自分が立ち掛けた時、兄は「あゝ」と肯いて見せたが、自分が敷居を跨ぐ拍子に「おい二郎」と又呼び戻した。

「詳しい事は追つて東京で聞くとして、唯一言だけ要領を聞いて置かうか」

「嫂さんに就いて……」

「無論」

「嫂さんの人格に就いて、御疑ひになる所は丸でありません」

自分が斯う云つた時、兄は急に色を變へた。けれども何も云はなかつた。自分はそれぎり席を立つて仕舞つた。

四十四

自分は其時場合によれば、兄から拳骨を食ふか、又は後から熱罵を浴びせ掛けられる事と豫期してゐた。色を變へた彼を後に見捨てて、自分の席を立つた位だから、自分は普通より餘程彼を見縊つてゐたに違ひなかつた。其上自分はいざとなれば腕力に訴へてでも嫂を辯護する氣概を十分具へてゐた。是は嫂が潔白だからといふよりも嫂に新たなる同情が加はつたからと云ふ方が適切かも知れなかつた。云ひ換へると、自分は兄を夫丈輕蔑し始めたのである。席を立つ時などは多少彼に對する敵愾心さへ起つた。

自分が室へ歸つて來た時、母はもう浴衣を疊んではゐなかつた。けれども小さい行李の始末に餘念なく手を動かしてゐた。それでも心は手許になかつたと見えて、自分の足音を聞くや否や、すぐ此方を向いた。

「兄さんは」

「今來るでせう」

「もう話しは濟んだの」

「濟むの濟まないのつて、始めからそんな大した話しぢやないんです」

自分は母の氣を休めるため、わざと蒼蠅さうに斯う云つた。母は又行李の中へ、こま〴〵したものを出したり入れたりし始めた。自分は今度は彼女に恥ぢて、決して傍に手傳つてゐる嫂の顏を敢て見なかつた。それでも彼女の若くて淋しい唇には冷やかな笑の影が、自分の眼を掠めるやうに過ぎた。

「今から荷造りですか。ちつと早過ぎるな」と自分はわざと年を取つた母を嘲る如く注意した。

「だつて立つとなれば、成るたけ早く用意して置いた方が都合が好いからね」

「左右ですとも」

嫂の此返事は、自分が何か云はうとする先を越して聲に應ずる響の如く出た。

「ぢや繩でも絡げませう。男の役だから」

自分は兄と反對に車夫や職人のするやうな荒仕事に妙を得てゐた。ことに行李を括るのは得意であつた。

自分が繩を十文字に掛け始めると、嫂はすぐ立つて兄の居る室の方に行つた。自分は思はず其後姿を見送つた。

「二郎、兄さんの機嫌は何うだつたい」と母がわざ〳〵小さな聲で自分に聞いた。

「別に是と云ふ事もありません。なあに心配なさる事があるもんですか。大丈夫です」と自分は殊更に荒つぽく云つて、右足で行李の蓋をぎい〳〵締めた。

「實は御前にも話したい事があるんだが。東京へでも歸つたら何れ又緩りね」

「えゝ緩り伺ひませう」

自分は斯う無造作に答へながら、腹の中では母の所謂話しなるものの内容を朧氣ながら髣髴した。少時すると、兄と嫂が別席から出て來た。自分は平氣を粧ひながら母と話してゐる間にも、兩人の會見と其會見の結果に就いて多少氣掛りな所があつた。母は二人の並んで來る樣子を見て、やつと安心した風を見せた。自分にも何處かにそんな所があつた。

自分は行李を絡げる努力で、顏やら背中やらから汗が澤山出た。腕捲りをした上、浴衣の袖で汗を容赦なく拭いた。

「おい暑さうだ。少し扇いで遣るが好い」

兄は斯う云つて嫂を顧た。嫂は靜かに立つて自分を扇いで呉れた。

「何よござんす。もう直きですから」

自分が斯う斷つてゐるうちに、やがて明日の荷造りは出來上がつた。

歸つてから

一

自分は兄夫婦の仲が何うなる事かと思つて和歌山から歸つて來た。自分の豫想は果して外れなかつた。自分は自然の暴風雨に次いで、兄の頭に一種の旋風が起る徴候を十分認めて彼の前を引き下がつた。けれども其徴候は嫂が行つて十分か十五分話してゐるうちに、殆ど警戒を要しない程穩やかになつた。自分は心のうちで此變化に驚いた。針鼠の樣に尖つてゐるあの兄を、僅かの間に丸め込んだ嫂の手腕には猶更敬服した。自分は漸く安心したやうな顔を、晴々と輝かせた母を見る丈でも滿足であつた。

兄の機嫌は和歌の浦を立つ時も變らなかつた。汽車の内でも同じ事であつた。大阪へ來ても猶續いてゐた。彼は見送りに出た岡田夫婦を捕まへて戲談さへ云つた。

「岡田君お重に何か言傳はないかね」

岡田は要領を得ない顔をして、「お重さんに丈ですか」と聞き返してゐた。

「さうさ君の仇敵のお重にさ」

兄が斯う答へた時、岡田はやつと氣の附いたといふ風に笑ひ出した。同じ意味で謎の解けたお兼さんも

笑ひ出した。母の豫言通り見送りに來てゐた佐野も、漸く笑ふ機會が來た樣に、憚りなく口を開いて周圍の人を驚かした。

自分は其時迄嫂に何うして兄の機嫌を直したかを聞いて見なかつた。其後もつひぞ聞く機會を有たなかつた。けれども斯ういふ靈妙な手腕を有つてゐる彼女であればこそ、あの兄に對して始終あゝ高を括つてゐられるのだと思つた。さうして其手腕を彼女はわざと出したり引込ましたりする、單に時と場合ばかりでなく、全く己の氣儘次第で出したり引込ましたりするのではあるまいかと疑つた。

汽車は例の如く込み合つてゐた。自分達は仕切りの附いてゐる寢臺をやつとの思ひで四つ買つた。四つで一室になつてゐるので都合は大變好かつた。兄と自分は體力の優秀な男子と云ふ譯で、婦人方二人に、下のベッドを當てがつて、上へ寐た。自分の下には嫂が横になつてゐた。

自分は暗い中を走る汽車の響のうちに自分の下にゐる嫂を何うしても忘れる事が出來なかつた。彼女の事を考へると愉快であつた。同時に不愉快であつた。何だか柔らかい青大將に身體を絡まれるやうな心持もした。

兄は谷一つ隔てて向うに寐てゐた。是は身體が寐てゐるよりも本當に精神が寐てゐるやうに思はれた。さうして其寐てゐる精神を、ぐにや〱した例の青大將が筋違に頭から足の先迄巻き詰めてゐる如く感じた。自分の想像には其青大將が時々熱くなつたり冷たくなつたりした。夫からその巻きやうが緩くなつた

り、緊くなつたりした。兄の顏色は青大將の熱度の變ずる度に、それから其絡みつく强さの變ずる度に、變つた。

自分は自分の寢臺の上で、半ばは想像の如く半ばは夢の如くに此青大將と嫂とを連想して已まなかつた。自分は此詩に似たやうな眠りが、驛夫の呼ぶ名古屋名古屋と云ふ聲で、急に破られたのを今でも記憶してゐる。其時汽車の音がはたりと留まると同時に、さあといふ雨の音が聞こえた。自分は靴足袋の裏に濕氣を感じて起き上がると、足の方に當たる窓が塵除けの紗で張つてあつた。自分はいそいで窓を閉て換へた。外の人のは何うかと思つて、聞いて見たが、答がなかつた。たゞ嫂丈が雨が降り込むやうだといふので、已むを得ず上から飛び下りて又窓を閉て換へてやつた。

二

「雨の樣ね」と嫂が聞いた。

「えゝ」

自分は半ば風に吹き寄せられた厚い窓掛の、じと／＼に濕つたのを片方へがらりと引いた。途端に母の寐返りを打つ音が聞こえた。

「二郎、此處は何處だい」

「名古屋です」

自分は吹き込む紗の窓を通して、殆ど人影の射さない停車場の光景を、雨のうちに眺めた。名古屋名古屋と呼ぶ聲がまだ遠くの方で聞こえた。夫からこつりこつりといふ足音がたつた一人で活きて來るやうに響いた。

「二郎序に妾の足の方も締めて御呉れな」

「御母さんの所も硝子が閉つてゐないんですか。先刻呼んだら好く寐て入らつしやる樣でしたから……」

自分は嫂の方を片附けて、すぐ母の方に行つた。厚い窓掛を片寄せて、手探りに探つて見ると、案外にも立派に硝子戸が締まつてゐた。

「御母さん此方は雨なんか這入りやしませんよ。大丈夫です、此通りだから」

自分はかう云ひながら、母の足の方に當たる硝子を、とん〳〵と手で叩いて見せた。

「おや雨は這入らないのかい」

「這入るものですか」

母は微笑した。

「何時頃から雨が降り出したか御母さんは些とも知らなかつたよ」

母はさも愛想らしく又辯疏らしく口を利いて、「二郎、御苦勞だつたね、早く御休み。もう餘つ程遲いん

だらう」と云つた。

時計は十二時過ぎであつた。自分は又そつと上の寢臺に登つた。車室は元の通り靜かになつた。嫂は母が口を利き出してから、何も云はなくなつた。母は自分が自分の寢臺に上つてから、亦何も云はなくなつた。たゞ兄丈は始めから仕舞迄一言も物を云はなかつた。彼は聖者の如く只すやすやと眠つてゐた。此眠り方が自分には今でも不審の一つになつてゐる。

彼は自分で時々公言する如く多少の神經衰弱に陷つてゐた。さうして時々不眠のために苦しめられた。又正直にそれを家族の誰彼に訴へた。けれども眠くて困ると云つた事は未だ曾てなかつた。

富士が見え出して雨上りの雲が列車に逆らつて飛ぶ景色を、みんなが起きて珍らしさうに眺める時すら。彼は前後に關係なく心持よささうに寢てゐた。

食堂が開いて乘客の多數が朝飯を濟ました後、自分は母を連れて昨夜以來の空腹を充たすべく細い廊下を傳はつて後部の方へ行つた。其時母は嫂に向つて「もう好い加減に一郎を起して、一所に彼方へ御出で。妾達は向うへ行つて待つてゐるから」と云つた。嫂は何時もの通り淋しい笑ひ方をして「えゝ直き御後から參ります」と答へた。

自分達は室内の掃除に取り懸からうとする給仕を後にして食堂へ這入つた。食堂はまだ大分込んでゐた。出たり這入つたりするものが絕えず狹い通り路をざわつかせた。自分が母に紅茶と果物を勸めてゐる時分

に、兄と嫂の姿が漸く入口に現はれた。不幸にして彼等の席は自分達の傍に見出だせる程、食卓は空いてゐなかつた。彼等は入口の所に差し向ひで座を占めた。さうして普通の夫婦のやうに笑ひながら話したり、窓の外を眺めたりした。自分を相手に茶を啜つてゐた母は、時々其様子を満足らしく見た。

自分達は斯くして東京へ歸つたのである。

三

繰り返していふが、我々は斯うして東京へ歸つたのである。

東京の宅は平生の通り別にこれと云つて變つた樣子もなかつた。お貞さんは襷を掛けて別條なく働いてゐた。彼女が手拭を被つて洗濯をしてゐる後姿を見て、一段落置いた昔のお貞さんを思ひだしたのは、歸つて二日目の朝であつた。

芳江といふのは兄夫婦の間に出來た一人つ子であつた。留守のうちはお重が引き受けて萬事世話をしてゐた。芳江は元來母や嫂に馴附いてゐたが、いざとなると、お重丈でも不自由を感じない程世話の燒けない子であつた。自分はそれを嫂の氣性を受けて生れたためか、さうでなければお重の愛嬌のあるためだと解釋してゐた。

「お重御前の樣なものが能くあの芳江を預かる事が出來るね。流石にやつぱり女だなあ」と父が云つた

ら、お重は膨れた顔をして、「御父さんも随分な方ね」と母にわざ〳〵訴へに來た話を、汽車の中で聞いた。
自分は歸つてから一兩日して、彼女に、「お重御前を御父さんが矢つ張り女だなと仰しやつたつて怒つてるさうだね」と聞いた。彼女は「怒つたわ」と答へたなり、父の書齋の花瓶の水を易へながら、乾いた布巾で水を切つてゐた。

「まだ怒つてるのかい」

「まだつて最う忘れちまつたわ。――綺麗ね此花は何といふんでせう」

「お重然し、女だなあといふのは、夫や賞めた言葉だよ。女らしい親切な子だといふんだ。怒る奴があるもんか」

「何うでもよくつてよ」

お重は帶で隱した尻の邊を左右に振つて、兩手で花瓶を持ちながら父の居間の方へ行つた。それが自分には恰も彼女が尻で怒りを見せてゐるやうで可笑しかつた。

芳江は我々が歸るや否や、すぐお重の手から母と嫂に引き渡された。二人は彼女を奪ひ合ふ樣に抱いたり下ろしたりした。自分の平生から不思議に思つてゐたのは、この外見上冷靜な嫂に、頑是ない芳江がよくあれ程に馴附き得たものだといふ眼前の事實であつた。この眸の黑い髮の澤山ある、さうして母の血を受けて人並よりも蒼白い頬をした少女は、馴れ易からざる彼女の母の後を、奇蹟の如く追つて歩いた。

それを嫂は日本一の誇りとして、宅中の誰彼に見せびらかした。ことに己の夫に對しては見せびらかすといふ意味を通り越して、寧ろ殘酷な敵打をする風にも取れた。兄は思索に遠ざかる事の出來ない讀書家として、大抵は書齋裡の人であつたので、いくら腹のうちで此少女を鍾愛しても、鍾愛の報酬たる親しみの程度は甚だ稀薄なものであつた。感情的な兄がそれを物足らず思ふのも無理はなかつた。食卓の上などで夫が色に出る時さへ兄の性質としては偶にはあつた。さうなると外のものよりお重が承知しなかつた。

「芳江さんは御母さん子ね。何故御父さんの側へ行かないの」などと故意とらしく聞いた。

「だつて……」と芳江は云つた。

「だつて何うしたの」とお重が又聞いた。

「だつて怖いから」と芳江はわざと小さな聲で答へた。それがお重には猶更忌々しく聞こえるのであつた。

「なに？怖いつて？誰が怖いの？」

斯んな問答がよく繰り返されて、時には五分も十分も續いた。嫂は斯う云ふ場合に、決して眉目を動かさなかつた。何時でも蒼い頰に微笑を見せながら何處までも尋常な應對をした。仕舞には父や母が雙方を宥めるために、兄から果物を貰はしたり、菓子を受け取らしたりさせて、「さあ夫で好い。御父さんから旨いものを頂戴して」とやつと御茶を濁す事もあつた。お重は夫でも腹が癒えなさうに膨れた頰をみんなに

見せた。兄は默つて獨り書齋へ退くのが常であつた。

四

父は其年始めて誰かから朝貌を作る事を敎はつて、しきりに變つた花や葉を愛玩してゐた。變つたと云つても普通のものがたゞ縮れて見立てがなくなる丈だから、宅中でそれを顧るものは一人もなかつた。ただ父の熱心と彼の早起きと、幾何も竝んでゐる鉢と、綺麗な砂と、それから最後に、厭に拗ねた花の樣や葉の形に感心する丈に過ぎなかつた。

父はそれらを緣側へ竝べて誰を捉まへても說明を怠らなかつた。

「成程面白いですなあ」と正直な兄までさも感心したらしく御世辭を餘儀なくされてゐた。

父は常に我々とは懸け隔たつた奧の二間を專領してゐた。簀垂の懸かつた其緣側に、朝貌は何時でも竝べられた。從つて我々は「おい一郎」とか「おい重」とか云つて、わざ〳〵其處へ呼び出されたものであつた。自分は兄よりも遙かに父の氣に入るやうな贊辭を呈して引き退がつた。さうして父の聞こえない所で、「何うもあんな朝貌を賞めなけりやならないなんて、實際恐れ入るね。親父の醉興にも困つちまふ」などと惡口を云つた。

一體父は講釋好きの說明好きであつた。其上時間に暇があるから、誰でも構はず、號鈴を鳴らして呼び

寄せては色々な話しをした。お重などは呼ばれるたびに、「兄さん今日は御願ひだから代りに行つて頂戴」と云ふ事がよくあつた。其お重に父は又解り悪い事を話すのが大好きだつた。

自分達が大阪から歸つたとき朝貌はまだ咲いてゐた。然し父の興味はもう朝貌を離れてゐた。

「何うしました。例の變り種は」と自分が聞いて見ると、父は苦笑ひをして「實は朝貌もあまり思はしくないから、來年からはもう止めだ」と答へた。自分は大方父の誇りとして我々に見せた妙な花や葉が、恐らく其道の人から鑑定すると、成つてゐなかつたんだらうと判斷して、茶の間で大きな聲を立てて笑つた。すると例のお重とお貞さんが父を辯護した。

「さうぢや無いのよ。あんまり手數が掛かるんで、御父さんも根氣が盡きちまつたのよ。夫でも御父さんだからあれ丈に出來たんですつて、皆賞めて入らしつたわ」

母と嫂は自分の顏を見て、さも自分の無識を嘲るやうに笑ひ出した。すると傍にゐた小さな芳江迄が嫂と同じやうに意味のある笑ひ方をした。

こんな瑣事で日を暮らしてゐるうちに兄と嫂の間柄は自然自分達の胸を離れるやうになつた。自分はかねて約束した通り、兄の前へ出て嫂の事を説明する必要がなくなつた樣な氣がした。母が東京へ歸つてから緩り話さうと云つた六づかしさうな事件も母の口から容易に出ようとも思へなかつた。最後にあれ程嫂に就いて知識を得たがつてゐた兄が、段々冷靜に傾いて來た。其代り父母や自分に對しても前程は口

を利かなくなつた。暑い時でも大抵は書齋へ引き籠もつて何か熱心に遣つてゐた。自分は時々嫂に向つて、「兄さんは勉强ですか」と聞いた。嫂は「えゝ大方來學年の講義でも作つてるんでせう」と答へた。自分は成程と思つて、其忙しさが永く續くため、彼の心を全然其方の方へ轉換させる事が出來はしまいかと念じた。嫂は平生の通り淋しい秋草のやうに其處らを動いてゐた。さうして時々片靨を見せて笑つた。

五

其うち夏も次第に過ぎた。宵々に見る星の光が夜毎に深くなつて來た。梧桐の葉の朝夕風に搖ぐのが、肌に應へるやうに眼をひや〳〵と搖振つた。自分は秋に入ると生れ變つた樣に愉快な氣分を時々感じ得た。自分より詩的な兄は嘗て透き通る秋の空を眺めてあゝ生き甲斐のある天だと云つて嬉しさうに眞蒼な頭の上を眺めた事があつた。

「兄さん愈生き甲斐のある時候が來ましたね」と自分は兄の書齋のヹランダに立つて彼を顧た。彼は其處にある籐椅子の上に寐て居た。

「まだ本當の秋の氣分にやなれない。もう少し經たなくつちや駄目だね」と答へて彼は膝の上に伏せた厚い書物を取り上げた。時は食事前の夕方であつた。自分はそれなり書齋を出て下へ行かうとした。すると兄が急に自分を呼び止めた。

然し下には特に彼女の爲に植木屋が拵へたブランコがあつた。然し自分は北の窓を開けて下を覗いて見た。下には特に彼女の爲に植木屋が拵へたブランコがあつた。

「芳江は下にゐるかい」
「居るでせう。先刻裏庭で見たやうでした」
自分は北の窓を開けて下を覗いて見た。下には特に彼女の爲に植木屋が拵へたブランコがあつた。然し先刻ゐた芳江の姿は見えなかつた。「おや何處へか行つたかな」と自分が獨り言を云つてゐると、彼女の鋭い笑ひ聲が風呂場の中で聞こえた。
「あゝ湯に這入つてゐます」
「直と一所かい。御母さんとかい」
芳江の笑ひ聲の間には慥かに、女として深さのあり過ぎる嫂の聲が聞こえた。
「嫂さんです」と自分は答へた。
「大分機嫌が好ささうぢやないか」
自分は思はず斯う云つた兄の顏を見た。彼は手に持つてゐた大きな書物で頭まで隱してゐたから此言葉を發した時の表情は少しも見る事が出來なかつた。けれども、彼の意味は其調子で自分によく呑み込めた。自分は少し逡巡した後で、「兄さんは子供をあやす事を知らないから」と云つた。兄の顏は夫でも書物の後に隱れてゐた。それを急に取るや否や彼は「己の綾成す事の出來ないのは子供ばかりぢやないよ」と云つた。自分は默つて彼の顏を打ち守つた。

「己は自分の子供を綾成す事が出來ないばかりぢやない。自分の父や母でさへ綾成す技巧を持つてゐない。それ所か肝心のわが妻さへ何うしたら綾成せるか未だに分別が附かないんだ。此年になる迄學問をした御蔭で、そんな技巧は覺える餘暇がなかつた。二郎、ある技巧は、人生を幸福にする爲に、何うしても必要と見えるね」

「でも立派な講義さへ出來りや、それで凡てを償つて餘りあるから好いでさあ」

自分は斯う云つて、樣子次第、退却しようとした。所が兄は中止する氣色を見せなかつた。

「己は講義を作るため計りに生れた人間ぢやない。然し講義を作つたり書物を讀んだりする必要があるために肝心の人間らしい心持を人間らしく滿足させる事が出來なくなつてしまつたのだ。でなければ先方で滿足させて吳れる事が出來なくなつたのだ」

自分は兄の言葉の裏に、彼の周圍を咒ふやうに苦々しい或物を發見した。自分は何とか答へなければならなかつた。然し何と答へて好いか見當が附かなかつた。たゞ問題が例の嫂事件を再發させては大變だと考へた。それで卑怯の樣ではあるが、問答が其處へ流れ入る事を故意に防いだ。

「兄さんが考へ過ぎるから、自分でさう思ふんですよ。夫よりか此好天氣を利用して、今度の日曜位に、何處かへ遠足でもしようぢやありませんか」

兄はかすかに「うん」と云つて慵げに承諾の意を示した。

兄の顔には孤獨の淋しみが廣い額を傳はつて瘠けた頰に漲つてゐた。

「二郎己は昔から自然が好きだが、詰り人間と合はないので、已むを得ず自然の方に心を移す譯になるんだらうかな」

自分は兄が氣の毒になつた。「そんな事はないでせう」と一口に打ち消して見た。けれどもそれで兄の滿足を買ふ譯には行かなかつた。自分はすかさず又斯う云つた。

「矢つ張り家の血統にさう云ふ傾きがあるんですよ。御父さんは無論、僕でも兄さんの知つていらつしやる通りですし、夫にね、あのお重が又不思議と花や木が好きで、今ぢや山水畫などを見ると感に堪へたやうな顔をして時々眺めてゐる事がありますよ」

自分は成るべく兄を慰めようとして、色々な話しをしてゐた。其處へお貞さんが下から夕食の報知に來た。自分は彼女に、「お貞さんは近頃嬉しいと見えて妙ににこ〳〵してゐますね」と云つた。自分が大阪から歸るや否や、お貞さんは暑い下女室の隅に引つ込んで容易に顔を出さなかつた。それが大阪から出したみんなの合併繪葉書の中へ、自分がお貞さん宛に「御目出たう」と書いた五字から起つたのだと知れて家内中大笑ひをした。其爲か一つ家にゐながらお貞さんは變に自分を回避した。從つて顔を合はせると自分

は殊更に何か云ひたくなつた。

「お貞さん何が嬉しいんですか」と自分は面白半分追窮するやうに聞いた。お貞さんは手を突いたなり耳迄赤くなつた。兄は籐椅子の上からお貞さんを見て、「お貞さん、結婚の話で顔を赤くするうちが女の花だよ。行つて見るとね、結婚は顔を赤くする程嬉しいものでもなければ、恥づかしいものでもないよ。それ所か、結婚をして一人の人間が二人になると、一人でゐた時よりも人間の品格が堕落する場合が多い。恐ろしい目に會ふ事さへある。まあ用心が肝心だ」と云つた。

お貞さんには兄の意味が全く通じなかつたらしい。何と答へて好いか解らないので、寧ろ途方に暮れた顔をしながら涙を眼に一杯溜めてゐた。兄はそれを見て、「お貞さん餘計な事を話して御氣の毒だつたね。今のは冗談だよ。二郎の樣な向う見ずに云つて聞かせる事を、ついお貞さん見たいな優しい娘さんに云つちまつたんだ。全くの間違ひだ。勘辨して呉れ玉へ。今夜は御馳走があるかね。二郎それぢや御膳を食べに行かう」と云つた。

お貞さんは兄が籐椅子から立ち上がるのを見るや否や、すぐ腰を立てて一足先へ階子段をとんとんと下りて行つた。自分は兄と肩を比べて室を出に掛かつた。其時兄は自分を顧て「二郎、此間の問題もそれぎりになつてゐたね。つい書物や講義の事が忙しいものだから、聞かう聞かうと思ひながら、つい其儘にして置いて濟まない。其内緩り聽く積りだから、どうか話して呉れ」と云つた。自分は「此間の問題とは何

ですか」と空惚けたかつた。けれどもそんな勇氣は此際出る餘裕がなかつたから、まづ體裁の好い挨拶丈をして置いた。

「斯う時間が經つと、何だか氣の拔けた麥酒見た樣で、僕には話し惡くなつて仕舞ひましたよ。然し折角の御約束だから聽くと仰しやれば遣らん事もありませんがね。然し兄さんの所謂生き甲斐のある秋にもなつたものだから、其んな詰らない事より、先づ第一に遠足でもしようぢやありませんか」

「うん遠足も好からうが……」

二人は斯んな話しを交換しながら、食卓の据ゑてある下の室に入つた。さうして其處に芳江を傍に引き附けてゐる嫂を見出だした。

七

食卓の上で父と母は偶然又お貞さんの結婚問題を話頭に上せた。母は兼て白縮緬を織屋から買つて置いたから、それを紋附に染めようと思つてゐるなどと云つた。お貞さんは其時みんなの後に坐つて給仕をしてゐたが、急に黑塗の盆をおはちの上へ置いたなり席を立つて仕舞つた。

自分は彼女の後姿を見て笑ひ出した。兄は反對に苦い顏をした。

「二郎御前が無暗に調戲ふから不可ない。あゝ云ふ乙女にはもう少しデリカシーの籠もつた言葉を使つ

て遣らなくつては」

「二郎は丸で堂摺連と同じ事だ」と父が笑ふやうな又窘める樣な句調で云つた。母丈は一人不思議な顏をしてゐた。

「何二郎がね。お貞さんの顏さへ見れば御目出たうだの嬉しい事がありさうだのつて、色々の事を云ふから、向うでも恥づかしがるんです。今も二階で顏を赤くさせた計りの所だもんだから、すぐ逃げ出したんです。お貞さんは生れ附きからして直とは丸で違つてるんだから、此方でも其積りで注意して取り扱つて遣らないと不可ません……」

兒の說明を聞いた母は始めて成程と云つたやうに苦笑した。もう食事を濟ましてゐた嫂は、わざと自分の顏を見て變な眼遣ひをした。それが自分には一種の相圖の如く見えた。自分は父から評された通り大分堂摺連の傾きを持つてゐたが、此時は父や母に憚つて、嫂の相圖を返す氣は毫も起らなかつた。

嫂は無言の儘すつと立つた、室の出口で一寸振り返つて芳江を手招ぎした。芳江もすぐ立つた。

「おや今日は御菓子を頂かないで行くの」とお重が聞いた。芳江は其處に立つた儘、何うしたものだらうかと思案する樣子に見えた。嫂は「おや芳江さん來ないの」と左も大人しやかに云つて廊下の外へ出た。今迄躊躇してゐた芳江は、嫂の姿が見えなくなるや否や、急に意を決したものの如く、ばた〳〵と其後を追ひ懸けた。

お重は彼女の後姿を左も忌々しさうに見送つた。父と母は嚴格な顏をして己の皿の中を見詰めてゐた。お重は兄を筋違に見た。けれども兄は遠くの方をぼんやり眺めてゐた。尤も彼の眉根には薄く八の字が描かれてゐた。

「兄さん、其プッヂングを妾に頂戴。ね、好いでせう」とお重が兄に云つた。兄は無言の儘皿をお重の方に押し遣つた。お重も無言の儘其を匙で突つついたが、自分から見ると、食べたくない物を業腹で食べてるとしか思はれなかつた。

兄が席を立つて書齋に入つたのは夫からして少時後の事であつた。自分は耳を峙てて彼の上靴が靜かに階段を上つて行く音を聞いた。軈て上の方で書齋の戸がどたんと閉まる聲がして、後は靜かになつた。

東京へ歸つてから自分は斯んな光景をしばしば目撃した。父も其處には氣が附いてゐるらしかつた。けれども一番心配さうなのは母であつた。彼女は嫂の態度を見破つて、かつ容赦の色を見せないお重を、一日も早く片附けて若い女同士の葛藤を避けたい氣色を色にも顏にも擧動にも現はした。次には成るべく早く嫁を持たして、兄夫婦の間から自分といふ厄介ものを拔き去りたかつた。けれども複雜な世の中は、さう母の思ふ樣に旨く回轉して呉れなかつた。自分は相變らず、のらくらして居た。お重は益嫂を敵の樣に振舞つた。不思議に彼女は芳江を愛した。けれども夫は嫂の居ない留守に限られてゐた。芳江も嫂の居ない時ばかりお重に縋り附いた。兄の額には學者らしい皺が段々深く刻まれて來た。彼は益書物と思

索の中に沈んで行つた。

八

斯んな譯で、母の一番輕く見てゐたお貞さんの結婚が最初に極まつたのは、彼女の思はくとは丸で反對であつた。けれども早晩片附けなければならないお貞さんの運命に一段落を附けるのも、矢張り父や母の義務なんだから、彼等は岡田の好意を喜びこそすれ、決してそれを惡く思ふ筈はなかつた。彼女の結婚が家中の問題になつたのも詰りはその爲であつた。お重は此問題に就いてよくお貞さんを捕まへて離さなかつた。お貞さんは又お重には赤い顏も見せずに、色々の相談をしたり己の將來をも語り合つたらしい。

或日自分が外から歸つて來て、風呂から上がつた所へ、お重が「兄さん佐野さんて一體どんな人なの」と例の前後を顧慮しない調子で聞いた。是は自分が大阪から歸つてから、もう二度目若しくは三度目の質問であつた。

「何だそんな藪から棒に。御前は一體輕卒で不可ないよ」

怒り易いお重は默つて自分の顏を見てゐた。自分は胡坐をかきながら、三澤へ遣る端書を書いてゐたが、此樣子を見て、一寸筆を留めた。

「お重又怒つたな。――佐野さんはね、此間云つた通り金縁眼鏡を掛けた御凸額さんだよ。夫で好いぢ

やないか。何遍聞いたつて同じ事だ」

「御凸額や眼鏡は寫眞で充分だわ。何も兄さんから聞かないたつて妾知つててよ。眼があるぢやありませんか」

彼女はまだ打ち解けさうな口の利き方をしなかつた。自分は靜かに端書と筆を机の上に置いた。

「全體何を聞かうと云ふのだい」

「全體貴方は何を研究して入らしつたんです。佐野さんに就いて」

お重といふ女は議論でも遣り出すと丸で自分を同輩の樣に見る、癖だか、親しみだか、猛烈な氣性だか、稚氣だかがあつた。

「佐野さんに就いてつて……」と自分は聞いた。

「佐野さんの人と爲りに就いてです」

自分は固よりお重を馬鹿にしてゐたが、斯ういふ眞面目な質問になると、腹の中でどつしりした何物も貯へてゐなかつた。自分は濟まして卷煙草を吹かし出した。お重は口惜しさうな顏をした。

「だつて餘りぢやありませんか、お貞さんがあんなに心配してゐるのに」

「だつて岡田が慥かだつて保證するんだから、好いぢやないか」

「兄さんは岡田さんを何の位信用して入らつしやるんです。岡田さんは高が將棋の駒ぢやありませんか」

「顏は將棋の駒だつて何だつて……」

「顏ぢやありません、心が浮いてるんです」

自分は面倒と癇癪でお重を相手にするのが厭になつた。

「お重御前そんなにお貞さんの事を心配するより、自分が早く嫁にでも行く工夫をした方が餘つ程利口だよ。御父さんや御母さんは、御前が片附いて吳れる方をお貞さんの結婚より何の位助かるか解りやしない。お貞さんの事なんか何うでも宜いから、早く自分の身體の落ち附くやうにして、少し親孝行でも心掛けるが好い」

お重は果して泣き出した。自分はお重と喧嘩をするたびに向うが泣いて吳れないと手應へがない樣で、何だか物足らなかつた。自分は平氣で莨を吹かした。

「ぢや兄さんも早く御嫁を貰つて獨立したら好いでせう。其方が妾が結婚するより幾ら親孝行になるか知れやしない。厭に嫂さんの肩ばかり持つて……」

「御前は嫂さんに抵抗し過ぎるよ」

「當り前ですわ。大兄さんの妹ですもの」

九

自分は三澤へ端書を書いた後で、風呂から出立ての頬に髪剃を中てようと思つてゐた。お重を相手に愚圖愚圖いふのが面倒になつたのを好い幸ひに、「お重氣の毒だが風呂場から熱い湯をうがひ茶碗に一杯持つて來て呉れないか」と賴んだ。お重は嗽茶碗どころの騷ぎではないらしかつた。夫より未だ十倍も嚴肅な人生問題を考へてゐるものの如く澄まして膨れてゐた。自分はお重に構はず、手を鳴らして下女から必要な湯を貰つた。それから机の上へ旅行用の鏡を立てて、象牙の柄のついた髪剃を並べて、熱湯で濡らした頬をわざと滑稽に膨らませた。

自分が物新しさうにシエーヴイング、ブラツシを振り廻して、石鹸の泡で顏中を眞白にしてゐると、先刻から傍に坐つて此樣子を見てゐたお重は、わつと云ふ悲劇的な聲を振り上げて泣き出した。自分はお重の性質として、早晩此處に來るだらうと思つて、暗に此悲劇を豫期してゐたのである。そこで益頬ぺたに空氣を一杯入れて、白い石鹸をすう／＼と髪剃の刃で心持宜ささうに落とし始めた。お重はそれを見て業腹だか何だか益騷々しい聲を立てた。仕舞に「兄さん」と鋭く自分を呼んだ。自分はお重を馬鹿にして居たには違ひないが、此鋭い聲には少し驚かされた。

「何だ」

「何だつて、そんなに人を馬鹿にするんです。是でも私は貴方の妹です。嫂さんはいくら貴方が贔屓にしたつて、もと／＼他人ぢやありませんか」

自分は髪剃を下へ置いて、石鹸だらけの頬をお重の方に向けた。

「お重御前は逆せてるるよ。御前が己の妹で、嫂さんが他家から嫁に來た女だ位は、御前に教はらないでも知つてるさ」

「だから私に早く嫁に行けなんて餘計な事を云はないで、あなたこそ早く貴方の好きな嫂さん見た樣な方を御貰ひなすつたら好いぢやありませんか」

自分は平手でお重の頭を一つ張り附けて遣りたかつた。けれども家中騷ぎ廻られるのが怖いんで、容易に手は出せなかつた。

「ぢや御前も早く兄さん見た樣な學者を探して嫁に行つたら好からう」

お重は此言葉を聞くや否や、急に摑み懸かりかねまじき凄じい勢ひを示した。さうして涙の途切れ目途切れ目に彼女の結婚がお貞さんより後れたので、夫でこんなに愚弄されるのだと言明した末、自分を兄妹に同情のない野蠻人だと評した。自分も固より彼女の相手になり得る程の惡口家であつた。けれども最後にとう〳〵根氣負けがして默つて仕舞つた。夫でも彼女は自分の傍を去らなかつた。さうして事實は無論の事、事實が生んだ飛んでもない想像迄縱横に喋舌り廻して已まなかつた。其中で彼女の最も得意とする主題は、何でも蚊でも自分と嫂とを結び附けて當て擦るといふ惡い意地であつた。自分は夫が何より厭であつた。自分は其時心の中で、何んなお多福でも構はないからお重より早く結婚して、此夫婦關係が何う

だの、男女の愛が何うだのと囀る女を、たつた一人後に取り殘して遣りたい氣がした。夫から其方が又實際母の心配する通り、兄夫婦にも都合が好からうと眞面目に考へても見た。

自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の佛頂面を覺えてゐる。お重は又石鹸を溶いた金盥の中に顏を突込んだとしか思はれない自分の異な顏を、何うしても忘れ得ないさうである。

十

お重は明らかに嫂を嫌つてゐた。是は學究的に孤獨な兄に同情が强いためと誰にも肯かれた。

「御母さんでも居なくなつたら何うなさるでせう。本當に御氣の毒ね」

凡てを隱す事を知らない彼女はかつて自分に斯う云つた。是は固より頰ぺたを眞白にして自分が彼女と喧嘩をしない遠い前の事であつた。自分は其時彼女を相手にしなかつた。たゞ「兄さん見たいに譯の解つた人が、家庭間の關係で、御前抔に心配して貰ふ必要が出て來るものか、默つて見て入らつしやい。御父さんも御母さんも附いていらつしやるんだから」と訓戒でも與へるやうに云つて聞かせた。

自分は其時分からお重と嫂とは火と水の樣な個性の差異から、到底圓熟に同棲する事は困難だらうと旣に觀察してゐた。

「御母さんお重も早く片附けて仕舞はないと不可ませんね」と自分は母に忠告がましい差出口を利いた

事さへあつた。其折母は何故とも何とも聞き返さなかつたが、左も自分の意味を呑み込んだらしい眼附をして、「御前が云つて呉れないでも、御父さんだつて妾だつて心配し拔いてる所だよ。お重計りぢやないやね。御前の御嫁だつて、蔭ぢや何の位みんなに手數を掛けて探して貰つてるか分りやしない。けれども是計りは緣だからね……」と云つて自分の顏をしけじけと見た。自分は母の意味も何も解らずに、たゞ「はあ」と子供らしく引き下がつた。

お重は何でも直きむきになる代りに裏表のない正直な美質を持つてゐたので、母よりは寧ろ父に愛されてゐた。兄には無論可愛がられてゐた。お貞さんの結婚談が出た時にも「先づお重から片附けるのが順だらう」と云ふのが父の意見であつた。兄も多少はそれに同意であつた。けれども折角名ざして申し込まれたお貞さんのために、澤山ない機會を逃すのはつまり兩損になるといふ母の意見が實際上に尤もなので、理に明るい兄はすぐ折れて仕舞つた。兄の見地に多少讓歩してゐる父も無事に納得した。

けれども默つてゐたお重には、夫が甚しい不愉快を與へたらしかつた。然し彼女が今度の結婚問題に就いて萬事快くお貞さんの相談に乘るのを見ても、彼女が機先を制せられたお貞さんに惡感情を抱いてゐないのは慥かな事實であつた。

彼女はたゞ嫂の傍にゐるのが厭らしく見えた。いくら父母のゐる家であつても、いくら思ひ通りの子供らしさを精一杯に振り舞はす事が出來ても、此冷やかな嫂からふんといふ顏附で眺められるのが何より辛

かつたらしい。

斯ういふ氣分に神經を焦つかせてゐる時、彼女は不圖女の雜誌か何かを借りるために嫂の室へ這入つた。さうして其處で嫂がお貞さんの爲に縫つてゐた嫁入仕度の着物を見た。

「お重さん是お貞さんのよ。好いでせう。あなたも早く佐野さん見た樣な方の所へ入らつしやいよ」と嫂は縫つてゐた着物を裏表引繰り返して見せた。其態度がお重には見せびらかしの面當ての樣に聞こえた。早く嫁に行く先を極めて、斯んなものでも縫ふ覺悟でもしろといふ謎にも取れた。何時迄小姑の地位を利用して人を苛虐めるんだといふ諷刺とも解釋された。最後に佐野さんの樣な人の所へ嫁に行けと云はれたのが尤も神經に障つた。

彼女は泣きながら父の室に訴へに行つた。父は面倒だと思つたのだらう、嫂には一言も聞き糺さずに、翌日お重を連れて三越へ出掛けた。

十一

夫から二三日して、父の所へ二人程客が來た。父は生來交際好きの上に、職業上の必要から、大分手廣く諸方へ出入りしてゐた。公の務を退いた今日でも其惰性だか影響だかで、知合間の往來は絶える間もなかつた。尤も始終顏を出す人に、夫程有名な人も勢力家も見えなかつた。其時の客は貴族院の議員が一人

と、ある會社の監査役が一人とであつた。

父は此二人と謠の方の仲善しと見えて、彼等が來る度に謠をうたつて樂しんだ。お重は父の命令で、少しの間鼓の稽古をした覺えがあるので、さう云ふ時にはよく客の前へ呼び出されて鼓を打つた。自分は其高慢ちきな顔をまだ忘れずにゐる。

「お重御前の鼓は好いが、御前の顔は頗る不味いね。悪い事は云はないから　嫁に行つた當座は決して鼓を御打ちでないよ。いくら御亭主が謠氣狂でもあゝ澄まされた日にや、愛想を盡かされる丈だから」とわざ〳〵罵つた事がある。すると傍で聞いてゐたお貞さんが眼を丸くして、「まあ非道い事を仰しやる事、隨分ね」と云つたので、自分も少し言ひ過ぎたかと思つた。けれども烈しいお重は平生に似ず全く自分の言葉を氣に掛けないらしかつた。「兄さんあれでも顔の方はまだ上等なのよ。鼓と來たらそれこそ大變なの。妾謠の御客がある程厭な事はないわ」とわざ〳〵自分に說明して聞かせた。お重の顔ばかりに注意してゐた自分は、彼女の鼓が其程不味いとは夫迄氣が附かなかつた。

其日も客が來てから一時間半程すると豫定の通り謠が始まつた。自分はやがて又お重が呼び出される事と思つて、調戯半分茶の間の方に出て行つた。お重は一生懸命に會席膳を拭いてゐた。

「今日はほん〳〵鳴らさないのか」と自分がことさらに聞くと、お重は妙にとほけた顔をして、立つてゐる自分を見上げた。

「だつて今御膳が出るんですもの。忙しいからつて、断つたのよ」

自分は臺所や茶の間のごた／＼した中で、巫山戯過ぎて母に叱られるのも面白くないと思つて、又室へ取つて返した。

夕食後一寸散歩に出て歸つて來ると、まだ自分の室に這入らない先から母に捉まつた。

「二郎丁度好い所へ歸つて來て御呉れだ。奧へ行つて御父さんの謠を聞いて入らつしやい」

自分は父の謠を聞き慣れてゐるので、一番位聽くのは左程厭とも思はなかつた。

「何を遣るんです」と母に質問した。母は自分とは正反對に謠が又大嫌ひだつた。「何だか知らないがね。早く入らつしやいよ。皆さんが待つて入らつしやるんだから」と云つた。

自分は委細承知して奧へ通らうとした。すると暗い縁側の所にお重がそつと立つてゐた。自分は思はず「おい……」と大きな聲を出し掛けた。お重は急に手を振つて相圖のやうに自分の口を塞いで仕舞つた。

「何故そんな暗い所に一人で立つて居るんだい」と自分は彼女の耳へ口を附けて聞いた。彼女はすぐ「何故でも」と答へた。然し自分が其返事に滿足しないで矢張り元の所に立つてゐるのを見て、「先刻から、何遍も出て來い出て來いつて催促するのよ。だから御母さんに斷つて、少し加減が惡い事にしてあるのよ」

「何故又今日に限つて、そんなに遠慮するんだい」

「だつて妾鼓なんか打つのはもう厭になつちまつたんですもの、馬鹿らしくつて。それに是から遣るの

なんか六づかしくつて到底出來ないんですもの」

「感心に御前見た樣な女でも謙遜の道は少々心得てゐるから偉いね」と云ひ放つた儘、自分は奧へ通つた。

十二

奧には例の客が二人床の前に坐つてゐた。二人とも品の好い容貌の人で、其薄く禿げ掛かつた頭が後に掛かつてゐる探幽の三幅對とよく調和した。

彼等は二人とも袴の儘、羽織を脱ぎ放しにしてゐた。三人のうちで袴を着けてゐなかつたのは父計りであつたが、其父でさへ羽織丈は遠慮してゐた。

自分は見知り合ひだから正面の客に挨拶かた〴〵「何うか拜聽を……」と頭を下げた。客は一寸恐縮の體を裝つて「いや何うも……」と頭を搔く眞似をした。父は自分に又お重の事を尋ねたので「先刻から少し頭痛がするさうで、御挨拶に出られないのを殘念がつてゐました」と答へた。父は客の方を見ながら「お重が心持が惡いなんて、丸で鬼の霍亂だな」と云つて、今度は自分に「先刻綱（母の名）の話しでは腹が痛い樣に聞いたがさうぢやない頭痛なのかい」と聞き直した。自分は仕舞つたと思つたが「多分兩方なんでせう。胃腸の熱で頭が痛む事もあるやうだから。然し心配する程の病氣ぢやないやうです。ぢき癒

るでせう」と答へた。客は蒼蠅い程お重に同情の言葉を注射した後、「ちや残念だが始めませうか」と云ひ出した。

聽手には、自分より前に兄夫婦が横向きになつて、行儀よく併んで坐つてゐたので、自分は鹿爪らしく嫂の次に席を取つた。「何を遣るんです」と坐りながら聞いたら、斯道について何の素養も趣味もない嫂は、「何でも景清ださうです」と答へて、それ限り何とも云はなかつた。

客のうちで赭顔の恰腹の好い男が仕手をやる事になつて、其隣の貴族院議員が脇、父は主人役で「娘」と「男」を端役だと云ふ譯か二つ引き受けた。多少謠を聞き分ける耳を持つてゐた自分は、最初から何んな景清が出來るかと心配した。兄は何を考へてゐるのか、甚だ要領を得ない顔をして、凋落しかゝつた前世紀の肉聲を夢のやうに聞いてゐた。嫂の鼓膜には肝心の「松門」さへ人間としてよりも寧ろ獸類の吠りとして不快に響いたらしい。自分はかねてから此「景清」といふ謠に興味を持つてゐた。何だか勇ましいやうな慘ましいやうな一種の氣分が、盲目の景清の強い言葉遣ひから、又遙々父を尋ねに日向迄下る娘の態度から、涙に化して自分の眼を輝かせた場合が、一二度あつた。

然し夫は歷乎とした謠手が本氣に各自の役を引き受けた場合で、今聞かせられてゐるやうな胡麻節を辿つて漸く出來上がる景清に對しては殆ど同情が起らなかつた。

やがて景清の戰物語も濟んで一番の謠も滯りなく結末迄來た。自分は其成績を何と評して好いか解ら

ないので、少し不安になつた。嫂は平生の寡言にも似ず「勇ましいものですね」と云つた。自分も「左右ですね」と答へて置いた。すると多分一口も開くまいと思つた兄が、急に赭顏の客に向つて「さすがに我も平家なり物語り申してとか、始めてとかいふ句がありましたが、あのさすがに我も平家なりといふ言葉が大變面白う御座いました」と云つた。

兄には元來正直な男で、かつ己の教育上嘘を吐かないのを、品性の一部分と心得てゐる位の男だから、此批評に疑ふ餘地は少しもなかつた。けれども不幸にして彼の批評は謠の上手下手でなくつて、文章の巧拙に屬する話しだから、相手には殆ど手應へがなかつた。

斯う云ふ場合に馴れた父は「いや彼處は非常に面白く拜聽した」と客の謠ひ振を一應賞めた後で、「實はあれに就いて思ひ出したが、大變興味のある話がある。丁度あの文句を世話に崩して、景清を女にしたやうなものだから、謠よりは餘程艶である。しかも事實でね」と云ひ出した。

十三

父は交際家だけあつて、斯ういふ妙な話を澤山頭の中に仕舞つてゐた。さうして客でもあると、獻酬の間によくそれを臨機應變に運用した。多年父の傍に寐起きしてゐる自分にも此女景淸の逸話は始めてであつた。自分は思はず耳を傾けて父の顏を見た。

「つい此間の事で、又實際あつた事なんだから御話しをするが、その發端はずつと古い。古いたつて何も源平時代から說き出すんぢやないから其處は御安心だが、何しろ今から二十五六年前、丁度私の腰辨時代とでも云ひませうかね……」

父は斯ういふ前置きをして皆を笑はせた後で本題に這入つた。それは彼の友達と云ふよりも寧ろずつと後輩に當る男の艷聞見たやうなものであつた。尤も彼は遠慮して名前を云はなかつた。自分は家へ出入る人の數々に就いて、大抵は名前も顏も覺えてゐたが、此逸話を有つた男丈はいくら考へても何んな想像も浮かばなかつた。自分は心のうちで父は今表向き多分此人と交際してゐるのではなからうと疑つた。

何しろ事は其人の二十前後に起つたので、其時當人は高等學校へ這入り立てだとか、這入つてから二年目になるとか、父は甚だ曖昧な說明をしてゐたが、それは何方にしたつて、我々の氣に掛かる所ではなかつた。

「其人は好い人間だ。好い人間にも色々あるが、まあ好い人間だ。今でもさうだから、二十歲位の時分は定めて可愛らしい坊ちやんだつたらう」

父は其男を斯う荒つぽく敍述して置いて、其男と其家の召使とがある關係に陷入つた因果を極單簡に物語つた。

「元來其奴はね本當の坊ちやんだから、情事なんて洒落た經驗は丸で夫迄知らなかつたのださうだ。當

人も亦婦人に慕はれるなんて粋事は自分の様なものに到底有り得べからざる奇蹟と思つてゐたのださうだ。所が其奇蹟が突然天から降つて來たので大變驚いたんですね」

話し掛けられた客は寧ろ眞面目な顏をして、「成程」と受けてゐたが、自分は可笑しくて堪らなかつた。淋しさうな兄の頰にも笑ひの渦が漂つた。

「しかも夫が男の方が消極的で、女の方が積極的なんだから愈妙ですよ。私が其奴に、其女が君に思し召しがあると悟つたのは何ういふ機だと聞いたらね。眞面目な顏をして、色々云ひましたが、其うちで一番面白いと思つた所爲か、未だに覺えてゐるのは、そいつが瓦煎餅か何か食つてる所へ女が來て、私にも其御煎餅を頂戴なと云ふや否や、そいつの食ひ缺いた殘りの半分を引つ手繰つて口へ入れたといふ時なんです」

父の話し方は無論滑稽を主にして、大事の眞面目な方を背景に引き込まして仕舞ふので、聞いてゐる客を始め我々三人もたゞ笑ふ丈笑へばそれで後には何も殘らないやうな氣がした。其上客は笑ふ術を何處かで練修して來たやうに旨く笑つた。一座のうちで比較的眞面目だつたのはたゞ兄一人であつた。

「兎に角其結果は何うなりました。目出たく結婚したんですか」と冗談とも思はれない調子で聞いてゐた。

「いや其處を是から話さうといふのだ。先刻も云つた通り『景清』の趣きの出てくる所は是からさ。今

言つてる所はほんの冒頭だて」と父は得意らしく答へた。

十四

父の話す所によると、其男と其女の關係は、夏の夜の夢のやうに果敢ないものであつた。然し契りを結んだ時、男は女を未來の細君にすると言明したさうである。尤も是は女から申し出した條件でも何でもなかつたので、唯男の口から勢ひに驅られておのづと迸つた、誠ではあるが實行しにくい感情的の言葉に過ぎなかつたと父は態々說明した。

「と云ふのはね、兩方共おない年でせう。然も一方は親の脛を嚙つてる前途遼遠の書生だし、一方は下女奉公でもして暮らさうといふ貧しい召使なんだから、どんな堅い約束をしたつて、其約束の實行が出來る長い年月の間には、何んな故障が起らないとも限らない。で、女が聞いたさうですよ。貴方が學校を卒業なさると、二十五六に御成んなさる。すると私も同じ位に老けて仕舞ふ。夫でも御承知ですかつてね」

父は其處へ來て、急に話を途切らして、膝の下にあつた銀烟管へ煙草を詰めた。彼が薄青い烟を一時に鼻の穴から出した時、自分はもどかしさの餘り「其人は何て答へました」と聞いた。

父は吸殼を手で叩きながら「二郎が屹度何とか聞くだらうと思つた。二郎面白いだらう。世間には隨分色々な人があるもんだよ」と云つて自分を見た。自分は只「へえ」と答へた。

「實はわしも聞いて見た、其男に。君何て答へたかつて。すると坊ちやんだね、斯う云ふんだ。僕は自分の年も先の年も知つてゐた。けれども僕が卒業したら女が幾何になるか、其處迄は考へて居られなかつた、況や僕が五十になれば先も五十になるなんて遠い未來は全く頭の中に浮かんで來なかつたつて」

「無邪氣なものですね」と兄は寧ろ贊嘆の口振を見せた。今迄默つてゐた客が急に兄に贊成して、「全くの所無邪氣だ」とか「成程若いものになると如何にも一途ですな」とか云つた。

「所が一週間經つか經たないうちに其奴が後悔し始めてね、なに女は平氣なんだが、其奴が自分で恐縮して仕舞つたのさ。坊ちやん丈に意氣地のない事つたら。然し正直ものだからとう／＼女に對してまともに結婚破約を申し込んで、しかも極りの惡さうな顏をして、御免よとか何とか云つて謝罪つたんだつてね。そこへ行くとおない年だつて先は女だもの、『御免よ』なんて子供らしい言葉を聞けば可愛くもなるだらうが、又馬鹿々々しくもなるだらうよ」

父は大きな聲を出して笑つた。御客も其反響の如くに笑つた。兄だけは可笑しいのだか、苦々しいのだか變な顏をしてゐた。彼の心には凡て斯う云ふ物語が嚴肅な人生問題として映るらしかつた。彼の人生觀から云つたら父の話し振さへ或は輕薄に響いたかもしれない。

父の語る所を聞くと、其女は少時してすぐ暇を貰つて其處を出てしまつた限り再び顏を見せなかつたけれども、其男はそれ以來二三ヶ月の間何か考へ込んだなり魂が一つ所にこびり附いた樣に動かなかつたさ

うである。一遍其女が近所へ來たと云つて寄つた時などでも、外の人の手前だか何だか殆ど一口も物を云はなかつた。しかも其時は丁度午飯の時で、其女が昔の通り御給仕をしたのだが、男は丸で初對面の者にでも逢つた樣に口數を利かなかつた。

女もそれ以來決して男の家の敷居を跨がなかつた。男は丸で其女の存在を忘れて仕舞つたやうに、學校を出て家庭を作つて、二十何年といふつい近頃迄女とは何等の交渉もなく打ち過ぎた。

十五

「それ丈で濟めばまあ唯の逸話さ。けれども運命といふものは恐ろしいもので……」と父が又語り續けた。

自分は父が何を云ひ出すかと思つて、彼の顏から自分の眼を離し得なかつた。父の物語の概要を摘んで見ると、ざつと斯うであつた。

其男が其女を丸で忘れた二十何年の後、二人が偶然運命の手引で不意に會つた。會つたのは東京の眞中であつた。しかも有樂座で名人會とか美音會とかのあつた薄ら寒い宵の事ださうである。

其時男は細君と女の子を連れて、土間の何列目か知らないが、かねて注文して置いた席に竝んでゐた。すると彼等が入場して五分經つか經たないのに、今云つた女が他の若い女に手を引かれながら這入つて來

た。彼等も電話か何かで席を豫約して置いたと見えて、男の隣にあるエンゲージドと紙札を張つた所へ案内された儘大人しく腰を掛けた。二人は斯ういふ奇妙な所で、奇妙に隣り合せに坐つた。猶更奇妙に思はれたのは、女の方が昔と違つた表情のない盲目になつてしまつて、外に何んな人が居るか全く知らずに、たゞ舞臺から出る音樂の響にばかり耳を傾けてゐるといふ、男に取つては丸で想像すらし得なかつた事實であつた。

男は始め自分の傍に坐る女の顏を見て過去二十年の記憶を逆さに振られた如く驚いた。次に黑い眸を凝と据ゑて自分を見た昔の面影が、何時の間にか消えてゐた女の面影に氣が附いて、又愕然として心細い感に打たれた。

十時過ぎ迄一つ席に殆ど身動きもせずに坐つてゐた男は、舞臺で何を遣らうが、殆ど耳へは這入らなかつた。たゞ女に別かれてから今日に至る運命の暗い絲を、色々に想像する丈であつた。女は又わが隣にゐる昔の人を、見もせず、知りもせず、全く意識に上す暇もなく、たゞ自然に凋落しかゝつた過去の音樂に、やつとの思ひで若い昔を偲ぶ氣色を濃い眉の間に示すに過ぎなかつた。

二人は突然として邂逅し、突然として別かれた。男は別かれた後も屡女の事を思ひ出した。ことに彼女の盲目が氣に掛かつた。それで何うかして女の居る所を突き留めようとした。

「馬鹿正直な丈に熱心な男だもんだから、とう／＼成功した。其筋道も聞くには聞いたが、くだくだし

くつて忘れちまつたよ。何でも彼が其次に有樂座へ行つた時、案内者を捕まへて、何とか彼んとかした上に、大分込み入つた手數を掛けたんださうだ」

「何處に居たんです其女は」と自分は是非確めたくなつた。

「夫は祕密だ。名前や所は一切云はれない事になつてゐる。約束だからね。それは好いが、其奴が私に其盲目の女のゐる所を訪問して吳れと賴むんだね。何といふ主意か解らないが、詰りは無沙汰見舞のやうなものさ。當人に云はせると、學問した丈に、鹿爪らしい理窟を何ヶ條も竝べるけれども。つまり過去と現在の中間を結び附けて安心したいのさ。夫に何うして盲目になつたか、それが大變當人の神經を惱ましてゐたと見えてね。と云つて今更其女と新しい關係を附ける氣はなし、且は女房子の手前もあるから、自分はわざ〳〵出掛け度くないのさ。のみならず彼が又昔其女と別かれる時餘計な事を饒舌つてゐるんです。僕は少し學問する積りだから三十五六にならなければ妻帶しない。で已むを得ず此間の約束は取消にして貰ふんだつてね。所が奴學校を出るとすぐ結婚してゐるんだから良心の方から云つちやあまり心持は好くないのだらう。其でとう〳〵私が行く事になつた」

「まあ馬鹿らしい」と嫂が云つた。

「馬鹿らしかつたけれどもとう〳〵行つたよ」と父が答へた。客も自分も興味ありげに笑ひ出した。

十六

父には人に見られない一種剽輕な所があつた。或者は直な方だとも云ひ、或者は氣の置けない男だとも評した。

「親爺は全くあれで自分の地位を拵へ上げたんだね。實際の所それが世の中なんだらう。本式に學問をしたり眞面目に考へを纏めたりしたつて、社會ではちつとも重寶がらない。只輕蔑される丈だ」

兄は斯んな愚癡とも厭味とも、又諷刺とも事實とも、片の附かない感慨を、陰ながら曾て自分に洩らした事があつた。自分は性質から云ふと兄よりも寧ろ父に似て居た。其上年が若いので、彼のいふ意味が今程明瞭に解らなかつた。

何しろ父が其男に頼まれて、快く訪問を引受けたのも、多分持つて生れた物數奇から來たのだらうと自分は解釋してゐる。

父はやがて其盲目の家を音信れた。行く時に男は土産のしるしだと云つて、百圓札を一枚紙に包んで水引を掛けたのに、大きな菓子折を一つ添へて父に渡した。父はそれを受取つて、俥を其女の家に驅つた。女の家は狹かつたけれども小綺麗に且住み心地よく出來てゐた。縁の隅に丸く彫り拔いた御影の手水鉢が据ゑてあつて、手拭掛には小新しい三越の手拭さへ搖めいてゐた。家内も小人數らしく寂然として音も

しなかつた。

父は此日當りの好い然し茶がゝつた小座敷で、初めて其盲人に會つた時、一寸何と云つて好いか分らなかつたさうである。

「己の樣なものが言句に窮するなんて馬鹿げた恥を話すやうだが實際困つたね。何しろ相手が盲目なんだからね」

父はわざと斯う云つて皆を興がらせた。

彼は其場でとう〳〵男の名を打ち明けて、例の土產ものを取り出しつゝ女の前に置いた。女は眼が惡いので菓子折を撫でたり擦つたりして見た上「何うも御親切に……」と恭しく禮を述べたが、其上にある紙包を手で取り上げるや否や、少し變な顏をして「是は？」と念を押す樣に聞いた。父は例の氣性だから、呵々と笑ひながら「それも御土產の一部分です、何うか一緒に受取つて置いて下さい」と云つた。すると女が水引の結び目を持つた儘「もしや金子では御座いませんか」と問ひ返した。

「いえ何甚だ輕少で、――然し〇〇さんの寸志ですから何うぞ御納め下さい」

父が斯う云つた時、女はぱたりと此紙包を疊の上に落とした。さうして閉ぢた眸を屹と父の方へ向けて、「私は今寡婦で御座いますが、此間迄歷乎とした夫が御座いました。子供は今でも丈夫で御座います。たとひ何んな關係があつたにせよ、他人さまから金子を頂いては、樂に今日を過ごすやうにして置いて吳れ

た夫の位碑に對して濟みませんから御返し致します」と判切云つて涙を落とした。

「是には實に閉口したね」と父は皆の顏を一順見渡したが、其時に限つて、誰も笑ふものはなかつた。自分も腹の中で、いかな父でも流石に弱つたらうと思つた。

「其時わしは閉口しながらも、あゝ景淸を女にしたら矢つ張り斯んなものぢやなからうかと思つてね。本當は感心しましたよ。何ういふ譯で景淸を思ひ出したかと云ふとね、たゞ雙方とも盲目だからと云ふ計りぢやない。何うも其女の態度がね……」

父は考へてゐた。父の筋向うに坐つてゐた赭顏の客が、「全く氣込みが似てゐるからですね」と左も六づかしい謎でも解くやうに云つた。

「全く氣込みです」と父はすぐ承服した。自分は是で父の話が結末に來たのかと思つて、「成程夫は面白い御話です」と全體を批評する樣な調子で云つた。すると父は「まだ後があるんだ。後の方がまだ面白い。ことに二郎の樣な若い者が聞くと」と附け加へた。

十七

父は意外な女の見識に、話しの腰を折られて、已むを得ず席を立たうとした。すると女は始めて女らしい表情を面に湛へて、縋りつくやうに父を留めた。さうして何時何日何處で〇〇が自分を見たのかと聞い

た。父は例の有樂座の事を包み藏さず盲人に話して聞かせた。

「丁度あなたの隣に腰を掛けてゐたんださうです。あなたの方では丸で知らなかつたでせうが、〇〇は最初から氣が附いてゐたのです。然し細君や娘の手前口を利く事も出來惡かつたんでせう。夫なり宅へ歸つたと云つてゐました」

父は其時始めて盲目の涙腺から流れ出る涙を見た。

「失禮ながら眼を御煩ひになつたのは餘程以前の事なんですか」と聞いた。

「斯ういふ不自由な身體になつてから、もう六年程にもなりませうか。夫が亡くなつて一年經つか經たないうちの事で御座います。生れ附の盲目と違つて、當座は大變不自由を致しました」

父は慰め樣もなかつた。彼女の所謂夫といふのは何でも、請負師か何かで、存生中に大分金を使つた代りに、相應の資産も殘して行つたらしかつた。彼女は其御蔭で眼を煩つた今日でも、立派に獨立して暮らして行けるのだらうと父は説明した。

彼女は人に誇つて然るべき倅と娘を持つてゐた。其倅には高等の教育こそ施してないやうだつたけれども、何でも銀座邊のある商會へ這入つて獨立し得る丈の收入を得てゐるらしかつた。娘の方は下町風の育て方で、唄や三味線の稽古を專一と心得させるやうに見えた。凡てを通じて〇〇とは遠い過去に燒き附けられた一點の記憶以外に何ものをも共通に有つてゐるとは思へなかつた。

父が有樂座の話をした時に、女は兩方の眼をうるませて、「本當に盲目程氣の毒なものは御座いませんね」と云つたのが、痛く父の胸には應へたさうである。

「○○さんは今何をして御出で御座いますか」と女は又空中に何物をか想像するが如き眼遣ひをして父に聞いた。父は殘りなく○○が學校を出てから以後の經歷を話して聞かせた後、「今ぢや中々偉くなつてゐますよ。私見たいな老朽とは違つてね」と答へた。

女は父の返事には耳も借さずに、「定めて御立派な奥さんを御貰ひになつたで御座いませうね」と大人しやかに聞いた。

「えゝ最う子供が四人あります」

「一番御上のは幾何に御成りで」

「左樣さもう十二三にも成りませうか。可愛らしい女の子ですよ」

女は默つたなり頻りに指を折つて何か勘定し始めた。其指を眺めてゐた父は、急に恐ろしくなつた。さうして腹の中で餘計な事を云つて、もう取り返しが附かないと思つた。

女は少時間を置いて、たゞ「結構で御座います」と一口云つて後は淋しく笑つた。然し其笑ひ方が、父には泣かれるよりも怒られるよりも變な感じを與へたと云つた。

父は○○の宿所を明らさまに告げて、「ちと暇な時に遊びがてら御孃さんでも連れて行つて御覽なさい。

一寸好い家ですよ。〇〇も夜なら大抵御目にかゝれると云つてゐましたから」と云つた。すると女は忽ち眉を曇らして「そんな立派な御屋敷へ我々風情が到底御出入りは出來ませんが」と云つた儘しばらく考へてゐたが、忽ち抑へ切れないやうに眞劍な聲を出して「御出入りは致しません。先樣で來いと仰しやつても此方で御遠慮しなければなりません。然したゞ一つ一生の御願ひに伺つて置きたい事が御座います。斯うして御目に掛かれるのも最う二度とない御縁だらうと思ひますから、何うぞ夫丈聞かして頂いた上心持よく御別れが致したいと存じます」と云つた。

十八

父は年の割に度胸の惡い男なので、女から斯う云はれた時は、何んな凄じい文句を並べられるかと思つて、少なからず心配したさうである。

「幸ひ相手の眼が見えないので、自分の周章さ加減を覺られずに濟んだ」と彼は殊更に附け加へた。其時女は斯う云つたさうである。

「私は御覧の通り眼を煩つて以來、色といふ色は皆目見えません。世の中で一番明るい御天道樣さへもう拜む事は出來なくなりました。一寸表へ出るにも娘の厄介にならなければ用事は足せません。いくら年を取つても一人で不自由なく歩く事の出來る人間が幾人あるかと思ふと、何の因果で斯んな業病に罹つた

のかと、つく〴〵辛い心持が致します。けれども此眼は潰れても左程苦しいとは存じません。たゞ兩方の眼が滿足に開いて居る癖に、他の料簡方が解らないのが一番苦しう御座います」

父は「成程」と答へた。「御尤も」とも答へた。けれども女のいふ意味は一向通じなかつた。彼にはさういふ經驗が丸でなかつたと彼は明言した。女は曖昧な父の言葉を聞いて、「ねえ貴方左右では御座いませんか」と念を押した。

「そりや其んな場合は無論有るでせう」と父が云つた。

「有るでせうでは、貴方もわざ〳〵○○さんに御賴まれになつて、此處迄入らしつて下すつた甲斐がないでは御座いませんか」と女が云つた。父は益窮した。

自分は此時偶然兄の顏を見た。さうして彼の神經的に緊張した眼の色と、少し冷笑を洩らしてるやうな嫂の唇との對照を比較して、突然彼等の間に此間から蟠つてる妙な關係に氣が附いた。その蟠りの中に、自分も引きずり込まれてるといふ、一種厭ふべき空氣の匂も容赦なく自分の鼻を衝いた。自分は父が何故座興とは云ひながら、擇りに擇つて、斯んな話をするのだらうと、漸く不安の念が起つた。けれども萬事は既に遲かつた。父は知らぬ顏をして勝手次第に話頭を進めて行つた。

「おれは夫でも解らないから、淡泊に其女に聞いて見た。折角○○に賴まれてわざ〳〵此處迄來て、肝心な要領を伺はないで引き取つては、あなたに對しては勿論○○から云つても定めし不本意だらうから、

何うかあなたの胸を存分私に打ち明けて下さいませんか。夫でないと私も歸つてから○○に話しがし惡いからつて」

其時女は始めて思ひ切つた決斷の色を面に見せて、「では申し上げます。貴方も○○さんの代理にわざわざ尋ねて來て下さる位で入らつしやるから、定めし關係の深い御方には違ひ御座いませんでせう」といふ冒頭を置いて、彼女の腹を父に打ち明けた。

○○か結婚の約束をしながら一週間經つか經たないのに、それを取り消す氣になつたのは、周圍の事情から壓迫を受けて已むを得ず斷つたのか、或は別に何か氣に入らない所でも出來て、其氣に入らない所を結婚の約束後急に見附けたため斷つたのか、其有體の本當が聞きたいのだと云ふのが、女の何より知りたい所であつた。

女は二十年以上○○の胸の底に隱れてゐる此祕密を掘り出し度くつて堪らなかつたのである。彼女には天下の人が悉く持つてゐる二つの眼を失つて、殆ど他から片輪扱ひにされるよりも、一旦契つた人の心を確實に手に握れない方が遙かに苦痛なのであつた。

「御父さんはどういふ返事をして御遣りでしたか」と其時兄が突然聞いた。其顏には普通の興味といふよりも、異常の同情が籠もつてゐるらしかつた。

「己も仕方がないから、夫や大丈夫、僕が受け合ふ。本人に輕薄な所は些ともないと答へた」と父は好

い加減な答を却て自慢らしく兄に話した。

十九

「女はそんな事で滿足したんですか」と兄が聞いた。自分から見ると、兄の此問には冒す可からざる強味が籠もつてゐた。夫が一種の念力のやうに自分には響いた。

父は氣が附いたのか、氣が附かなかつたのか、平氣で斯んな答をした。

「始めは滿足しかねた樣子だつた。勿論此方の云ふ事がそら夫程根のある譯でもないんだからね。本當を云へば、先刻御前達に話した通り男の方は丸で坊ちやんなんで、前後の分別も何もないんだから、眞面目な挨拶はとても出來ないのさ。けれども其奴が一旦女と關係した後で止せば好かつたと後悔したのは、何うも事實に違ひなからうよ」

兄は苦々しい顏をして父を見てゐた。父は何といふ意味か、兩手で長い頰を二度程撫でた。

「此席で斯んな御話をするのは少し憚りがあるか」と兄が云つた。自分は何んな議論が彼の口から出るか、次第によつては途中から其鋒先を、一座の迷惑にならない方角へ向け易へようと思つて聞いてゐた。すると彼は斯う續けた。

「男は情慾を滿足させる迄は、女よりも烈しい愛を相手に捧げるが、一旦事が成就すると其愛が段々下

り坂になるに反して、女の方は關係が附くと夫から其男を益慕ふ樣になる。是が進化論から見ても、世間の事實から見ても、實際ぢやなからうかと思ふのです。夫で其男も此原則に支配されて後から女に氣がなくなつた結果結婚を斷つたんぢやないでせうか」

「妙な御話ね。妾女だからそんな六づかしい理窟は知らないけれども、始めて伺つたわ。隨分面白い事があるのね」

嫂が斯う云つた時、自分は客に見せたくないやうな厭な表情を兄の顏に見出だしたので、すぐそれを胡魔化すため何か云つて見ようとした。すると父が自分より早く口を開いた。

「そりや學理から云へば色々解釋が附くかも知れないけれども、まあ何だね、實際は其女が厭になつたに相違ないとした所で、當人面喰らつたんだね、まづ第一に。其上小膽で無分別で正直と來てるから、それ程厭でなくつても斷りかねないのさ」

父はさう云つたなり洒然としてゐた。

床の前に謠本を置いてゐた一人の客が、其時父の方を向いて斯う云つた。

「然し女といふものは兎に角執念深いものですね。二十何年も其事を胸の中に疊み込んで置くんですからね。全くの所貴方は好い功德を爲すつた。さう云つて安心させて遣れば其眼の見えない女のために何の位嬉しかつたか解りやしません」

「其處が凡ての懸合ひ事の氣轉ですな。萬事左右遣れば雙方の爲に何の位都合が好いか知れんです」他の客が續いて斯う云つた時、父は「いや何うも」と頭を搔いて「實は今云つた通り最初はね、その位な事ぢや中々疑りが解けないんで、私も少々弱らせられました。夫を色々に光澤を附けたり、出鱈目を拵へたりして、とう〳〵女を納得さしちまつたんですが、隨分骨が折れましたよ」と少し得意氣であつた。

やがて客は謠本を風呂敷に包んで露に濡れた門を潛つて出た。皆後で世間話をしてゐるなかに、兄丈は六づかしい顏をして一人書齋に入つた。自分は例の如く冷やかに重い音をさせる上草履の音を一つ宛聞いて、最後にどんと締まる扉の響に耳を傾けた。

二十

二三週間はそれなり過ぎた。そのうち秋が段々深くなつた。葉鷄頭の濃い色が庭を覗くたびに自分の眼に映つた。

兄は俥で學校へ出た。學校から歸ると大抵は書齋へ這入つて何かしてゐた。家族のものでも滅多に顏を合はす機會はなかつた。用があると此方から二階を上つて、わざ〳〵扉を開けるのが常になつてゐた。兄はいつでも大きな書物の上に眼を向けてゐた。それでなければ何か萬年筆で細かい字を書いてゐた。一番我々の眼に附いたのは、彼の茫然として洋机の上に頰杖を突いて居る時であつた。

彼は學者で且思索家であるから、默つて考へるのは當然の事のやうにも思はれたが、扉を開けて其樣子を見た者は、如何にも寒い氣がすると云つて、用を濟ますのを待ち兼ねて外へ出た。最も關係の深い母ですら、書齋へ行くのを餘り難有いとは思つてゐなかつたらしい。彼は一心に何か考へてゐるらしかつた。

「二郎、學者つてものは皆あんな偏窟なものかね」

此間を聞いた時、自分は學者でないのを不思議な幸福の樣に感じた。それで只えへゝと笑つてゐた。すると母は眞面目な顏をして、「二郎、御前が居なくなると、宅は淋しい上にも淋しくなるが、早く好い御嫁さんでも貰つて別に成る工面を御爲よ」と云つた。自分には母の言葉の裏に、自分さへ新しい家庭を作つて獨立すれば、兄の機嫌が少しはよくなるだらうといふ意味が明らさまに讀まれた。自分は今でも兄がそんな妙な事を考へてゐるのだらうかと疑つても見た。然し自分も既に一家を成して然るべき年配だし、又小さい一軒の竈位は、現在の收入で何うか斯うか維持して行かれる地位なのだから、かねてから、左右いふ考へはちら〳〵と無頓着な自分の頭をさへ横切つたのである。

自分は母に對して、「えゝ外へ出る事なんか譯はありません。明日からでも出ろと仰しやれば出ます。然し嫁の方はさうちんころの樣に、何でも構はないから、只路に落ちてさへゐれば拾つて來るといふやうな遣り口ぢや僕には不向きですから」と云つた。其時母は「そりや無論……」と答へようとするのを自分はわざと遮つた。

「御母さんの前ですが、兄さんと嫂さんの間ですね。あれには色々複雜な事情もあり、又僕が固から少し嫂さんと知り合ひだつたので、御母さんにも御心配を懸けて濟まない樣ですけれども、大根をいふとね。兄さんが學問以外の事に時間を費やすのが惜しいんで、萬事人任せにして置いて、何事にも手を出さずに華族然と澄ましてゐたのが惡いんですよ。いくら研究の時間が大切だつて、學校の講義が大事だつて、一生同じ所で同じ生活をしなくつちやならない吾が妻ぢやありませんか。兄さんに云はしたら又學者相應の意見もありませうけれども學者以下の我々には到底あんな眞似は出來ませんからね」

自分が斯んな下らない理窟を云ひ募つてゐるうちに、母の眼には何時の間にか淚らしい光の影が、段々溜まつて來たので、自分は驚いて已めて仕舞つた。

自分は面の皮が厚いといふのか、遠慮がなさ過ぎると云ふのか、それ程宅のものが氣兼ねをして、云はば敬して遠ざけてゐるやうな兄の書齋の扉を他よりも屢叩いて話しをした。中へ這入つた當分の感じは、さすがの自分にも少し應へた。けれども十分位經つと彼は丸で別人のやうに快活になつた。自分は苦い兄の心機を斯う一轉させる自分の手際に重きを置いて、恰も己の虛榮心を滿足させる爲の手段らしい態度をもつて、わざ〳〵彼の書齋へ出入りした事さへあつた。自白すると、突然兄から捕まつて危く死地に陷れられさうになつたのも、實は斯ういふ得意の瞬間であつた。

二十一

其折自分は何を話してゐたか今慥かに覺えてゐない。何でも兄から玉突の歷史を聞いた上、ルイ十四世頃の銅版の玉突臺をわざ〳〵見せられた樣な氣がする。

兄の室へ這入つては、斯んな問題を種に、彼の新しく得た知識を、はい〳〵聞いてゐるのが一番安全であつた。尤も自分も御饒舌だから、兄と違つた方面で、ルネサンスとかゴシツクとかいふ言葉を心得顏に振り廻す事も多かつた。然し大抵は世間離れのした斯う云ふ談話丈で書齋を出るのが例であつたが、其折は何かの拍子で兄の得意とする遺傳とか進化とかに就いての學說が、銅版の後で出て來た。自分は多分云ふ事がないため、默つて聞いてゐたものと見える。其時兄が「二郎御前は御父さんの子だね」と突然云つた。自分はそれが何うしたと云はぬ許りの顏をして、「左右です」と答へた。

「おれは御前だから話すが、實はうちの御父さんには、一種妙におつちよこちよいの所があるぢやないか」

兄から父を評すれば正に左右であるといふ事を自分は以前から呑み込んでゐた。けれども兄に對して此場合何と挨拶すべきものか自分には解らなかつた。

「夫や貴方のいふ遺傳とか性質とかいふものぢや恐らくないでせう。今の日本の社會があれでなくつち

や、通させないから、已むを得ないのぢやないですか。世の中にや御父さん所かまだまだ堪らないおつちよこがありますよ。兄さんは書齋と學校で高尙に日を暮らしてゐるから解らないかも知れないけれども」

「夫や己も知つてる。御前の云ふ通りだ。今の日本の社會は――ことによつたら西洋も左右かも知れないけれども、――皆上滑りの御上手もの丈が存在し得るやうに出來上がつてゐるんだから仕方がない」

兄は斯う云つて少時沈默の裡に頭を埋めてゐた。夫から怠さうな眼を上げた。

「然し二郎、御父さんのは、御氣の毒だけれども、持つて生れた性質なんだよ。何んな社會に生きてゐても、あゝより外に存在の仕方は御父さんに取つて六づかしいんだね」

自分は此學問をして、高尙になり、かつ迂濶になり過ぎた兄が、家中から變人扱ひにされるのみならず、親身の親からさへも、日に〳〵離れて行くのを眼前に見て、思はず顏を下げて自分の膝頭を見詰めた。

「二郎御前も矢つ張り御父さん流だよ。少しも摯實の氣質がない」と兄が云つた。

自分は癇癪の不意に起る野蠻な氣質を兄と同樣に持つてゐるが、此場合兄の言葉を聞いたとき、毫も憤怒の念が萌さなかつた。

「そりや非道い。僕は兎に角、御父さん迄世間の輕薄ものと一所に見做すのは。兄さんは獨りぼつちで書齋にばかり籠もつてゐるから、夫でさういふ僻んだ觀察ばかりなさるんですよ」

「ぢや例を擧げて見せようか」

兄の眼は急に光を放つた。自分は思はず口を閉ぢた。

「此間謠の客のあつた時に、盲女の話を御父さんがしたらう。あのとき御父さんは何とかいふ人を立派に代表して行きながら、其女が二十何年も解らずに煩悶してゐた事を、たゞ一口に胡魔化してゐる。己はあの時、其女のために腹の中で泣いた。女は知らない女だから夫程同情は起らなかつたけれども、實をいふと御父さんの輕薄なのに泣いたのだ。本當に情ないと思つた……」

「さう女見たやうに解釋すれば、何だつて輕薄に見えるでせうけれども……」

「そんな事を云ふ所が、つまり御父さんの惡い所を受け繼いでゐる證據になる丈さ。己は直の事を御前に賴んで、其報告を何時迄も待つてゐた。所が御前は何時迄も言葉を左右に託して、空惚けてゐる……」

二十二

「空惚けてると云はれちや些と可哀さうですね。話す機會もなし、又話す必要がないんですもの」

「機會は毎日ある。必要は御前になくても己の方にあるから、わざ／＼賴んだのだ」

自分は其時ぐつと行き詰まつた。實はあの事件以後、嫂について兄の前へ一人出て、眞面目に彼女を論ずるのが如何にも苦痛だつたのである。自分は話頭を無理に横へ向けようとした。

「兄さんは既に御父さんを信用なさらず。僕も其御父さんの子だといふ譯で、信用なさらない樣だが。

和歌の浦で仰しやつた事とは丸で矛盾してゐますね」

「何が」と兄は少し怒氣を帶びて反問した。

「何がつて、あの時、貴方は仰しやつたぢやありませんか。御前は正直な御父さんの血を受けてゐるから、信用が出來る、だから斯んな事を打ち明けて頼むんだつて」

自分が斯う云ふと、今度は兄の方がぐつと行き詰まつた樣な形迹を見せた。自分は此處だと思つて、わざと普通以上の力を、言葉の裡へ籠めながら斯う云つた。

「そりや御約束した事ですから、嫂さんに就いて、あの時の一部始終を今此處で御話ししても一向差支へありません。固より僕はあまり下らない事だから、機會が來なければ口を開く考へもなし、叉口を開いたつて、只一言で濟んで仕舞ふ事だから、兄さんが氣に掛けない以上、何も云ふ必要を認めないので、今日迄控へてゐたんですから。――然し是非何とか報告をしろと、官命で出張した屬官流に逼られゝば、仕方がない。今卽刻でも僕の見た通りを御話しします。けれども豫め斷つて置きますが、僕の報告から、貴方の豫期してゐるやうな變な幻は決して出て來ませんよ。元々貴方の頭にある幻なんで、客觀的には何處にも存在してゐないんだから」

兄は自分の言葉を聞いた時、平生と違つて、顏の筋肉を殆ど一つも動かさなかつた。唯洋卓の前に肱を突いたなり、凝としてゐた。眼さへ伏せてゐたから、自分には彼の表情が些とも解らなかつた。兄は理に

明らかな樣で、又其理にころりと抛げられる癖があつた。自分はたゞ彼の顏色が少し蒼くなつたのを見て、是は必竟彼が自分の強い言語に叩かれたのだと判斷した。

自分は其所にあつた卷莨入から烟草を一本取り出して燐寸の火を擦つた。さうして自分の鼻から出る青い烟と兄の顏とを等分に眺めてゐた。

「二郎」と兄が漸く云つた。其聲には力も張りもなかつた。

「何です」と自分は答へた。自分の聲は寧ろ驕つてゐた。

「もう己は御前に直の事に就いて何も聞かないよ」

「左右ですか。其方が兄さんの爲にも嫂さんの爲にも、また御父さんや御母さんの爲にも好いでせう。善良な夫になつて御上げなさい。さうすれば嫂さんだつて善良な夫人でさあ」と自分は嫂を辯護するやうに、又兄を戒めるやうに云つた。

「此馬鹿野郎」と兄は突然大きな聲を出した。其聲は恐らく下迄聞こえたらうが、すぐ傍に坐つてゐる自分には、殆ど豫想外の驚きを心臟に打ち込んだ。

「御前は御父さんの子だけあつて、世渡りは己より旨いかも知れないが、士人の交りは出來ない男だ。なんで今になつて直の事を御前の口などから聞かうとするものか。輕薄兒め」

自分の腰は思はず坐つてゐる椅子からふらりと離れた。自分は其儘扉の方へ歩いて行つた。

「御父さんのやうな虚僞な自白を聞いた後、何で貴樣の報告なんか宛にするものか」

自分は斯ういふ烈しい言葉を背中に受けつゝ扉を閉めて、暗い階段の上に出た。

二十三

自分は夫から約一週間程といふもの、夕食以外には兄と顏を合はした事がなかつた。平生食卓を賑やかにする義務を有つてゐると迄、皆から思はれてゐた自分が、急に默つて仕舞つたので、テーブルは變に淋しくなつた。何處かで鳴く蟀の音さへ、併んでゐる人の耳に、肌寒の象徵の如く響いた。

斯ういふ寂寞たる團欒の中に、お貞さんは日毎に近づいて來るわが結婚の日限を考へるより外に何の天地もない如くに、盆を膝の上へ載せて御給仕をしてゐた。陽氣な父は周圍に頓着なく、己に特有な勝手な話しばかりした。然し其反響は何時もの樣に何處からも起らなかつた。父の方でも丸でそれを豫期する氣色は見えなかつた。

時々席に列なつたものが、一度に聲を出して笑ふ種になつたのは唯芳江ばかりであつた。母などは話しが途切れておのづと不安になる度に、「芳江御前は……」とか何とか無理に問題を拵へて一時を糊塗するのを例にした。すると其態とらしさが、すぐ兄の神經に觸つた。

自分は食卓を退いて自分の室に歸る度に、ほつと一息吐くやうに煙草を呑んだ。

「詰らない。一面識のないものが寄つて會食するより猶詰らない。他の家庭もみんな斯んな不愉快なものかしら」

自分は時々斯う考へて、早く家を出てしまはうと決心した事もあつた。あまり食卓の空氣が冷やかな折は、お重が自分の後を慕つて、追ひ懸けるやうに、自分の室へ這入つて來た。彼女は何も云はずに其處で泣き出したりした。或時は何故兄さんに早く詫らないのだと詰問するやうに自分を惡らしさうに睨めたりした。

自分は宅に居るのが愈厭になつた。元來性急の癖に決斷に乏しい自分だけれども、今度こそは下宿なり間借りなりして、當分氣を拔かうと思ひ定めた。自分は三澤の所へ相談に行つた。其時自分は彼に「君が大阪などで、あゝ長く煩ふから惡いんだ」と云つた。彼は「君がお直さん抔の傍に長く喰つ附いてゐるから惡いんだ」と答へた。

自分は上方から歸つて以來、彼に會ふ機會は何度となくあつたが、嫂に就いては、未だ曾て一言も彼に告げた例がなかつた。彼も亦自分の嫂に關しては、一切口を閉ぢて何事をも云はなかつた。

自分は始めて彼の咽喉を洩れる嫂の名を聞いた。また其嫂と自分との間に橫たはる、深くも淺くも取れる相互關係をあらはした彼の言葉を聞いた。さうして驚きと疑ひの眼を三澤の上に注いだ。其中に怒りを含んでゐると解釋した彼は、「怒るなよ」と云つた。其後で「氣狂になつた女に、しかも死んだ女に惚れ

られたと思つて、己惚れてゐる己の方が、まあ安全だらう。其代り心細いには違ひない。然し面倒は起らないから、幾何惚れても、惚れられても一向差支へない」と云つた。自分は默つてゐた。彼は笑ひながら「何うだ」と自分の肩を捕まへて小突いた。自分には彼の態度が眞面目なのか、又冗談なのか、少しも解らなかつた。眞面目にせよ、冗談にせよ、自分は彼に向つて何事をも説明したり、辯明したりする氣は起らなかつた。

自分は夫でも三澤に適當な宿を一二軒教はつて、歸り掛けに、自分の室迄見て歸つた。家へ戻るや否や誰より先に、まづお重を呼んで、「兄さんも御前の忠告して呉れた通り愈家を出る事にした」と告げた。お重は案外な樣な又豫期してゐたやうな表情を眉間にあつめて、凝と自分の顏を眺めた。

二十四

兄妹として云へば、自分とお重とは餘り仲の善い方ではなかつた。自分が外へ出る事を、先づ第一に彼女に話したのは、愛情のためといふよりは、寧ろ面當ての氣分に打ち勝たれてゐた。すると見る〳〵うちにお重の兩方の眼に涙が一杯溜まつて來た。

「早く出て上げて下さい。其代り妾も何んな所でも構はない、一日も早く御嫁に行きますから」と云つた。

自分は默つてゐた。

「兄さんは一旦外へ出たら、それなり家へ歸らずに、すぐ奥さんを貰つて獨立なさる積りでせう」と彼女が又聞いた。

自分は彼女の手前「勿論さ」と答へた。其時お重は今迄持ち應へてゐた涙をほろり〳〵と膝の上に落とした。

「何だつて、そんなに泣くんだ」と自分は急に優しい聲を出して聞いた。實際自分は此事件に就いてお重の眼から一滴の涙さへ豫期して居なかつたのである。

「だつて妾計り後へ殘つて……」

自分に判然聞こえたのは只是丈であつた。其他は彼女の無暗に引泣り上げる聲が邪魔をして殆ど崩れたまゝ自分の鼓膜を打つた。

自分は例の如く煙草を呑み始めた。さうして大人しく彼女の泣き止むのを待つてゐた。彼女はやがて袖で眼を拭いて立ち上がつた。自分は其後姿を見たとき、急に可哀さうになつた。

「お重、御前とは好く喧嘩ばかりしたが、もう今迄通り啀み合ふ機會も滅多にあるまい。さあ仲直りだ。握手しよう」

自分は斯う云つて手を出した。お重は却て極り惡氣に躊躇した。

自分は是から段々に父や母に自分の外へ出る決心を打ち明けて、彼等の許諾を一々求めなければならないと思つた。たゞ最後に兄の所へ行つて、同じ決心を是非共繰り返す必要があるので、それ丈が苦になつた。

母に打ち明けたのは慥かその明くる日であつた。母は此唐突な自分の決心に驚いたやうに、「何うせ出るなら御嫁でも極まつてからと思つてゐたのだが。――まあ仕方があるまいよ」と云つた後、憮然として自分の顔を見た。自分はすぐ其足で、父の居間へ行かうとした。母は急に後から呼び留めた。

「二郎たとひ、御前家を出たつてね……」

母の言葉は夫丈で支へて仕舞つた。自分は「何ですか」と聞き返したため、元の場所に立つてゐなければならなかつた。

「兄さんにはもう御話しかい」と母は急に卽かぬ事を云ひ出した。

「いゝえ」と自分は答へた。

「兄さんには却て御前から直下に話した方が好いかも知れないよ。なまじ、御父さんや御母さんから取次ぐと、却て感情を害するかも知れないからね」

「えゝ僕もさう思つてゐます。成丈綺麗にして出る積りですから」

自分は斯う断つて、すぐ父の居間に這入つた。父は長い手紙を書いてゐた。

「大阪の岡田からお貞の結婚に就いて、此間又問ひ合せが來たので、其返事を書かう書かうと思ひながら、とう〳〵今日迄放つて置いたから、今日は是非一つ其義務を果さうと思つて、今書いてゐる所だ。序だから左右云つとくが、御前の書く拜啓の啓の字は間違つてゐる。崩すなら其處にある樣に崩すものだ」

長い手紙の一端が丁度自分の坐つた膝の前に出てゐた。自分は啓の字を横に見たが、何處が間違つてるるのか丸で解らなかつた。自分は父が筆を動かす間、床に活けた黄菊だの其後にある懸物だのを心のうちで品評してゐた。

二十五

父は長い手紙を裾の方から卷き返しながら、「何か用かね、又金ぢやないか。金ならないよ」と云つて、封筒に上書を認めた。

自分は極めて簡略に自分の決意を述べた上、「永々御厄介になりましたが……」といふやうな形式の言葉を一寸後へ附け加へた。父は唯「うん左右か」と答へた。やがて切手を狀袋の角へ貼り附けて、「一寸其ベルを押して呉れ」と自分に頼んだ。自分は「僕が出させませう」と云つて手紙を受け取つた。父は「御前の下宿の番地を書いて、御母さんに渡して置きな」と注意した。それから床の幅に就いて色々な說明をした。

自分は夫だけ聞いて父の室を出た。是で挨拶の殘つてゐるものは愈兄と嫂丈になつた。兄には此間の事件以來殆ど親しい言葉を換はさなかつた。自分は彼に對して怒り得る程の勇氣を持つてゐなかつた。怒り得るならば、此間罵られて彼の書齋を出るとき、既に激昂してゐなければならなかつた。自分は後から小さな石膏像の飛んでくる位に恐れを抱く人間ではなかつた。けれどもあの時に限つて、怒るべき勇氣の源が既に枯れてゐたやうな氣がする。自分は室に入つた幽靈が、ふうと又室を出る如くに力なく退却した。其後も彼の書齋の扉を叩いて、快く詫る丈の度胸は、何處からも出て來なかつた。斯くして自分は毎日苦い顏をしてゐる彼の顏を、晩餐の食卓に見る丈であつた。

嫂とも自分は近頃滅多に口を利かなかつた。近頃といふよりも寧ろ大阪から歸つて後といふ方が適當かも知れない。彼女は單獨に自分の簞笥などを置いた小さい部屋の所有主であつた。然しながら彼女と芳江が二人限り其處に遊んでゐる事は、一日中で時間に積もると幾何もなかつた。彼女は大抵母と共に裁縫其他の手傳をして日を暮らしてゐた。

父や母に自分の未來を打ち明けた明くる朝、便所から風呂場へ通ふ縁側で、自分は此嫂にぱたりと出會つた。

「二郎さん、あなた下宿なさるんですつてね。宅が厭なの」と彼女は突然聞いた。彼女は自分の云つた通りを、何時の間にか母から傳へられたらしい言葉遣ひをした。自分は何氣なく「えゝ少時出る事にしま

した」と答へた。

「其方が面倒でなくつて好いでせう」

彼女は自分が何か云ふかと思つて、凝と自分の顔を見てゐた。然し自分は何とも云はなかつた。

「さうして早く奥さんを御貰ひなさい」と彼女の方から又云つた。自分は夫でも默つてゐた。

「早い方が好いわよ貴方。妾探して上げませうか」と又聞いた。

「何うぞ願ひます」と自分は始めて口を開いた。

嫂は自分を見下げた樣な又自分を調戯ふ樣な薄笑ひを薄い唇の兩端に見せつゝ、わざと足音を高くして。茶の間の方へ去つた。

自分は默つて、風呂場と便所の境にある三和土の隅に寄せ掛けられた大きな銅の金盥を見詰めた。此金盥は直徑二尺以上もあつて自分の力で持ち上げるのも困難な位、重くて且大きなものであつた。自分は子供の時分から此金盥を見て、屹度大人の行水を使ふものだと許り想像して、一人嬉しがつてゐた。金盥は今迄で侘びしく汚れてゐた。低い硝子戸越しには、是も自分の子供時代から忘れ得ない秋海棠が、變らぬ年毎の色を淋しく見せてゐた。自分は是等の前に立つて、よく秋先に玄關前の棗を、兄と共に叩き落として食つた事を思ひ出した。自分はまだ青年だけれども、自分の背後には既に是丈無邪氣な過去がずつと續いてゐる事を發見した時、今昔の比較が自ら胸に溢れた。さうして是から此餓鬼大將であつた兄と不愉快

な言葉を交換して、わが家を出なければならないといふ變化に想ひ及んだ。

二十六

其日自分が事務所から歸つてお重に「兄さんは」と聞くと、「まだよ」といふ返事を得た。

「今日は何處かへ廻る日なのかね」と重ねて尋ねた時、お重は「何うだか知らないわ。書齋へ行つて壁に貼り附けてある時間表を見て來て上げませうか」と云つた。

自分はたゞ兄が歸つたら教へて呉れるやうに頼んで、誰にも會はずに室へ這入つた。洋服を脱ぎ替へるのも面倒なので、其儘横になつて寐てゐるうち、何時の間にか本當の眠りに落ちた。さうして他人に說明も何も出來ない樣な複雜に變化する不安な夢に襲はれてゐると、急にお重から起された。

「大兄さんが御歸りよ」

斯ういふ彼女の言葉が耳に這入つた時、自分はすぐ起ち上がつた。けれども意識は朦朧として、夢のつゞきを步いてゐた。お重は後から「まあ顏でも洗つて入らつしやい」と注意した。判然しない自分の意識は、それすら敢てする勇氣を必要と感ぜしめなかつた。

自分は其儘兄の書齋に這入つた。兄もまだ洋服のまゝであつた。彼は扉の音を聞いて、急に入口に眼を轉じた。其光のうちには或豫期を明らかに示してゐた。彼が外出して歸ると、嫂が芳江を連れて、不斷の

和服を持つて上がつて來るのが、其頃の習慣であつた。自分は母が嫂に「斯ういふ風に御爲よ」と云ひ附けたのを傍にゐて聞いてゐた事がある。自分はぼんやりしながらも、兄の此眼附によつて、和服の不斷着より、嫂と芳江とを彼は待ち設けてゐたのだと覺つた。

自分は寐惚けた心持が有つたればこそ、平氣で彼の室を突然開けたのだが、彼は自分の姿を敷居の前に見て、少しも怒りの影を現はさなかつた。然したゞ默つて自分の背廣姿を打ち守る丈で、急に言葉を出す氣色はなかつた。

「兄さん、一寸御話しがありますが……」と、自分は遂に此方から切り出した。

「此方へ御這入り」

彼の言語は落ち附いてゐた。且此間の事に就いて何の介意をも含んでゐないらしく自分の耳に響いた。彼は自分の爲に、わざ〳〵一脚の椅子を己の前へ据ゑて、自分を麾いだ。

自分はわざと腰を掛けずに、椅子の背に手を載せた儘、父や母に云つたと略同樣の挨拶を述べた。兄は尊敬すべき學者の態度で、それを靜かに聞いてゐた。自分の單簡の説明が終ると、彼は嬉しくも悲しくもない常の來客に應接する樣な態度で「まあ其處へ御掛け」と云つた。

彼は黑いモーニングを着て、あまり好い香のしない葉卷を燻らしてゐた。

「出るなら出るさ。御前ももう一人前の人間だから」と云つて少時煙ばかり吐いてゐた。夫から「然し

己が御前を出したやうに皆から思はれては迷惑だよ」と續けた。「そんな事はありません。唯自分の都合で出るんですから」と自分は答へた。

自分の寐惚けた頭は此時次第に冴えて來た。出來る丈早く兄の前から退きたくなつた結果、振り返つて室の入口を見た。

「直も芳江も今湯に這入つて居るやうだから、誰も上がつて來やしない。其んなにそはくしないで緩り話すが好い、電燈でも點けて」

自分は立ち上がつて、室の內を明るくした。夫から、兄の吹かしてゐる葉卷を一本取つて火を點けた。

「一本八錢だ。隨分惡い煙草だらう」と彼が云つた。

二十七

「何時出る積りかね」と兄が又聞いた。

「今度の土曜あたりにしようかと思つてます」と自分は答へた。

「一人出るのかい」と兄が又聞いた。

此奇異な質問を受けた時、自分は少時茫然として兄の顏を打ち守つてゐた。彼がわざと斯う云ふ失禮な皮肉を云ふのか、さうでなければ彼の頭に少し變調を來したのか、何方だか解らないうちは、自分にも何

の兄當へ打つて出て好いものか、料簡が定まらなかつた。

彼の言葉は平生から皮肉澤山に自分の耳を襲つた。然しそれは彼の智力が我々よりも鋭敏に働き過ぎる結果で、其他に惡氣のない事は、自分によく呑み込めてゐた。唯此一言丈は鼓膜に響いたなり、何時迄も其處でぢん／＼熱く鳴つてゐた。

兄は自分の顏を見て、えへゝと笑つた。自分は其笑の影にさへ歇斯的里性の稻妻を認めた。

「無論一人で出る氣だらう。誰も連れて行く必要はないんだから」

「勿論です。唯一人になつて、少し新しい空氣を吸ひたい丈です」

「新しい空氣は己も吸ひたい。然し新しい空氣を吸はして吳れる所は、この廣い東京に一ケ所もない」

自分は半ば此好んで孤立してゐる兄を憐んだ。さうして半ば彼の過敏な神經を悲しんだ。

「ちつと旅行でも爲すつたら何うです。少しは晴々するかも知れません」

自分が斯う云つた時、兄はチョッキの隱袋から時計を出した。

「まだ食事の時間には少し間があるね」と云ひながら、彼は再び椅子に腰を落ち附けた。さうして「おい二郎最う左右度々話す機會もなくなるから、飯が出來る迄此處で話さうぢやないか」と自分の顏を見た。

自分は「えゝ」と答へたが、少しも尻は坐らなかつた。其上何も話す種がなかつた。すると兄が突然「御前パオロとフランチエスカの戀を知つてるだらう」と聞いた。自分は聞いた樣な、聞かない樣な氣がする

ので、すぐとは返事も出來なかつた。

　兄の說明によると、パオロと云ふのはフランチエスカの夫の弟で、其二人が夫の眼を忍んで、互に慕ひ合つた結果、とう〳〵夫に見附かつて殺されるといふ悲しい物語で、ダンテの神曲の中とかに書いてあるさうであつた。自分は其憐れな物語に對する同情よりも、斯んな話を殊更にする兄の心持に就いて、一種厭な疑念を挾んだ。兄は臭い煙草の煙の間から、始終自分の顏を見詰めつゝ、十三世紀だか十四世紀だか解らない遠い昔の以太利の物語をした。自分は其間やつとの事で、不愉快の念を抑へてゐた。所が物語が一應濟むと、彼は急に思ひも寄らない質問を自分に掛けた。

「二郎、何故肝心な夫の名を世間が忘れてパオロとフランチエスカ丈覺えてゐるのか。其譯を知つてるか」

　自分は仕方がないから「矢つ張り三勝半七見たやうなものでせう」と答へた。兄は意外な返事に一寸驚いたやうであつたが、「己は斯う解釋する」と仕舞に云ひ出した。

「己は斯う解釋する。人間の作つた夫婦といふ關係よりも、自然が醸した戀愛の方が、實際神聖だから、それで時を經るに從つて、狹い社會の作つた窮屈な道德を脫ぎ棄てて、大きな自然の法則を嘆美する聲丈が、我々の耳を刺激するやうに殘るのではなからうか。尤も其當時はみんな道德に加勢する。二人のやうな關係を不義だと云つて咎める。然しそれは其事件の起つた瞬間を治める爲の道義に驅られた云はば通り

雨のやうなもので、あとへ殘るのは何うしても靑天と白日、卽ちパオロとフランチエスカさ。何うだ左右は思はんかね」

二十八

自分は年配から云つても性格から云つても、平生なら兄の說に手を擧げて贊成する筈であつた。けれども此場合、彼が何故わざ〳〵パオロとフランチエスカを問題にするのか、又何故彼等二人が永久に殘る理由を、物々しく解說するのか、其主意が分らなかつたので、自然の興味は全く不快と不安の念に打ち消されて仕舞つた。自分は奧齒に物の挾まつたやうな兄の說明を聞いて、必竟それが何うしたのだといふ氣を起した。

「二郞、だから道德に加勢するものは一時の勝利者には違ひないが、永久の敗北者だ。自然に從ふものは、一時の敗北者だけれども永久の勝利者だ……」

自分は何とも云はなかつた。

「所が己は一時の勝利者にさへなれない。永久には無論敗北者だ」

自分は夫でも返事をしなかつた。

「相撲の手を習つても、實際力のないものは駄目だらう。そんな形式に拘泥しないでも、實力さへ慥か

に持つてゐれば其方が屹度勝つ。勝つのは當り前さ。四十八手は人間の小刀細工だ。膂力は自然の賜物だ……」

兄は斯ういふ風に、影を踏んで力んでゐるやうな哲學をしきりに論じた。さうして彼の前に坐つてゐる自分を、氣味の悪い霧で、一面に鎖して仕舞つた。自分には此朦朧たるものを拂ひ退けるのが、太い麻繩を嚙み切るよりも苦しかつた。

「二郎、御前は現在も未來も永久に、勝利者として存在しようとする積りだらう」と彼は最後に云つた。

自分は癇癪持ちだけれども兄程露骨に突進はしない性質であつた。ことさら此時は、相手が全然正氣なのか、又は少し昂奮し過ぎた結果、精神に尋常でない一種の狀態を引き起したのか、第一その方を懸念しなければならなかつた。其上兄の精神狀態を其處に導いた原因として、何うしても自分が責任者と目指されてゐるといふ事實を、猶更苛く感じなければならなかつた。

自分はとう〳〵仕舞迄一言も云はずに兄の言葉を聞く丈聞いてゐた。さうして夫程疑るなら一層嫂を離別したら、晴々して好からうにと考へたりした。

所へ其嫂が兄の平生着を持つて、芳江の手を引いて、例の如く階段を上がつて來た。

扉の敷居に姿を現はした彼女は、風呂から上がりたてと見えて、蒼味の注した常の頰に、心持の好い程、薄赤い血を引き寄せて、肌理の細かい皮膚に手觸りを挑むやうな柔らかさを見せてゐた。

彼女は自分の顏を見た。けれども一言も自分には云はなかつた。

「大變遲くなりました。嘸御窮屈でしたらう。生憎御湯へ這入つてゐたものだから、すぐ御召を持つて來る事が出來なくつて」

嫂は斯う云ひながら兄に挨拶した。さうして傍に立つてゐた芳江に、「さあ御父さんに御歸り遊ばせと仰しやい」と注意した。芳江は母の命令通り「御歸り」と頭を下げた。

自分は永らくの間、嫂が兄に對して是程家庭の夫人らしい愛嬌を見せた例を知らなかつた。自分は又此愛嬌に對して柔らげられた兄の氣分が、彼の眼に強く集まつた例も知らなかつた。兄は人の手前極めて自尊心の強い男であつた。けれども、子供のうちから兄と一所に育つた自分には、彼の腦天を動きつゝある雲の往來がよく解つた。

自分は助け船が不意に來た嬉しさを胸に藏して兄の室を出た。出る時嫂は一面識もない眼下のものに挨拶でもするやうに、一寸頭を下げて自分に默禮をした。自分が彼女から斯んな冷淡な挨拶を受けたのも亦珍らしい例であつた。

二十九

二三日してから自分はとう／＼家を出た。父や母や兄弟の住む、古い歷史を有つた家を出た。出る時は

殆ど何事をも感じなかつた。母とお重が別れを惜しむやうに浮かない顏をするのが、却て厭であつた。彼等は自分の自由行動をわざと妨げる樣に感ぜられた。嫂丈は淋しいながら笑つて呉れた。

「もう御出掛け。では御機嫌よう。又ちよく〳〵遊びに入らつしやい」

自分は母やお重の曇つた顏を見た後で、此一口の愛嬌を聞いた時、多少の愉快を覺えた。

自分は下宿へ移つてからも有樂町の事務所へ例の通り毎日通つてゐた。自分を其處へ周旋して呉れたものは、例の三澤であつた。事務所の持主は、昔三澤の保證人をしてゐた（兄の同僚の）Hの叔父に當たる人であつた。此人は永らく外國に居て、內地でも相應に經驗を積んだ大家であつた。胡麻鹽頭の中へ指を突つ込んで、無暗に頭垢を搔き落とす癖があるので、差し向ひの間に火鉢でも置くと、時々火の中から妙な臭を立てさせて、非道く相手を弱らせる事があつた。

「君の兄さんは近來何を硏究してゐるか」などと度々自分に聞いた。自分は仕方なしに、「何だか一人で書齋に籠もつて遣つてるやうです」と極めて大體な答をするのを例のやうにしてゐた。梧桐が坊主になつたある朝、彼は突然自分を捕へて、「君の兄さんは近頃何うだね」と又聞いた。斯う云ふ彼の質問に慣れ切つてゐた自分も、其時ばかりは餘りの不意打ちに一寸返事を忘れた。

「健康は何うだね」と彼は又聞いた。

「健康は餘り好い方ぢやないです」と自分は答へた。

「少し氣を附けないと不可ないよ。餘り勉強ばかり爲てゐると」と彼は云つた。

自分は彼の顏を打ち守つて、其處に一種の眞面目な眉と眼の光とを認めた。

自分は家を出てから、まだ一遍しか家へ行かなかつた。其折そつと母を小蔭に呼んで、兄の樣子を聞いて見たら「近頃は少し好い樣だよ。時々裏へ出て芳江をブランコに載せて、押して遣つたりしてゐるからね。……」

自分は夫で少しは安心した。夫限り宅の誰とも顏を合はせる機會を拵へずに今日迄過ぎたのである。

晝の時間に一品料理を取り寄せて食つてゐると、B先生（事務所の持主）が又突然「君は慥か下宿したんだつたね」と聞いた。自分は唯單簡に「えゝ」と答へて置いた。

「何故。家の方が廣くつて便利だらうぢやないか。それとも何か面倒な事でもあるのかい」

自分は愚圖ついて頗る曖昧な挨拶をした。其時呑み込んだ麵麭の一片が、如何にも水氣がないやうに、ぱさ／＼と感ぜられた。

「然し一人の方が却て氣樂かも知れないね。大勢ごた／＼してゐるよりも。――時に君はまだ獨身だらう、何うだ早く細君でも有つちや」

自分はB先生の此言葉に對しても、平生の通り氣樂な答が出來なかつた。先生は「今日は君いやに意氣銷沈してゐるね」と云つたぎり話頭を轉じて、他のものと愚にも附かない馬鹿話を始め出した。自分は自

分の前にある茶碗の中に立つてる茶柱を、何かの前徴の如く見詰めたぎり、左右に起る笑ひ聲を聞くともなく、又聞かぬでもなく、默然と腰を掛けてゐた。さうして心の裡で、自分こそ近頃神經過敏症に罹つてゐるのではなからうかと不愉快な心配をした。自分は下宿にゐて餘り孤獨なため、斯う頭に變調を起したのだと思ひ附いて、歸つたら久し振に三澤の所へでも話しに行かうと決心した。

三十

其晩三澤の二階に案內された自分は、氣樂さうに胡坐をかいた彼の姿を見て羨ましい心持がした。彼の室は明るい電燈と、暖かい火鉢で、初冬の寒さから全然隔離されてゐるやうに見えた。自分は彼の痼疾が秋風の吹き募るに從つて、漸々好い方へ向いて來た事を、かねてから彼の色にも姿にも知つた。けれども今の自分と比較して、彼が斯う悠たり構へてゐようとは思へなかつた。高くて暑い空を、恐る〳〵仰いで暮らした大阪の病院を憶ひ起すと、當時の彼と今の自分とは、殆ど地を換へたと一般であつた。

彼はつい近頃父を失つた結果として、當然一家の主人に成り濟ましてゐた。Hさんを通してB先生から彼を使ひたいと申し込まれた時も、彼はまづ己を後にするといふ好意からか、若しくは贅澤な擇り好みからか、折角の位置を自分に讓つて吳れた。

自分は電燈で照らされた彼の室を見廻して、其壁を隙間なく飾つてゐる風雅なエッチングや水彩畫など

に就いて、しばらく彼と話し合つた。けれども何ういふものか、藝術上の議論は十分經つか經たないうちに自然と消えて仕舞つた。すると三澤は突然自分に向つて、「時に君の兄さんだがね」と云ひ出した。自分は此處でも亦兄さんかと驚いた。

「兄が何うしたつて？」

「いや別に何うしたつて事もないが……」

彼は是丈云つて只自分の顏を眺めてゐた。自分は勢ひ彼の言葉とB先生の今朝の言葉とを胸の中で結び附けなければならなかつた。

「さう半分でなく、話すなら皆話して呉れないか。兄が一體何うしたと云ふんだ。今朝もB先生から同じ樣な事を聞かれて、妙な氣がしてゐる所だ」

三澤は焦烈たさうな自分の顏を尙根氣に見詰めてゐたが、やがて「ぢや話さう」と云つた。

「B先生の話しも僕のも矢つ張り同じHさんから出たのだらうと思ふがね。Hさんのは又學生から出たのだつて云つたよ。何でもね、君の兄さんの講義は、平生から明瞭で新しくつて、大變學生に氣受けが好いんださうだが、其明瞭な講義中に、矢張り明瞭ではあるが、前後と何うしても辻褄の合はない所が一二箇所出て來るんだつてね。さうして夫を學生が質問すると、君の兄さんは元來正直な人だから、何遍も何遍も繰り返して、其處を說明しようとするが、何うしても解らないんださうだ。仕舞に手を額へ當てて、

何うも近來頭が少し惡いもんだから……と茫乎硝子窓の外を眺めながら、何時迄も立つてゐるんで、學生も、そんなら又此次にしませうと、自分の方で引き下がつた事が、何でも幾遍もあつたと云ふ話さ。Hさんは僕に今度長野（自分の姓）に逢つたら、少し注意して見るが好い。ことによると烈しい神經衰弱なのかも知れないからつて云つたが、僕もとう〳〵それなり忘れて仕舞つて、今君の顏を見る迄實は思ひ出せなかつたのだ」

「そりや何時頃の事だ」と自分はせはしなく聞いた。

「丁度君の下宿する前後の事だと思つてゐるが、判然した事は覺えて居ない」

「今でも左右なのか」

三澤は自分の思ひ逼つた顏を見て、慰めるやうに「いや〳〵」と云つた。

「いや〳〵夫はほんに一時的の事であつたらしい。此頃では全然平生と變らなくなつたやうだと、Hさんが二三日前僕に話したから、もう安心だらう。然し……」

自分は家を出た時に自分の胸に刻み込んだ兄との會見を思はず憶ひ出した。さうして其折の自分の疑ひが、或は學校で證明されたのではなからうかと考へて、非常に心細く且恐ろしく感じた。

三十一

自分は力めて兄の事を忘れようとした。すると不圖大阪の病院で三澤から聞いた精神病の「娘さん」を聯想し始めた。

「あの御孃さんの法事には間に合つたのかね」と聞いて見た。

「間に合つた。間に合つたが、實にあの娘さんの親達は失敬な厭な奴だ」と彼は拳骨でも振り廻しさうな勢ひで云つた。自分は驚いて其理由を聞いた。

彼は其日三澤家を代表して、築地の本願寺の境内とかにある菩提所に參詣した。薄暗い本堂で長い讀經があつた後、彼も列席者の一人として、一抹の香を白い位牌の前に焚いた。彼の言葉によると、彼程の誠をもつて、其若く美しい女の靈前に額づいたものは、彼以外に殆どあるまいといふ話しであつた。

「あいつ等はいくら親だつて親類だつて、只靜かな御祭でも爲てゐる氣になつて、平氣でゐやがる。本當に涙を落としたのは他人の己丈だ」

自分は三澤の斯ういふ憤慨を聞いて、少し滑稽を感じたが、表ではたゞ「成程」と肯つた。すると三澤は「いや其丈なら何も怒りやしない。然し癪に障つたのはその後だ」

彼は一般の例に從つて、法要の濟んだ後、寺の近くにある或料理屋へ招待された。其食事中に、彼女の父に當たる人や、母に當たる女が、彼に對して談をするうちに妙に引つ掛かつて來た。何の惡意もない彼には、最初一向その當てこすりが通じなかつたが、段々時間の進むに從つて、彼等の本旨が漸く分つて來た。

「馬鹿にも程があるね。露骨にいへばさ、あの娘さんを不幸にした原因は僕にある。精神病にしたのも僕だ、と斯うなるんだね。さうして離別になつた先の亭主は、丸で責任のないやうに思つてるらしいんだから失敬ぢやないか」

「何うして又さう思ふんだらう。そんな筈はないがね。君の誤解ぢやないか」と自分が云つた。

「誤解？」と彼は大きな聲を出した。自分は仕方なしに默つた。彼はしきりにその親達の愚劣な點を述べたてて已まなかつた。その女の夫となつた男の輕薄を罵つて措かなかつた。仕舞に斯う云つた。

「何故そんなら始めから僕に遣らうと云はないんだ。資產や社會的の地位ばかり目當てにして……」

「一體君は貰ひたいと申し込んだ事でもあるのか」と自分は途中で遮つた。

「ないさ」と彼は答へた。

「僕がその娘さんに――その娘さんの大きな潤つた眼が、僕の胸を絕えず往來するやうになつたのは、既に精神病に罹つてからの事だもの。僕に早く歸つて來て呉れと賴み始めてからだもの」

彼は斯う云つて、依然として其女の美しい大きな眸を眼の前に描くやうに見えた。もし其女が今でも生きて居たなら、何んな困難を冒しても、愚劣な親達の手から、若しくは輕薄な夫の手から、永久に彼女を奪ひ取つて、己の懷で暖めて見せるといふ強い決心が、同時に彼の固く結んだ口の邊に現はれた。

自分の想像は、此時其美しい眼の女よりも、却て自分の忘れようとしてゐた兄の上に逆戻りをした。さ

うして其女の精神に祟つた恐ろしい狂ひが耳に響けば響く程、兄の頭が氣に掛かつて來た。兄は和歌山行の汽車の中で、其女は慥かに三澤を思つてゐるに違ひないと斷言した。精神病で心の憚りが解けたからだと其理由迄も說明した。兄はことによると、嫂をさういふ精神病に罹らして見たい、本音を吐かせて見たい、と思つてるかも知れない。さう思つてゐる兄の方が、傍から見ると、もうそろ〳〵神經衰弱の結果、多少精神に狂ひを生じかけて、自分の方から恐ろしい言葉を家中に響かせて狂ひ廻らないとも限らない。

自分は三澤の顏などを見てゐる暇を有たなかつた。

三十二

自分はかねて母から頼まれて、此次若し三澤の所へ行つたら、彼にお重を貰ふ氣があるか、ないか、夫となく彼の樣子を探つて來るといふ約束をした。しかし其晩は何うしても左右いふ元氣が出なかつた。自分の心持を了解しない彼は、却て自分に結婚を勸めて已まなかつた。自分の頭は又それに對して氣乘りのした返事をする程、穩やかに澄んでゐなかつた。彼は折を見て、ある候補者を自分に紹介すると云つた。自分は生返事をして彼の家を出た。外は十文字に風が吹いてゐた。仰ぐ空には星が粉の如くさゝやかな力を集めて、此風に抵抗しつゝ輝いた。自分は侘びしい胸の上に兩手を當てて下宿へ歸つた。さうして冷たい蒲團の中にすぐ潛り込んだ。

夫から二三日しても兄の事がまだ氣に懸かつたなり、頭が何うしても自分と調和して呉れなかつた。自分はとう〳〵番町へ出掛けて行つた。直接兄に會ふのが厭なので、二階へはとう〳〵上がらなかつたが、母を始め他の者には無沙汰見舞の格で、何氣なく例の通りの世間話をした。兄を交へない一家の團欒は却て寬いだ暖かい感じを自分に與へた。

自分は歸り際に、母を一寸次の間へ呼んで、兄の近況を聞いて見た。母は此頃兄の神經が大分落ち附いたと云つて喜んで居た。自分は母の一言でやつと安心したやうなものゝ、母には氣の附かない特殊の點に、何だか變調がありさうで、却てそれが氣掛りになつた。されば云つて、兄に會つて自分から彼を試驗しようといふ勇氣は無論起し得なかつた。三澤から聞いた兄の講義が一時變になつた話も母には告げ得なかつた。

自分は何も云ふ事のないのに、茫乎暗い部屋の襖の蔭に寒さうに立つて居た。母も自分に對して其處を動かなかつた。其上彼女の方から自分に何かいふ必要を認めるやうに見えた。

「尤も此間少し風邪を引いた時、妙な囈語を云つたがね」と云つた。

「何んな事を云ひました」と自分は聞いた。

母はそれには答へないで、「なに熱の所爲だから、心配する事はないんだよ」と自分の問を打ち消した。

「熱がそんなに有つたんですか」と自分は更に別の事を尋ねた。

「それがね、熱は三十八度か八度五分位なんだから、其んな筈はないと思つて、御醫者に聞いて見ると、神經衰弱のものは少しの熱でも頭が變になるんだつてね」

醫學の初歩さへ心得ない自分は始めて此知識に接して、思はず眉をひそめた。けれども室が暗いので、母には自分の顏が見えなかつた。

「でも氷で頭を冷やしたら、其御蔭で熱がすぐ引いたんで安心したけれど……」

自分は熱の引かない時の兄が、何んな囈語を云つたか、それが未だ知りたいので、薄ら寒い襖の蔭に依然として立つてゐた。

次の間は電燈で明るく照らされてゐた。父が芳江に何か云つて調戯ふたびに、皆の笑ふ聲が陽氣に聞こえた。すると突然其笑ひ聲の間から、「おい二郎」と父が自分を呼んだ。

「おい二郎、又御母さんに小遣でも強請つてるんだらう。お綱、御前見たやうに、さう無暗に二郎の口車に乘つちや不可ないよ」と大きな聲で云つた。

「いゝえ其んな事ぢやありません」と自分も大きな聲で負けずに答へた。

「ぢや何だい、そんな暗い所で、こそ〳〵御母さんを取つ捉まへて話して居るのは。おい早く光るい所へ面を出せ」

父が斯う云つた時、明るい室の方に集まつたものは一度にどつと笑つた。自分は母から聞き度い事も聞

かずに、父の命令通り、はいと云つて、皆の前へ姿をあらはした。

三十三

それから暫くの間は、B先生の顏を見ても、三澤の所へ遊びに行つても、兄の話は一向話題に上らなかつた。自分は少し安心した。さうして成るべく家の事を忘れようと試みた。然し下宿の徒然に打ち勝たれるのが何より苦しいので、よく三澤の時間を潰しに此方から押し寄せたり、又引つ張り出したりした。三澤は厭きずに何時迄も例の精神病の娘さんの話をした。自分は此異樣なおのろけを聞くたびに、屹度兄と嫂の事を連想して自ら不快になつた。それで、時々又かといふ樣子を色にも言葉にも表はした。三澤も負けては居なかつた。

「君も君のおのろけを云へば、夫で差引損得なしぢやないか」などと自分を冷やかした。自分はもう些とで彼と往來で喧嘩をする所であつた。

彼には斯ういふ風に、精神病の娘さんが、影身に添つて離れないので、自分はかねて母から頼まれたお重の事を彼に話す餘地がなかつた。お重の顏は誰が見ても、まあ十人並以上だらうと、仲の善くない自分にも思へたが、惜しい事に、此大切な娘さんとは、丸で顏の型が違つてゐた。

自分の遠慮に引き換へて、彼は平氣で自分に嫁の候補者を推擧した。「今度何處かで一寸見て見ないか」

と勸めた事もあつた。自分は始めこそ生返事計りしてゐたが、仕舞は本氣に其女に會はうと思ひ出した。すると三澤は、まだ機會が來ないから、最う少し、最う少し、と會見の日を順繰りに先へ送つて行くので、自分は又氣を腐らした末、遂に其女の幻を離れて仕舞つた。

反對に、お貞さんの方の結婚は愈事實となつて現はるべく、目前に近づいて來た。お貞さんは相應の年をしてゐる癖に、宅中で一番初心な女であつた。是といふ特色はないが、何を云つても、ぢき顏を赤くする所に變な愛嬌があつた。

自分は三澤と夜更に寒い町を歸つて來て、下宿の冷たい夜具に潛り込みながら、時々お貞さんの事を思ひ出した。さうして彼女も斯んな冷たい夜具を引き擔ぎながら、今頃は近い未來に逼る暖かい夢を見て、誰も氣の附かない笑ひ顏を、半ば天鵞絨の襟の裡に埋めてゐるだらうなどと想像した。

彼女の結婚する二三日前に、岡田と佐野は、氷を裂くやうな汽車の中から身を顫はして新橋の停車場に下りた。彼は迎へに出た自分の顏を見て、いようといふ掛け聲をした。それから「相變らず二郎さんは呑氣だね」と云つた。岡田は己の呑氣さ加減を自覺しない男のやうにも思はれた。

翌日番町へ行つたら、岡田一人のために宅中騷々しく賑はつてゐた。兄も外の事と違ふといふ意味か、別に苦い顏もせずに、其渦中に捲き込まれて默つてゐた。

「二郎さん、今になつて下宿するなんて、そんな馬鹿がありますか、家が淋しくなる丈ぢやありません

か。ねえお直さん」と彼は嫂に話し掛けた。此時丈は嫂も流石變な顏をして默つてゐた。自分も何とも云ひやうがなかつた。兄は却て冷然と凡てに取り合はない氣色を見せた。岡田は既に醉つて何事にも拘泥せずへらへら口を動かした。

「尤も一郎さんも善くないと僕は思ひますよ。さう貴方、書齋にばかり引つ込んで勉強してゐたつて、詰らないぢやありませんか。もう貴方位學問をすれば、何處へ出たつて引けを取るんぢやないんだからね。然し二郎さん始め、お直さんや叔母さんも好くないやうですね。一郎は書齋より外は嫌ひだ嫌ひだつて云つときながら、僕が來て斯う引つ張り出せば、譯なく二階から下りて來て、僕と面白さうに話して呉れるぢやありませんか。左右でせう一郎さん」

彼は斯う云つて兄の方を見た。兄は默つて苦笑ひをした。

「ねえ叔母さん」

母も默つてゐた。

「ねえお重さん」

彼は返事を受ける迄順々に聞いて廻るらしかつた。お重はすぐ「岡田さん、貴方いくら年を取つても饒舌る病氣が癒らないのね。騷々しいわよ」と云つた。それで皆が笑ひ出したので、自分はほつと一息吐いた。

三十四

芳江が「叔父さん一寸入らつしやい」と次の間から小さな手を出して自分を招いた。「何だい」と立つて行くと彼女は何處からか、大きな信玄袋を引き摺り出して、「是お貞さんのよ、見せたげませうか」と自慢らしく自分を見た。

彼女は信玄袋の中から天鵞絨で張つた四角な箱を出した。自分は其中にある眞珠の指環を手に取つて、ふんと云ひながら眺めた。芳江は「是もよ」と云つて、今度は海老茶色のを出したが、是は自分が洗濯其他の世話になつた禮に買つて遣つた寶石なしの單純な金の指環であつた。彼女は又「是もよ」と云つて、繻珍の紙入を出した。其紙入には模樣風に描いた菊の花が金で一面に織り出されてゐた。彼女は其次に比較的大きくて細長い桐の箱を出した。是は金と赤銅と銀とで、蔦の葉を綴つた金具の附いてゐる帶留であつた。最後に彼女は櫛と笄を示して、「是卵甲よ。本當の鼈甲ぢやないんだつて。本當の鼈甲は高過ぎるから御已めにしたんですつて」と說明した。自分には卵甲といふ言葉が解らなかつた。芳江には無論解らなかつた。けれども女の子丈あつて、「是一番安いのよ。四方張よか安いのよ。玉子の白味で貼り附けるんだから」と云つた。「玉子の白味で何處をどう貼り附けるんだい」と聞くと、彼女は、「そんな事知らないわ」と取り濟ました口の利き方をして、さつさと信玄袋を引き摺つて次の間へ行つて仕舞つた。

自分は母からお貞さんの當日着る着物を見せて貰つた。薄紫がゝつた御納戸の縮緬で、紋は蔦、裾の模樣は竹であつた。

「是ぢや餘り閑靜過ぎやしませんか、年に合はして」と自分は母に聞いて見た。母は「でもね餘り高くなるから」と答へた。さうして「是でも御前二十五圓掛かつたんだよ」と附け加へて、無知識な自分を驚かした。地は去年の春京都の織屋が背負つて來た時、白の儘三反許り用意に買つて置いて、此間迄簞笥の抽出に仕舞つたなり放つてあつたのださうである。

お貞さんは一座の席へ先刻から少しも顏を出さなかつた。自分は大方極りが惡いのだらうと想像して、其極りの惡い所を、此處で一目見たいと思つた。

「お貞さんは何處に居るんです」と母に聞いた。すると兄が「あゝ忘れた。行く前に一寸お貞さんに話しがあるんだつた」と云つた。

みんな變な顏をしたうちに、嫂の唇には著しい冷笑の影が閃めいた。兄は誰にも取り合ふ氣色もなく、「一寸失敬」と岡田に挨拶して、二階へ上がつた。其足音が消えると間もなく、お貞さんは自分達の居る室の敷居際迄來て、岡田に丁寧な挨拶をした。

彼女は「さあ何うぞ」と會釋する岡田に、「今一寸御書齋迄參らなければなりませんから、いづれ後程」と答へて立ち上がつた。彼女の上氣したやうにぽつと赤くなつた顏を見た一座のものは、氣の毒な爲か何

だか、強ひて引き留めようともしなかつた。

兄の二階へ上がる足音はそれ程強くはなかつたが、何時でも上履を引掛けてゐる爲、ぴしやぴしやする響が、下からよく聞こえた。お貞さんのは素足の上に、女のつゝましやかな氣性をあらはす所爲か、丸で聽き取れなかつた。戸を開けて戸を閉ぢる音さへ、自分の耳には全く這入らなかつた。

彼等二人は其處で約三十分許り何か話してゐた。其間嫂は平生の冷淡さに引き換へて、尋常のものより機嫌よく話したり笑つたりした。けれども其裏に不機嫌を藏さうとする不自然の努力が強く潛在してゐる事が自分によく解つた。岡田は平氣でゐた。

自分は彼女が兄と會見を終つて、自分達の室の横を通る時、其足音を聞き附けて、用あり氣に不意と廊下へ出た。ばつたり出逢つた彼女の顏は依然として恥づかしさうに赤く染まつてゐた。彼女は眼を俯せて、自分の傍を擦り拔けた。其時自分は彼女の瞼に涙の宿つた痕迹を慥かに認めたやうな氣がした。けれども書齋に入つた彼女が兄と差し向ひで何んな談話をしたか、それは未だに知る事を得ない。自分丈ではない、其委細を知つてゐるものは、彼等二人より以外に、恐らく天下に一人もあるまいと思ふ。

三十五

自分は親戚の片割れとして、お貞さんの結婚式に列席するやう、父母から命ぜられてゐた。其日は丁度

雨がしよぼ〱降つて、婚禮には似合はしからぬ侘びしい天氣であつた。何時もより早く起きて番町へ行つて見ると、お貞さんの衣裳が八疊の間に取り散らしてあつた。

便所へ行つた歸りに風呂場の口を覗いて見たら、硝子戸が半分開いて、其中にお貞さんの御化粧をしてゐる姿がちらりと見えた。それから「あら其處へ障つちや厭ですよ」といふ彼女の聲が聞こえた。芳江は面白半分何か悪戯をすると見えた。自分も芳江の眞似を遣らうと思つたが、場合が場合なのでつい遠慮して茶の間へ戻つた。

しばらくしてから、又八疊へ出て見ると、みんなが御召換へを遣つてゐた。芳江が「あのお貞さんは手へも白粉を塗けたのよ」と大勢に吹聽してゐた。實を云ふと、お貞さんは顏よりも手足の方が赤黑かつたのである。

「大變眞白になつたな。亭主を欺瞞すんだから善くない」と父が調戯つてゐた。

「あしたになつたら旦那様が嘸驚くでせう」と母が笑つた。お貞さんも下を向いて苦笑した。彼女は初めて島田に結つた。それが豫期出來なかつた斬新の感じを自分に與へた。

「此髷でそんな重いものを差したら嘸苦しいでせうね」と自分が聞くと、母は「いくら重くつても、生涯に一度はね……」と云つて、己の黑紋附と白襟との合ひ具合をしきりに氣にしてゐた。お貞さんの帶は嫂が後へ廻つて、ぐつと締めて遣つた。

兄は例の臭い卷煙草を吹かしながら廣い縁側を彼方此方と逍遥してゐた。彼は此結婚に、丸で興味を有たないやうな、又彼一流の批評を心の中に加へてゐるやうな、判斷の出來惡い態度をあらはして、時々我我の居る座敷を覗いた。けれども一寸敷居際に留まる丈で決して中へは這入らなかつた。「仕度はまだか」とも催促しなかつた。彼はフロックに絹帽を被つてゐた。

愈出る時に、父は一番綺麗な俥を擇つて、お貞さんを乘せて遣つた。十一時に式がある筈の所を少し時間が後れた爲岡田は太神宮の式臺へ出て、わざ〳〵我々を待つてゐた。皆がどや〳〵と一度に控所に這入ると、其處には御婿さんがたゞ一人質に取られた置物のやうに椅子へ腰を掛けてゐた。やがて立ち上がつて、一人々々に挨拶をするうちに、自分は控所にある洋卓やら、絨氈やら、白木の格天井やらを眺めた。突き當りには御簾が下りてゐて、中には何か在るらしい氣色だけれども、奧の全く暗いため何物をも髣髴する事が出來なかつた。其前には鶴と浪を一面に描いた目出度い一雙の金屏風が立て廻してあつた。

縁女と仲人の奧さんが先、それから婿と仲人の夫、其次へ親類がつゞくといふ順を、袴羽織の男が出て來て敎へて呉れたが、肝心の仲人たるべき岡田はお兼さんを連れて來なかつたので、「ぢや甚だ御迷惑だけど、一郎さんとお直さんに引き受けて戴きませうか、此場限り」と岡田が父に相談した。父は簡單に「好からうよ」と答へた。嫂は例の如く「何うでも」と云つた。兄も「何うでも」と云つたが、後から、「然し僕等のやうな夫婦が媒妁人になつちや、少し御兩人の爲に惡いだらう」と附け足した。

「惡いなんて――僕がするより名譽でさあね。ねえ二郎さん」と岡田が例の如く輕い調子で云つた。兄は何やら其理由を述べたいらしい氣色を見せたが、すぐ考へ直したと見えて、「ぢや生れて初めての大役を引き受けて見るかな。然し何も知らないんだから」と云ふと、「何向うで何も彼も教へて呉れるから世話はない。御前達は何もしないで濟むやうにちやんと拵へてあるんだ」と父が說明した。

三十六

反橋を渡る所で、先の人が何かに支へて一同一寸留まつた機會を利用して、自分はそつと岡田のフロックの尻を引つ張つた。

「岡田さんは實に呑氣だね」と云つた。

「何故です」

彼は自ら媒妁人をもつて任じながら、その細君を連れて來ない不注意に少しも氣が附いてゐないらしかつた。自分から呑氣の譯を聞いた時、彼は苦笑して頭を搔きながら、「實は伴れて來ようと思つたんですがね、まあ何うかなるだらうと思つて……」と答へた。

反橋を降りて奥へ這入らうといふ入口の所で、花嫁は一面に張り詰められた鏡の前へ坐つて、黑塗の盥の中で手を洗つてゐた。自分は後から脊延びをして、お貞さんの姿を見た時、成程これで列が後れるんだ

なと思ふと同時に吹き出し度くなつた。折角丹精して塗り立てた彼女の手も、此神聖な一杓の水で、無殘に元の如く赤黑くされて仕舞つたのである。

神殿の左右には別室があつた。其右の方へ兄が佐野さんを伴れて這入つた。其左の方へ嫂がお貞さんを伴れて這入つた。それが左右から出て來て着座するのを見ると、兄夫婦は眞面目な顏をして向ひ合せに坐つてゐた。花嫁花婿も無論の事、謹んだ姿で相對してゐた。

式壇を正面に、後の方にずらりと竝んだ父だの母だの自分達は、此二樣の意味を有つた夫婦と、繪の具で塗り潰した綺麗な太鼓と、何物を中に藏してゐるか分らない、御簾を靜粛に眺めた。

兄は腹のなかで何を考へてゐるか、餘所目から見ると、尋常と變る所は少しもなかつた。嫂は元より取り繕つた樣子もなく、自然其儘に取り濟ましてゐた。

彼等は既に過去何年かの間に、夫婦といふ社會的に大切な經驗を彼等なりに嘗めて來た、古い夫婦であつた。さうして彼等の嘗めた經驗は、人生の歷史の一部分として、彼等に取つては再びしがたい貴いものであつたかも知れない。けれども何方から云つても、蜜に似た甘いものではなかつたらしい。此苦い經驗を有する古夫婦が、己達のあまり幸福でなかつた運命の割前を、若い男と若い女の頭の上に割り附けて、又新しい不仕合せな夫婦を作る積りなのかしらん。

兄は學者であつた。かつ感情家であつた。其蒼白い額の中に或は此位な事を考へてゐたかも知れない。

或はそれ以上に深い事を考へてゐたかも知れない。或は凡ての結婚なるものを自ら呪咀しながら、新郎と新婦の手を握らせなければならない仲人の喜劇と悲劇とを同時に感じつゝ坐つてゐたかも知れない。兎に角兄は眞面目に坐つてゐた。嫂も、佐野さんも、お貞さんも、眞面目に坐つてゐた。其内式が始まつた。巫女の一人が、途中から腹痛で引き返したといふので介添が其代りを勤めた。

自分の隣に坐つてゐたお重が「大兄さんの時より淋しいのね」と私語いた。其時は簫や太鼓を入れて、巫女の左右に入れ交ふ姿も蝶のやうに翩々と華麗に見えた。

「御前の嫁に行く時は、あの時位賑やかにして遣るよ」と自分はお重に云つた。お重は笑つてゐた。

式が濟んでみんなが控所へ歸つた時、お貞さんは我々が立つてゐるのに、わざ〳〵絨氈の上に手を突いて、今迄厄介になつた禮を丁寧に述べた。彼女の眼には淋しさうな涙が一杯溜まつてゐた。

新夫婦と岡田は晝の汽車で、すぐ大阪へ向けて立つた。自分は雨のプラットフォームの上で、二三日箱根あたりで逗留する筈のお貞さんを見送つた後、父や兄に別れて獨り自分の下宿へ歸つた。さうして途々自分にも當然番の廻つてくるべき結婚問題を人生に於ける不幸の謎の如く考へた。

三十七

お貞さんが攫はれて行くやうに消えて仕舞つた後の宅は、相變らずの空氣で包まれてゐた。自分の見た

所では、お貞さんが宅中で一番の呑氣ものらしかつた。彼女は永年世話になつた自分の家に、朝夕箒を執つたり、洗ひ濯ぎをしたりして、下女だか仲働だか分らない地位に甘んじた十年の後、別に不平な顔もせず佐野と一所に雨の汽車で東京を離れて仕舞つた。彼女の腹の中も日常彼女の繰り返しつゝ慣れ抜いた仕事の如く明瞭でかつ器械的なものであつたらしい。一家團欒の時季とも見るべき例の晩餐の食卓が、一時重苦しい灰色の空氣で鎖された折でさへ、お貞さん丈は其中に坐つて、平生と何の變りもなく、給仕の盆を膝の上に載せたまゝ平氣で控へてゐた。結婚當日の少し前、兄から書齋へ呼ばれて出て來た時、彼女の顔を染めた色と、彼女の瞼に充ちた涙が、彼女の未來のために、何を語つてゐたか知らないが、彼女の氣質から云へば、それがために長い影響を受けようとも思へなかつた。

お貞さんが去ると共に冬も去つた。去つたと云ふよりも、先づ大した事件も起らずに濟んだと評する方が適當かも知れない。斑な雪、枯枝を搖ぶる風、手水鉢を鎖す氷、孰れも例年の面影を規則正しく自分の眼に映した後、消えては去り消えては去つた。自然の寒い課程が斯う繰り返されてゐる間、番町の家は凝として動かずにゐた。其家の中にゐる人と人との關係も何うか斯うか今迄通り持ち應へた。

自分の地位にも無論變化はなかつた。唯お重が遊び半分時々苦情を訴へに來た。彼女は來る度に「お貞さんは何うしてゐるでせうね」と聞いた。

「何うしてゐるでせうつて、――御前の所へ何とも云つて來ないのか」

自分より遙かに豐富な知識を有つてゐた。自分は又彼女が來る度に、兄の事を聞くのを忘れなかつた。

「兄さんは何うだい」

「何うだいつて、貴方こそ惡いわ。家へ來ても兄さんに逢はずに歸るんだから」

「わざ〳〵避けるんぢやない、行つても何時でも留守なんだから仕方がない」

「噓を仰しやい、此間來た時も書齋へ這入らずに逃げた癖に」

お重は自分より正直な丈に眞赤になつた。自分はあの事件以後何うかして兄と故の通り親しい關係になりたいと心では希望してゐたが、實際はそれと反對で、何だか近寄り惡い氣がするので、全くお重の云ふ如く、宅へ行つて彼に挨拶する機會があつても、成る可く會はずに歸る事が多かつた。

お重に遣り込められると、自分は無言の降意を表する如くにあはゝと笑つたり、わざと短かい口髭を撫でたり、時によると例の通り煙草に火を點けて曖昧な煙を吐いたりした。

左右かと思ふと却てお重の方から突然「大兄さんも隨分變人ね。あたし今になつて全く貴方が喧嘩して出たのも無理はないと思ふわ」などと云つた。お重から藪から棒に斯う驚かされると、自分は腹の底で自分の味方が一人殖えたやうな氣がして嬉しかつた。けれども表向き彼女の意見に相槌を打つ程の稚氣もな

かつた。叱り附ける程の衒氣もなかつた。只彼女が歸つた後で、忽ち今迄の考へが逆さまになつて、兄の精神狀態が周圍に及ぼす影響抔が頻りに苦になつた。段々生物から孤立して、書物の中に引き摺り込まれて行くやうに見える彼を平生よりも一倍氣の毒に思ふ事もあつた。

三十八

母も一二遍來た。最初來た時は大變機嫌が好かつた。隣の座敷にゐる法學士は何處へ出て何を勤めてゐるのだ抔と、自分にも判然解らないやうな事を、左も大事らしく聞いたりした。其時彼女は宅の近況に就いて何も語らずに、「此頃は方々で風邪が流行るから氣を御附け。御父さんも二三日前から咽喉が痛いつて、濕布をして御出でだよ」と注意して去つた。自分は彼女の去つた後、兄夫婦の事を思ひ出す暇さへなかつた。彼等の存在を忘れた自分は、快い風呂に入つて、旨い夕飯を食つた。

次に訪ねて呉れた時の母の調子は、前に較べると少し變つてゐた。彼女は大阪以後、ことに自分が下宿して以後、自分の前でわざと嫂の批評を回避するやうな風を見せた。自分も母の前では氣が咎めるといふのか、必要のない限り、嫂の名を憚つて、成るべく口へ出さなかつた。所が此注意深い母が其折卒然と自分に向つて、「二郎、此處丈の話しだが、一體お直の氣立ては好いのかね惡いのかね」と聞いた。果して何か始まつたのだと心得た自分は冷りとした。

下宿後の自分は、兄に就いても嫂に就いても不謹愼な言葉を無責任に放つ勇氣は全くなかつたので、母は自分から何一つ滿足な材料を得ずして去つた。自分の方でも、何故彼女が此氣味の惡い質問を自分に突然と掛けたか遂に要領を得ずに母を逸した。「何か又心配になるやうな事でも出來たのですか」と聞いても、彼女は「なに別に是と云つて變つた事もないんだがね……」と答へた丈で、後は自分の顏を打守るに過ぎなかつた。

自分は彼女が歸つた後、しきりに此質問に拘泥し始めた。けれども前後の事情だの母の態度だのを綜合して考へて見て、何うしても新しい事件が、わが家庭のうちに起つたとは受取れないと判斷した。

母もあまり心配し過ぎて、とう／＼嫂が解らなくなつたのだ。

自分は最後に斯う解釋して、恐ろしい夢に捉へられたやうな氣持を抱いた。

お重も來、母も來る中に、嫂丈は遂に一度も自分の室の火鉢に手を翳さなかつた。彼女がわざと遠慮して自分を尋ねない主意は、自分にもよく呑み込めてゐた。自分が番町へ行つたとき、彼女は「二郎さんの下宿は高等下宿なんですつてね。御室に立派な床があつて、庭に好い梅が植ゑてあるつて云ふ話ぢやありませんか」と聞いた。然し「今度拜見に行きますよ」とは云はなかつた。自分も「見に入らつしやい」とは云ひかねた。尤も彼女の口に上つた梅は、何處かの畠から引つこ拔いて來て、其儘其處へ植ゑたとしか思はれない無意味なものであつた。

嫂が來ないのとは異樣の意味で、又同樣の意味で、兄の顏は決して自分の宅の裡に見出だされなかつた。

父も來なかつた。

三澤は時々來た。自分はある機會を利用して、それとなく彼にお重を貰ふ意があるかないかを探つて見た。

「左右だね。あの御孃さんも最う年頃だから、そろ〳〵何處かへ片附ける必要が逼つて來るだらうね。早く好い所を見附けて嬉しがらせて遣り給へ」

彼はたゞ斯う云つた丈で、取り合ふ氣色もなかつた。自分は夫限り斷念して仕舞つた。

永いやうで短かい冬は、事の起りさうで事の起らない自分の前に、時雨、霜解、空つ風……と既定の日程を平凡に繰り返して、斯樣に去つたのである。

一

陰刻な冬が彼岸の風に吹き拂はれた時自分は寒い窖から顔を出した人のやうに明るい世界を眺めた。自分の心の何處かには此明るい世界も亦今遣り過ごした冬と同樣に平凡だといふ感じがあつた。けれども呼息をする度に春の匂が脈の中に流れ込む快さを忘れる程自分は老いてゐなかつた。

自分は天氣の好い折々室の障子を明け放つて往來を眺めた。又廂の先に横たはる蒼空を下から透かすやうに望んだ。さうして何處か遠くへ行きたいと願つた。學校にゐた時分ならもう春休みを利用して旅へ出る支度をする筈なのだけれども、事務所へ通ふやうになつた今の自分にはそんな自由は到底望めなかつた。偶の日曜ですら寐起きの惡い顔を一日下宿に持ち扱つて、散歩にさへ出ない事があつた。

自分は半ば春を迎へながら半ば春を咒ふ氣になつてゐた。下宿へ歸つて夕飯を濟ますと、火鉢の前へ坐つて煙草を吹かしながら茫然自分の未來を想像したりした。其未來を織る絲のうちには、自分に媚びる花やかな色が、新しく活けた佐倉炭の焔と共にちら〳〵と燃え上がるのが常であつたけれども、時には一面に變色して何處迄行つても灰の樣に光澤を失つてゐた。自分は斯ういふ想像の夢から突然何かの拍子で現

在の我に立ち返る事があつた。さうして此現在の自分と未來の自分とを運命が何ういふ手段で結び附けて行くだらうと考へた。

　自分が不意に下宿の下女から驚かされたのは、丁度斯んな風に現實と空想の間に迷つて凝と火鉢に手を翳してゐた、或宵の口の出來事であつた。自分は自分の注意を己一人に集めてゐたといふものか、實際下女の廊下を踏んで來る足音に氣が附かなかつた　彼女が思ひ掛けなくすうと襖を開けた時自分は始めて偶然のやうに眼を上げて彼女と顔を見合はせた。

「風呂かい」

自分はすぐ斯う聞いた。是より外に下女が今頃自分の室の襖を開ける筈がないと思つたからである。すると下女は立ちながら「いゝえ」と答へたなり默つてゐた。自分は下女の眼元に一種の笑ひを見た。其笑ひの中には相手を翻弄し得た瞬間の愉快を女性的に貪りつゝある妙な閃きがあつた。自分は鋭く下女に向つて、「何だい、突立つた儘」と云つた。下女はすぐ敷居際に膝を突いた。さうして「御客様です」と稍眞面目に答へた。

「三澤だらう」と自分が云つた。自分は或事で三澤の訪問を豫期してゐたのである。

「いゝえ女の方です」

「女の人?」、

自分は不審の眉を寄せて下女に見せた。下女は却て澄ましてゐた。
「此方へ御通し申しますか」
「何といふ人だい」
「知りません」
「知りませんつて、名前を聞かないで無暗に人の室へ客を案内する奴があるかい」
「だつて聞いても仰しやらないんですもの」
下女は斯う云つて、又先刻の様な意地の悪い笑ひを目元で笑つた。自分はいきなり火鉢から手を放して立ち上がつた。敷居際に膝を突いてゐる下女を追ひ退けるやうにして上り口迄出た。さうして土間の片隅にコートを着た儘寒さうに立つてゐる嫂の姿を見出だした。

二

其日は朝から曇つてゐた。然も打ち續いた好天氣を一度に追ひ拂ふやうに寒い風が吹いた。自分は事務所から歸りがけに、外套の襟を立てて歩きながら道々雨になるのを氣遣つた。其雨が先刻夕飯の膳に向ふ時分からしと〳〵と降り出した。
「好く斯んな寒い晩に御出掛けでした」

嫂は輕く「えゝ」と答へたぎりであつた。自分は今迄坐つてゐた蒲團の裏を返して、それを三尺の床の前に直して、「さあ此方へ入らつしやい」と勸めた。彼女はコートの片袖をする〳〵と脱ぎながら「さう御客扱ひにしちや厭よ」と云つた。自分は茶器を濯がせる爲に電鈴を押した手を放して、彼女の顏を見た。寒い戸外の空氣に冷えた其頰は何時もより蒼白く自分の眸子を射た。不斷から淋しい片靨さへ平生とは違つた意味の淋しさを消える瞬間にちら〳〵と動かした。

「まあ好いから其處へ坐つて下さい」

彼女は自分の云ふ通りに蒲團の上に坐つた。さうして白い指を火鉢の上に翳した。彼女はその姿から想像される通り手爪先の尋常な女であつた。彼女の持つて生れた道具のうちで、初めから自分の注意を惹いたものは、華奢に出來上がつた其手と足とであつた。

「二郎さん、貴方も手を出して御あたりなさいな」

自分は何故か躊躇して手を出しかねた。其時雨の音が窓の外で蕭々とした。晝間吹き募つた西北の風は雨と共にぱつたりと落ちたため世間は案外靜かになつてゐた。只時を區切つて樋を叩く雨滴の音丈がぽたりぽたりと響いた。嫂は平生の通り落ち附いた態度で、室の中を見廻しながら「成程好い御室ね、さうして靜かだ事」と云つた。

「夜だから好く見えるんです。晝間來て御覽なさい、隨分汚らしい室ですよ」

自分は少時嫂と應對してゐた。けれども今自白すると腹の中に話しの調子で示される程穩やかなものでは決してなかつた。自分は嫂が此下宿へ訪ねて來ようとは其時迄決して豫期してゐなかつたのである。空想にすら描いてゐなかつたのである。彼女の姿を上り口の土間に見出だした時自分ははつと驚いた。さうして其驚きは喜びの驚きよりも寧ろ不安の驚きであつた。

「何で來たのだらう。何で此寒いのにわざ〳〵來たのだらう。何でわざ〳〵晩になつて灯が點いてから來たのだらう」

是が彼女を見た瞬間の疑惑であつた。此疑惑に初手からこだはつた自分の胸には、火鉢を隔てて彼女と相對してゐる日常の態度の中に絶えざる壓迫があつた。それが自分の談話や調子に不愉快なそら〴〵しさを與へた。自分はそれを明らかに自覺した。それから其空々しさがよく相手の頭に映つてゐるといふ事も自覺した。けれども何うする譯にも行かなかつた。自分は嫂に「冴え返つて寒くなりましたね」と云つた。「雨の降るのに能く御出掛けですね」と云つた。「何うして今頃御出掛けです」と聞いた。對話が其處迄行つても自分の胸に少しの光明を投げなかつた時、自分は硬くなつた、さうしてジヨコンダに似た怪しい微笑の前に立ち竦まざるを得なかつた。

「二郎さんは少時會はないうちに、急に改まつちまつたのね」と嫂が云ひ出した。

「そんな事は有りません」と自分は答へた。

「いゝえ左右よ」と彼女が押し返した。

三

自分はつと立つて嫂の後へ廻つた。彼女は半間の床を背にして坐つてゐた。室が狹いので彼女の帶のあたりは殆ど杉の床柱とすれ／＼であつた。自分が其間へ一足割り込んだ時、彼女は窮屈さうに體軀を前の方へ屈めて「何をなさるの」と聞いた。自分は片足を宙に浮かした儘、床の奥から黑塗の重箱を取り出して、それを彼女の前へ置いた。

「一つ何うです」

斯う云ひながら蓋を取らうとすると、彼女は微かに苦笑を洩らした。重箱の中には白砂糖を振り懸けた牡丹餅が行儀よく竝べてあつた。昨日が彼岸の中日である事を自分は此牡丹餅によつて始めて知つたのである。自分は嫂の顏を見て眞面目に「食べませんか」と尋ねた。彼女は忽ち吹き出した。

「貴方も隨分ね、其御萩は昨日宅から持たせて上げたんぢやありませんか」

自分は已むを得ず苦笑しながら一つ頰張つた。彼女は自分の爲に湯呑へ茶を注いでくれた。

自分は此牡丹餅から彼女が今日墓詣りのため里へ行つて其歸り掛けに此處へ寄つたのだと云ふ事を漸く確めた。

「大變御無沙汰をしてゐますが、彼方でも別に御變りはありませんか」

「えゝ有り難う、別に……」

言葉寡なな彼女はたゞ簡單に斯う答へた丈であつたが、その後へ、「御無沙汰つて云へば、貴方番町へも隨分御無沙汰ね」と附け加へて、ことさらに自分の顏を見た。

自分は全く番町へは遠ざかつてゐた。始めは宅の事が苦になつて一週に一度か二度行かないと氣が濟まない位だつたが、何時か中心を離れて餘所からそつと眺める癖を養ひ出した。さうして其眺めてゐる間少なくとも事が起らずに濟んだといふ自覺が、無沙汰を無事の原因のやうに思はせてゐた。

「何故元のやうにちよく〳〵入らつしやらないの」

「少し仕事の方が忙しいもんですから」

「さう？本當に？左右ぢやないでせう」

自分は嫂から斯う追窮されるのに堪へなかつた。其上自分には彼女の心理が解らなかつた。他の人はどうあらうとも、嫂丈は此點に於て自分を追窮する勇氣のないものと今迄固く信じてゐたからである。自分は思ひ切つて「あなたは大膽過ぎる」と云はうかと思つた。けれども疾うに相手から小膽と見縊られてゐる自分は遂に卑怯であつた。

「本當に忙しいのです。實は此間から少し勉强しようと思つて、そろ〳〵其準備に取り懸かつたもんで

すから、つい近頃は何處へも出る氣にならないんです。僕も何時迄斯んな事をして愚圖々々してゐたつて詰らないから、今のうち少し本でも讀んで置いて、もう少ししたら外國へでも行つて見たいと思つてるんだから」

　此答の後半は本當に自分の希望であつた。自分は何でもいゝから只遠くへ行きたい行きたいと願つてゐた。

「外國つて、洋行？」と嫂が聞いた。

「まあ左右です」

「結構ね。御父さんに願つて早く遣つて御頂きなさい。妾話して上げませうか」

　自分も無駄と知りながらそんな事を幻のやうに考へてゐたのだが、彼女の言葉を聞いた時急に「御父さんは駄目ですよ」と首を振つて見せた。彼女はしばらく默つてゐた。やがて物憂さうな調子で「男は氣樂なものね」と云つた。

「些とも氣樂ぢやありません」

「だつて厭になれば何處へでも勝手に飛んで歩けるぢやありませんか」

四

自分は何時か手を出して火鉢へあたつてゐた。その火鉢は幾分か脊を高くかつ分厚に拵へたものであつたけれども、大きさから云ふと、普通の箱火鉢と同じ事なので、二人向ひ合せに手を翳すと、顔と顔との距離があまり近過ぎる位の位置にあつた。嫂は席に着いた初めから寒いといつて、猫脊の人のやうに、心持ち胸から上を前の方に屈めて坐つてゐた。彼女の此姿勢のうちには女らしいといふ以外に何の非難も加へやうがなかつた。けれども其結果として自分は勢ひ後へ反り返る氣味で座を構へなければならなくなつた。それですら自分は彼女の富士額を是程近く且長く見詰めた事はなかつた。自分は彼女の蒼白い頬の色を餤の如く眩しく思つた。

自分は斯ういふ比較的窮屈な態度の下に、彼女から突如として彼女と兄の關係が、自分が宅を出た後も唯好くない一方に進んで行く丈であるといふ厭な事實を聞かされた。彼女は是迄此方から問ひ掛けなければ、決して兄の事に就いて口を開かない主義を取つてゐた。たとひ此方から問ひ掛けても「相變らずですわ」とか、「何心配する程の事ぢやなくつてよ」とか答へて只微笑するのが常であつた。それを丸で逆さまにして、自分の最も心苦しく思つてゐる問題の眞相を、向うから積極的に此方へ吐き掛けたのだから、卑怯な自分は不意に硫酸を浴びせられた樣にひり〳〵とした。

然し一旦緒を見出だした時、自分は出來る丈根掘り葉掘り聞かうとした。けれども言葉の浪費を忌む彼女は、さう此方の思ひ通りにはさせなかつた。彼女の口にする所は重に彼等夫婦間に横たはる氣不味さ

の閃電に過ぎなかつた。さうして氣不味さの近因に就いては遂に一言も口にしなかつた。それを聞くと、彼女はたゞ「何故だか分らないのよ」といふ丈であつた。實際彼女にはそれが分らないのかも知れなかつた。又分つてゐる癖にわざと話さないのかも知れなかつた。

「何うせ妾が斯んな馬鹿に生れたんだから仕方がないわ。いくら何うしたつて爲るやうに爲るより外に道はないんだから。さう思つて諦めてゐれば夫迄よ」

彼女は初めから運命なら畏れないといふ宗教心を、自分一人で持つて生れた女らしかつた。其代り他の運命も畏れないといふ性質にも見えた。

「男は厭になりさへすれば二郎さん見たいに何處へでも飛んで行けるけれども、女は左右は行きませんから、妾なんか丁度親の手で植ゑ附けられた鉢植のやうなもので一遍植ゑられたが最後、誰か來て動かして呉れない以上、とても動けやしません。凝としてゐる丈です。立枯れになる迄凝としてゐるより外に仕方がないんですもの」

自分は氣の毒さうに見える此訴への裏面に、測るべからざる女性の強さを電氣のやうに感じた。さうして此強さが兄に對して何う働くかに思ひ及んだ時、思はずひやりとした。

「兄さんは只機嫌が惡い丈なんでせうね。外に何處も變つた所はありませんか」

「左右ね。夫や何とも云へないわ。人間だから何時何んな病氣に罹らないとも限らないから」

彼女はやがて帶の間から小さい女持ちの時計を出してそれを眺めた。室が靜かなので其蓋を締める音が意外に強く耳に鳴つた。恰も穩やかな皮膚の面に鋭い針の先が觸れたやうであつた。

「もう歸りませう。――二郎さん御迷惑でしたら斯んな厭な話しを聞かせて。妾今迄誰にもした事はないのよ、斯んな事。今日自分の宅へ行つてさへ默つてる位ですもの」

上り口に待つてゐた車夫の提灯には彼女の里方の定紋が附いてゐた。

五

其晩は靜かな雨が夜通し降つた。枕を叩くやうな雨滴の音の中に、自分は何時迄も嫂の幻影を描いた。濃い眉とそれから濃い眸子、それが眼に浮かぶと、蒼白い額や頰は、磁石に吸ひ附けられる鐵片の速度で、すぐ其周圍に反映した。彼女の幻影は何遍も打ち崩された。打ち崩される度に復同じ順序がすぐ繰り返された。自分は遂に彼女の唇の色迄鮮やかに見た。其唇の兩端にあたる筋肉が聲に出ない言葉の符號の如く微かに顫動するのを見た。それから、肉眼の注意を逃れようとする微細の渦が、靨に寄らうか崩れようかと迷ふ姿で、間斷なく波を打つ彼女の頰をありありと見た。

自分は夫位活きた彼女を夫位劇しく想像した。さうして雨滴の音のほたり／＼と響く中に、取り留めもない色々な事を考へて、火照つた頭を惱まし始めた。

彼女と兄との關係が惡く變る以上、自分の身體が何處に何う飛んで行かうとも、自分の心は決して安穩であり得なかつた。自分は此點に就いて彼女にもつと具體的な說明を求めたけれども、普通の女のやうに零碎な事實を訴への材料にしない彼女は、殆ど自分の要求を無視した樣に取り合はなかつた。自分は結果からいふと、焦慮らされる爲に彼女の訪問を受けたと同じ事であつた。

彼女の言葉は凡て影のやうに暗かつた。それでゐて、稻妻のやうに簡潔な閃きを自分の胸に投げ込んだ。自分は此影と稻妻とを綴り合はせて、若しや兄が此間中癇癪の高じた揚句、嫂に對して今迄にない手荒な事でもしたのではなからうかと考へた。打擲といふ字は折檻とか虐待とかいふ字と並べて見ると、忌まはしい殘酷な響を持つてゐる。嫂は今の女だから兄の行爲を全く此意味に解してゐるかも知れない。自分が彼女に兄の健康狀態を聞いた時、彼女は人間だから何時何んな病氣に罹るかも知れないと冷やかに云つて退けた。自分が兄の精神作用に掛念があつて此問を出したのは彼女にも通じてゐる筈である。從つて平生より猶冷淡な彼女の答は、美しい己の肉に加へられた鞭の音を、夫の未來に反響させる復讐の聲とも取れた。——自分は怖かつた。

自分は明日にも番町へ行つて、母からでもそつと彼等二人の近況を聞かなければならないと思つた。けれども嫂は既に明言した。彼等夫婦關係の變化に就いては何人もまだ知らない、又何人にも告げた事がないと明言した。影のやうな稻妻のやうな言葉のうちから其消息をぼんやりと燒きつけられたのは、天下に

自分の胸がたつた一つある計りであつた。
何故あれ程言葉の寡ない嫂が自分に丈それを話し出したのだらうか。彼女は平生から落ち附いてゐる。今夜も平生の通り落ち附いてゐた。彼女は昂奮の極訴へる所がないので、わざ〱自分を訪うたものとは思へなかつた。だいち訴へといふ言葉からしてが彼女の態度には不似合であつた。結果から云へば、自分は先刻云つた通り寧ろ彼女から焦慮らされたのであるから。
彼女は火鉢にあたる自分の顔を見て、「何故さう堅苦しくして入らつしやるの」と聞いた。自分が「別段堅苦しくはしてゐません」と答へた時、彼女は「だつて反つ繰り返つてるぢやありませんか」と笑つた。其時の彼女の態度は、細い人指しゆびで火鉢の向う側から自分の頰べたでも突つつきさうに狎れ〱しかつた。彼女は又自分の名を呼んで、「吃驚したでせう」と云つた。突然雨の降る寒い晩に来て、自分を驚かして遣つたのが、左も愉快な悪戯でもあるかの如くに云つた。……
自分の想像と記憶は、ほたり〱と垂れる雨滴の拍子のうちに、夫から夫からと留め度もなく深更迄廻轉した。

六

夫から三四日の間といふもの自分の頭は絶えず嫂の幽靈に追ひ廻された。事務所の机の前に立つて肝心

の圖を引く時ですら、自分は此祟りを拂ひ退ける手段を知らなかつた。或日には始終他人の手を借りて仕事を運んで行く樣な齒搔い思ひさへ加はつた。斯うして自分で自分を離れた氣分を持ちながら、上部丈を人並に遣つて行くのに傍の者は何故不審がらないのだらうと疑つて見たりした。自分は餘程前から事務所ではもう快活な男として通用しない樣になつてゐた。ことに近來は口數さへ碌に利かなかつた。それで此三四日間に起つた變化も亦他の注意に上らずに濟んでゐるのだらうと考へた。さうして自己と周圍と全く遮斷された人の淋しさを獨り感じた。

自分は此間に一人の嫂を色々に視た。――彼女は男子さへ超越する事の出來ないあるものを嫁に來た其日から既に超越してゐた。或は彼女には始めから超越すべき牆も壁もなかつた。始めから囚はれない自由な女であつた。彼女の今迄の行動は何物にも拘泥しない天眞の發現に過ぎなかつた。

或時は又彼女が凡てを胸のうちに疊み込んで、容易に己を露出しない所謂しつかりものの如く自分の眼に映じた。さうした意味から見ると彼女は有り觸れたしつかりものの域を遙かに通り越してゐた。あの落附き、あの品位、あの寡默、誰が評しても彼女はしつかりし過ぎたものに違ひなかつた。驚くべく圖々しいものであつた。

或刹那には彼女は忍耐の權化の如く、自分の前に立つた。さうして其忍耐には苦痛の痕迹さへ認められない氣高さが潛んでゐた。彼女は眉をひそめる代りに微笑した。泣き伏す代りに端然と坐つた。恰も其坐

つてゐる席の下からわが足の腐れるのを待つかの如くに。要するに彼女の忍耐は、忍耐といふ意味を通り越して、殆ど彼女の自然に近い或物であつた。

一人の嫂が自分には斯う色々に見えた。事務所の机の前、晝餐の卓の上、歸り途の電車の中、下宿の火鉢の周圍、さま〴〵の所でさま〴〵に變つて見えた。自分は他の知らない苦しみを他に言はずに苦しんだ。其間思ひ切つて番町へ出掛けて行つて、大體の樣子を探るのがともかくも順序だとは屢胸に浮かんだ。けれども卑怯な自分はそれを敢てする勇氣を有たなかつた。眼の前に怖い物のあるのを知りながら、わざと見ない爲に瞼を閉ぢてゐた。

すると五日目の土曜の午後に突然父から事務所の電話口迄呼び出された。

「御前は二郎かい」

「さうです」

「明日の朝一寸行くが好いかい」

「へえ」

「差支へがあるかい」

「いえ別に……」

「ぢや待つてゝ呉れ、好いだらうね。左樣なら」

父はそれで電話を切つて仕舞つた。自分は少なからず狼狽した。何の用事であるかをさへ確める餘裕を有たなかつた自分は、電話口を離れてから後悔した。もし用事があるなら呼び附けられさうなものだのにとすぐ變に思つても見た。父が向うから來るといふ違例な事が、此間の嫂の訪問に何か關係がある樣な氣がして、自分の胸は一層不安になつた。

下宿に歸つたら、大阪の岡田から來た一枚の繪端書が机の上に載せてあつた。それは彼等夫婦が佐野とお貞さんを誘つて、樂しい半日を郊外に暮らした記念であつた。自分は机に向つて長い間其繪端書を見詰めてゐた。

七

日曜には思ひ切つて寐坊をする癖のついてゐた自分も、次の朝丈は割合に早く起きた。飯を濟まして新聞を讀むと、其新聞が汽車を待ち合はせる間に買つて、せはしなく眼を通す時のやうに、何の見る所もない程、詰らなく感ぜられた。自分はすぐ新聞を棄てた。然し五六分經たないうちに又それを取り上げた。自分は煙草を吸つたり、眼鏡の曇りを丁寧に拭つたり、色々な所作をして、父の來るのを待ち受けた。

父は容易に來なかつた。自分は父の早起きをよく承知してゐた。彼の性急にも子供のうちから善く馴らされてゐた。落ち附かない自分は、電話でも掛けて、何うしたのか此方から父の都合を聞いて見ようかと

思つた。

母に狎れ拔いた自分は、常から父を憚つてゐた。けれども、本當の底を割つて見ると、柔和しい母の方が、苛酷しい父よりは却て怖かつた。自分は父に怒られたり小言を云はれたりする時に、恐縮はしながらも、矢つ張り男は男だと腹の中で思ふ事が度々あつた。けれども此場合は何時もと違つてゐた。いくら父でもさう容易く高を括る譯に行かなかつた。電話を掛けようとした自分は又掛け得ずに仕舞つた。

父はとう〳〵十時頃になつて遣つて來た。羽織袴で少し極り過ぎた服裝はしてゐたが、顏附は存外穩やかであつた。小さい時から彼の手元で育つた自分は、事のあるかないかを彼の顏色からすぐ判斷する功を積んでゐた。

「もつと早く御出でだらうと思つて先刻から待つてゐました」

「大方床の中で待つてたんだらう。早いのはいくら早くつても驚かないが、御前に氣の毒だからわざと遲く出掛けたのさ」

父は自分の汲んで出した茶を、飮むやうに嘗めるやうに、口の所へ持つて行つて、室の中をじろじろ見廻した。室には机と本箱と火鉢がある丈であつた。

「好い室だね」

父は自分達に對してもよく斯んな愛嬌を云ふ男であつた。彼が長年社交のために用ひ慣れた言葉は、遠

慮のない家庭に迄、何時か這入り込んで來た。それ程枯れた御世辭だから、それが自分には他の「御早う」位にしか響かなかつた。

彼は三尺の床を覗いて其處に掛けた幅物を眺め出した。

「丁度好いね」

其軸は特に此處の床の間を飾るために自分が父から借りて來た小形の半切であつた。彼が「是なら持つて行つても好い」と投げ出して呉れた丈あつて、自分には丁度好くも何ともない變なものであつた。自分は苦笑してそれを眺めてゐた。

其處には薄墨で棒が一本筋違に書いてあつた。其上に「此棒ひとり動かず、さはれば動く」と賛がしてあつた。要するに繪とも字とも片のつかない詰らないものであつた。

「御前は笑ふがね。是でも澁いものだよ。立派な茶懸になるんだから」

「誰でしたつけね書き手は」

「それは分らないが、何れ大德寺か何か……」

「さう〳〵」

父はそれで懸物の講釋を切り上げようとはしなかつた。大德寺がどうの、黄檗がどうのと、自分には丸で興味のない事を説明して聞かせた。仕舞に「此棒の意味が解るか」抔と云つて自分を惱ませた。

八

其日自分は父に伴れられて上野の表慶館を見た。今迄彼に隨いてさういふ所へ行つた事は幾度となくあつたが、まさかその爲に彼がわざ〱下宿へ誘ひに來ようとは思へなかつた。自分は父と共に下宿の門を出て上野へ向ふ途々も、今に彼の口から何か本當の用事が出るに違ひないと豫期してゐた。然しそれを此方から聞く勇氣はとても起らなかつた。兄の名も嫂の名も彼の前には封じられた言葉の如く、自分の聲帶を固く括り附けた。

表慶館で彼は利休の手紙の前に立つて、何々せしめ候……かね、といつた風に、解らない字を無理にほつほつ讀んで居た。御物の王羲之の書を見た時、彼は「ふうん成程」と感心してゐた。其書が又自分には至つて詰らなく見えるので「大いに人意を強うするに足るものだ」と云つたら、「何故」と彼は反問した。

二人は二階の廣間へ入つた。すると其處に應擧の繪がずらりと十幅ばかり懸けてあつた。それが不思議にも續きもので、右の端の巖の上に立つてゐる三羽の鶴と、左の隅に翼をひろげて飛んでゐる一羽の外は、距離にしたら約二三間の間悉く波で埋まつてゐた。

「唐紙に貼つてあつたのを、剝がして懸物にしたのだね」

一幅毎に殘つてゐる開閉の手摺れの痕と、引手の取れた部分の白い型を、父は自分に指し示した。自分

は廣間の眞中に立つて此雄大な畫を描いた昔の日本人を尊敬する事を、父の御蔭で漸く知つた。二階から下りた時、父は玉だの高麗燒だのの講釋をした。柹右衛門と云ふ名前も聞かされた。一番下らないのはのんかうの茶碗であつた。疲れた二人は遂に表慶館を出た。館の前を掩ふやうに聳えてゐる蒼黑い一本の松の木を右に見て、綺麗な小路をのそ〳〵歩いた。それでも肝心の用事に就いて、父は一言も云はなかつた。

「もうぢき花が咲くね」

「咲きますね」

二人は又のそ〳〵東照宮の前迄來た。

「精養軒で飯でも食ふか」

時計はもう一時半であつた。小さい時分から父に伴れられて外出する度に、屹度何處かで物を食ふ癖の附いた自分は、成人の後も御供と御馳走を引き離しては考へてゐなかつた。けれども其日は何故だか早く父に別かれたかつた。

行き掛けに氣の附かなかつた其精養軒の入口は、五色の旗で隙間なく飾られた綱を、何時の間にか縱横に渡して、絹帽の客を華やかに迎へてゐた。

「何かあるんですよ今日は。大方貸し切りなんでせう」

「成程」
父は立ち留まつて木の間にちら〱する旗の色を眺めてゐたが、やがて氣の附いた風で「今日は二十三日だつたね」と聞いた。其日は二十三日であつた。さうしてKといふ兄の知人の結婚披露の當日であつた。
「つい忘れてゐた。一週間ばかり前に招待狀が來てゐたつけ。一郎と直と二人の名宛で」
「Kさんはまだ結婚しなかつたのですかね」
「さうさ。善く知らないが、まさか二度目ぢやなからうよ」
二人は山を下りてとう〱其左側にある洋食屋に這入つた。
「此處は往來がよく見える。ことに寄ると一郎が、絹帽を被つて通るかも知れないよ」
「嫂さんも一所なんですか」
「さあ。何うかね」
二階の窓際近くに席を占めた自分達は、花で飾られた低い瓶を前に、廣々した三橋の通りを見下ろした。

九

食事中父は機嫌よく話した。然し用談らしい改まつたものは、珈琲を飲む迄遂に彼の口に上らなかつた。表へ出た時、彼は始めて氣の附いたらしい顏をして、向う側の白い大きな建物を眺めた。

「やあ何時の間にか勸工場が活動に變化してゐるね。些とも知らなかつた。何時變つたんだらう」

白い洋館の正面に金字で書いてある看板の周圍は、無數の旗の影で安價に彩どられてゐた。自分は職業柄、左も仰山らしく東京の眞中に立つてゐる此粗末な建築を、情ない眼附で見た。

「何うも驚くね世の中の早く變るには。さう思ふと己なぞも何時死ぬか分らない」

好い日曜なのと時刻が時刻なので、往來は今が人の出盛りであつた。華やかな色と、陽氣な肉と、浮いた足並の簇がるなかで斯う云つた父の言葉は、妙に周圍と調和を缺いてゐた。

自分は番町と下宿と方角の岐れる所で、父に別れようとした。

「用があるのかい」

「えゝ少し……」

「まあ好いから宅迄御出で」

自分は帽子の鍔へ手を懸けた儘躊躇した。

「いゝから御出でよ。自分の宅ぢやないか。偶には來るものだ」

自分は極りの惡い顔をして父の後に隨つた。父はすぐ後を振り向いた。

「宅ぢや近頃御前が來ないので、みんな不思議がつてるんだぜ。二郎は何うしたんだらうつて。遠慮が無沙汰といふが、御前のは無遠慮が無沙汰になるんだから猶惡い」

「さう云ふ譯でもありませんが。……」

「何しろ來るが好い。言譯は宅へ行つて、御母さんにたんとするさ。己はたゞ引つ張つて行く役なんだから」

父はずん／＼歩いた。自分は腹の中で恰も丁年未滿の若者のやうな自分の態度を苦笑しながら、默つて父と歩調を共にした。其日は此間とは打つて變つて、青春の第一日ともいふべき暖かい光を、南へ廻つた太陽が自分達の上へ投げかけてゐた。獺の襟を附けた重いとんびを纏つた父も、少し厚手の外套を着た自分も、先刻からの運動で、少し溫氣に蒸される氣味であつた。其春の半日を自分は父の御蔭で、珍らしく方々引つ張り廻された。此老いた父と、斯う肩を竝べて歩いた例は近頃頓となかつた。此老いた父と是から先もう何度斯うして歩けるものか夫も分らなかつた。

自分に鈍い不安のうちに、微かな嬉しさと、其嬉しさに伴なふ一種の果敢なさとを感じた。さうして不意に自分の胸を襲つた此感傷的な氣分に、成るべく己を任せるやうな心持で足を運ばせた。

「御母さんは驚いてるるよ。御彼岸に御萩を持たせて遣つても、返事も寄こさなければ、重箱を返しもしないつて。一寸でも好いから來ればいゝのさ。來られない譯が急に出來た譯でもあるまいし」

自分は何とも返事をしなかつた。

「今日は久し振に御前を伴れて行つて皆に會はせようと思つて。――御前一郎に近頃會つた事はあるま

い」

「えゝ實は下宿をする時挨拶をした限りです」

「それ見ろ。所が今日は生憎一郎が留守だがね。御父さんが上野の披露會の事を忘れてゐたのが惡かつたけれども」

自分は父に伴れられて、とう／＼番町の門を潛つた。

十

座敷に這入つた時、母は自分の顔を見て、「おや珍らしいね」と云つた丈であつた。自分は殆ど權柄づくで此處へ引つ張られて來ながらも、途々父の情を難有く感じてゐた。さうして暗に家に歸つてから母に會ふ瞬間の光景を豫想してゐた。その豫想が此一言で打ち崩されたのは案外であつた。父は家内の誰にも打ち合せをせずに、全く自分一人の考へで、此不心得な息子に親切を盡くして呉れたのである。お重は逃げた飼犬を見るやうな眼附で自分を見た。「そら迷子が歸つて來た」と云つた。嫂はたゞ「入らつしやい」と平生の通り言葉寡な挨拶をした。此間の晩一人で尋ねて來た事は、丸で忘れて仕舞つたといふ風に見えた。自分も人前を憚つて一口もそれに觸れなかつた。比較的陽氣なのは父であつた。彼は多少の諧謔と誇張とを交ぜて、今日何うして自分をおびき出したかを得意らしく母やお重に話した。おびき出すといふ

彼の言葉が自分には仰山でかつ滑稽に聞こえた。

「春になつたから、皆もちつと陽氣にしなくつちや不可ない。此頃のやうに默つて計りゐちや、丸で幽靈屋敷のやうで、くさ〳〵する丈だあね。桐畠でさへ立派な家が建つ時節ぢやないか」

桐畠といふのは家のつい近所にある角地面の名であつた。其處へ住まふと何か祟があるといふ昔からの言ひ傳へで、此間迄空地になつてゐたのを、此頃になつて漸く或人が買ひ取つて、大きな普請を始めたのである。父は自分の家が第二の桐畠になるのを恐れでもするやうに、活々と傍のものに話し掛けた。平生彼の居馴染んだ室は、奧の二間續きで、何か用があると、母でも兄でも、其處へ呼び出されるのが例になつてゐたが、其日はいつもと違つて、彼は始めから居間へは這入らなかつた。たゞ袴と羽織を脱ぎ棄てたなり、其處へ坐つた儘、長く自分達を相手に喋舌つてゐた。

久しく住み馴れた自分の家も、斯うして偶に來て見ると、多少忘れ物でも思ひ出すやうな趣きがあつた。出る時はまだ寒かつた。座敷の硝子戸は大抵二重に鎖されて、庭の苔を殘酷に地面から引き剝がす霜が一面に降つてゐた。今は其外側の仕切が悉く戸袋の中に收められて仕舞つた。內側も左右に開かれてゐた。許す限り家の中と大空と續くやうにしてあつた。樹も苔も石も自然から直接に眼の中へ飛び込んで來た。凡てが出る時と趣きを異にしてゐた。凡てが下宿とも趣きを異にしてゐた。

自分は斯ういふ過去の記念のなかに坐つて、久し振に父母や妹や嫂と一所に話しをした。家族のうち

で其處にゐないものは唯兄丈であつた。其兄の名は先刻からまだ一度も誰の會話にも上らなかつた。自分は其日彼がKさんの披露會に呼ばれたといふ事を聞いた。自分は彼が其招待に應じたか、上野へ出掛けたか、果して留守であるかさへ知らなかつた。自分は自分の前にゐる嫂を見て、彼女が披露の席に臨まないといふ事丈を確めた。

自分は兄の名が話頭に上らないのを苦にした。同時に彼の名が出て來るのを憚つた。さうした心持でみんなの顏を見ると、無邪氣な顏は一つもないやうに思へた。

自分はしばらくしてお重に「お重御前の室を一寸御見せ。綺麗になつたつて威張つてたから見てやらう」と云つた。彼女は「當り前よ、威張る丈の事はあるんだから行つて御覽なさい」と答へた。自分は下宿をする迄朝夕寢起きをした、家中で一番馴染の深い、故のわが室を覗きに立つた。お重は果して後から隨いて來た。

十一

彼女の室は自慢する程綺麗にはなつてゐなかつたけれども、自分の住み荒らした昔に比べると、何處かになまめいた匂が漂つてゐた。自分は机の前に敷いてある派出な模樣の座蒲團の上に胡坐をかいて、「成程」と云ひながら其處いらを見廻した。

机の上には和製のマジョリカ皿があつた。薔薇の造り花がセヾツションヨン式の一輪瓶に挿してあつた。白い大きな百合を刺繍にした壁飾りが横手に懸けてあつた。

「ハイカラぢやないか」

「ハイカラよ」

お重の澄ました顏には得意の色が見えた。

自分はしばらく其處でお重に調戯つてゐた。五六分してから彼女に「近頃兄さんは何うだい」と左も偶然らしく問ひ掛けて見た。すると彼女は急に聲を潛めて、「そりや變なのよ」と答へた。彼女の性質は嫂とは全く反對なので、斯う云ふ場合には大變都合が好かつた。一旦緒口さへ見出だせば、あとは此方で水を向ける必要も何もなかつた。隱す事を知らない彼女は腹にある事を悉く話した。默つて聞いてゐた自分にも仕舞には蒼蠅い程であつた。

「つまり兄さんが家のものとあんまり口を利かないと云ふんだらう」

「えゝ左右よ」

「ぢや僕の家を出た時と同じ事ぢやないか」

「まあ左右よ」

自分は失望した。考へながら、煙草の灰をマジョリカ皿の中へ遠慮なくはたき落とした。お重は厭な顏

をした。

「それペン皿よ。灰皿ぢやないわよ」

自分は嫂程に頭の出來てゐないお重から、何も得る所のないのを覺つて、又父や母のゐる座敷へ歸らうとした時、突然妙な話を彼女から聞いた。

その話によると、兄は此頃テレパシーか何かを眞面目に研究してゐるらしかつた。彼はお重を書齋の外に立たして置いて、自分で自分の腕を抓つた後「お重、今兄さんは此處を抓つたが、御前の腕も其處が痛かつたらう」と尋ねたり、又は室の中で茶碗の茶を自分一人で飲んで置きながら、「お重御前の咽喉は今何か飲む時のやうにぐび〱鳴りやしないか」と聞いたりしたさうである。

「妾說明を聞く迄は、きつと氣が變になつたんだと思つて吃驚したわ。兄さんは後で佛蘭西の何とかいふ人の遣つた實驗だつて敎へて呉れたのよ。さうして御前は感受性が鈍いから罹らないんだつて云ふのよ。妾嬉しかつたわ」

「何故」

「だつてそんなものに罹るのはコレラに罹るより厭だわ妾」

「そんなに厭かい」

「極まつてゐるぢやありませんか。だけど、氣味が惡いわね、いくら學問だつてそんな事をしちや」

自分も可笑しいうちに何だか氣味の悪い心持がした。座敷へ歸つて來ると、嫂の姿はもう其處に見えなかつた。父と母は差し向ひになつて小さな聲で何か話し合つてゐた。其樣子は今しがた自分一人で家中を陽氣にした賑やかな人の樣子とも見えなかつた。「あゝ育てる積りぢやなかつたんだがね」といふ聲が聞こえた。

「あれぢや困りますよ」といふ聲も聞こえた。

十二

自分は其席で父と母から兄に關する近況の一般を聞いた。彼等の擧げた事實は、お重を通して得た自分の知識に裏書をする以外、別に新しい何物をも附け加へなかつたけれども、其樣子といひ言葉といひ、如何にも兄の存在を苦にしてゐるらしく見えて、甚だ痛々しかつた。彼等（ことに母）は兄一人のために宅中の空氣が濕つぽくなるのを辛いと云つた。尋常の父母以上にわが子を愛して來たといふ自信が、彼等の不平を一層濃く染めつけた。彼等はわが子から是程不愉快にされる因緣がないと暗に主張してゐるらしく思はれた。從つて自分か彼等の前に坐つてゐる間、彼等は兄を云々する外、何人の上にも非難を加へなかつた。平生から兄に對する嫂の仕打ちに飽き足らない顏を見せてゐた母でさへ、此時は彼女について終に一口も訴へがましい言葉を洩らさなかつた。

彼等の不平のうちには、同情から出る心配も多量に籠もつてゐた。彼等は兄の健康について少なからぬ掛念を有つてゐた。其健康に多少支配されなければならない彼の精神狀態にも冷淡ではあり得なかつた。要するに兄の未來は彼等にとつて、恐ろしいXであつた。

「どうしたものだらう」

是が相談の時必ず繰り返されべき言葉であつた。實を云へば、一人々々離れてゐる折ですら、胸の中でぼんやり繰り返して見るべき二人の言葉であつた。

「變人なんだから、今迄もよく斯んな事があつたには有つたんだが、變人丈にすぐ癒つたもんだがね。不思議だよ今度は」

兄の機嫌買ひを子供のうちから知り拔いてゐる彼等にも、近頃の兄は不思議だつたのである。陰鬱な彼の調子は、自分が下宿する前後から今日迄少しの晴れ間なく續いたのである。さうして夫が段々險惡の一方に向つて眞直に進んで行くのである。

「本當に困つちまふよ妾だつて。腹も立つが氣の毒でもあるしね」

母は訴へるやうに自分を見た。

自分は父や母と相談の揚句、兄に旅行でも勸めて見る事にした。彼等が自分達の手際では到底駄目だからといふので、自分は兄と一番親密なHさんにそれを賴むが好からうと發議して二人の贊成を得た。然し

其頼み役には是非共自分が立たなければ濟まなかつた。春休みにはまだ一週間あつた。けれども學校の講義はもうそろ〳〵仕舞になる日取であつた。頼んで見るとすれば、早くしなければ都合が惡かつた。

「ぢや二三日うちに三澤の所へ行つて三澤からでも話して貰ふか、又様子によつたら僕がぢかに行つて話すか、何方かにしませう」

Hさんとそれ程懇意でない自分は、何うしても途中に三澤を置く必要があつた。三澤は在學中Hさんを保證人にしてゐた。學校を出てからも殆ど家族の一人の如く始終其處へ出入りしてゐた。

歸りがけに挨拶をしようと思つて、一寸嫂の室を覗いたら、嫂は芳江を前に置いて裸人形に美しい着物を着せて遣つてゐた。

「芳江大變大きくなつたね」

自分は芳江の頭へ立ちながら手を掛けた。芳江はしばらく顔を見なかつた叔父に突然綾されたので、少しはにかんだ樣に脣を曲げて笑つてゐた。門を出る時は彼是五時に近かつたが、兄はまだ上野から歸らなかつた。父は久し振だから飯でも食つて彼に會つて行けと云つたが、自分はとう〳〵それ迄腰を据ゑてゐられなかつた。

十三

翌日自分は事務所の歸りがけに三澤を尋ねた。丁度髪を刈りに今しがた出掛けた所だといふので、自分は遠慮なく上がり込んで彼を待つ事にした。

「此兩三日は滅切御暖かになりました。もうそろ〳〵花も咲くで御座いませう」

主人の歸る間座敷へ出た彼の母は、何時もの通り丁寧な言葉で自分に話し掛けた。

彼の室は例の如く繪だのスケッチだので鼻を突きさうであつた。中には額縁も何もない裸の儘を、ピンで壁の上にぢかに貼り附けたのもあつた。

「何だか存じませんが、好きだもので御座いますから、無暗と貼り散らかしまして」と彼の母は辯解がましく云つた。自分は横手の本棚の上に、丸い壺と竝べて置いてあつた一枚の油繪に眼を着けた。

それには女の首が描いてあつた。其女は黒い大きな眼を有つてゐた。さうしてその黒い眼の柔らかに濕つた、ぼんやりしさ加減が、夢の樣な匂を畫幅全體に漂はしてゐた。自分は凝とそれを眺めてゐた。彼の母は苦笑して自分を顧た。

「あれも此間いたづらに描きましたので」

三澤は畫の上手な男であつた。職業柄自分も繪の具を使ふ道位は心得てゐたが、藝術的の素質を饒かに有つてゐる點に於て、自分は到底彼の敵ではなかつた。自分は此繪を見ると共に可憐なオフィリヤを連想した。

「面白いです」と云つた。

「寫眞を臺にして描いたんだから氣分がよく出ない、いつそ生きてるうちに描かして貰へば好かつたなんて申して居りました。不幸な方で、二三年前に亡くなりました。折角御世話をして上げた御嫁入先も不緣でね、あなた」

油繪のモデルは三澤の所謂出戻りの御孃さんであつた。彼の母は自分の聞かない先に、彼女に就いて色色と語つた。けれども女と三澤との關係は一言も口にしなかつた。女の精神病に罹つた事にも丸で觸れなかつた。自分も夫を聞く氣は起らなかつた。却て話頭を此方で切り上げるやうにした。

問題は彼女を離れるとすぐ三澤の結婚談に移つて行つた。彼の母は嬉しさうであつた。

「あれも色々御心配を掛けましたが、今度漸く極まりまして……」

此間三澤から受取つた手紙に、少し一身上の事に就いて、君に話しがあるから其内是非行くと書いてあつたのが、此話しでやつと悟れた。自分は彼の母に對して、たゞ人並の祝意を表して置いたが、心のうちでは其嫁になる人は、果して此油繪に描いてある女のやうに、黑い大きな滴るほどに潤つた眼を有つてるだらうか、それが何より先に確めて見たかつた。

三澤は思つた程早く歸らなかつた。彼の母は大方歸りがけに湯にでも行つたのだらうと云つて、何なら見せに遣らうかと聞いたが、自分はそれを斷つた。然し彼女に對する自分の話しは、氣の毒な程實が入ら

なかつた。

三澤に何うだらうと云つた自分の妹のお重は、まだ何處へ行くとも極まらずに愚圖々々してゐる。さういふ自分もお重と同じ事である。折角身の堅まつた兄と嫂は折り合はずにゐる。――斯んな事を對照して考へると、自分は何うしても快活になれなかつた。

十四

其内三澤が歸つて來た。近頃は身體の具合が好いと見えて、髪を刈つて湯に入つた後の彼の血色は、殊につや〳〵しかつた。健康と幸福、自分の前に胡坐をかいた彼の顏はたしかに此二つのものを物語つてゐた。彼の言語態度も亦それに匹敵して陽氣であつた。自分の持つて來た不愉快な話しを、突然と切り出すには餘りに快活すぎた。

「君何うかしたか」

彼の母が席を立つて二人差向ひになつた時、彼は斯う問ひ掛けた。自分は澁りながら、兄の近況を彼に訴へなければならなかつた。其兄を勸めて旅行させるやうに、彼からHさんに頼んで呉れと云はなければならなかつた。

「父や母が心配するのを只默つて見てゐるのも氣の毒だから」

此最後の言葉を聞く迄、彼は尤もらしく腕組をして自分の膝頭を眺めてゐた。

「ぢや君と一所に行かうぢやないか。一所の方が僕一人より好からう、精しい話しが出來て」

三澤にそれ丈の好意があれば、自分に取つても、それに越した都合はなかつた。彼は着物を着換へると云つてすぐ座を起つたが、しばらくすると又襖の陰から顔を出して、「君、母が久し振だから君に飯を食はせたいつて今支度をしてゐる所なんだがね」と云つた。自分は落ち附いて馳走を受ける氣分を有つてゐなかつた。然しそれを斷つたにした所で、飯は何處かで食はなければならなかつた。自分は曖昧な返事をして、早く立ちたいやうな氣のする尻を元の席に据ゑてゐた。さうして本棚の上に載せてある女の首をちよいちよい眺めた。

「どうも何も御座いませんのに、御引き留め申しまして嘸御迷惑で御座いましたらう。ほんの有合せで」

三澤の母は召使に膳を運ばせながら又座敷へ顔を出した。膳の端には古さうに見える九谷燒の猪口が載せてあつた。

それでも三澤と一所に出たのは思つたより早かつた。電車を降りて五六丁歩いて、Hさんの應接間に通つた時、時計を見たらまだ八時であつた。

Hさんは銘仙の着物に白い縮緬の兵兒帶をぐる〱巻き附けた儘、椅子の上に胡坐をかいて、「珍らしい

御客さんを連れて來たね」と三澤に云つた。丸い顔と丸い五分刈の頭を有つた彼は、支那人のやうにでく〳〵肥つてゐた。話し振も支那人が慣れない日本語を操る時のやうに、鈍かつた。さうして口を開くたびに、肉の多い頬が動くので、始終にこ〳〵してゐるやうに見えた。

彼の性質は彼の態度の示す通り鷹揚なものであつた。彼に比較的堅固でない椅子の上に、わざ〳〵両足を載せて胡坐をかいたなり、傍から見ると左も窮屈さうな姿勢の下に、夷然として落ち附いてゐた。兄とは殆ど正反對な此樣子なり氣風なりが、却て兄と彼とを結び附ける一種の力になつてゐた。何にも逆らはない彼の前には、兄も逆らふ氣が出なかつたのだらう。自分はHさんの惡口を云ふ兄の言葉を、今迄つひぞ一度も聞いた事がなかつた。

「兄さんは相變らず勉強ですか。あゝ勉強しては不可ないね」

悠長な彼は斯う云つて、自分の吐いた烟草の烟を眺めてゐた。

十五

やがて用事が三澤の口から切り出された。自分はすぐ其後に隨いて主要な點を說明した。Hさんは首を捻つた。

「そりや少し妙ですね、そんな筈はなささうだがね」

彼の不審は決して僞りとは見えなかつた。彼は昨日Kの結婚披露に兄と精養軒で會つた。そこを出る時にも一所に出た。話しが途切れないので、浮か〳〵と二人連れ立つて歩いた。仕舞に兄が疲れたといつた。Hさんは自分の家に兄を引つ張つて行つた。

「兄さんは此處で晩飯を食つた位なんだからね、何うも少しも不斷と違つた所はないやうでしたよ」

我儘に育つた兄は、平生から家で氣六づかしい顏に、外では至極穩やかであつた。然しそれは昔の兄であつた。今の彼を、たゞ我儘の二字で說明するのは餘りに單純過ぎた。自分は已むを得ず其時兄がHさんに向つて重に何んな話しをしたか、差支へない限りそれを聞かうと試みた。

「なに別に家庭の事なんか一口も云やしませんよ」

是も噓ではなかつた。記憶の好いHさんは、其時の話題を明瞭に覺えてゐて、それを最も淡白な態度で話して呉れた。

兄は其時しきりに死といふものに就いて云々したさうである。彼は英吉利や亞米利加で流行る死後の研究といふ題目に興味を有つて、大分其方面を調べたさうである。けれども、何れも是も彼には不滿足だと云つたさうである。彼はメーテルリンクの論文も讀んで見たが、矢張り普通のスピリチユアリズムと同じ樣に詰らんものだと嘆息したさうである。

兄に關するHさんの話しは、凡て學問とか研究とかいふ側計りに限られてゐた。Hさんは兄の本領とし

て夫を當然の如くに思つてゐるらしかつた。けれども聞いてゐる自分は、どうしても此兄と家庭の兄とを二つに切り離して考へる譯には行かなかつた。寧ろ家庭の兄が斯ういふ研究的な兄を生み出したのだとしか理解出來なかつた。

「そりや動搖はしてゐますね。御宅の方の關係があるかないか、そこは僕にも解らないが、何しろ思想の上で動搖して落ち附かないで弱つてゐる事は慥かなやうです」

Hさんは仕舞に斯う云つた。彼は其上に兄の神經衰弱も肯つた。然し夫は兄の隱してゐる事でも何でもなかつた。兄はHさんに會ふたんびに、ほとんど極り文句のやうに、それを訴へて已まなかつたさうである。

「だから此際旅行は至極好いでせうよ。さう云ふ譯なら一つ勸めて見ませう。然しうんと云つてすぐ承知するかね。中々動かない人だから、ことによると六づかしいね」

Hさんの言葉には自信がなかつた。

「貴方の仰しやる事なら素直に聞くだらうと思ふんですが」

「左右も行かんさ」

Hさんは苦笑してゐた。

表へ出た時は彼是十時に近かつた。それでも閑靜な屋敷町にちらほら人の影が見えた。それが皆そゞろ

歩きでもするやうに、長閑に履物の音を響かして行つた。空には星の光が鈍かつた。恰も眠たい眼をしばたゝいてゐるやうな鈍さであつた。自分は不透明な何物かに包まれた氣分を抱いた。さうして薄明るい往來を三澤と二人肩を並べて歸つた。

十六

自分は首を長くしてHさんの消息を待つた。花のたよりが都下の新聞を賑はし始めた一週間の後になつても、Hさんからは何の通知もなかつた。自分は失望した。電話を番町へ掛けて聞き合はせるのも厭になつた。何うでもするが好いといふ氣分で凝としてゐた。そこへ三澤が來た。

「何うも旨く行かないさうだ」

事實は果して自分の想像した通りであつた。兄はHさんの勸誘を斷然斷つて仕舞つた。Hさんは已むを得ず三澤を呼んで、其結果を自分に傳へるやうに賴んだ。

「それでわざ〳〵來て呉れたのかい」

「まあ左右だ」

「何うも御苦勞さま、濟まない」

自分は是以上何を云ふ氣も起らなかつた。

「Hさんはあゝ云ふ人だから、自分の責任のやうに氣の毒がつてゐる。今度は事が餘り突然なので旨く行かなかつたが、此次の夏休みには是非何處かへ連れ出す積りだと云つてゐた」

自分は斯ういふ慰藉をもたらしてくれた三澤の顏を見て苦笑した。Hさんのやうな大悠な人から見たら、春休みも夏休みも同じ事なんだらうけれども、内側で働いてゐる自分達の眼には、夏休みといへば遠い未來であつた。其遠い未來と現在の間には大きな不安が潛んでゐた。

「然しまあ仕方がない。元々此方で勝手なプログラムを拵へて置いて、それに當てはまるやうに兄を自由に動かさうといふんだから」

自分はとう／＼諦めた。三澤は何も批評せずに、机の角に肱を突き立てて、其上に顏を載せたなり自分の顏を眺めてゐた。彼はしばらくしてから、「だから僕のいふ通りにすれば好いんだ」と云つた。

此間Hさんに兄の事を依賴しに行つた歸り途に、無言な彼は突然往來の眞中で自分を驚かしたのである。今迄兄の事に就いて一言も發しなかつた彼は、其時不意に自分の肩を突いて、「君兄さんを旅行させるの、快活にするのつて心配するより、自分で早く結婚した方が好かないか。其方がつまり君の得だぜ」と云つた。

彼が自分に結婚を勸めたのは、其晩が始めてではなかつた。自分は何時も相手がないとばかり彼に答へてゐた。彼は仕舞に相手を拵へて遣ると云ひ出した。さうして一時はそれが殆ど事實になり掛けた事もあ

つた。

自分は其晩の彼に向つても矢張り同じやうな挨拶をした。彼はそれを何時もより冷淡なものとして記憶してゐたのである。

「ぢや君のいふ通りにするから、本當に相手を出して呉れるかい」

「本當に僕のいふ通りにすれば、本當に好いのを出す」

彼は實際心當りがあるやうな口を利いた。近いうち彼の娶るべき女からでも聞いたのだらう。

彼はもう大きな黒い眼を有つた精神病の御孃さんに就いては多くを語らなかつた。

「君の未來の細君は矢つ張りあゝいふ顔立なんだらう」

「さあ何うかな。いづれそのうち引き合はせるから見て呉れ玉へ」

「結婚式は何時だい」

「ことによると向うの都合で秋迄延ばすかも知れない」

彼は愉快らしかつた。彼は來るべき彼の生活に、彼の有つてゐる過去の詩を投げ懸けてゐた。

十七

四月は何時の間にか過ぎた。花は上野から向島、それから荒川といふ順序で、段々咲いていつて段々散

つて仕舞つた。自分は一年のうちで人の最も嬉しがる此花の時節を無爲に送つた。然し月が替つて世の中が青葉で包まれ出してから、振り返つて遣り過ごした春を眺めると甚だ物足りなかつた。それでも無爲に送れた丈が難有かつた。

家へは其後一囘も足を向けなかつた。家からも誰一人尋ねて來なかつた。電話は母とお重から一二度掛かつたが、それは自分の着る着物に就いての用事に過ぎなかつた。三澤には全く會はなかつた。大阪の岡田からは花の盛りに繪葉書が又一枚來た。前と同じやうにお貞さんやお兼さんの署名があつた。

自分は事務所へ通ふ動物の如く暮らしてゐた。すると五月の末になつて突然三澤から大きな招待狀を送つて來た。自分は結婚の通知と早合點して封を裂いた。所が案外にもそれは富士見町の雅樂稽古所からの案內狀であつた。「六月二日音樂演習相催し候間同日午後一時より御來聽被下度候此段御案內申進候也」と書いてあつた。今迄斯ういふ方面に關係があるとは思はなかつた三澤が、何うしてこんな案內狀を自分に送つたのか、丸で解らなかつた。半日の後自分は又彼の手紙を受け取つた。其手紙には六月二日には、是非來いといふ文句が添へてあつた。是非來いといふ位だから彼自身は無論行くに極まつてゐる。自分は折角だからまづ行つて見ようと思ひ定めた。けれども雅樂そのものに就いては大した期待も何もなかつた。それよりも自分の氣分に轉化の刺激を與へたのは、三澤が餘事の如く名宛のあとへ附け足した、短かい報知であつた。

「Hさんは嘘を吐かない人だ。Hさんはとう〳〵君の兄さんを說き伏せた。此六月學校の講義を切り上げ次第、二人は何處かへ旅をする事に約束が出來たさうだ」

自分は父のため母のため且兄自身のため喜んだ。あの兄がHさんに對して旅行しようと約束する氣分になつたとすれば、單にそれ丈でも彼には大きな變化であつた。僞りの嫌ひな彼は必ずそれを實行する積りであるに違ひなかつた。

自分は父にも母にも實否を問ひ合はせなかつた。Hさんに向つても其消息を確める手段を取らなかつた。たゞ三澤の口からもう少し精しい所を聞かせて貰ひたかつた。それも今度會つた時で構はないといふ氣があるので、彼の是非來いといふ六月二日が暗に待ち受けられた。

六月二日は生憎雨であつた。十一時頃には少し歇んだが、季節が季節なのでからりとは晴れなかつた。往來を行く人は傘をさしたり疊んだりした。見附外の柳は烟のやうに長い枝を垂れてゐた。其下を通ると、青白い粉か黴が着物にくつ附いて何時迄も落ちないやうに感ぜられた

雅樂所の門內には俥が澤山竝んでゐた。馬車も一二臺ゐた。然し自働車は一つも見えなかつた。自分は玄關先で帽子を人に渡した。其人は金の釦鈕のついた制服のやうなものを着てゐた。もう一人の人が自分を觀覧席へ連れて行つて吳れた。

「其處いらへ御掛けなすつて」

彼はさう云つて又玄關の方へ歸つて行つた。椅子はまだ疎らに占領されてゐる丈であつた。自分は成るべく人の眼に着かないやうに後列の一脚に腰を下ろした。

十八

自分は心のうちで三澤を豫期しながら四方を見渡したが彼の姿は何處にも見えなかつた。尤も見所は正面の外左右兩側面にもあつた。自分は玄關から左へ突き當たつて右へ折れて金屏風の立ててある前を通つて正面席に案内されたのである。自分の前には紋附の女が二三人居た。後にはカーキー色の軍服を着けた士官が二人居た。その外六七人其處此處に散點してゐた。

自分から一席置いて隣の二人連は、舞臺の正面に掛かつてゐる幕の話しをしてゐた。それには雅樂に何の縁故もなささうに見える變な紋が、竪に何行も染め出されてゐた。

「あれが織田信長の紋ですよ、信長が王室の式微を慨いて、あの幕を獻上したといふのが始まりで、それから以後は必ずあの木瓜の紋の附いた幕を張る事になつてるんださうです」

幕の上下は紫地に金の唐草の模樣を置いた縁で包んであつた。

幕の前を見ると、眞中に太鼓が据ゑてあつた。その太鼓には緑や金や赤の美しい彩色が施されてあつた。さうして薄くて丸い枠の中に入れてあつた。左の端には火熨斗位の大きさの鐘が矢張り枠の中に釣るして

あつた。其外には琴が二面あつた。琵琶も二面あつた。
樂器の前は青い毛氈で敷き詰められた舞をまふ所になつてゐた。構造は能のそれのやうに、三方の見所からは全く切り離されてゐた。さうして其途切れた四五尺の空間からは日も射し風も通ふやうに出來てゐた。
自分が物珍らしさうに此樣子を見てゐるうちに、觀者は一人二人と絶えず集まつて來た。其中には自分がある音樂會で顏だけ覺えたNといふ侯爵もゐた。「今日は教育會があるので來られない」と細君の事か何かを、傍にゐた坊主頭の丸々と肥えた小さい人に話してゐた。此丸い小さな人がKといふ公爵である事を、自分は後で三澤から敎はつた。
其三澤は舞樂の始まるやつと五六分前にフロックコートで遣つて來て、入口の金屛風の所でしばらく觀席を見渡しながら躊躇してゐたが、自分の顏を見附けるや否や、すぐ傍へ來て腰を掛けた。
彼と前後して一人の脊の高い若い男が、年頃の女を二人連れて、矢張り正面席へ這入つて來た。男はフロックコートを着てゐた。女は無論紋附であつた。其男と伴れの女の一人が顏立から云つて好く似てゐるので、自分はすぐ彼等の兄妹である事を覺つた。彼等は人の頭を五六列越して、三澤と挨拶を交換した。男の顏には出來る丈の愛嬌が湛へられた。女は心持ち顏を赤くした。三澤はわざ〳〵腰を浮かして起立した。婦人は大抵前の方に席を占めるので、彼等は遂に自分達の傍へは來なかつた。

「あれが僕の妻になるべき人だ」と三澤は小聲で自分に告げた。自分は腹の中で、あの夢のやうな大きい黒い眼の所有者であつた精神病の御孃さんと、自分の二三間前に今席を取つた色澤の好い御孃さんとを比較した。彼女は自分にたゞ黒い髮と白い襟足とを見せて坐つてゐた。それも人の影に遮られて自由には見られなかつた。

「もう一人の女ね」と三澤が又小聲で云ひ掛けた。それから彼は突然ポッケットへ手を入れて、白い紙片と萬年筆を取り出した。彼はすぐそれへ何か書き始めた。正面の舞臺にはもう樂人が現はれた。

十九

彼等は帽子とも頭巾とも名の附けやうのない奇拔なものを被つてゐた。謠曲の富士太鼓を知つてゐた自分は、大方これが鳥兜といふものだらうと推察した。首から下も被りものと同じく現代を超越してゐた。彼等は錦で作つた社杯のやうなものを着てゐた。其社杯には骨がないので肩のあたりは柔らかな線でぴたりと身體に附いてゐた。袖には白の先へ幅三寸位の赤い絹が縫ひ足してあつた。彼等はみな白の括り袴を穿いてゐた。さうして一樣に胡坐をかいた。

三澤は膝の上で何か書き掛けた白い紙を苦茶々々にした。自分は其苦茶々々になつた紙の塊りを横から眺めた。彼は一言の説明も與へずに正面を見た。青い毛氈の上に左の帳の陰から現はれたものは鉾を有つ

てゐた。是も管絃を奏する人と同じく錦の袖無を着てゐた。

三澤は何時迄經つても「もう一人の女はね」の續きを云はなかつた。觀覽席にゐるものは悉く靜肅であつた。隣同志で話しをするのさへ憚かられた。自分は仕方なしに催促を我慢した。三澤も空とぼけて澄ましてゐた。彼は自分と同じやうに此處へは始めて顔を出したので、少し硬くなつてゐるらしかつた。

舞は謹愼な見物の前に、既定のプログラム通り、單調で上品な手足の運動を飽きもせずに進行させて行つた。けれども彼等の服裝は、題の改まる毎に、閑雅な上代の色彩を、代る〲自分達の眼に映しつゝ過ぎた。あるものは冠に櫻の花を插してゐた。紗の大きな袖の下から燃えるやうな五色の紋を透かせてゐた。黄金作の太刀も佩いてゐた。あるものは袖口を括つた朱色の着物の上に、唐錦のちやん〲を膝のあたり迄垂らして、丸で錦に包まれた獵人のやうに見えた。あるものは蓑に似た青い衣をばら〲に着て、同じ青い色の笠を腰に下げてゐた。――凡てが夢のやうであつた。昔々の祖先が殘して行つた遠い記念の匂がした。みんな難有さうな顔をしてそれを觀てゐた。三澤も自分も狐に撮まれた氣味で坐つてゐた。

舞樂が一段落ついた時に、御茶を上げますと誰かが云つたので周圍の人は席を立つて別室に動き始めた。其處へ先刻三澤と約束の整つたといふ女の兄さんが來て、物馴れた口調で彼と話した。彼は斯ういふ方面に關係のある男と見えて、當日案内を受けた誰彼をよく知つてゐた。三澤と自分は此人から今迄そこいらにゐた華族や高官や名士の名を敎へて貰つた。

別室には珈琲とカステラとチヨコレートとサンドヰッチがあつた。普通の會の時のやうに、無作法な振舞は見受けられなかつたけれども、それでも多少込み合ふので、女は坐つたなり席を立たないのがあつた。三澤と彼の知人は、菓子と珈琲を盆の上に載せて、わざ〳〵二人の御孃さんの所へ持つて行つた。自分はチヨコレートの銀紙を剝がしながら、敷居の上に立つて、遠くから其樣子を偸むやうに眺めてゐた。三澤の細君になるべき人は御辭儀をして、珈琲茶碗丈を取つたが、菓子には手を觸れなかつた。所謂「もう一人の女」は其珈琲茶碗にさへ容易く手を出さなかつた。三澤は盆を持つた儘、引く事も出來ず進む事も出來ない態度で立つてゐた。女の顏が先刻見た時よりも子供々々した苦痛の表情に充ちてゐた。

二十

自分は先刻から「もう一人の女」に特別の注意を拂つてゐた。それには三澤の樣子や態度が有力な原因となつて働いてゐたに違ひないが、單獨に云つても、彼女は自分の視線を引き着けるに足る程な好い器量を有つてゐたのである。自分は彼女と三澤の細君になるべき人との後姿を、舞樂の相間々々に絕えず眺めた。彼等は自分の坐つてゐる所から、ことさらな方向に眸子を轉ずる事なしに、自然と見られるやうに都合の好い位地に坐つてゐた。

斯うして首筋ばかり眺めてゐた自分は今比較的自由な場所に立つて、彼等の顏立を筋違に見始めた。或

は正面に動く機會が來るかも知れないと思つた時、自分はチヨコレートを頬張りながら、暗に其瞬間を捉へる注意を怠らなかつた。けれども其女も三澤の意中の人も、遂に此方を向かなかつた。自分はたゞ彼等の容貌を三分の二丈側面から遠くに望んだ。

其内三澤は又盆を持つて此方へ歸つて來た。自分の傍を通る時、彼は微笑しながら、「何うだい」と云つた。自分はたゞ「御苦勞さま」と挨拶した。後から例の脊の高い兄さんが遣つて來た。

「何うです、彼方へ入らしつて煙草でも御呑みになつちや。喫煙室はあすこの突き當りです」

自分と三澤との間に緒口の附き掛けた談話は是で又流れて仕舞つた。二人は彼に導かれて喫煙室に這入つた。煙と男子に占領された比較的狹い其室は思つたより賑やかであつた。

自分は其一隅にたゞ一人の知つた顏を見出だした。それは伶人の姓を有つた眼の大きい男であつた。ある協會の主要な一員として、舞臺の上で巧みに其大きな眼を利用する男であつた。彼は臺詞を使ふ時のやうな深い聲で、誰かと話してゐたが、殆ど自分達と入れ代り位に、喫煙室を出て行つた。

「とう／＼役者になつたんださうだ」

「儲かるのかね」

「えゝ儲かるんだらう」

「此間何とかを遣るといふ事が新聞に出てゐたが、あの人なんですか」

「えゝさうださうです」

彼の去つた後で、室の中央にゐた三人の男は斯んな話しをしてゐた。三澤の知人は自分達に其三人の名を教へて呉れた。其うちの二人は公爵で、一人は伯爵であつた。さうして三人が三人とも公卿出の華族であつた。彼等の會話から察すると、三人ながら殆ど劇といふ藝術に對して何の知識も興味も有つてゐないやうであつた。

我々は又元の席に歸つて二三番の歐洲樂を聞いた後、漸く五時頃になつて雅樂所を出た。周圍の人が居なくなつた時、三澤は漸く「もう一人の女」の事に就いて語り始めた。彼の考へは自分が最初から推察した通りであつた。

「何うだい、氣に入らないかね」

「顏は好いね」

「顏丈かい」

「あとは分らないが、然し少し舊式ぢやないか。何でも遠慮さへすればそれが禮儀だと思つてゐるやうだね」

「家庭が家庭だからな。然しあゝいふのが間違ひがないんだよ」

二人は土手に沿うて歩いた。土手の上の松が雨を含んで蒼黑く空に映つた。

二十一

自分は三澤と飽かず女の話しをした。彼の娶るべき人は宮内省に關係のある役人の娘であつた。其伴侶は彼女と仲の好い友達であつた。三澤は彼女と打ち合せをして、とくに自分のために其人を誘ひ出したのであつた。自分は其人の家族やら地位やら教育やらについて得らるゝ限りの知識を彼から供給して貰つた。

自分は本末を顚倒した。雅樂所で三澤に會ふ迄は、Hさんと兄とが此夏一所にするといふ旅行の件を、其日の問題として暗に胸の中に疊み込んでゐた。雅樂所を出る時は、それがほんの附けたりになつて仕舞つた。自分は愈彼に別れる間際になつて、始めて四つ角の隅に立つた。

「兄の事も今日君に會つたらよく聞かうと思つてゐたんだが、愈Hさんの云ふ通りになつたんだね」

「Hさんはわざ〳〵僕を呼び寄せてさう云つた位なんだから間違ひはないさ。大丈夫だよ」

「何處へ行くんだらう」

「そりや知らない。――何處だつて好いぢやないか、行きさいすりやあ」

遠くから見てゐる三澤の眼には、兄の運命が最初から夫程の問題になつてゐなかつた。

「それより片つ方のはうを積極的にどし〳〵進行させようぢやないか」

自分は一人下宿へ歸る途々、矢張り兄と嫂の事を考へない譯に行かなかつた。然し其日會つた女の事も

或は彼等以上に考へたかも知れない。自分は彼女と一言も口を交へなかつた。自分は遂に彼女の聲を聞き得なかつた。三澤は自然が二人を視線の通ふ一室に會合させたといふ事實以外に、わざとらしい痕迹を見せるのは厭だと云つて、紹介も何もしなかつた。彼はさう云つて後から自分に斷つた。彼の遣り口は、彼女に取つても自分に取つても、面倒や迷惑の起り得ない程單簡で淡泊なものであつた。然し夫だから物足りなかつた。自分はもう少し何とかして貰ひたかつた。「然し君の意志が解らなかつたから」と三澤は辯解した。さう云はれて見ると、さうでもあつた。自分はあれ以上、女を目掛けて進んで行く考へはなかつたのだから。

夫から二三日は女の顏を時々頭の中で見た。然しそれが爲に、又會ひたいの焦慮るのといふ熱は起らなかつた。その當日のはつとした色彩が剝げて行くに連れて、番町の方が依然として重要な問題になつて來た。自分はなまじひ遠くから女の匂を嗅いた反動として、却てぢゞむさくなつた。事務所の往復に、ざら〱した頰を撫でゝ見て、手もなく電車に乘つた貉の樣なものだと悲觀したりした。

一週間程經つて母から電話がかゝつた。彼女は電話口へ出て、昨日Hさんが遊びに來た事を告げた。嫂が風邪氣なので、彼女が代理として饗應の席に出たら、Hさんが兄と一所に旅行する話しを始めたと告げた。彼女は喜ばしさうな調子で、自分に禮を述べた。父からも宜しくとの事であつた。自分は「いゝ案排でした」と答へた。

自分は其晩色々考へた。自分は旅行が兄のために有利であると認めたから、Hさんを煩はして、是丈の手續を運んだのであるが、眞底を自白すると、自分の最も苦に病んでるるのは、兄の自分に對する思はくであつた。彼は自分を何う見てるるだらうか。どの位の程度に自分を憎んでるるだらう、又疑つてるるだらう。其處が一番知りたかつた。從つて自分の氣になるのは未來の兄であると同時に現在の兄であつた。久しく彼と會見の路を絕たれた自分は、其現在の兄に關する直接の知識を殆ど有たなかつた。

二十二

自分は旅行に出る前のHさんに一應會つて置く必要を感じた。此方で頼んだ事を順に運んで吳れた好意に對して、禮を云はなければ濟まない義理も控へてるた。

自分は事務所の歸り掛けに又彼の玄關に立つて名刺を出した。取次が奧へ這入つたかと思ふと、彼は例のむく〳〵した丸い體軀を、自分の前に運んで來た。

「實は今あしたの講義で苦しんでるる所なんですがね。もし急用でなければ、今日は御免を蒙りたい」

學者の生活に氣の附かなかつた自分は、Hさんの此言葉で急に兄の日常を想ひ起した。彼等の書齋に立て籠もるのは、必ずしも家庭や社會に對する謀反とも限らなかつた。自分はHさんに都合の好い日を聞いて、又出直す事にした。

「おや御氣の毒だが、さうして下さい。成るべく早く講義を切り上げて、兄さんと一所に旅行しようと云ふ譯なんだからね」

自分はHさんの前に丁寧な頭を下げなければならなかつた。

彼の家を再度訪問したのは、夫から又二三日經つた梅雨晴れの夕方であつた。肥つた彼は暑いと云つて浴衣の胸を胃の上部迄開け放つて坐つてゐた。

「さあ何處へ行くかね。まだ海とも山とも極めてゐないんだから」

Hさん丈あつて行く先抔は頓と苦にしてゐないらしかつた。自分も夫には無頓着であつた。けれども……
……。

「少しそれに就いて御願ひがあるんですが」

家庭の事情の一般は、此間三澤と來た時、既にHさんの耳に入れて仕舞つた。然し兄と自分との間に横たはる一種特別な關係に就いては、まだ一言も彼に告げてゐなかつた。然し夫は何時迄經つてもHさんの前で自分から打ち明けるべき性質のものではないと自分は考へてゐた。親しい三澤の知識ですら、其處になると殆ど臆測に過ぎなかつた。Hさんは三澤から其臆測の知識を間接に受けてゐるかも知れなかつたけれども、此方から露骨に切り出さない以上、その眞僞も程度も丸で確める譯に行かなかつた。

自分は兄から今何う見られてゐるか、何う思はれてゐるか、それが知りたくつて仕方がなかつた。それ

を知るために、此際Hさんの助けを借りようとすれば、勢ひ萬事を彼の前に投げ出して見せなければならなかつた。自分が三澤に何事も云はずに、恰も彼を出し抜いた樣な態度で、たつた一人斯うしてHさんを訪問するのも、實は其用事の眞相を成るべく他に知らせたくないからであつた。然し三澤に對してさへ、良心に氣兼ねをするやうな用事の眞相なら、それをHさんの前で云はれる筈がなかつた。

自分は已むを得ず特殊な問題を一般的に崩して仕舞つた。

「甚だ御迷惑かも知れませんが、兄と一所に旅行される間、兄の擧動なり言語なり、思想なり感情なりに就いて、貴方の御觀察になつた所を、出來る丈詳しく書いて報知して頂く譯には行きますまいか。その邊が明瞭になると、宅でも兄の取扱上大變便宜を得るだらうと思ふんですが」

「左右さね。絶對に出來ない事もないが、ちつと六づかしさうですね。だいゝち時間がないぢやないか、君、そんな事をする。よし時間があつても、必要がないだらう。それより僕等が旅行から歸つたらゆつくり聞きに來たら好いぢやありませんか」

二十三

Hさんの云ふ所は尤もであつた。自分は下を向いてしばらく默つてゐたが、とう／＼嘘を吐いた。

「實は父や母が心配して、出來るなら旅行中の模樣を、經過の一段落毎に承知したいと云ふんですが…

……」

自分は困つた顔をした。Hさんは笑ひ出した。

「君そんなに心配する事はありませんよ。大丈夫だよ、僕が受け合ふよ」

「然し年寄ですから……」

「困るね、それぢや。だから年寄は嫌ひなんだ。宅へ行つて左右云ひ玉へな、大丈夫だつて」

「何とか好い工夫はないもんでせうか。貴方の御迷惑にならないで、さうして、父や母を滿足させる樣な」

Hさんは又こや／＼笑つてゐた。

「そんな重寳な工夫があるものかね、君。――然し折角の御依賴だから斯うしよう。もし旅先で報道するに足るやうな事が起つたら、君の所へ手紙を上げると。もし手紙が行かなかつたら、平生の通りだと思つて安心してゐると。それで可からう」

自分は是より以上Hさんに望む事は出來なかつた。

「それで結構です。然し出來事といふ意味を俗にいふ不慮の出來事と取らずに、貴方が御觀察になる兄の感情なり思想のうちで、是は尋常でないと御氣附きになつたものに應用して頂けませうか」

「中々面倒だね、事が。然しまあ宜いや、さう爲てもいゝ」

「夫からことによると、僕の事だの母の事だの、家庭の事などが兄の口に上るかも知れませんが、それを御遠慮なく一々聞かして頂きたいと思ひますが」

「うん、そりや差支へない限り知らせて上げませう」

「差支へがあつても構はないから聞かして戴きたい。それでないと宅のものが困りますから」

Hさんは默つて煙草を吹かし出した。自分は弱輩の癖に多少云ひ過ぎた事に氣が附いた。手持無沙汰の感じが強く頭に上つた。Hさんは庭の方を見てゐた。其隅に秋田から家主が持つて來て植ゑたといふ大きな蕗が五六本あつた。雨上りの初夏の空が何時迄も明るい光を地の上に投げてゐるので、その太い蕗の莖がすい〳〵と薄暗い中に青く描かれてゐた。

「あすこへ大きな蟇が出るんですよ」とHさんが云つた。

しばらく世間話をした後で、自分は暗くならないうちに席を立たうとした。

「君の縁談は何うなりました。此間三澤が來て、好いのを見付けて遣つたつて得意になつてゐましたよ」

「えゝ三澤も隨分世話好きですから」

「所が萬更世話好き計りで遣つてるんでもないやうですよ。だから君も好い加減に貰つちまつたら好いぢやありませんか。器量は惡かないつて話しぢやないか。君には氣に入らんのかね」

「氣に入らんのぢやありません」

Hさんは「はあ矢つ張り氣に入つたのかい」と云つて笑ひ出した。自分はHさんの門を出て、あの事も早く何うかしなければ、三澤に對して義理が惡いと考へた。然し兄の問題が一段落でも片附いて呉れない以上、到底其方へ向ける心の餘裕は出なかつた。いつそ一思ひにあの女の方から惚れ込んで呉れたならなどと思つても見た。

二十四

自分は又三澤を尋ねた。けれども腹を極めてから尋ねた譯でないから、實際上何んな歩調も前に動かす氣にはなれなかつた。自分の態度は何處迄も愚圖々々であつた。さうして唯漫然と其女の話をした。

「何うするね」

斯う聞かれると、結局要領を得た何の挨拶も出來なかつた。

「僕は職業の上ではふら／＼して浪人のやうに暮らしてゐるが、家庭の人としてなら、是でも一定の方針に支配されて、着々固まつて行きつゝある積りだ。所が君は丸で反對だね。一家の主人となるとか、他の夫になるとかいふ方面には、故意に意志の働きを鈍らせる癖に、職業の問題になると、手つ取り早く片附けて、ちやんと落ち附いてゐるんだから」

「あんまり落ち附いても居ないさ」

自分は大阪の岡田から受取つた手紙の中に、相應な位地が彼地にあるから來ないかといふ勸誘があつたので、ことによつたら今の事務所を飛び出さうかと考へてゐた。

「つい此間迄は洋行するつて頻りに騷いでゐたぢやないか」

三澤は自分の矛盾を追窮した。自分には西洋も大阪も變化として此際大した相違もなかつた。

「さう萬事的にならなくつちや駄目だ。僕丈君の結婚問題を眞面目に考へるのは馬鹿々々しい譯だ。斷つちまはう」

三澤は大分癪に障つたらしく見えた。自分は又自分が癪に障つてならなかつた。

「一體先方では何ういふんだ。君は僕ばかり責めるがね、僕には向うの意志が少しも解らないぢやないか」

「解る筈がないよ。まだ何も話してないんだもの」

三澤は少し激してゐた。さうして激するのが尤もであつた。彼は女の父兄にも女自身にも、自分の事をまだ一口も告げてゐなかつた。何う間違つても彼等の體面に障りやうのない事情の下に、女と自分を御互の視線の通ふ範圍内に置いた丈であつた。彼の處置には少しも人工的な痕迹を留めない、殆ど自然其儘の利用に過ぎないといふのが彼の大いなる誇りであつた。

「君の考へが纏まらない以上は何うする事も出來ないよ」

「ぢやもう少し考へて見よう」
三澤は焦慮つたさうであつた。自分も自分が不愉快であつた。

Hさんと兄が一所の汽車で東京を去つたのは、自分が三澤の所へ出掛けてから、一週間と經たないうちであつた。自分は彼等の立つ時刻も日限も知らずにゐた。三澤からもHさんからも何の通知を受取らなかつた自分は、家からの電話で始めてそれを聞いた。其時電話口へは思ひ掛けなく嫂が出て來た。

「兄さんは今朝御立ちよ。御父さんが貴方へ知らせて置けと仰しやるから、一寸御呼び申しました」

嫂の言葉は少し改まつてゐた。

「Hさんと一所なんでせうね」

「えゝ」

「何處へ行つたんですか」

「何でも伊豆の海岸を廻るとかいふ御話しでした」

「ぢや船ですか」

「いゝえ矢つ張り新橋から……」

二十五

其日自分は下宿へ歸らずに、事務所からすぐ番町へ廻つた。昨日迄恐れて近寄らなかつたのに、兄の出立と聞くや否や、すぐ其方へ足を向けるのだから、自分の行爲は餘りに現金過ぎた。けれども自分はそれを隱す氣もなかつた。隱さなければ濟まない人は、宅に一人も居ないやうに思はれた。

茶の間には嫂が雜誌の口繪を見てゐた。

「今朝程は失禮」

「おや吃驚したわ、誰かと思つたら、二郎さん。今京橋から御歸り？」

「えゝ、暑くなりましたね」

自分は手帛を出して顏を拭いた。それから上着を脱いで疊の上へ放り出した。嫂は團扇を取つて呉れた。

「御父さんは？」

「御父さんは御留守よ。今日は築地で何かあるんですつて」

「精養軒？」

「ぢやないでせう。多分外の御茶屋だと思ふんだけれども」

「御母さんは？」

「御母さんは今御風呂」

「お重は？」

「お重さんも……」

嫂はとう〳〵笑ひ掛けた。

「風呂ですか」

「いゝえ、居ないの」

下女が來て氷の中へ苺を入れるかレモンを入れるかと尋ねた。

「宅ぢやもう氷を取るんですか」

「えゝ二三日前から冷藏庫を使つてゐるのよ」

氣の所爲か嫂は此前見た時よりも少し瘦れてゐた。頰の肉が心持ち減つたらしかつた。それが夕方の光線の具合で、顏を動かす時に、ちら〳〵と自分の眼を掠めた。彼女は左の頰を緣側に向けて坐つてゐたのである。

「兄さんは夫でも能く思ひ切つて旅に出掛けましたね。僕は事によると今度も亦延ばすかも知れないと思つてたんだが」

「延ばしやなさらないわよ」

嫂は斯ういふ時に下を向いた。さうして何時もよりも一層落ち附いた沈んだ低い聲を出した。

「そりや兄さんは義理堅いから、Hさんと約束した以上、それを實行する積りだつたには違ひないけれ

ども……」
「そんな意味ぢやないのよ。そんな意味ぢやなくつて、さうして延ばさないのよ」
自分はぽかんとして彼女の顔を見た。
「ぢや何んな意味で延ばさないんです」
「何んな意味つて、――解つてるぢやありませんか」
自分には解らなかつた。
「僕には解らない」
「兄さんは妾に愛想を盡かしてゐるのよ」
「愛想づかしに旅行したといふんですか」
「いゝえ、愛想を盡かして仕舞つたから、それで旅行に出掛けたといふのよ。つまり妾を妻と思つていらつしやらないのよ」
「だから……」
「だから妾の事なんか何うでも構はないのよ。だから旅に出掛けたのよ」
嫂は是で默つて仕舞つた。自分も何とも云はなかつた。其處へ母が風呂から上がつて來た。
「おや何時來たの」

母は二人坐つてゐる所を見て厭な顔をした。

二十六

「もう好い加減に芳江を起さないと又晩に寐ないで困るよ」

嫂は黙つて起つた。

「起きたらすぐ湯に入れて御遣んなさいよ」

「えゝ」

彼女の後姿は廊下を曲がつて消えた。

「芳江は晝寐ですか、どうれで靜かだと思つた」

「先刻何だか拗ねて泣いてたら、夫つ限り寐ちまつたんだよ。何ぼなんでも、もう五時だから、好い加減に起して遣らなくつちや……」

母は不平らしい顔をしてゐた。

自分は其日珍らしく宅の食卓に向つて、晩餐の箸を取つた。築地の料理屋か待合へ呼ばれたといふ父は、無論歸らなかつたけれども、お重は豫定通り戻つて來た。

「おい早く來て坐らないか。みんな御前の湯から上がるのを待つてたんだ」

お重は縁側へぺたりと尻を着けて團扇で浴衣の胸へ風を入れてゐた。

「そんなに急き立てなくつたつて可かないの。會に來た御客さまの癖に」

お重はつんとしてわざと鼻の先の八つ手の方を向いてゐた。母は又始まつたといふ笑ひの裡に自分を見た。自分は又調戯ひたくなつた。

「御客さまだと思ふなら、そんな大きな御尻を向けないで、早く此處へ來て御坐りよ」

「蒼蠅いわよ」

「一體此暑いのに、一人で何處をほつつき歩いてたんだい」

「何處でも餘計な御世話よ。ほつつき歩くだなんて、第一言葉使ひからして貴方は下品よ。――好いわ、今日坂田さんの所へ行つて、兄さんの秘密をすつかり聞いて來たから」

お重は兄の事を大兄さん、自分の事をたゞ兄さんと呼んでゐた。始めはちひ兄さんと云つたのだが、其ちひを聞くたびに妙な不快を感ずるので、自分はとう〱ちひ丈を取らして仕舞つた。

「好くつてみんなに話しても」

お重は湯で火照つた顔をぐるりと自分の方に向けた。自分は瞬きを二つ續けざまにした。

「だつて御前は今兄さんの秘密だと明言したぢやないか」

「えゝ秘密よ」

「祕密なら話して可くないに極まつてるぢやないか」

「それを話すから面白いのよ」

自分はお重の無鐵砲が、何を云ひ出すか分らないと思つて腹の中では辟易した。

「お重御前は論理學でいふコントラヂクション、イン、タームスといふ事を知らないだらう」

「可くつてよ。そんな高慢ちきな英語なんか使つて、他が知らないと思つて」

「もう二人とも止しに御爲よ。何だね面白くもない、十五六の子供ぢやあるまいし」

母はとう／＼二人を窘めた。自分もそれを好い機にすぐ舌戰を切り上げた。お重も團扇を縁側へ投げ出して大人しく食卓に着いた。

局面が一轉した後なので、祕密らしい祕密は、食事中途にお重の口から洩れる機會がなかつた。母も嫂も丸でそれには取り合ふ氣色を見せなかつた。平吉といふ男が裏から出て來て、庭に水を打つた。「まださう燥いてゐないんだから、好い加減にして御置き」と母が云つてゐた。

二十七

其晩番町を出たのは燈火が點いてまだ間もない宵の口であつた。それでも飯を濟ましてから約一時間半程は、其處へ坐り込んだ儘、みんなを相手に喋舌つてゐた。

自分は其一時間半の間に、とう〳〵お重から例の祕密をあばかれる羽目に陷つた。然しそれが自分に取つては、祕密でも何でもない例の結婚問題だつたので、自分は却て安心した。

「御母さん、兄さんは妾達に隱れて此間見合ひをなすつたんですつて」

「隱れて見合ひなんかするものか」

自分は母がまだ何とも云はないうちにお重の言葉を遮つた。

「いゝえ慥かな筋からちやんと聞いて來たんだから、いくら白ばつくれても駄目よ」

慥かな筋といふ樣な一種の言葉が、お重の口から出るのを聞いたとき、自分は思はず苦笑した。

「馬鹿だな御前は」

「馬鹿でも可いわよ」

お重は六月二日の出來事を母や嫂に向つてべら〳〵喋舌り出した。それが中々精しいので自分は少し驚いた。何處から其知識を得て來たのだらうといふ好奇心が強く自分の反問を促した。けれどもお重はたゞ意地の惡い微笑を洩らすのみで、決して出所を告げなかつた。

「兄さんが妾達に默つてるのは、屹度打ち明けて云ひ惡い譯があるからなのよ。ね、さうでせう、兄さん」

お重は自分の好奇心を滿足させないのみか、却て向うから此方を嬲りにかゝつた。自分は「何うでも好

いや」と云つた。母から眞面目に事の顚末を聞かれた時、自分は簡單に有りの儘を答へた。

「たゞ丈夫の事なんです。しかも向うぢや全く知らないんだから其積りで居て下さい。お重見たいに好い加減な事を云ひ觸らすと、僕は何うでも構はんにした所で、先方が迷惑するかも知れませんから」

母は先方が迷惑がる筈がないといふ顏附で、無暗に細かい質問を始めた。然し財産が何の位あるんだらうとか、親類に貧乏人があるだらうかとか、或は惡い病氣の系統を引いてゐやしなからうかと云ふやうな事になると、自分には丸で答へられなかつた。のみならず仕舞には聞くのさへ面倒で厭になつて來た。自分はとう〳〵逃げ出すやうにして番町を出た。

自分が其夜母から色々な質問を掛けられてゐる間、嫂は始終同じ席にゐたが、此問題に關しては殆ど一言も口を開かなかつた。母も彼女に向つてついぞ相談がましい言葉を掛けなかつた。二人の此態度が、二人の氣質をよく代表してゐた。然しそれは單に氣質の相違から計り來た一種の對照とも思へなかつた。嫂は全くの局外者らしい位置を守るためか何だか、始終芳江のおもりに氣を取られ勝ちに見えた。日が暮れさへすればすぐ寢かされる習慣の芳江は、晝寢を貪り過ぎた結果として、其晩はとう〳〵自分が歸る迄蚊帳の中へ這入らなかつた。

自分は下宿へ歸つて、自分の室の暑苦しいのを意外に感じた。わざと電氣燈を消して暗い所に默つて坐つてゐた。今朝立つた兄は今日何處で泊るだらう。Hさんは今夜彼と何んな話しをするだらう。鷹揚なH

さんの顔が自然と眼の前に浮かんだ。それと共に瘠せた兄の頰に刻まれた久し振の笑ひが見えた。

二十八

其翌日からHさんの手紙が心待ちに待ち受けられた。自分は一日、二日、三日と指を折つて日取を勘定し始めた。けれどもHさんからは何の音信もなかつた。繪端書一枚さへ來なかつた。自分は失望した。Hさんに責任を忘れるやうな輕薄はなかつた。然し此方の豫期通り律義にそれを果たして吳れない程の大悠はあつた。自分は自烈たい部に屬する人間の一人として遠くから彼を眺めた。

すると二人が立つてから丁度十一日目の晩に、重い封書が始めて自分の手に落ちた。Hさんは罫の細かい西洋紙へ、萬年筆で一面に何か書いて來た。頁の數から云つても、二時間や三時間で出來る仕事ではなかつた。自分は机の前に縛り附けられた人形の樣な姿勢で、それを讀み始めた。自分の眼には、この小さな黑い字の一點一畫も讀み落とすまいといふ決心が、焰の如く輝いた。自分の心は頁の上に釘附けにされた。しかも雪を行く橇のやうに、其上を滑つて行つた。要するに自分はHさんの手紙の最初の頁の第一行から讀み始めて、最後の頁の最終の文句に至る迄に、何の位の時間が要つたか丸で知らなかつた。

手紙は下のやうに書いてあつた。

「長野君を誘つて旅へ出るとき、あなたから賴まれた事を、一旦引き受けるには引き受けたが、いさと

なつて見ると、到底實行は出來まい、また出來てもする必要があるまい、もしくは必要と不必要に拘らず。するのは好もしい事でなからう、——斯ういふ考へでゐました。旅行を始めてから一日二日は、此三つの事情の凡てか或は幾分かが常に働くので、是では折角の約束も反古にしなければならないといふ氣が強く募りました。それが三日四日となつた時、少し考へさせられました。五日六日と日を重ねるに從つて、考へる許りでなく、約束通りあなたに手紙を上げるのが、或は必要かも知れないと思ふやうになりました。尤も此處にいふ必要といふ意味が、あなたと私とで、大分違ふかも知れませんが、それは此手紙を仕舞迄御讀みになれば解る事ですから、說明はしません。それから當初私の抱いた好もしくないといふ倫理上の感じ、是はいくら日數を經過しても取り去る譯には行きませんが、片方にある必要の度が、自然夫を抑へ附ける程強くなつて來た事も亦確かであります。恐らく手紙を書いてゐる暇があるまい。——此故障丈は始めあなたに申上げた通り何處迄も附け纏つて離れませんでした。我々二人は一所の室に寐ます。一所の室で飯を食ひます。散歩に出る時も一所です。湯も風呂場の構造が許す限りは、一所に這入ります。かう數へ立てて見ると、別々に行動するのは、まあ厠に上る時位なものなのですから。

無論我々二人は朝から晩迄のべつに喋舌り續けてゐる譯ではありません。御互が勝手な書物を手にしてゐる時もあります。默つて寐轉んでゐる事もあります。然し現に其人の居る前で、其人の事を知らん顏で書いて、さうして夫をそつと他に知らせるのは一寸私にとつては出來惡いのです。書くべき必要を認め

出した私も、是には弱りました。いくら書く機會を見附けよう見附けようと思つても、そんな機會の出て來る筈がないのですから。然し偶然は遂に私の手を導いて、私に私の必要と認める仕事をさせるやうにして呉れました。私はそれ程兄さんに氣兼ねをせずに、此手紙を書き初めました。さうして同じ狀態の下に、それを書き終ろ事を希望します。

二十九

我々は二三日前から此紅ヶ谷の奥に來て、疲れた身體を谷と谷の間に放り出しました。居る所は私の親戚の有つてゐる小さい別莊です。所有主は八月にならないと東京を離れる事が六づかしいので、其前なら何時でも貴方に用立てゝ宜いと云つた言葉を、圖らず旅行中に利用する譯になつたのであります。別莊といふと大變人聞きが好いやうですが、其實は甚だ見苦しい手狹なもので、構へからいふと、丁度東京の場末にある四五十圓の安官吏の住居です。然し田舍丈に邸内の地面には多少の餘裕があります。庭だか菜園だか分らないものが、軒から爪下りに向うの垣根迄續いてゐます。其垣には珊瑚樹の實が一面に結つてゐて、葉越しに隣の藁屋根が四半分程見えます。

同じ軒の下から谷を隔てゝ向うの山も手に取るやうに見えます。此山全體がある伯爵の別莊地で、時には浴衣の色が樹の間から見えたり、女の聲が崖の上で響いたりします。其崖の頂には高い松が空を突くや

うに聳えてゐます。我々は低い軒の下から朝夕此松を見上げるのを、高尚な課業のやうに心得て暮らしてゐます。

今迄通つて來たうちで、君の兄さんには此處が一番氣に入つたやうです。それには色々な意味があるかも知れませんが、二人ぎりで獨立した一軒の家の主人になり濟まされたといふ氣分が、人慣れない兄さんの胸に一種の落附きを與へるのが、其大原因だらうと思ひます。今迄何處へ泊つてもよく寢られなかつた兄さんは、此處へ來た晩からよく寐ます。現に今私がかうやつて萬年筆を走らしてゐる間も、ぐう〳〵寐てゐます。

もう一つ此處へ來てから偶然の恩惠に浴したと思ふのは、普通の宿屋のやうに二人が始終膝を突き合はして、一つ部屋にごろ〳〵してゐないで濟む事です。家は今申した通り手狹至極なものであります。門を出て右の坂上にある或長者の拵へた西洋館などに比べると全くの燐寸箱に過ぎません。それでも垣を圍らして四方から切り離した獨立の一軒家です。窮屈ではあるが間數は五つ程あります。兄さんと私は一つ座敷に吊つた一つ蚊帳の中に寐ます。然し宿屋と違つて同じ時間に起きる必要はありません。片方が起きても、片方は寐たい丈寐てゐられます。私は兄さんをそつとして置いて、次の座敷に据ゑてある一閑張の机に向ふ事が出來ます。晝も其通りです。二人差向ひでゐるのが苦痛になれば、何方かが勝手に姿を隱して、自分に都合のいゝ事を、好きな時間丈やります。それから適當な頃に又出て來て顏を見せます。

私は斯ういふ偶然を利用して此手紙を書くのであります。さうして此偶然を思ひ掛けなく利用する事の出來た自分を、あなたの爲に仕合せと考へます。同時に、それを利用する必要を認め出した自分を、自分のために遺憾だと思ひます。

私のいふ事は順序からいふと日記體に纏まつて居りません。分類からいふと科學的に區別が立たないかも知れません。然しそれは汽車、俥、宿、凡て規則的な仕事を妨げる旅行といふものの障害と、平氣で取り掛かりにくいといふ其仕事の性質とが、破壞的に働いた結果と思つて頂くより仕方がありません。斷片的にせよ下に述べる丈の事を貴方に報道し得るのが既に私には意外なのであります。全く偶然の御蔭なのであります。

三十

我々は二人とも大した旅行癖のない男です。從つて我々の編み上げた旅程も亦經驗相應に平凡でした。近くて便利な所を人並に廻つて歩けば、夫で目的の大半は達せられる位な考へで、まづ相摸伊豆邊をぼんやり心掛けました。

それでも私の方が兄さんよりはまだ増しでした。私は主要な場所と、そこへ行くべき交通機關とを略承知してゐましたが、兄さんに至つては殆ど地理や方角を超越してゐました。兄さんは國府津が小田原の手

前か先か知りませんでした。知らないといふより寧ろ構はないのでせう。是程一方に無頓着な兄さんが、何故人事上のあらゆる方面に、同じ平然たる態度を見せる事が出來ないのかと思ふと、私は實際不思議な感に打たれざるを得ません。然しそれは餘事です。話しが逸れると戻り悪くなりますから、成る可く本流を傳つて、筋を離れないやうに進む事にしませう。

我々は始め逗子を基點として出發する事に相談を極めてゐました。所が其朝新橋へ驅け附ける俥の上で、ふと私の考へが變りました。如何に平凡な旅行にしても、眞先に逗子へ行くのは、あまりに平凡過ぎて氣が進まなくなつたのです。私は停車場で兄さんに相談の仕直しを遣りました。私は行程を逆にして、まづ沼津から修善寺へ出て、それから山越しに伊東の方へ下りようと云ひました。小田原と國府津の後先さへ知らない兄さんに異存のある筈がないので、我々はすぐ沼津迄の切符を買つて、其儘東海道行の汽車に乘り込みました。

汽車中では報知に値する樣な事が別に起りませんでした。先方へ着いても風呂へ入つたり、飯を食つたり、茶を飲んだりする間は、是といつて目に着く點もなかつたのです。私が兄さんに就いて、是はことによると家族の人の參考のために、知らせて置く必要があるかも知れないと思ひ出したのは、其日の晩になつてからであります。

寐るには早過ぎました。話しにはもう飽きました。私は旅行中に誰でも經驗する一種の徒然に襲はれま

した。不圖床の間の脇を見ると、其處に重さうな碁盤が一面あつたので、私はすぐそれを室の眞中へ持ち出しました。無論兄さんを相手に黒白を爭ふつもりでした。貴方は御存じだか何うだか知りませんが、私は學校にゐた時分、是でよく兄さんと碁を打つたものです。其後二人とも申し合はせたやうに、ぴたりと已めて仕舞ひましたが、この場合、二人が持て餘してゐる時間を、面白く過ごすには碁盤が屈强の道具に違ひなかつたのです。

兄さんは暫く碁盤を眺めてゐました。さうして置いて「まあ止さう」と云ひました。私は思ひ込んだ勢ひで、「さう云はずに遣らうぢやないか」と押し返しました。夫でも兄さんは「いや〳〵まあ止さう」と云ひます。兄さんの顏を見ると、眼と眉の間に變な表情がありました。それが何の碁なんぞと云つた風の輕蔑又は無頓着を示してゐないのですから、私は一寸異な心持がしました。然し無理に强ひるのも厭ですから、私はとう〳〵一人で碁石を取り上げて、黒と白を打手違ひに、盤の上に並べ始めました。兄さんは少しの間それを見てゐました。私が猶默つて打ち續けて行きますと、兄さんは不意に座を立つて廊下へ出ました。大方便所へでも行つたのだらうと思つた私は、一向兄さんの擧動には注意を拂ひませんでした。

三十一

案の通り兄さんは時を移さず戻つて來ました。さうして突然「遣らう」といふや否や、自分の手から、

碁石を捥ぎ取るやうに引つ手繰りました。私は何の氣もつかずに、「よろしい」と答へて、すぐ打ち始めました。我々のは申す迄もなくへぼ碁ですから、石を下すのも早いし、勝負の片附くのも雑作はありません。一時間のうちに悠に二番位は始末が出來る位だから、見てゐても局に對つてゐても、間怠い思ひは決してないのです。所を兄さんは、その手早く運んで行く碁面を、仕舞迄辛抱して眺めてゐるのが苦痛だと云つて、とう〳〵中途で已めて終ひました。私は心持でも惡くなつたのかと思つて心配しましたが、兄さんはたゞ微笑してゐました。

　床に入る前になつて、私は始めて兄さんから其時の心理狀態の說明を聞きました。兄さんは碁を打つのは固より、何をするのも厭だつたのださうです。同時に、何かしなくつては居られなかつたのださうです。此矛盾が既に兄さんには苦痛なのでした。兄さんは碁を打ち出せば、屹度碁なんぞ打つてゐられないといふ氣分に襲はれると豫知してゐたのです。けれども又打たずには居られなくなつたのです。それで已むを得ず盤に向つたのです。盤に向ふや否や自烈たくなつたのです。仕舞には盤面に散點する黑と白が、自分の頭を惱ます爲に、わざと續いたり離れたり、切れたり合つたりして見せる、怪物のやうに思はれたのださうです。兄さんはもう些とで、盤面を滅茶々々に掻き亂して、此魔物を追つ拂ふ所だつたと云ひました。何事も知らなかつた私は、少し驚き乍らも惡い事をしたと思ひました。

「いや碁に限つた譯ぢやない」と云つて兄さんは、自分の過失を許して呉れました。私は其時兄さんか

ら、兄さんの平生を聞きました。兄さんの態度は碁を中途で已めた時ですら落ち附いてゐました。上部から見ると何の異狀もない兄さんの心持は、恐らくあなた方には理解されてゐないかも知れません。少なくとも斯ういふ私には一つの發見でした。

兄さんは書物を讀んでも、理窟を考へても、飯を食つても、散歩をしても、二六時中何をしても、其處に安住する事が出來ないのださうです。何をしても、こんな事をしてはゐられないといふ氣分に追ひ掛けられるのださうです。

「自分のしてゐる事が、自分の目的になつてゐない程苦しい事はない」と兄さんは云ひます。

「目的でなくつても方便になれば好いぢやないか」と私が云ひます。

「それは結構である。ある目的があればこそ、方便が定められるのだから」と兄さんが答へます。

兄さんの苦しむのは、兄さんが何を何うしても、それが目的にならない許りでなく、方便にもならないと思ふからです。たゞ不安なのです。從つて凝としてゐられないのです。兄さんは落ち附いて寐てゐられないから起きると云ひます。起きると、たゞ起きてゐられないから歩くと云ひます。歩くとたゞ歩いてゐられないから走けると云ひます。既に走け出した以上、何處迄行つても止まれないと云ひます。止まれない許りなら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云ひます。其極端を想像すると恐ろしいと云ひます。冷汗が出るやうに恐ろしいと云ひます。怖くて怖くて堪らないと云ひます。

三十二

私は兄さんの說明を聞いて、驚きました。然しさういふ種類の不安を、生れてからまだ一度も經驗した事のない私には、理解があつても同情は伴ひませんでした。私は頭痛を知らない人が、割れるやうな痛みを訴へられた時の氣分で、兄さんの話しに耳を傾けてゐました。私はしばらく考へました。考へてゐるうちに、人間の運命といふものが朧氣ながら眼の前に浮かんで來ました。私は兄さんの爲に好い慰藉を見出だしたと思ひました。

「君のいふやうな不安は、人間全體の不安で、何も君一人丈が苦しんでゐるのぢやないと覺れば夫迄ぢやないか。詰りさう流轉して行くのが我々の運命なんだから」

私の此言葉はぼんやりしてゐる許りでなく、頗る不快に生溫いものでありました。鋭い兄さんの眼から出る輕侮の一瞥と共に葬られなければなりませんでした。兄さんは斯う云ふのです。

「人間の不安は科學の發展から來る。進んで止まる事を知らない科學は、かつて我々に止まる事を許して呉れた事がない。徒步から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自働車、それから航空船、それから飛行機と、何處迄行つても休ませて呉れない。何處迄伴れて行かれるか分らない。實に恐ろしい」

「そりや恐ろしい」と私も云ひました。

兄さんは笑ひました。

「君の恐ろしいといふのは、恐ろしいといふ言葉を使つても差支へないといふ意味だらう。實際恐ろしいんぢやないだらう。つまり頭の恐ろしさに過ぎないんだらう。僕のは違ふ。僕のは心臓の恐ろしさだ。脈を打つ活きた恐ろしさだ」

私は兄さんの言葉に一毫も虚僞の分子の交つてゐない事を保證します。然し兄さんの恐ろしさを自舌で嘗めて見る事はとても出來ません。

「凡ての人の運命なら君一人さう恐ろしがる必要がない」と私は云ひました。

「必要がなくても事實がある」と兄さんは答へました。其上下の樣な事も云ひました。

「人間全體が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに經過しなければならないから恐ろしい。一代のうちなら未だしもだが、十年間でも、一年間でも、縮めて云へば一ヶ月間乃至一週間でも、依然として同じ運命を經過しなければならないから恐ろしい。君は嘘かと思ふかも知れないが、僕の生活の何處を何んな斷片に切つて見ても、たとひ其斷片の長さが一時間だらうと三十分だらうと、それが屹度同じ運命を經過しつゝあるから恐ろしい。要するに僕は人間全體の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを經驗してゐる」

「それは不可ない。もつと氣を樂にしなくつちや」

「不可ない位は自分にも好く解つてゐる」

私は兄さんの前で默つて煙草を吹かしてゐました。私は心のうちで、何うかして兄さんを此苦痛から救ひ出して上げたいと念じました。私は凡て其他の事を忘れました。今迄凝と私の顏を見守つてゐた兄さんは、其時突然「君の方が僕より偉い」と云ひました。私は思想の上に於て、兄さんこそ私に優れてゐると感じてゐる際でしたから、此賛辭に對して嬉しいとも難有いとも思ふ氣は起りませんでした。私は矢張り默つて煙草を吹かしてゐました。兄さんは段々落ち附いて來ました。夫から二人とも一つ蚊帳に這入つて寐ました。

三十三

翌日も我々は同じ所に泊つてゐました。朝起き拔けに濱邊を歩いた時、兄さんは眠つてゐる樣な深い海を眺めて、「海も斯う靜かだと好いね」と喜びました。近頃の兄さんは何でも動かないものが懷かしいのださうです。その意味で水よりも山が氣に入るのでした。氣に入ると云つても、普通の人間が自然を樂しむ時の心持とは少し違ふやうです。それは下に擧げる兄さんの言葉で御解りになるでせう。

「斯うして髭を生やしたり、洋服を着たり、シガーを銜へたりする所を上部から見ると、如何にも一人前の紳士らしいが、實際僕の心は宿なしの乞食見たやうに朝から晩迄うろ〳〵してゐる。二六時中不安に

追ひ懸けられてゐる。情ない程落附けない。仕舞には世の中で自分程修養の出來てゐない氣の毒な人間はあるまいと思ふ。さういふ時に、電車の中やなにかで、不圖眼を上げて向う側を見ると、如何にも苦のなささうな顔に出つ食はす事がある。自分の眼が、ひとたび其邪念の萌さないぽかんとした顔に注ぐ瞬間に。僕はしみ〴〵嬉しいといふ刺激を總身に受ける。僕の心は旱魃に枯れかゝつた稻の穗が豪雨を得たやうに蘇る。同時に其顔――何も考へてゐない、全く落ち附き拂つた其顔が、大變氣高く見える。眼が下がつてゐても、鼻が低くつても、雜作は何うあらうとも、非常に氣高く見える。僕は殆ど宗教心に近い敬虔の念をもつて、其顔の前に跪いて感謝の意を表したくなる。自然に對する僕の態度も全く同じ事だ。昔のやうに唯うつくしいから玩ぶといふ心持は、今の僕には起る餘裕がない」

兄さんは其時電車のなかで偶然見當たる尊い顔の部類の中へ、私を加へました。私は思ひも寄らん事だと云つて辭退しました。すると兄さんは眞面目な態度で斯う云ひました。

「君でも一日のうちに、損も得も要らない、善も惡も考へない、たゞ天然の儘の心を天然の儘顔に出してゐる事が、一度や二度はあるだらう。僕の尊いといふのは、其時の君の事を云ふんだ。其時に限るのだ」

兄さんに斯う云はれても覺束なく見える私のために、具體的な證據を示してやるといふ積りか、昨夜二人が床に入る前の私を取つて來て其例に引きました。兄さんはあの折談話の機でつい興奮し過ぎたと自白しました。然し私の顔を見たときに、その激した心の調子が次第に收まつたと云ふのです。私が背はうと

肯ふまいと、それには頓着する必要がない、たゞ其時の私から好い影響を受けて、一時的にせよ苦しい不安を免れたのだと、兄さんは斷言するのです。

其時の私は前云つた通りです。たゞ煙草を吹かして默つてゐた丈です。私は其時凡ての事を忘れました。獨り兄さんを何うにかして此不安の裡から救つて上げたいと念じました。けれども私の心が兄さんに通じようとは思ひませんでした。又通じさせようといふ氣は無論ありませんでした。だから何も云はずに默つて煙草を吹かしてゐたのです。然し其處に純粹な誠があつたのかも知れません。兄さんは其誠を私の顏に讀んだのでせうか。

私は兄さんと砂濱の上をのそり〳〵と歩きました。歩きながら考へました。兄さんは早晩宗教の門を潜つて始めて落ち附ける人間ではなからうか。もつと強い言葉で同じ意味を繰り返すと、兄さんは宗教家になる爲に、今は苦痛を受けつゝあるのではなからうか。

三十四

「君近頃神といふものに就いて考へた事はないか」

私は仕舞に斯ういふ質問を兄さんに掛けました。私が此處でとくに「近頃」と斷つたのは、書生時代の古い回想から來たものであります。其時分は二人共まだ考への纒まらない靑二才でしたが、それでも私は

思索に耽り勝ちな兄さんと、よく神の存在に就いて云々したものであります。序だから申しますが、兄さんの頭は其時分から少し外の人とは變つてゐました。兄さんは浮か浮かと散歩をしてゐて、ふと自分が今歩いてゐたなといふ事實に氣が附くと、さあ夫が解すべからざる問題になつて、考へずには居られなくなるのでした。歩かうと思へば歩くのが自分に違ひないが、其歩かうと思ふ心と、歩く力とは、果して何處から不意に湧いて出るか、それが兄さんには大いなる疑問になるのでした。

二人はそんな事から神とか第一原因とかいふ言葉をよく使ひました。今から考へると解らずに使つたのでした。然し口の先で使ひ慣れた結果、仕舞には神も何時か陳腐になりました。それから二人とも申し合はせた樣に默りました。默つてから何年目になるでせう。私は靜かな夏の朝の、海といふ深い色を沈める大きな器の前に立つて、兄さんと相對しつゝ、再び神といふ言葉を口にしたのであります。

然し兄さんは其言葉を全く忘れてゐました。思ひ出す氣色さへありませんでした。私の質問に對する返事としては、たゞ微かな苦笑があの皮肉な唇の端を横切つた丈でした。

私は兄さんの此態度で辟易する程に臆病ではありませんでした。また思ふ事を云ひ終せずに引込む程疎い間柄でもありませんでした。私は一歩前へ進みました。

「何處の馬の骨だか分らない人間の顏を見てさへ、時々難有いといふ氣が起るなら、圓滿な神の姿を束の間も離れずに拜んでゐられる場合には、何百倍幸福になるか知れないぢやないか」

「そんな意味のない口先丈の論理が何の役に立つものかね。そんなら神を僕の前に連れて來て見せて呉れるが好い」

兄さんの調子にも兄さんの眉間にも自烈たさうなものが顫動してゐました。兄さんは突然足下にある小石を取つて二三間波打ち際の方に馳け出しました。さうして夫を遙かの海の中へ投げ込みました。海は靜かに其小石を受け取りました。兄さんは手應へのない努力に、憤りを起す人のやうに、二度も三度も同じ所作を繰り返しました。兄さんは磯へ打ち上げられた昆布だか若布だか、名も知れない海藻の間を構はず馳け廻りました。それから又私の立つて見てゐる所へ歸つて來ました。

「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」

兄さんは斯う云ふのです。さうして苦しさうに呼息をはずませてゐました。私は兄さんを連れて、又そろそろ宿の方へ引き返しました。

「車夫でも、立ん坊でも、泥棒でも、僕が難有いと思ふ刹那の顔、即ち神ぢやないか。山でも川でも海でも、僕が崇高だと感ずる瞬間の自然、取りも直さず神ぢやないか。其外に何んな神がある」

兄さんから斯う論じかけられた私は、たゞ「成程」と答へる丈でした。兄さんは其時は物足りない顔をします。然し後になると矢つ張り私に感心した樣な素振を見せます。實を云ふと、私の方が兄さんに遣り込められて感心する丈なのですが。

三十五

我々は沼津で二日程暮らしました。序に興津迄行かうかと相談した時、兄さんは厭だと云ひました。旅程に掛けては、萬事私の思ひの儘になつてゐる兄さんが、何故其時に限つて斷然私の申し出でを拒絶したものか、私には頓と解りませんでした。後で其説明を聞いたら、三保の松原だの天女の羽衣だのが出て來る所は嫌ひだと云ふのです。兄さんは妙な頭を有つた人に違ひありません。

我々はつひに三島迄引き返しました。其處で大仁行の汽車に乘り換へて、とう／＼修善寺へ行きました。兄さんには始めから此温泉が大變氣に入つてゐたやうです。然し肝心の目的地へ着くや否や、兄さんは「おや／＼」といふ失望の聲を放ちました。實際兄さんの好いてゐたのは、修善寺といふ名前で、修善寺といふ所ではなかつたのです。瑣事ですが、是も幾分か兄さんの特色になりますから序に附け加へて置きます。

御承知の通り此温泉場は、山と山が抱き合つてゐる隙間から谷底へ陷落したやうな低い町にあります。一旦其所へ這入つた者は、何方を見ても青い壁で鼻が支へるので、仕方なしに上を見上げなければなりません。俯向いて歩いたら、地面の色さへ碌に眼には止まらない位狹苦しいのです。今迄海よりも山の方が好いと云つてゐた兄さんは、修善寺へ來て山に取り圍まれるが早いか、急に窮屈がり出しました。私はす

ぐ兄さんを伴れて、表へ出て見ました。すると、普通の町なら先づ往來に當たる所が、一面の川床で、青い水が岩に打つかりながら其中を流れてゐるのです。だから歩くと云つても、歩きたい丈歩く餘地は無論ありませんでした。私は川の眞中の岩の間から出る溫泉に兄さんを誘ひ込みました。男も女もごちや／＼に一つ所に浸かつてゐるのが面白かつたからです。不潔な事も話の種になる位でした。兄さんと私はさすがに其所へ浴衣を投げ棄てゝ這入る勇氣はありませんでした。然し湯の中にゐる黒い人間を、岩の上に立つて物好きらしく何時迄も眺めてゐました。兄さんは嬉しさうでした。岩から岸に渡した危い板を踏みながら元の路へ引き返す時に、兄さんは「善男善女」といふ言葉を使ひました。それが冗談半分の形容詞でなく、全くさう思はれたらしいのです。

翌朝楊枝を銜へながら、一所に内風呂に浸かつた時、兄さんは「昨夕も寐られないで困つた」と云ひました。私は今の兄さんに取つて寐られないが一番毒だと考へてゐましたので、つい夫を問題にしました。

「寐られないと、何うかして寐よう寐ようと焦るだらう」と私が聞きました。

「全くさうだ。だから猶寐られなくなる」と兄さんが答へました

「君、寐なければ誰かに濟まない事でもあるのか」と私が又聞きました。

兄さんは變な顔をしました。石で疊んだ風呂槽の縁に腰を掛けて、自分の手や腹を眺めてゐました。兄さんは御存じの通り餘り肥つては居ません。

「僕も時々寐られない事があるが、寐られないのも亦愉快なものだ」と私が云ひました。
「何うして」と今度は兄さんが聞きました。私は其時私の覺えてゐた燈影無睡を照し心清妙香を聞くといふ古人の句を兄さんの爲に擧げました。すると兄さんは忽ち私の顔を見てにやにやと笑ひました。
「君のやうな男にもさういふ趣きが解るかね」と云つて、不審さうな樣子をしました。

三十六

その日私はまた兄さんを引つ張り出して今度は山へ行きました。上を見て山に行き、下を向いて湯に入る。それより外にする事は先づない所なのですから。
兄さんは瘦せた足を鞭のやうに使つて細い道を達者に歩きます。其代り疲れる事も亦人一倍早いやうです。肥つた私がのそ〳〵後から上がつて行くと、木の根に腰を掛けて、せえ〳〵云つてゐます。兄さんのは他を待ち合はせるのではありません。自分が呼息を切らして已むを得ずに斃れるのです。
兄さんは時々立ち留まつて茂みの中に咲いてゐる百合を眺めました。一度などは白い花片をとくに指さして、「あれは僕の所有だ」と斷りました。私にはそれが何の意味だか解りませんでしたが、別に聞き返す氣も起らずに、とう〳〵天邊迄上りました。二人で其處にある茶屋に休んだ時、兄さんは又足の下に見える森だの谷だのを指して、「あれ等も悉く僕の所有だ」と云ひました。二度迄繰り返された此言葉で、私は

始めて不審を起しました。然し其不審は其場ですぐ晴らす譯に行きませんでした。私の質問に對する兄さんの答は、たゞ淋しい笑ひに過ぎなかつたのです。

我々は其茶店の床几の上で、しばらく死んだやうに寐てゐました。其間兄さんは何を考へてゐたか知りません。私はたゞ明らかな空を流れる白い雲の樣子ばかり見てゐました。私の眼はきらきらしました。次第に歸り途の暑さが想ひやられるやうになりました。私は兄さんを促して又山を下りました。其時です。兄さんが突然後から私の肩をつかんで「君の心と僕の心とは一體何處迄通じてゐて、何處から離れてゐるのだらう」と聞いたのは。私は立ち留まると同時に、左の肩を二三度強く小突き廻されました。私は身體に感ずる動搖を、同じやうに心でも感じました。私は平生から兄さんを思索家と考へてゐました。一所に旅に出てからは、宗教に這入らうと思つて這入り口が分らないで困つてゐる人のやうにも解釋して見ました。私が心に動搖を感じたといふのは、果して兄さんの此質問が、さういふ立場から出たのであらうかと迷つたからです。私はあまり物に頓着しない性質です。またあまり物に驚かない、至つて鈍な男です。けれども出立前あなたから色々依賴を受けたため、兄さんに對して丈は、妙に鋭敏になりたがつてゐました。私は少し平氣の道を踏み外しさうになりました。

「Keine Brücke führt von Mensch zu Mensch.（人から人へ掛け渡す橋はない）」

私はつい覺えてゐた獨逸の諺を返事に使ひました。無論半分は問題を面倒にしない故意の作略も交つて

ゐたでせうが。すると兄さんは、「さうだらう、今の君はさうより外に答へられまい」と云ふのです。私はすぐ「何故」と云つて聞き返しました。

「自分に誠實でないものは、決して他人に誠實であり得ない」

私は兄さんの此言葉を、自分の何處へ應用して好いか氣が附きませんでした。

「君は僕の御守になつて、わざ／＼一所に旅行してゐるんぢやないか。僕は君の好意を感謝する。けれども左右いふ動機から出る君の言動は、誠を裝ふ僞りに過ぎないと思ふ。朋友としての僕は君から離れる丈だ」

兄さんは斯う斷言しました。さうして私を其處へ取り殘した儘、一人でどん／＼山道を馳け下りて行きました。其時私も兄さんの口を迸る Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit!（孤獨なるものよ、汝はわが住居なり）といふ獨逸語を聞きました。

三十七

私は心配しい／＼宿へ歸りました。兄さんは室の眞ん中に蒼い顏をして寐てゐました。私の姿を見ても口を利きません、動きもしません。私は自然を尊む人を、自然の儘にして置く方針を取りました。私は靜かに兄さんの枕元で一服しました。それから氣持の惡い汗を流すために手拭を持つて風呂場へ行きました。

私が湯槽の縁に立つて身體を清めてゐると、兄さんが後から遣つて來ました。二人は其時始めて物を云ひ合ひました。私は「疲れたらう」と聞きました。兄さんは「疲れた」と答へました。

午の膳に向ふ頃から兄さんの機嫌は段々回復して來ました。私はつひに兄さんに向つて、先刻山途で二人の間に起つた芝居がゝりの動作に云ひ及びました。兄さんは始めのうちは苦笑してゐました。然し仕舞には居住居を直して眞面目になりました。さうして實際孤獨の感に堪へないのだと云ひ張りました。私は其時始めて兄さんの口から、彼がたゞに社會に立つてのみならず、家庭にあつても一樣に孤獨であるといふ痛ましい自白を聞かされました。兄さんは親しい私に對して疑念を持つてゐる以上に、其家庭の誰彼を疑つてゐる樣でした。兄さんの眼には御父さんも御母さんも僞の器なのです。細君は殊にさう見えるらしいのです。兄さんは其細君の頭に此間手を加へたと云ひました。

「一度打つても落ち附いてゐる。二度打つても落ち附いてゐる。三度目には抵抗するだらうと思つたが、矢つ張り逆らはない。僕が打てば打つほど向うはレデーらしくなる。そのために僕は益無頼漢扱ひにされなくては濟まなくなる。僕は自分の人格の墮落を證明するために、怒りを小羊の上に洩らすと同じ事だ。夫の怒りを利用して、自分の優越に誇らうとする相手は殘酷ぢやないか。君、女は腕力に訴へる男より遙かに殘酷なものだよ。僕は何故女が僕に打たれた時、起つて抵抗して呉れなかつたと思ふ。抵抗しないでも好いから、何故一言でも云ひ爭つて呉れなかつたと思ふ」

斯ういふ兄さんの顔は苦痛に充ちてゐました。不思議な事に兄さんはこれ程鮮明に自分が細君に對する不快な動作を話して置きながら、その動作を敢てするに至つた原因に就いては、具體的に殆ど何事も語らないのです。兄さんはたゞ自分の周圍が僞で成立してゐると云ひます。しかも其僞を私の眼の前で組み立てて見せようとはしません。私は何でこの空漠な響を有つ僞といふ字のために、兄さんがそれ程興奮するかを不審がりました。兄さんは、私が僞といふ言葉を字引で知つてゐる丈だから、そんな迂濶な不審を起すのだと云つて、實際に遠い私を窘めました。兄さんから見れば、私は實際に遠い人間なのです。私は強ひて兄さんから僞の内容を聞かうともしませんでした。從つて兄さんの家庭には何んな面倒な事情が縺れ合つてゐるか、私には頓と解りません。好んで聞くべき筋でもなし、又聞いて置かないでも、家庭の一員たる貴方には報道の必要のない事と思ひましたから、其儘にして濟ましました。たゞ御參考迄に一言注意して置きますが、兄さんは其時御兩親や奥さんに就いて、抽象的ながら云々されたに拘らず、貴方に關しては、一郎といふ名前さへ口にされませんでした。それからお重さんとかいふ妹さんの事に就いても何も云はれませんでした。

三十八

私が兄さんにマラルメの話をしたのは修善寺を立つて小田原へ來た晩の事です。專門の違ふ貴方だから、

或は失禮にもなるまいと思つて書き添へますが、マラルメと云ふのは有名な佛蘭西の詩人の名前です。斯ういふ私も實はその名前だけしか知らないのです。だから話と云つた所で作物の批評などではありません。東京を立つ前に、取りつけの外國雜誌の封を切つて、一寸眼を通したら、其うちにこの詩人の逸話があつたのを、面白いと思つて覺えてゐたので、私はついそれを擧げて、兄さんの反省を促して見たくなつたのです。

此マラルメと云ふ人にも多くの若い崇拜者がありました。其人達はよく彼の家に集まつて、彼の談話に耳を傾ける宵を更かしたのですが、如何に多くの人が押し懸けても、彼の坐るべき場所は必ず煖爐の傍で。彼の腰を卸ろすのは必ず一箇の搖椅と極まつてゐました。是は長い習慣で定められた規則のやうに、誰も犯すものがなかつたといふ事です。所がある晩新しい客が來ました。慥か英吉利のシモンズだつたといふ話ですが、その客は今日迄の習慣を丸で知らないので、何の席も何の椅子も同じ價と心得たのでせう、當然マラルメの坐るべきかの特別の椅子へ腰を掛けて仕舞ひました。マラルメは不安になりました。何時ものやうに話しに實が入りませんでした。一座は白けました。

「何といふ窮屈な事だらう」

私はマラルメの話をした後で、斯ういふ一句の斷案を下しました。さうして兄さんに向つて、「君の窮屈な程度はマラルメよりも烈しい」と云ひました。

兄さんは鋭敏な人です。美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、つまり自分を苦しめに生れて來たやうな結果に陷つてゐます。兄さんには甲でも乙でも構はないといふ鈍な所がありません。必ず甲か乙かの何方かでなくては承知出來ないのです。しかも其甲なら甲の形なり程度なり色合なりが、ぴたりと兄さんの思ふ坪に嵌まらなければ肯はないのです。兄さんは自分が鋭敏な丈に、自分の斯うと思つた針金の樣に際どい線の上を渡つて生活の歩を進めて行きます。其代り相手も同じ際どい針金の上を、踏み外さずに進んで來て呉れなければ我慢しないのです。然し是が兄さんの我儘から來ると思ふと間違ひです。兄さんの豫期通りに兄さんに向つて働き懸ける世の中を想像して見ると、それは今の世の中より遙かに進んだものでなければなりません。從つて兄さんは美的にも智的にも乃至倫理的にも自分程進んでゐない世の中を忌むのです。だから唯の我儘とは違ふでせう。椅子を失つて不安になつたマラルメの窮屈ではありますまい。

然し苦しいのは或はそれ以上かも知れません。私は何うかして其苦しみから兄さんを救ひ出したいと念じてゐるのです。兄さんも自分で其苦しみに堪へ切れないで、水に溺れかゝつた人のやうに、只管藻掻いてゐるのです。私には心のなかの其爭ひがよく見えます。然し天賦の能力と教養の工夫とで漸く鋭くなつた兄さんの眼を、たゞ落附きを與へる目的のために、再び昧くしなければならないといふ事が、人生の上に於て何んな意義になるでせうか。よし意義があるにした所で、人間として出來得る仕事でせうか。

私はよく知つてゐました。考へて考へて考へ拔いた兄さんの頭には、血と涙で書かれた宗教の二字が、最後の手段として、躍り叫んでゐる事を知つてゐました。

三十九

「死ぬか、氣が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」

兄さんは果して斯う云ひ出しました。其時兄さんの顔は、寧ろ絶望の谷に赴く人の樣に見えました。

「然し宗教には何うも這入れさうもない。死ぬのも未練に食ひ留められさうだ。なればまあ氣違ひだな。然し未來の僕は偖置いて、現在の僕は君正氣なんだらうかな。もう既に何うかなつてゐるんぢやないかしら。僕は怖くて堪らない」

兄さんは立つて緣側へ出ました。其處から見える海を手摺に倚つてしばらく眺めてゐました。夫から室の前を二三度行つたり來たりした後、又元の所へ歸つて來ました。

「椅子位失つて心の平和を亂されるマラルメは幸ひなものだ。僕はもう大抵なものを失つてゐる。纔かに自己の所有として殘つてゐる此肉體さへ、(此手や足さへ、)遠慮なく僕を裏切る位だから」

兄さんの此言葉は、好い加減な形容ではないのです。昔から内省の力に勝つてゐた兄さんは、あまり考へた結果として、今は此力の威壓に苦しみ出してゐるのです。兄さんは自分の心が如何な狀態にあらうと

も、一應それを振り返つて吟味した上でないと、決して前へ進めなくなつてゐます。だから兄さんの命の流れは、刹那々々にぽつ〳〵中斷されるのです。食事中一分毎に電話口へ呼び出されるのと同じ事で、苦しいに違ひありません。然し中斷するのも兄さんの心なら、中斷されるのも兄さんの心ですから、兄さんは詰まる所二つの心に支配されてゐて、其二つの心が嫁と姑の樣に朝から晩迄責めたり、責められたりしてゐるために、寸時の安心も得られないのです。

私は兄さんの話しを聞いて、始めて何も考へてゐない人の顔が一番氣高いと云つた兄さんの心を理解する事が出來ました。兄さんが此判斷に到着したのは、全く考へた御蔭です。然し考へた御蔭で此境界には這入れないのです。兄さんは幸福になりたいと思つて、たゞ幸福の研究ばかりをしたのです。所がいくら研究を積んでも、幸福は依然として對岸にあつたのです。

私はとう〳〵兄さんの前に再び神といふ言葉を持ち出しました。さうして意外にも突然兄さんから頭を打たれました。然し是は小田原で起つた最後の幕です。頭を打たれる前にまだ一節ありますから、先づそれから御報知しようと思ひます。然し前にも申した通り、貴方と私とは丸で專門が違ひますので、私の筆にする事が、時によると變に物識めいた餘計な云ひ草のやうに、貴方の眼に映るかも知れません。それで貴方に關係のない片假名抔を入れる時は、猶更躊躇しがちになりますが、是でも必要と認めない限り、成るべくそんな性質の文字は、省いてゐるのですから、貴方も其積りで虚心に讀んで下さい。少しでも貴方

なる恐れがありますから。の心に輕薄といふ疑念が起る樣では、折角書いて上げたものが、前後を通じて、何の役にも立たなくなる恐れがありますから。

私がまだ學校に居た時分、モハメッドに就いて傳へられた下のやうな物語を、何かの書物で讀んだ事があります。モハメッドは向うに見える大きな山を、自分の足元へ呼び寄せて見せるといふのださうです。それを見たいものは何月何日を期して何處へ集まれといふのださうです。

四十

期日になつて幾多の群衆が彼の周圍を取り卷いた時、モハメッドは約束通り大きな聲を出して、向うの山に此方へ來いと命令しました。所が山は少しも動き出しません。モハメッドは澄ましたもので、又同じ號令を掛けました。それでも山は依然として凝としてゐました。モハメッドはとう〱三度號令を繰り返さなければならなくなりました。然し三度云つても、動く氣色の見えない山を眺めた時、彼は群衆に向つて云ひました。――「約束通り自分は山を呼び寄せた。然し山の方では來たくないやうである。山が來て呉れない以上は、自分が行くより外に仕方があるまい」彼はさう云つて、すた〱山の方へ歩いて行つたさうです。

此話を讀んだ當時の私はまだ若う御座いました。私はいゝ滑稽の材料を得た積りで、それを方々へ持つ

て廻りました。すると其内に一人の先輩がありました。みんなが笑ふのに、その先輩丈は「あゝ結構な話だ。宗教の本義は其處にある。それで盡くしてゐる」と云ひました。私は解らぬながらも、その言葉に耳を傾けました。私が小田原で兄さんに同じ話を繰り返したのは、それから何年目になりますか、話は同じ話でも、もう滑稽の爲ではなかつたのです。

「何故山の方へ歩いて行かない」

私が兄さんに斯う云つても、兄さんは默つてゐます。私は兄さんに私の主意が徹しないのを恐れて、附け足しました。

「君は山を呼び寄せる男だ。呼び寄せて來ないと怒る男だ。地團太を踏んで口惜しがる男だ。さうして山を惡く批判する事丈を考へる男だ。何故山の方へ歩いて行かない」

「もし向うが此方へ來るべき義務があつたら何うだ」と兄さんが云ひます。

「向うに義務があらうとあるまいと、此方に必要があれば此方で行くだけの事だ」と私が答へます。

「義務のない所に必要のある筈がない」と兄さんが主張します。

「ぢや幸福の爲に行くさ。必要のために行きたくないなら」と私が又答へます。

兄さんは是で又默りました。私のいふ意味はよく兄さんに解つてゐるのです。けれども是非、善惡、美醜の區別に於て、自分の今日迄に養ひ上げた高い標準を、生活の中心としなければ生きてゐられない兄さ

んは、さらりとそれを擲つて、幸福を求める氣になれないのです。寧ろそれに振ら下がりながら、幸福を得ようと焦燥るのです。さうして其矛盾も兄さんには能く呑み込めてゐるのです。

「自分を生活の心棒と思はないで、綺麗に投げ出したら、もつと樂になれるよ」と私が又兄さんに云ひました

「ぢや何を心棒にして生きて行くんだ」と兄さんが聞きました。

「神さ」と私が答へました。

「神とは何だ」と兄さんが又聞きました。

私は此處で一寸自白しなければなりません。私と兄さんと斯う問答をしてゐる所を御讀みになる貴方には、私がさも宗教家らしく映ずるかも知れませんが、――私が何うかして兄さんを信仰の道に引き入れようと力めてゐるやうに見えるかも知れませんが、實を云ふと、私は耶蘇にもモハメッドにも縁のない、平凡な唯の人間に過ぎないのです。宗教といふものを夫迄必要とも思はないで、漫然と育つた自然の野人なのです。話しが兎角そちらへ向くのは、全く相手に兄さんといふ烈しい煩悶家を控へてゐる爲だつたのです。

四十一

私が兄さんに遣られた原因も全く其處にあつたのです。事實私は神といふものを知らない癖に、神といふ言葉を口にしました。兄さんから反問された時に、それは天とか命とかいふ意味と同じものだと漠然答へて置いたら、まだ可かつたかも知れません。所が前後の行きがゝり上、私にはそんな說明の餘裕がなくなりました。其時の問答はたしか下の樣な順序で進行したかと思ひます。

私「世の中の事が自分の思ふ樣にばかりならない以上、そこに自分以外の意志が働いてゐると、いふ事實を認めなくてはなるまい」

「認めてゐる」

私「さうして其意志は君のよりも遙かに偉大ぢやないか」

「偉大かも知れない、僕が負けるんだから。けれども大概は僕のよりも不善で不美で不眞だ。僕は彼等に負かされる譯がないのに負かされる。だから腹が立つのだ」

私「それは御互に弱い人間同志の競合を云ふんだらう。僕のはさうぢやない、もつと大きなものを指すのだ」

「そんな曖昧なものが何處にある」

私「なければ君を救ふ事が出來ない丈の話しだ」

「ぢや暫くあると假定して……」

私「萬事其方へ委任して仕舞ふのさ。何分宜しく御頼み申しますつて。君、俥に乘つたら、落つことさないやうに車夫が引いて吳れるだらうと安心して、俥の上で寐る事は出來ないか」

「僕は車夫程信用出來る神を知らないのだ。君だつて左右だらう。君のいふ事は、全く僕の爲に拵へた說教で、君自身に實行する經典ぢやないのだらう」

私「左右ぢやない」

「ぢや君は全く我を投げ出してゐるね」

私「まあ左右だ」

「死なうが生きようが、神の方で好いやうに取り計らつて吳れると思つて安心してゐるね」

私「まあ左右だ」

私は兄さんから斯う詰め寄せられた時、段々怪しくなつて來るやうな氣がしました。けれども前後の勢ひが自分を支配してゐる最中なので、また何うする譯にも行きません。すると兄さんが突然手を擧げて、私の橫面をぴしやりと打ちました。

私は御承知の通り餘程神經の鈍く出來た性質です。御蔭で今日迄餘り人と爭つた事もなく、又人を怒らした試しも知らずに過ぎました。私の鈍い所爲でもあつたでせうが、子供の時ですら親に打たれた覺えはありません。成人しては無論の事です。生れて始めて手を顏に加へられた私は其時われ知らずむつとしま

した。

「何をするんだ」

「それ見ろ」

私には此「それ見ろ」が解らなかつたのです。

「亂暴ぢやないか」と私が云ひました。

「それ見ろ。少しも神に信頼してゐないぢやないか。矢つ張り怒るぢやないか。一寸した事で氣分の平均を失ふぢやないか。落附きが顚覆するぢやないか」

私は何とも答へませんでした。又何とも答へられませんでした。そのうちに兄さんはつと座を立ちました。私の耳にはどん／＼階子段を馳け下りて行く兄さんの足音丈が殘りました。

四十二

私は下女を呼んで伴れの御客さんは何うしたと聞いて見ました。

「今しがた表へ御出になりました。大方濱でせう」

下女の返事が私の想像と一致したので、私はそれ以上の掛念を省いて、ごろりと其處に横になりました。すると衣桁の端に懸かつてゐる兄さんの夏帽子がすぐ眼に着きました。兄さんは此暑いのに帽子も被らず

に何處かへ飛び出して行つたのです。あなたの樣に、兄さんの一擧一動を心配する人から見たら、仰向けに寐そべつた其時の私の姿は、少し呑氣過ぎたかも知れません。是は固より私の鈍い神經の仕業に違ひないのです。けれども唯鈍い丈で說明する以外に、もう少し御參考になる點も交つてゐるやうですから、夫を一寸申上げます。

私は兄さんの頭を信じてゐました。私よりも鋭敏な兄さんの理解力に尊敬を拂つてゐました。兄さんは時々普通の人に解らない樣な事を出し拔けに云ひます。それが知らないものの耳や、敎育の乏しい男の耳には、何處かに破目の入つた鐘の音として、變に響くでせうけれども、よく兄さんを心得た私には却て習慣的な言說よりは難有かつたのです。私は平生から其處に兄さんの特色を認めてゐました。だから心配の必要はないと、あれ程強くあなたに斷言して憚らなかつたのです。それで一所に旅に出ました。旅へ出てからの兄さんは今迄私が敍述して來た通りですが、私は此旅行先の兄さんの爲に、少しづゝ故の考へを訂正しなければならない樣になつて來たのです。

私は兄さんの頭が、私より判然と整つてゐる事に就いて、今でも少しの疑ひを挾む餘地はないと思ひます。然し人間としての今の兄さんは、故に較べると、何處か亂れてゐるやうです。さうして其亂れる原因を考へて見ると、判然と整つた彼の頭の働き其物から來てゐるのです。私から云へば、整つた頭には敬意を表したいし、又亂れた心には疑ひを置きたいのですが、兄さんから見れば、整つた頭、取りも直さず亂

れた心なのです。私はそれで迷ひます。頭は確かである。然し氣はことによると少し變かも知れない。信用は出來る、然し信用は出來ない。斯う云つたら貴方はそれを滿足な報道として受け取られるでせうか。それより外に云ひやうのない私は、自分自身で既に困つて仕舞つたのです。

私は梯子段をどん／＼馳け下りて行つた兄さんを其儘にして、ごろりと横になりました。私は夫程安心してゐたのです。帽子も被らずに出て行つた位だから、すぐ歸るに極まつてゐると考へたのです。然し兄さんは豫想通りさう手輕くは戻りませんでした。すると私もつひに大の字になつて居られなくなりました。私は仕舞に明らかな不安を抱いて起ち上がりました。

濱へ出ると、日は何時か雲に隱れてゐました。薄どんよりと曇り掛けた空と、其下にある磯と海が、同じ灰色を浴びて、物憂く見える中を、妙に生溫い風が磯臭く吹いて來ました。私は其灰色を彩どる一點として、向うの波打際に蹲踞んでゐる兄さんの姿を、白く認めました。私は默つて其方角へ歩いて行きました。私が後から聲を掛けた時、兄さんはすぐ立ち上がつて「先刻は失敬した」と云ひました。

兄さんは目的もなくまた留め度もなく其處いらを歩いた揚句、仕舞に疲れたなりで疲れた場所に蹲踞んでしまつたのださうです。

「山に行かう。もう此處は厭になつた。山に行かう」

兄さんは今にも山へ行きたい風でした。

四十三

我々は其晩とう／＼山へ行く事になりました。山と云つても小田原からすぐ行かれる所は箱根の外にありません。私は此通俗な溫泉場へ、最も通俗でない兄さんを連れ込んだのです。兄さんは始めから、屹度騷々しいに違ひないと云つてゐました。それでも山だから二三日は我慢出來るだらうと云ふのです。

「我慢しに溫泉場へ行くなんて勿體ない話だ」

是も其時兄さんの口から出た自嘲の言葉でした。果して兄さんは着いた晩からして、八釜しい隣室の客を我慢しなければならなくなりました。此客は東京のものか橫濱のものか解りませんが、何でも言葉の使ひやうから判斷すると、商人とか請負師とか、仲買とかいふ部に屬する種類の人間らしく思はれました。時々不調和に大きな聲を出します。傍若無人に騷ぎます。さういふ事に餘り頓着のない私さへ隨分辟易しました。御蔭で其晩は兄さんも私も些とも六づかしい話しをしずに寐て仕舞ひました。つまり隣の男が我我の思索を破壞するために騷いだ事に當たるのです。

翌くる朝私が兄さんに向つて、「昨夜は寐られたか」と聞きますと、兄さんは首を掉つて、「寐られる所か。君は實に羨ましい」と答へました。私は何うしても寐つかれない兄さんの耳に、さかんな鼾聲を終宵聞かせたのださうです。

其日は夜明から小雨が降つてゐました。それが十時頃になると本降りに變りました。午少し過ぎには、多少の暴れ模樣さへ見えて來ました。すると兄さんは突然立ち上がつて尻を端折ります。是から山の中を歩くのだと云ひます。凄じい雨に打たれて、谷崖の容赦なく無暗に運動するのだと主張します。御苦勞千萬だとは思ひましたが、兄さんを思ひ留まらせるよりも、私が兄さんに贊成した方が、手數が省けますので、つい「宜からう」と云つて、私も尻を端折りました。

兄さんはすぐ呼息の塞まるやうな風に向つて突進しました。水の音だか、空の音だか、何とも蚊とも喩へられない響の中を、地面から跳ね上がる護謨球のやうな勢ひで、ほん〳〵飛ぶのです。さうして血管の破裂する程大きな聲を出して、たゞわあつと叫びます。其勢ひは昨夜の隣室の客より何層倍猛烈だか分りません。聲だつて彼よりも遙かに野獸らしいのです。しかも其原始的な叫びは、口を出るや否や、すぐ風に攫つて行かれます。それを又雨が追ひ懸けて碎き盡くします。兄さんは暫くして沈默に歸りました。けれどもまだ歩き廻りました。呼息が切れて仕方なくなる迄歩き廻りました。

我々が濡れ鼠のやうになつて宿へ歸つたのは、出てから一時間目でしたらうか、又二時間目に懸かりましたらうか。私は臍の底まで冷えました。兄さんは唇の色を變へてゐました。湯に這入つて暖まつた時、兄さんはしきりに「痛快だ」と云ひました。自然に敵意がないから、いくら征服されても痛快なんでせう。私はたゞ「御苦勞な事だ」と云つて、風呂のなかで心持よく足を伸ばしました。

其晩は豫期に反して、隣の室がひつそりと靜まつてゐました。下女に聞いて見ると、兄さんを惱ました昨夕の客は、何時の間にかもう立つて仕舞つたのでした。私が兄さんから思ひ掛けない宗教觀を聞かされたのは其宵の事です。私は一寸驚きました。

四十四

貴方も現代の青年だから宗教といふ古めかしい言葉に對してあまり同情は持つて居られないでせう。私も小六づかしい事は成るべく言はずに濟ましたいのです。けれども兄さんを理解するためには、是非共其處へ觸れて來なければなりません。あなたには興味もなからうし、又意外でもあらうけれども、それを遠慮する以上、肝心の兄さんが不可解になる丈だから、辛防して此處のところを飛ばさずに讀んで下さい。辛抱さへなされば、貴方にはよく解る事なんです。讀んでさうして善く兄さんを呑み込んだ上、御老人方の合點の行かれるやうに御宅へ紹介して上げて下さい。私は兄さんに就いて過度の心勞をされる御年寄に對して實際御氣の毒に思つてゐます。然し今の處貴方を通してより外に、ありの儘の兄さんを、兄さんの家庭に知らせる手段はないのだから、貴方も少し眞面目になつて、聞き慣れない字面に眼を御注ぎなさい。私は醉興で六づかしい事を書くのではありません。六づかしい事が活きた兄さんの一部分なのだから仕方がないのです。二つを引き離すと血や肉から出來た兄さんも亦存在しなくなるのです。

兄さんは神でも佛でも何でも自分以外に權威のあるものを建立するのが嫌ひなのです。（この建立といふ言葉も兄さんの使つた儘を、私が踏襲するのです。） それではニイチエのやうな自我を主張するのかといふと左右でもないのです。

「神は自己だ」と兄さんが云ひます。兄さんが斯う強い斷案を下す調子を、知らない人が傍で聞いてると、少し變だと思ふかも知れません。兄さんは變だと思はれても仕方のないやうな激した云ひ方をします。

「ぢや自分が絶對だと主張すると同じ事ぢやないか」と私が非難します。兄さんは動きません。

「僕は絶對だ」と云ひます。

斯ういふ問答を重ねれば重ねる程、兄さんの調子は益變になつて來ます。調子ばかりではありません、云ふ事も次第に尋常を外れて來ます。相手が若し私のやうなものでなかつたならば、兄さんは最後迄行かないうちに、純粹な氣違ひとして早く葬られ去つたに違ひありません。然し私はさう容易く彼を見棄てる程に、兄さんを輕んじてはゐませんでした。私はとう／＼兄さんを底迄押し詰めました。

兄さんの絶對といふのは、哲學者の頭から割り出された空しい紙の上の數字ではなかつたのです。自分で其境界に入つて親しく經驗する事の出來る判切した心理的のものだつたのです。

兄さんは純粹に心の落ち附きを得た人は、求めないでも自然に此境界に入れるべきだと云ひます。一度

此境界に入れば天地も萬有も、凡ての對象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云ひます。さうして其時の自分は有るとも無いとも片の附かないものだと云ひます。偉大なやうな又微細なやうなものだと云ひます。何とも名の附け樣のないものだと云ひます。卽ち絕對だと云ひます。さうして其絕對を經驗してる人が、俄然として半鐘の音を聞くとすると、其半鐘の音は卽ち自分だといふのです。言葉を換へて同じ意味を表はすと、絕對卽相對になるのだといふのです。從つて自分以外に物を置き他を作つて、苦しむ必要がなくなるし、又苦しめられる掛念も起らないのだと云ふのです。

「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、何うしても安心は得られない。すべからく現代を超越すべしといつた才人は兎に角、僕は是非共生死を超越しなければ駄目だと思ふ」

兄さんは殆ど齒を喰ひしばる勢ひで斯う言明しました。

四十五

私は此場合にも自分の頭が兄さんに及ばないといふ事を自白しなければなりません。私は人間として、果して兄さんのいふ樣な境界に達せられべきものかを未だ考へてゐなかつたのです。明瞭な順序で自然其處に歸着して行く兄さんの話を聞いた時、成程そんなものかとも思ひました。又そんなものでも無からうかとも思ひました。何しろ私は兎角の是非を挾む丈の資格を有つてゐない人間に過ぎませんでした。私は

默々として熱烈な言葉の前に坐りました。すると兄さんの態度が變りました。私の沈默が鋭い兄さんの鋒先を鈍らせた例は、今迄にも何遍かありました。さうして夫が悉く偶然から來てゐるのです。尤も兄さんの樣な聰明な人に、一種の思はくから默つて見せるといふ技巧を弄したら、すぐ觀破されるに極まつてゐますから、私の鈍いのも時には一得になつたのでせう。

「君、僕を單に口舌の人と輕蔑して呉れるな」と云つた兄さんは、急に私の前に手を突きました。私は挨拶に窮しました。

「君のやうな重厚な人間から見たら僕は如何にも輕薄な御饒舌に違ひない。然し僕は是でも口で云ふ事を實行したがつてゐるんだ。實行しなければならないと朝晩考へ續けに考へてゐるんだ。實行しなければ生きてゐられないと迄思ひ詰めてゐるんだ」

私は依然として挨拶に困つた儘でした。

「君、僕の考へを間違つてゐると思ふか」と兄さんが聞きました。

「左右は思はない」と私が答へました。

「徹底してゐないと思ふか」と兄さんが又聞きました。

「根本的の樣だ」と私が又答へました。

「然し何うしたら此研究的な僕が、實行的な僕に變化出來るだらう。どうぞ教へて呉れ」と兄さんが賴

むのです。

「僕にそんな力があるものか」と、思ひも寄らない私は斷るのです。

「いやある。君は實行的に生れた人だ。だから幸福なんだ。さう落ち附いてゐられるんだ」と兄さんが繰り返すのです。

兄さんは眞劍のやうでした。私は其の時憮然として兄さんに向ひました。

「君の智慧は遙かに僕に優つてゐる。僕には到底君を救ふ事は出來ない。僕の力は僕より鈍いものになら、或は及ぼし得るかも知れない。然し僕より聰明な君には全く無效である。要するに君は痩せて丈が長く生れた男で、僕は肥えてずんぐり育つた人間なんだ。僕の眞似をして肥らうと思ふなら、君は君の脊丈を縮めるより外に途はないんだらう」

兄さんは眼からほろ〳〵涙を出しました。

「僕は明らかに絶對の境地を認めてゐる。然し僕の世界觀が明らかになればなる程、絶對は僕と離れて仕舞ふ。要するに僕は圖を披いて地理を調査する人だつたのだ。それでゐて脚絆を着けて山河を跋渉する實地の人と、同じ經驗をしようと焦慮り抜いてゐるのだ。僕は迂闊なのだ。僕は矛盾なのだ。然し迂闊と知り矛盾と知りながら、依然として藻掻いてゐる。僕は馬鹿だ。人間としての君は遙かに僕よりも偉大だ」

兄さんは又私の前に手を突きました。さうして恰も謝罪でもする時のやうに頭を下げました。涙がほ

たりほたりと兄さんの眼から落ちました。私は恐縮しました。

四十六

箱根を出る時兄さんは「二度と斯んな所は御免だ」と行ひました。今迄通つて來たうちで、兄さんの氣に入つた所はまだ一ヶ所もありません。兄さんは誰と何處へ何つても直ぐ厭になる人なのでせう。夫も其筈です。兄さんには自分の身軀や自分の心からしてが既に氣に入つてゐないのですから。兄さんは自分の身軀や心が自分を裏切る曲者の樣に云ひます。それが徒爾半分の出放題でない事は、今日迄一所に寐泊りの日數を重ねた私にはよく理解出來ます。其私から有りの儘の報知を受ける貴方にも篤と御合點が行く事だらうと思ひます。

斯ういふ兄さんと、私がよく一所に旅が出來ると御思ひになるかも知れません。私にも考へると、それが不思議な位です。兄さんを上に述べた樣に頭の中へ疊み込んだが最後、如何に遲鈍な私だつて、御相手は出來惡い譯です。然し事實私は今兄さんと斯うして差向ひで暮らしてゐながら、左程に苦痛を感じてはゐないのです。少なくとも傍で想像するよりは餘程樂なのだらうと考へてゐます。さうして夫を何故だと聞かれたら、一寸返答に差支へるのです。貴方も同じ兄さんに就いて同じ經驗をなさりはしませんか。若し同じ經驗をなさらないならば、骨肉を分けた貴方よりも、他人の私の方が、兄さんに親しい性質を有

つて生れて來たのでせう。親しいといふのは、たゞ仲が好いと云ふ意味ではありません。和して納まるべき特性をどこか相互に分擔して前へ進めるといふ積りなのです。

私は旅へ出てから絶えず兄さんの氣に障る樣な事を云つたり爲たりしました。ある時は頭さへ打たれました。それでも私は貴方の家庭の凡ての人の前に立つて、私はまだ兄さんから愛想を盡かされてゐないといふ事を明言出來ると思ひます。同時に、一種の弱點を持つた此兄さんを、私は今でも衷心から敬愛してゐると固く信じて疑はないのであります。

兄さんは私のやうな凡庸な者の前に、頭を下げて涙を流す程の正しい人です。それを敢てする程の勇氣を有つた人です。それを敢てするのが當然だと判斷する丈の識見を具へた人です。兄さんの頭は明らか過ぎて、やゝともすると自分を置き去りにして先へ行きたがります。心の他の道具が彼の理智と步調を一つにして前へ進めない所に、兄さんの苦痛があるのです。人格から云へば其處に隙間があるのです。成效から云へば其處に破滅が潛んでゐるのです。此不調和を兄さんの爲に悲しみつゝある私は、凡ての原因をあまりに働き過ぎる彼の理智の罪に歸しながら、やつぱり、其理智に對する敬意を失ふ事が出來ないのです。兄さんを唯の氣六づかしい人、唯の我儘な人とばかり解釋してゐては、何時迄經つても兄さんに近寄る機會は來ないかも知れません。從つて少しでも兄さんの苦痛を柔らげる縁は、永劫に去つたものと見なければなりますまい。

我々は前申した通り箱根を立ちました。さうして直ぐに此紅ケ谷の小別莊に入りました。私は其前一寸國府津に泊つて見る積りで、暗に一人極めのプログラムを立てゝるたのですが、とう〳〵兄さんにはそれを云ひ出さずに仕舞つたのです。國府津でもまた「二度と斯んな所は御免だ」と怒られさうでしたから、其上兄さんは私から此別莊の話を聞いて、しきりに其處へ落ち附きたがつてゐたのです。

四十七

何にでも刺激され易い癖に、何んな刺激にも堪へ切れないと云つた風の、今の兄さんには、草庵めいた此別莊が最も適してゐたのかも知れません。兄さんは物靜かな座敷から、谷一つ隔てゝ向うの崖の高い松を見上げた時、「好いな」と云つて其處へ腰を卸ろしました。

「あの松も君の所有だ」

私は慰めるやうな句調で、わざと兄さんの口吻を眞似て見せました。修善寺では頓と解らなかつた「あの百合は僕の所有だ」とか、「あの山も谷も僕の所有だ」とか云つた兄さんの言葉を想ひ出したからです。

別莊には留守番の爺さんが一人居ましたが、是は我々と出違ひに自分の宅へ歸りました。夫でも拭き掃除のためや水を汲むために朝夕一度位づゝは必ず來て呉れます。男二人の事ですから、煮炊は無論出來ません。我々は爺さんに頼んで近所の宿屋から三度々々食事を運んで貰ふ事にしました。夜は電燈の設備が

ありますから、洋燈を點す手數は要らないのです。斯ういふ譯で、朝起きてから夜寐る迄に、我々の是非遣らなければならない事は、まあ床を延べて蚊帳を釣る位なものです。

「自炊よりも氣樂で閑靜だね」と兄さんが云ひます。實際今迄通つて來た山や海のうちで、此處が一番靜かに違ひないのです。兄さんと差向ひで默つてゐると、風の音さへ聞こえない事があります。多少八釜しいと思ふのは珊瑚樹の葉隱れにぎい〳〵軋る隣の車井戸の響ですが、兄さんは案外それには無頓着です。兄さんは段々落ち附いて來るやうです。私はもつと早く兄さんを此處へ連れて來れば好かつたと思ひました。

庭先に少しばかりの畠があつて、其處に茄子や唐もろこしが作つてあります。此茄子を捥いで食はうかと相談しましたが、漬物に拵へるのが面倒なので、つひ已めにしました。唐もろこしは未だ食べられる程實が入りません。勝手口の井戸の傍に、トマトーが植ゑてあります。それを朝、顔を洗ふ序に、二人で食ひました。

兄さんは暑い日盛りに、此庭だか畑だか分らない地面の上に下りて、凝と蹲踞んでゐる事があります。時々かんなの花の香を嗅いで見たりします。かんなに香なんかありやしません。凋んだ月見草の花片を見詰めてゐる事もあります。着いた日抔は左隣の長者の別莊の境に生えてゐる薄の傍へ行つて、長い間立つてゐました。私は座敷から其樣子を眺めてゐましたが、何時迄經つても兄さんが動かないので、仕舞に縁

先にある草履を突掛けて、わざ／＼傍へ行つて見ました。隣と我々の住居との仕切りになつてゐる其處は、高さ一間位の土堤で、時節柄一面の薄が蔽ひ被さつてゐるのです。兄さんは近づいた私を顧て、下の方にある薄の根を指さしました。

薄の根には蟹が這つてゐました。小さな蟹でした。親指の爪位の大きさしかありません。それが一匹ではないのです。しばらく見てゐるうちに、一匹が二匹になり、二匹が三匹になるのです。仕舞には彼處にも此處にも蒼蠅い程眼に着き出します。

「薄の葉を渡る奴があるよ」

兄さんは斯んな觀察をして、まだ動かずに立つてゐます。私は兄さんを其處へ殘して又故の席へ歸りました。

兄さんが斯ういふ些細な事に氣を取られて、殆ど我を忘れるのを見る私は、甚だ愉快です、是でこそ兄さんを旅行に連れ出した甲斐があると思ふ位です。其晩私は其意味を兄さんに話しました。

四十八

「先刻君は蟹を所有してゐたぢやないか」

私が兄さんに突然斯う云ひ掛けますと、兄さんは珍らしくあはゝと聲を立てて愉快さうに笑ひました。

修善寺以後、私が時々所有といふ言葉を、妙な意味に使つて見せるので、單にそれを滑稽と解釋してゐる兄さんには可笑しく響くのでせう。可笑しがられるのは、怒られるよりも餘つ程增しですが、事實私の方ではもつと眞面目なのでした。

「絶對に所有してゐたのだらう」と私はすぐ云ひ直しました。今度は兄さんも笑ひませんでした。然しまだ何とも答へません。口を開くのは矢張り私の番でした。

「君は絶對々々と云つて、此間六づかしい議論をしたが、何もさう面倒な無理をして、絶對なんかに這入る必要はないぢやないか。あゝいふ風に蟹に見惚れてさへゐれば、少しも苦しくはあるまいがね。まづ絶對を意識して、それから其絶對が相對に變る刹那を捕へて、そこに二つの統一を見出だすなんて、隨分骨が折れるだらう。第一人間に出來る事か何だか夫さへ判然しやしない」

兄さんはまだ私を遮らうとはしません。何時もよりは大分落ち附いてゐる樣でした。私は一歩先へ進みました。

「それより逆に行つた方が便利ぢやないか」

「逆とは」

斯う聞き返す兄さんの眼には誠が輝いてゐました。

「つまり蟹に見惚れて、自分を忘れるのさ。自分と對象とがぴたりと合へば、君の云ふ通りになるぢや

ないか」

「左右かな」

兄さんは心元なささうな返事をしました。

「さうかなつて、君は現に實行してゐるぢやないか」

「成程」

兄さんの此言葉はやはり茫然たるものでした。私は此時不圖自分が今迄餘計な事を云つてゐたのに氣が附きました。實を云ふと、私は絶對といふものを丸で知らないのです。考へもしなかつたのです。想像もした覺えがないのです。たゞ教育の御蔭でさう云ふ言葉を使ふ事丈を知つてゐたのです。けれども私は人間として兄さんよりも落ち附いてゐました。落ち附いてゐるといふ事が兄さんより偉いといふ意味に聞こえては面目ない位なものですから、私は兄さんより普通一般に近い心の狀態を有つてゐたと云ひ直しませう。朋友として私の兄さんに向つて働き掛ける仕事は、だから唯兄さんを私のやうな人並な立場に引き戻す丈なのです。然しそれを別な言葉で云つて見ると非凡なものを平凡にするといふ馬鹿氣た意味にもなつて來ます。もし兄さんの方で苦痛の訴へがないならば、私のやうなものが、何で兄さんにこんな問答を仕懸けませう。兄さんは正直です。腑に落ちなければ何處迄も問ひ詰めて來ます。問ひ詰めて來られゝば、私には解らなくなります。それ丈ならまだしもですが、斯ういふ批評的な談話を交換してゐると、折角

實行的になりかけた兄さんを、又もとの研究的態度に戻して仕舞ふ恐れがあるのです。私は何より先にそれを氣遣ひました。私は天下にありとあらゆる藝術品、高山大河、もしくは美人、何でも構はないから、兄さんの心を悉皆奪ひ盡くして、少しの研究的態度も萌し得ない程なものを、兄さんに與へたいのです。さうして約一年ばかり、寸時の間斷なく、其全勢力の支配を受けさせたいのです。兄さんの所謂物を所有するといふ言葉は、畢竟物に所有されるといふ意味ではありませんか。だから絕對に物から所有される事、卽ち絕對に物を所有する事になるのだらうと思ひます。神を信じない兄さんは、其處に至つて始めて世の中に落ち附けるのでせう。

四十九

一昨日の晩は二人で濱を散歩しました。私たちの居る所から海邊迄は約三丁もあります。細い道を通つて、一旦街道へ出て、また夫を橫切らなければ海の色は見えないのです。月の出にはまだ間がある時刻でした。波は存外暗く動いてゐました。眼がなれる迄は、水と礒との境目が判然分らないのです。兄さんは其中を容赦なくずん〳〵歩いて行きます。私は時々生溫い水に足下を襲はれました。岸へ寄せる波の餘りが、のし餅の樣に平らに擴がつて、思ひの外遠く迄押し上げて來るのです。私は後から兄さんに、「下駄が濡れやしないか」と聞きました。兄さんは命令でも下すやうに、「尻を端折れ」と云ひました。兄さんは先

刻から足を汚す覺悟で、尻を端折つてゐたものと見えます。二三間離れた私にはそれが分らない位四圍が暗いのでした。けれども時節柄なんでせう、避暑地丈あつて人に會ひます。さうして會ふ人も會ふ人も、必ず男女二人連に限られてゐました。彼等は申し合はせた樣に、默つて闇の中を辿つて來ます。だから忽然私たちの前へ現はれる迄は、丸で氣がつかないのです。彼等が摺り拔けるやうに私たちの傍を通つて行く時、眼を上げて物色すると、どれも是も若い男と女ばかりです。私は斯ういふ一對に何度か出合ひました。

私が兄さんからお貞さんといふ人の話を聞いたのは其時の事でした。お貞さんは近頃大阪の方へ御嫁に行つたんださうですから、兄さんは其宵に出逢つた幾組かの若い男や女から、お貞さんの花嫁姿を連想でもしたのでせう。

兄さんはお貞さんを宅中で一番慾の寡ない善良な人間だと云ふのです。あゝ云ふのが幸福に生れて來た人間だと云つて羨ましがるのです。自分もあゝなりたいと云ふのです。お貞さんを知らない私は、何とも評しやうがありませんから、只さうかくと答へて置きました。すると兄さんが「お貞さんは君を女にしたやうなものだ」と云つて砂の上へ立ち留まりました。私も立ち留まりました。

向うの高い所に徼かな燈火が一つ眼に入りました。晝間見ると、其見當に赤い色の建物が樹の間隱れに眺められますから、此燈火も大方其赤い洋館の主が點けてゐるのでせう。濃い夜陰の色の中にたつた一つ

懸け離れて星のやうに光つてゐるのです。私の顔は其燈火の方を向いてゐました。兄さんは又浪の來る海をまともに受けて立ちました。

其時二人の頭の上で、ピアノの音が不意に起りました。其處は砂濱から一間の高さに、石垣を規則正しく積み上げた一構で、庭から濱へぢかに通へるためでせう、石垣の端には階段が筋違に庭先迄刻み上げてありました。私は其石段を上りました。

庭には家を洩れる電燈の光が、線のやうに落ちてゐました。其弱い光で照らされてゐた地面は一體の芝生でした。花もあちこちに咲いてゐるやうでしたが、是は暗い上に廣い庭なので、判然とは分りませんでした。ピアノの音は正面に見える洋館の、明るく照らされた一室から出るやうでした。

「西洋人の別莊だね」

「左右だらう」

兄さんと私は石段の一番上の所に竝んで腰を掛けました。聞こえない樣な又聞こえるやうなピアノの音が、時々二人の耳を掠めに來ます。二人共無言でした。兄さんの吸ふ煙草の先が時々赤くなりました。

五十

私はお貞さんのつゞきでも出る事と思つて、暗い中でそれとなく兄さんの聲を待ち受けてゐたのですが、

兄さんは煙草に魅せられた人の樣に、時々紙卷の先を赤くする丈で、中々口を開きません。それを石段の下へ投げて私の方へ向いた時は、もう話題がお貞さんを離れてゐました。私は少し意外に思ひました。兄さんの題目は、お貞さんに關係のない許りか、ピアノの音にも、廣い芝生にも、美しい別莊にも、乃至は避暑にも旅行にも、凡て我々の周圍と現在とは全く交渉を絶つた昔の坊さんの事でした。

坊さんの名はたしか香嚴とか云ひました。俗にいふ一を問へば十を答へ、十を問へば百を答へるといつた風の、聰明靈利に生れ附いた人なのださうです。所が其聰明靈利が悟道の邪魔になつて、何時迄經つても道に入れなかつたと兄さんは語りました。悟を知らない私にも此意味はよく通じます。自分の智慧に苦しみ拔いてゐる兄さんには猶更痛切に解つてゐるでせう。兄さんは「全く多知多解が煩をなしたのだ」ととくに注意した位です。

數年の間百丈禪師とかいふ和尚さんに就いて參禪した此坊さんは遂に何の得る所もないうちに師に死なれて仕舞つたのです。それで今度は潙山といふ人の許に行きました。潙山は御前のやうな意解識想を振り舞はして得意がる男はとても駄目だと叱り附けたさうです。父も母も生れない先の姿になつて出て來いと云つたさうです。坊さんは寮舍に歸つて、平生讀み破つた書物上の知識を殘らず點檢した揚句、あゝ／＼畫に描いた餅はやはり腹の足しにならなかつたと嘆息したと云ひます。そこで今迄集めた書物をすつかり燒き棄てて仕舞つたのです。

「もう諦めた。是からはたゞ粥を啜つて生きて行かう」

斯う云つた彼は、それ以後禪のぜの字も考へなくなつたのです。善も投げ惡も投げ、父母の生れない先の姿も投げ、一切を放下し盡くして仕舞つたのです。それからある閑寂な所を選んで小さな庵を建てる氣になりました。彼はそこにある草を芟りました。そこにある株を掘り起しました。地ならしをするために、そこにある石を取つて除けました。すると其石の一つが竹藪に中たつて戛然と鳴りました。彼は此朗らかな響を聞いて、はつと悟つたさうです。さうして一擊に所知を亡ふと云つて喜んだといひます。

「何うかして香巖になりたい」と兄さんが云ひます。兄さんの意味はあなたにも好く解るでせう。一切の重荷を卸ろして樂になりたいのです。兄さんは其重荷を預かつて貰ふ神を有つてゐないのです。だから掃溜か何かへ棄てて仕舞ひたいと云ふのです。兄さんは聰明な點に於てよく此香巖といふ坊さんに似てゐます。だから猶のこと香巖が羨ましいのでせう。

兄さんの話は西洋人の別莊や、ハイカラな樂器とは、全く縁の遠いものでした。何故兄さんが暗い石段の上で、磯の香を嗅ぎながら、突然こんな話をし出したか、それは私には解りません。兄さんの話が濟んだ頃はピアノの音ももう聞こえませんでした。潮に近いためか、夜露の所爲か、浴衣が濕つぽくなつてゐました。私は兄さんを促して又故の道を引き返しました。往來へ出た時、私は行きつけの菓子屋へ寄つて饅頭を買ひました。それを食ひながら暗い中を默つて宅迄歸つて來ました。留守を賴んで置いた爺さんの

所の子供は、蚊に喰はれるのも構はずぐう〳〵寐てゐました。私は饅頭の餘りを遣つて、すぐ子供を歸してやりました。

五十一

昨日の朝食事をした時、飯櫃を置いた位地の都合から、私が兄さんの茶碗を受けとつて、一膳目の御飯をよそつてやりますと、兄さんは又お貞さんの名を私の耳に訴へました。お貞さんがまだ嫁に行かないうちは、丁度今私がしたやうに、始終兄さんの御給仕をしたものださうですね。昨夜は性格の點からお貞さんに比較され、今朝は又御給仕の具合で同じお貞さんにたとへられた私は、つい兄さんに向つて質問を掛けて見る氣になりました。

「君は其お貞さんとかいふ人と、斯うして一所に住んでゐたら幸福になれると思ふのか」

兄さんは默つて箸を口へ持つて行きました。私は兄さんの態度から推して、大方返事をするのが厭なんだらうと考へたので、それぎり後を推しませんでした。すると兄さんの答が、御飯を二口三口嚥み下したあとで、不意に出て來ました。

「僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」

兄さんの言葉は如何にも論理的に終始を貫いて眞直に見えます。けれども暗い奥には矛盾が既に漂つてゐます。兄さんは何にも拘泥してゐない自然の顔をみると感謝したくなる程嬉しいと私に明言した事があるのです。それは自分が幸福に生れた以上、他を幸福にする事も出來ると云ふのと同じ意味ではありませんか。私は兄さんの顏を見てにや〳〵笑ひました。兄さんはさうなると只では濟まされない男です。すぐ食ひ附いて來ます。

「いや本當にさうなのだ。疑られては困る。實際僕の云つた事は云つた事で、云はない事は云はない事なんだから」

「私は兄さんに逆らひたくはありませんでした。けれども是程頭の明らかな兄さんが、自分の平生から輕蔑してゐる言葉の上の論理を弄んで、平氣でゐるのは少し可笑しいと思ひました。それで私の腹にあつた兄さんの矛盾を遠慮なく話して聞かせました。

兄さんは又無言で飯を二口程頰張りました。兄さんの茶碗は其時空になりましたが、飯櫃は依然として兄さんの手の屆かない私の傍にありました。私はもう一遍給仕をする考へで、兄さんの鼻の先へ手を出したのです。所が今度は兄さんが應じません。此方へ寄こして吳れと云ひます。私は飯櫃を向うへ押して遣りました。兄さんは自分でしやも子を取つて、飯をてこ盛にもり上げました。それから其茶碗を膳の上に置いた儘、箸も執らずに私に問ひ掛けるのです。

「君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思つてゐるのか」

斯うなると私にはおいそれと返事が出來なくなります。平生そんな事を考へて見ないからでもありませうが。今度は私の方が飯を二口三口立て續けに頰張つて、兄さんの說明を待ちました。

「嫁に行く前のお貞さんと、嫁に行つたあとのお貞さんとは丸で違つてゐる。今のお貞さんはもう夫の爲にスポイルされて仕舞つてゐる」

「一體何んな人の所へ嫁に行つたのかね」と私が途中で聞きました。

「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が旣に僕の妻を何の位惡くしたか分らない。自分が惡くした妻から、幸福を求めるのは押しが强過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天眞を損なはれた女からは要求出來るものぢやないよ」

兄さんはさういふや否や、茶碗を取り上げて、むしや〳〵てこ盛りの飯を平げました。

五十二

私は旅行に出てから今日に至る迄の兄さんを、是で出來る丈委しく書いた積りです。東京を立つたのはつい昨日のやうですが、指を折るともう十日あまりになります。私の音信を宛にして待つて居られる貴方や御年寄には、此十日が少し長過ぎたかも知れません。私もそれは察してゐます。然し此手紙の冒頭に御

断りしたやうな事情のために、此處へ來て落ち附く迄は、殆ど筆を執る餘裕がなかつたので、已むを得ず遲れました。其代り過去十日間のうち、此手紙に漏れた兄さんは一日もありません。私は念を入れて其日其日の兄さんを悉く此一封のうちに書き込めました。それが私の申し譯です。同時に私の誇りです。私は當初の豫期以上に、私の義務を果たし得たといふ自信のもとに、此手紙を書き終るのですから。

私の費やした時間は、時計の針で仕事の分量を計算して見ない努力だから、數字としては申し上げられませんが、隨分の骨折りには違ひありませんでした。私は生れて始めてこんな長い手紙を書きました。無論一氣には書けません、一日にも書けません。ひまの見附かり次第机に向つて書き掛けたあとを書き續けて行つたのです。然し夫は何でもありません。もし私の見た兄さんと、私の理解した兄さんが、此一封のうちに動いてゐるならば、私は今より數層倍の手數と勞力を費やしても厭はない積りです。

私は私の親愛するあなたの兄さんのために此手紙を書きます。それから同じく兄さんを親愛する貴方のために此手紙を書きます。最後には慈愛に充ちた御年寄、あなたと兄さんの御父さんや御母さんのためにも此手紙をかきます。私の見た兄さんは恐らく貴方方の見た兄さんと違つてゐるでせう。私の理解する兄さんも亦貴方方の理解する兄さんではありますまい。もし此手紙が此努力に價するならば、其價は全くそこにあると考へて下さい。違つた角度から、同じ人を見て別樣の反射を受けた所にあると思つて御參考になさい。

あなた方は兄さんの將來に就いて、とくに明瞭な知識を得たいと御望みになるかも知れませんが、豫言者でない私は未來に喙を挾む資格を持つて居りません。雲が空に薄暗く被さつた時、雨になる事もありますし、又雨にならずに濟む事もあります。たゞ雲が空にある間、日の目の拜まれないのは事實です。あなた方は兄さんが傍のものを不愉快にすると云つて、氣の毒な兄さんに多少非難の意味を持たせて居る樣ですが、自分が幸福でないものに、他を幸福にする力がある筈がありません。雲で包まれてゐる太陽に、何故暖かい光を與へないかと逼るのは、逼る方が無理でせう。私は斯うして一所にゐる間、出來る丈兄さんの爲に此雲を拂はうとしてゐます。貴方方も兄さんから暖かな光を望む前に、まづ兄さんの頭を取り卷いてゐる雲を散らして上げたら可いでせう。もし夫が散らせないなら、家族のあなた方には悲しい事が出來るかも知れません。兄さん自身にとつても悲しい結果になるでせう。斯ういふ私も悲しう御座います。

私は過去十日間の兄さんを書きました。此十日間の兄さんが、未來の十日間に何うなるかが問題で、その問題には誰も答へられないのです。よし次の十日間を私が受け合ふにした所で、次の一ケ月、次の半年の兄さんを誰が受け合へませう。私はたゞ過去十日間の兄さんを忠實に書いた丈です。頭の鋭くない私が、讀み直すひまもなく唯書き流したものだから、そのうちには定めて矛盾があるでせう。頭の鋭い兄さんの言行にも氣の附かない所に矛盾があるかも知れません。けれども私は斷言します。兄さんは眞面目です、決して私を胡魔化さうとしては居ません。私も忠實です。貴方を欺く氣は毛頭ないのです。

私が此手紙を書き始めた時、兄さんはぐう〳〵寐てゐました。此手紙を書き終る今も亦ぐう〳〵寐てゐます。私は偶然兄さんの寐てゐる時に書き出して、偶然兄さんの寐てゐる時に書き終る私を妙に考へます。兄さんが此眠りから永久覺めなかつたら嘸幸福だらうといふ氣が何處かでします。同時にもし此眠りから永久覺めなかつたら嘸悲しいだらうといふ氣も何處かでします」

昭和四年三月一日印刷
昭和四年三月五日發行

漱石全集第八卷

著作權者　夏目純一

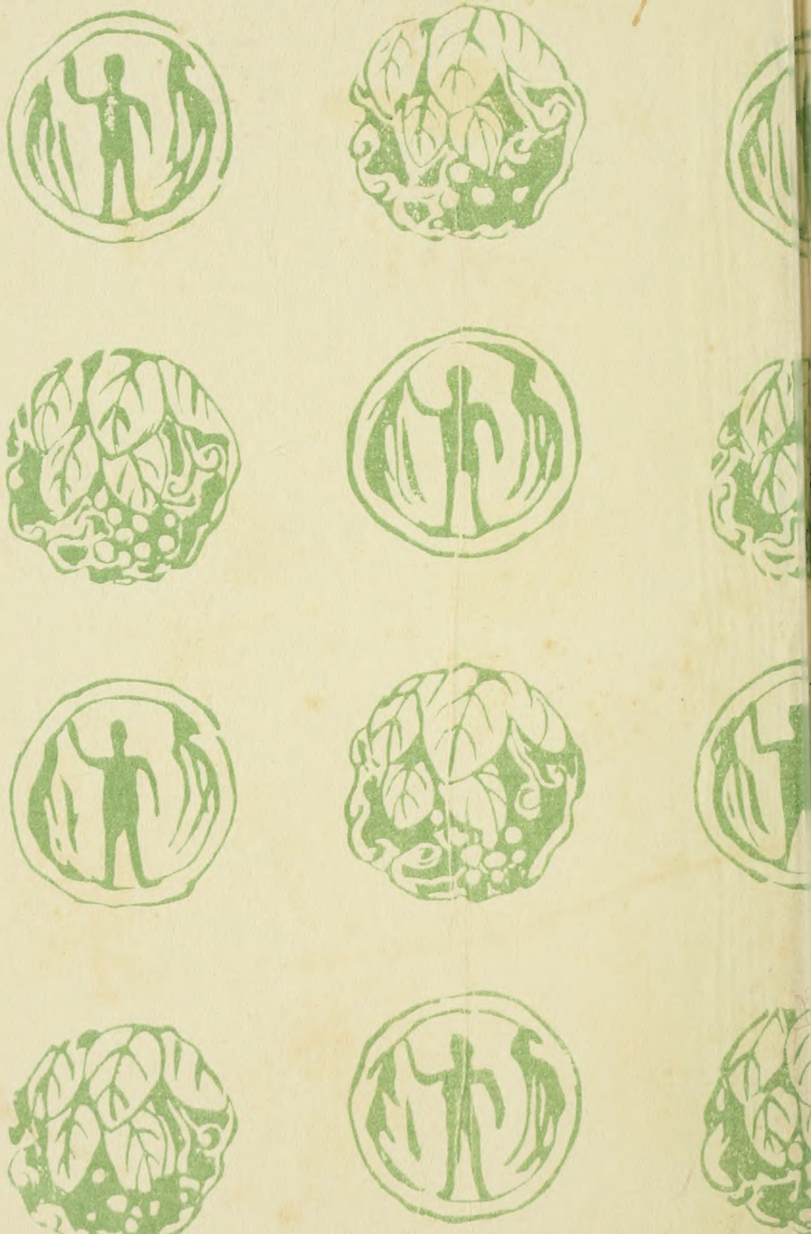
編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

（大森製本）



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03172 2119